熊本県文化財調査報告第56集

肥後国分僧寺跡 I

昭和56年度熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1982

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第56集

肥後国分僧寺跡 I

昭和56年度熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1982

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

肥後国分寺の初見は、『続日本紀』の天平勝宝８年12月20日の条であります。しかし、文献資料として管見できるものが少なく細部について不明の点が多々あります。ここに肥後国分僧寺の一角を調査できたことは、史料を補う点では非常に有益であったと思料されます。

発掘調査の実施にあたりましては、県土木部計画課・熊本都市計画水前寺土地区画整理事務所の御理解と御協力をはじめとして、地元の方々からも御協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解さらに学術上・研究上の一助になれば幸せです。

昭和57年３月31日

熊本県教育長　　外　村　次　郎

例　　言

1．本書は、昭和56年度に実施した熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の報告である。

2．現地の埋蔵文化財の発掘調査は、熊本県教育委員会文化課が実施し、平岡勝昭(文化課参事)、大田幸博(技師)、鶴島俊彦・柳原真由美(嘱託)が担当した。

3．現場での実測・写真撮影および整理後の遺物についての写真撮影は、調査担当者が行った。

4．出土遺物の整理および遺物の実測は、調査担当者があたり、熊本県文化財収蔵庫諸氏の協力があった。

5．本報告の執筆分担は次の通りである。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ-8・Ⅷ平岡、Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ-1・2鶴島、Ⅵ-3・4・5・6・7大田・柳原。

6．本報告書を作成するにあたり、熊本大学教育学部大迫靖雄助教授と熊本市立高校阿蘇品保夫教諭から玉稿をいただき、付論として収録した。

7．出土した動物の歯は熊本大学吉倉真名誉教授に鑑定をお願いした。

8．発掘調査中に三島　格（前福岡市立歴史資料館館長)、渡辺正気（前九州歴史資料館参事)、日野尚志（佐賀大学教授)、甲元真之（熊本大学助教授)、石松好雄・亀井明徳・高橋　章（九州歴史資料館)、森下　功（熊本市文化財保護委員)、勢田広行（文化財保存計画協会研究員）今村克彦・宮原国臣（熊本市文化課）の諸氏が来訪され、多くの教示を賜わった。また、遺物については、甲元真之氏の教示を得たほか、松本健郎・野田拓治（県文化課技師・同学芸員）の助言を受けた。さらに、国分寺の瓦に関連する資料の閲覧にあたっては、三島　格、白木原和美（熊本大学教授)、甲元真之、中村　愿（熊本大学助手)、東　光彦・富田紘一（熊本市立博物館学芸員)、原口長之（山鹿市立博物館館長)、田中義和（菊池市教育委員会)、中村幸史郎・倉原謙治（山鹿市立博物館学芸員)、稲垣普也・梶谷亮治（奈良国立博物館課長・同文部技官）のほか豊野村教育委員会、西田道世、林田正敏、福田正文、光沢徳行ら各氏の御配慮をいただいた。なお、広瀬正照(県文化課嘱託)の協力があった。

9．発掘調査中は、現国分寺の馬原道彦氏住職御夫妻から格別の御配慮をいただいた。

10．本書の編集は、平岡・大田・鶴島・柳原が行った。

11．なお、今回の発掘地は地番をとって124地点と仮称することとした。また、文中における方位は磁北を基準としている。遺構の略記号は次のとおりである。

ＳＢ－建物跡、ＳＤ－溝状遺構、ＳＫ－土壙、ＳＥ－井戸、ＳＸ－その他の遺構

12．国分僧寺東限外郭線推定地の試掘調査を付報として収録した。

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1．調査に至るまで……1

2．調査のための組織……1

第Ⅱ章　調査の概要

1．調　査　地　区……2

2．調　査　経　過……3

第Ⅲ章　位置と歴史的環境……5

第Ⅳ章　沿革と研究史……12

第Ⅴ章　検出遺構

1．基本層序と遺構の関係……17

2．遺　構　各　説……18

3．遺 構 の 変 遷……23

4．検出遺構の性格……25

第Ⅵ章　遺　　物

1．瓦　　類……35

2．軒瓦について……53

3．須　恵　器……61

4．土　師　器……65

5．瓦質土器・須恵質土器……96

6．陶　磁　器……96

7．金属製品・石製品・鞴羽口……96

8．木　製　品……100

第Ⅶ章　総　　括……101

付　論

文献よりみた肥後国分寺の推移　阿蘇品保夫…… 104
国分僧寺出土の木製品の鑑定　大迫靖雄…… 110

付　報

国分僧寺東限外郭線推定地の試掘調査とその他の試掘調査
廣瀬正照…… 116

挿図目次

第１図　松本雅明氏の国分僧寺復元図と発掘地点位置図…… 2
2　国分僧寺跡と周辺の遺跡分布図…… 6
3　肥後の梵鐘…… 9
4　発掘地点の基本層序……17
5　ＳＸ101実測図 ……18
6　ＳＤ105遺物集中地点平面実測図 ……20
7　ＳＥ101実測図 ……21
8　遺構の変遷図……24
9　検出遺構位置図……26
10　検出遺構断面実測図……27
11　検出遺構平面・断面実測図(1)……28・29
12　検出遺構平面・断面実測図(2)……30・31
13　検出遺構平面・断面実測図(3)……32・33
14　軒丸瓦実測図(1)……36
15　軒丸瓦実測図(2)……38
16　軒丸瓦実測図(3)……40
17　軒平瓦実測図(1)……42
18　軒平瓦実測図(2)……43

第19図　軒平瓦実測図(3)……45
20　軒平瓦実測図(4)……46
21　鬼瓦実測図……47
22　不明瓦製品実測図……48
23　塼・隅切瓦実測図……50
24　熨斗瓦実測図(1)……51
25　熨斗瓦実測図(2)・面戸瓦実測図……52
26　肥後国分尼寺跡出土瓦……54
27　須恵器（杯・壺）実測図……62
28　須恵器（杯蓋）実測図……64
29　須恵器（甕・壺・高杯）実測図……65
30　土師器（杯）実測図(1)……68
31　土師器（杯）実測図(2)……70
32　土師器（杯）実測図(3)……72
33　土師器（杯）実測図(4)……74
34　土師器（皿）実測図……78
35　土師器（その他の杯・皿）実測図……80
36　土師器（高台付杯）実測図……86
37　土師器（高台付杯・皿）実測図……88
38　土師器（高台付皿・その他）実測図……90
39　内黒土器実測図……91
40　墨書土器実測図……92
41　土師器（甕・鉢・高杯）実測図……93
42　土師器（甕・鉢）実測図……94
43　瓦質土器・須恵質土器・土師器実測図……95
44　陶磁器実測図……96
45　五輪塔（火輪）実測図……97
46　金属製品・石製品・鞴羽口実測図……98
47　木製品実測図……99

表　目　次

第１表　国分僧寺周辺の遺跡一覧……4
2　西海道の国分寺料……13
3　軒丸瓦各型式の出土点数と割合……35
4　軒平瓦各型式の出土点数と割合……39
5　熨斗瓦の出土点数と割合……53
6　面戸瓦の出土点数と割合……53
7　国分僧寺出土軒丸瓦集成表……55・56
8　国分僧寺出土軒平瓦集成表……57・58
9　アルファベット略記号一覧表……61
10　須恵器一覧表(1)……61
11　須恵器一覧表(2)……64
12　須恵器一覧表(3)……65
13　土師器　杯・皿法量グラフ……66
14　土師器（杯Ⅰa）一覧表……67
15　土師器（杯Ⅰb）一覧表……69
16　土師器（杯Ⅱa）一覧表……71
17　土師器（杯Ⅱb）一覧表……75
18　土師器（皿）一覧表……77
19　土師器（その他の杯・皿）一覧表……79
20　土師器（杯・皿）分類表……81・82
21　遺構別遺物出土個数一覧表……84
22　土師器（高台付杯）一覧表……85
23　土師器（高台付皿）一覧表……89
24　土師器（高台付その他）一覧表……90
25　内黒土器一覧表……91
26　土師器（甕・鉢・高杯）一覧表……92
27　瓦質土器・須恵質土器・土師器一覧表……96
28　陶磁器一覧表……97

図版目次

図版１．ａ．発掘前の調査地　ｂ．調査地近景…… 126
２．ａ．ＳＢ103・西側土壙群　ｂ．ＳＢ103…… 127
３．ａ．ＳＤ106・107とＳＳ101～103　ｂ．ＳＤ103～105… 128
４．ａ．ＳＢ103版築断面　ｂ．ＳＫ101…… 129
５．ａ．ＳＤ107　ｂ．ＳＤ105底部の瓦の出土状況…… 130
６．ａ．SB102・SD101　ｂ．ＳＢ102掘込み地業・SD101 … 131
７．ａ．ＳＢ102掘込み地業基底面の円文…… 132
ｂ．Ｂ９区Ⅵ層中の円文…… 132
８．ａ．ＳＢ102掘込み地業北辺とＳＫ114　ｂ．ＳＢ101… 133
９．ａ．ＳＸ101　ｂ．ＳＥ101…… 134
10. 出土軒丸瓦…… 135
11. 出土軒平瓦…… 136
12. 鬼瓦・不明瓦製品・塼…… 137
13. 面戸瓦・隅切瓦・熨斗瓦…… 138
14. 須恵器・土師器…… 139
15. 土師器・青磁・黄瀬戸・鉄製品・銅製品・鞴羽口…… 140
16. 火舎、擂鉢・土師器・木製品・石製品…… 141
（付報）
１．ａ．351 地点試掘溝　ｂ．351 地点落ち込み…… 142
２．351 地点　出土遺物 …… 143

第Ⅰ章　序　　説

1　発掘調査に至るまで

今回の発掘調査の契機は、家屋移転に伴う道路拡幅の側溝掘削工事にある。昭和55年度の部分的な工事に際し、掘削部分の一隅から多量の布目瓦が出土し、これを採集した方々から、県文化課に連絡があった。

県文化課では、これまでも肥後国分僧寺の推定寺域を包蔵する熊本都市区画整理事業水前寺土地区画整理計画に対処して、家屋移転による空地が出来るごとに幾度か試掘調査を実施してきたが確たる成果を収めていなかった。

今回の工事部分は、多量の布目瓦の出土を見た上に、国分僧寺域の中心地にも近く、対象面積も広いことから、従来の試掘調査方式ではなく、当初から本調査の方向に、県土木部計画課と協議した。昭和56年３月25日に、工事予定地の発掘調査の依頼を受けた。調査区の対象面積は311.45㎡であった。

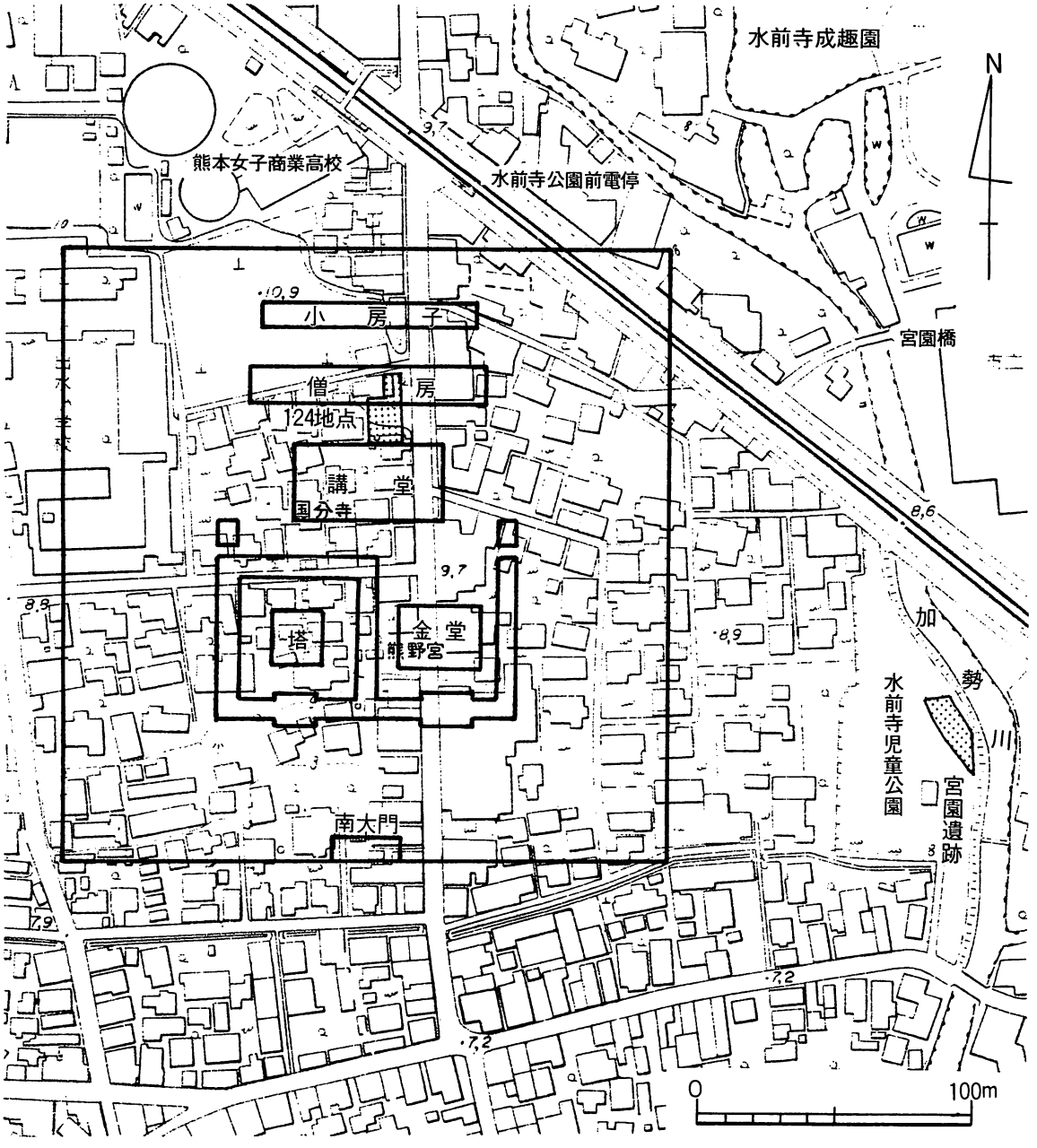
依頼を受けた県文化課では協議を行い平岡、大田、鶴島が調査を担当する事になった。

昭和56年４月13日より調査を開始した。

2　調査のための組織

調査責任者	岩崎　辰喜（文化課長）	下野　義一（県土木部計画課長）
調査総括	隈　　昭志（文化財調査係長）	河原　　保（水前寺土地区画整理事務所長）
調　査　員	平岡　勝昭（参事）	
	大田　幸博（技師）	
	鶴島　俊彦（嘱託）	
	柳原　真由美（　〃　）	
調査事務局	林田　茂一（課長補佐）	
	田辺　宗弘（前課長補佐）	
	大塚　正信（主幹兼経理係長）	
	横尾　泰宏（技　師）	
	矢野みゆき（前主事）	
	谷　喜美子　（主　事）	

第Ⅱ章　調査の概要



第１図　松本雅明氏の国分僧寺復元図と発掘地点位置図（地図は区画整理事業着工前のものを使用）

1　調　査　地　区

調査地は熊本県熊本市出水１丁目124番地である。国土地理院の地図２万５千分の１「熊本」にその位置を求むれば、北より21.2cm、東より5.6cmの交点にあたる。標高は海抜10.3m前後

を示す。

調査区は市街地の一角で旧状況は北より県警出水派出所、浅賀浩氏等の宅地であった。区画整理終了後は中田豆腐店、県有地、平井耳鼻咽喉科医院となる予定である。

この付近は市街化前において布目瓦の散布地として知られ、松本雅明氏の国分僧寺復元図（第1図）では講堂と僧房の間に位置する。調査の基点は平井耳鼻咽喉科医院南側境界より北に34cmと道路側西縁の交点を使用した。調査地全域に3m方眼を組み、北より1～9、東よりA～Dとし、例えばB－3区のごとく呼称した。標高についてはNo.191のベンチマーク10.176mを基準として使用した。

2 調 査 経 過

調査は、当初から多量の布目瓦の出土を見、発掘現場は、まるで塞の河原の石積みであるかのような景観を呈し、掘っても掘っても瓦の出土は止まなかった。

出土瓦は、最初のうちはコンテナーで処理していたが、予算的に対処しきれなくなり、安価な土嚢袋にした。しかし、これは瓦を車に積み込む時、瓦の凸凹が薄い袋を通して、身体に接触する事となり、多くのあざを生じる事となった。瓦の重さは、一袋約13～15kgで、その運搬は想像以上に重労働であった。また出土した瓦の置き場所にも困惑した。調査区から瓦が出土しなくなるのに約3カ月半を要した。出土瓦の総量は約8tにも及ぶものと推定される。

調査区は、区画整理事業の計画に関連して、北から、中田豆腐店予定地を第一区画、県有地を第二区画、平井耳鼻咽喉科医院を第三区画に分け、順を追って発掘調査を実施する事とした。調査は、工事の差し迫っていた第一区画を6月初旬までで終了し、第二および第三区画については、当初の予定を変更して、両区画を同時に調査した。両区画の調査には6月中旬～8月中旬までを要した。

なお、その間に、6月より鶴島に代わって柳原が調査に加わった。

幸いにも昭和56年度の雨期は、ほとんど週末に雨が降り、従って雨天によって調査を休んだのは3日ばかりであった。

8月14日にすべての調査を終了した。

第Ⅲ章　位置と歴史的環境

(1)　肥後国分僧寺跡は、熊本市出水１丁目(旧出水村大字今字門前周辺)に所在し、現在は曹洞宗寺院の医王山国分寺が法燈を掲げている。周辺は既に住宅が密集しており、僅かに熊野神社境内に置かれている巨大な塔心礎と裏通りの道端や庭先で見かける布目瓦に、当時の面影をとどめるにすぎない。

熊本市東部には託麻原台地と呼ばれている火山性台地が発達しており、この台地の段丘崖下では、江津湖・水前寺公園に代表される台地下に涵養される地下水が自墳する湧泉群がみられる。一方、託麻原台地西方の白川が形成した沖積平野は、北高南低を呈し、黒髪町を頂点とする扇状地性の微高地とこれに続く数条の自然堤防があり、自然堤防間には後背湿地が広がっている。

縄文・弥生時代の遺跡は、白川沿いの低地および台地先端部と江津湖東岸の台地先端部の２地域に集中する。縄文時代では渡鹿貝塚・北久根山遺跡・新南部Ａ遺跡・上ノ原遺跡など後・晩期の遺跡が多く、弥生時代の遺跡は中期の甕棺遺跡が多い。なお、江津湖の湖底や湖岸の低地には、縄文晩期後半から弥生前期の遺物を出土する遺跡の存在が知られている。古墳時代の遺跡も台地端や白川沿いの低地にみられるが、その数は少ない。また、墳墓は現在のところ下江津湖東岸の台地端の広木で方形周溝墓１基が発見されているほか、健軍水源池遺跡で住居跡１基とともに方形周溝墓２基、円形周溝をもった墓５基が調査されているだけである。

ところが、奈良時代以降になると様相は一変し、大江を中心とする台地先端付近やこれに連なる白川沿いの微高地上に多数の遺跡が出現する。この地域には奈良時代の瓦を出土する渡鹿Ａ地点遺跡(託麻郡衙想定地）や渡鹿廃寺が所在し、託麻郡の中心地となっていた様子が窺える。

一方、肥後国分二寺は託麻郡の中心地から離れた高燥な場所、すなわち、尼寺は段丘端に、僧寺は段丘崖下を流れる加勢川の右岸の微高地上に占地している。

歴史時代の遺跡	16. 熊本市交通局遺跡	C. 小関小松山遺跡
1. 国分僧寺跡	17. 大江東原遺跡	D. 北久根山遺跡
2. 陣山廃寺(国分尼寺)	18. 熊中通り遺跡	E. 渡鹿貝塚
3. 宮園遺跡	19. 熊高敷地遺跡	F. 辻遺跡
4. 水前寺廃寺	20. 南平上遺跡	G. 北原遺跡
5. 託麻国衙	21. 保田窪遺跡	H. 大江白川遺跡
6. 渡鹿廃寺	22. 帯山遺跡	I. 神水遺跡
7. 託麻郡衙想定地	23. 北水前寺町遺跡	J. 上江津遺跡
8. 杉ノ木遺跡	24. 西水前寺町遺跡	K. 泉ケ丘遺跡
9. 熊大総合運動場遺跡	25. 旧蚕業試験場遺跡	L. 健軍水源地遺跡
10. 大江青葉遺跡	62. 健軍神社遺跡	M. 広木方形周溝墓
11. 大江遺跡	27. 古屋敷遺跡	N. 江津湖苗代津遺跡
12. 新屋敷遺跡		O. 中ノ島遺跡
13. 通信病院遺跡	**歴史時代以前の遺跡**	P. 上ノ原遺跡
14. 熊本地方法務局遺跡	A. 新南部Ａ遺跡	Q. 重富遺跡
15. 熊本製紙遺跡	B. 小関原遺跡	

第１表　国分僧寺周辺の遺跡一覧表

僧寺の約2町西方には西海道（託麻郡条里の一条と二条の里界線と一致する）が通過しており、衆目を集める所であった。大量の木材や瓦を必要とする二寺の造営にあたって、西海道の陸運や加勢川の水運が利用されたであろうことは容易に察しがつく。また、僧寺と西海道を挟んだ約6町西方の微高地上には託麻国衙が位置しており、この一帯が肥後国の政治・文化の中心となっていたことが知られる。

なお、託麻国府を8町四方とみるのは諸家の一致するところだが、その境域については未だ確定していない。託麻郡条里（N5°W）の北端に位置する国府・国分二寺の条里地割との関係や遺跡間の占地関係については、発掘調査を含めた今後の調査が必要である。　（鶴島）

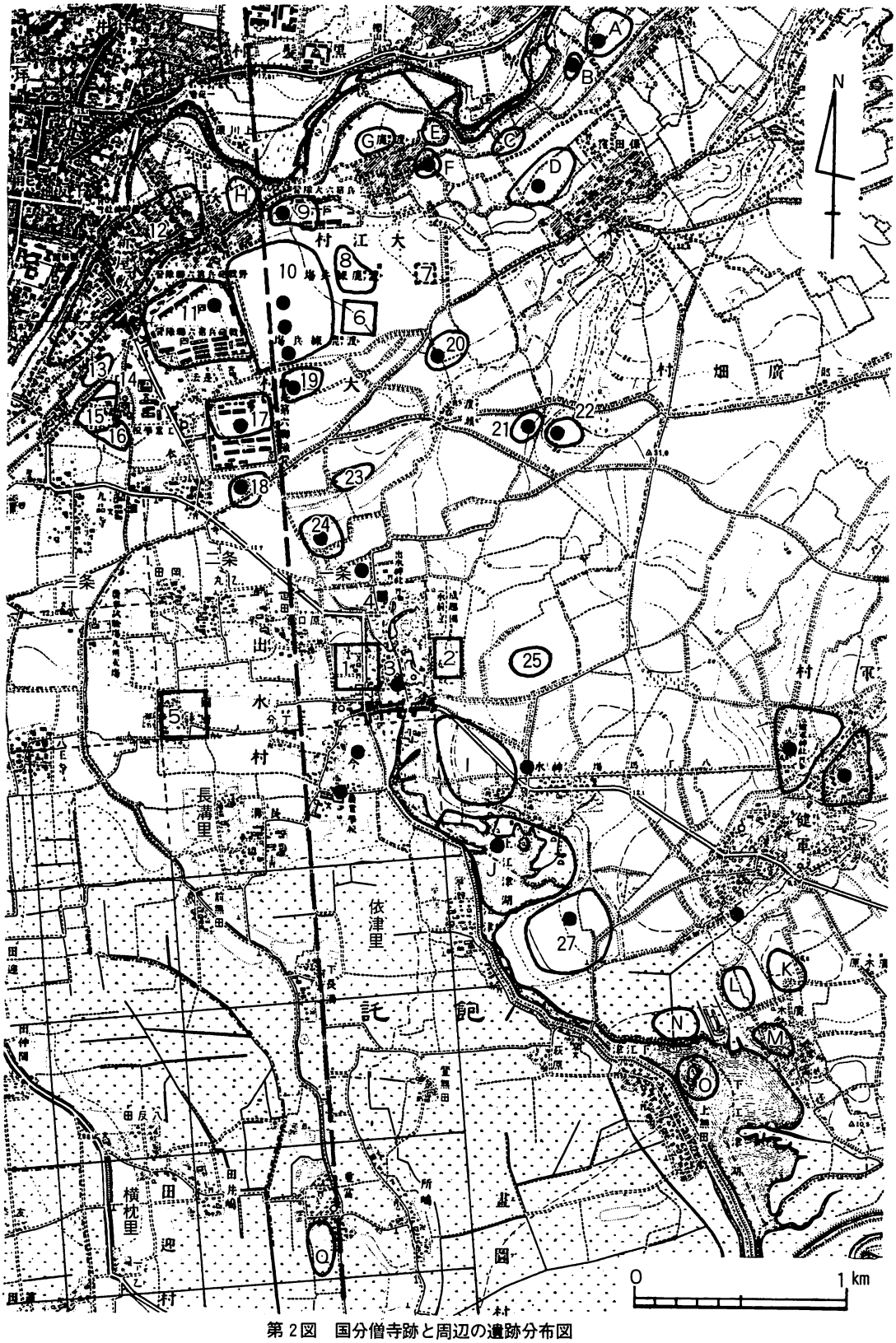
参考文献

1．「熊本市文化財調査報告書」東部・南部・中央北地区　熊本市教育委員会　1973・1975・1980
2．「江津湖苗代津遺跡」熊本県教育委員会　1974
3．木下　良「日本古代官道の復原的研究に関する諸問題　―特にその直線的路線形態について　―『人文研究』70集　神奈川大学　1978
4．「熊本県の条里」熊本県教育委員会　1977

(2)　国分寺、国分尼寺は天平13年（741）聖武天皇の勅願によって全国60余カ所に建立された。詔勅は次のようなものであった。

朕薄徳を以て忝くも重任を承けたり。未だ政化を弘めず寤多く慚ず。古の明主は皆先業を能くして、国泰らかに人楽しみ、災除き福至る。何の政化を修めて能く此道を臻さむ。頃者年穀豊かならず疫癘頻りに至る、斬懼交々集まりて、唯労して己を罪す。是を以て広く蒼生の為に、遍ねく景福を求む。故に前年駅を馳せて、天下の神宮を増飾り、去歳普く天下をして、釈伽牟尼仏の尊像高さ一丈六尺なる者各一鋪を造り、並に大般若経各一部を写さしむ。今春より己来、秋稼に至り、風雨序に順うて、五穀豊かに穣る。此乃ち誠を徴し願を啓くこと、霊貺答うるが如し。載ち惶れ載ち懼れて、以て自ら寧ずるなし。経を案ずるに云う。若し国土有りて、此経を講宣読誦恭敬供養し流通せば、我等四王常に来って擁護し、一切の災障皆消殄せしめ、憂愁疾疫も亦除き差さしめん。所願心に遂いて恒に歓喜を生ぜんといえり。宜しく天下諸国をして各七重塔一区を敬造し、並に金光明最勝王経、妙法蓮華経各十部を写さしむべし。朕又別に金字金光明最勝王経を写し塔毎に各一部を置かしめんと擬す。冀う所は聖法の盛なること天地と与に永く流え、擁護の恩幽明に被りて恒に満むことを。其れ造塔の寺は兼ねて国の華なり、必ず好処を択んで実に長久なるべし。人に近ければ則ち薫臭の及ぶ所を欲せず、人に遠ければ則ち衆の帰集を労するを欲せず。国司等各宜しく務めて厳飾を存し兼ねて潔清を尽くすべし。近くは諸天を感じて庶幾くは臨護せしめんことを。遐邇に布告して朕が意を知らしめよ。又各国の僧寺には封五十戸、水田一十町、尼寺には水田十町を施す。僧寺は必ず廿僧あり其寺名を金光明四天王護国之寺と為さしめ、尼寺は一十尼あり其寺名を法華滅罪之寺と為す。両寺相共に教戒を受くべし。若し闕あらば即ち須らく補い満すべし。其れ僧尼は毎月八日に必ず応さに最勝王経を転読し、月半に至る毎に戒羯磨を誦せよ。毎月六斎日には公私とも漁猟殺生することを得ず。国司等宜しく恒に検校を加うべし。

(3)―1　肥後国分僧寺、尼寺にしても文献的史料は少ない。現在熊本県内における記年銘のある主な仏教関係の資料は次のようなものがあげられる。



第２図　国分僧寺跡と周辺の遺跡分布図

※明治36年製　地形図「砂取」（２万分の１）を使用

※破線は木下良氏復元の西海道、黒丸印は布目瓦の出土地

1）　玉虫の八面石幢（上益城郡御船町）

御船町玉虫に、高さ地上約１ｍ、径30cmの凝灰岩の六角柱がある。銘文は三側面に続いて陰刻されている。

頂面は平らで上に笠をのせたものと思われる。平家の落人玉虫御前の墓と伝えられている。

永保元年（1081）は落人伝説より約100年前で、平安末期に誰かが法華経を如法に書写供養して埋納し、その標識として建てた石柱であろう。形から見ても、経塚標識という点から見てもこれこそ中国経幢の流れをくむ石幢と思われる。

十二月
永保元年辛酉　（西暦1081年）
廿三日
如法法花経一部
如法書

2）　凡導寺の石経筒（山鹿市蒲生）　筒身に刻字がある。

久安元年丑十月八日　（西暦1145年）
勧進僧慶有
斯彌勒如來
出世可供養

3）　本光寺の笠塔婆（熊本市黒髪町）　一辺34cmの方柱塔である。

造奉立石塔婆一基
安元季末十月五日　（西暦1175年）
仏　子　長　昭

4）　円台寺の笠塔婆（鹿本郡植木町）

奉造立石塔婆一基
右為珎朗尊靈往生極楽
造立如件但生年十五歳
建久三年十二月廿八日寅時入滅
建久四年歳次癸丑　二月十五日日次壬子　（西暦1193年）

5）　寛喜二年庚寅の十三重石塔（八代市）

奉造立十三重石塔
石為滅罪生善乃至浄界
平等利益造立如件
寛喜二年庚刀十一月　日　（西暦1230年）
大壇那沙彌浄心
藤原氏

（四方仏座像）

大工兼仏師幸西

小工榮幸

行事藤原頼忠

源光吉

鍛治末正

院主金剛仏子念西

（初層塔身に銘がある。）

6）　寛喜二年の九重石塔（球磨郡湯前町）

奉造立九重石塔一基

右志者為浄心往生極楽也

寛喜二年庚刀九月廿三日

大壇那沙彌浄心

大工兼仏師幸西

小工榮幸

院主念西

7）　城泉寺の七重石塔（球磨郡湯前町）

奉造立七重石□□□

為往生極楽也□為

四生皆成仏□

□代□之状如□

寛喜二年庚刀十一月日　　（西暦1230年）

大願主沙彌浄心

大工幸西

小工榮幸

院主念西

8）　文永十年の経筒（球磨郡多良木町）

奉　納

如法書写沙法蓮花経一部銅筒

有志者為藤原頼氏現世安穏後生

善所乃法界平等利益也　供養奉如件

文永十年癸酉十一月四日　　（西暦1273年）

藤原頼氏敬白

9）　大慈禅寺の鐘[註1]　弘安十年（西暦1287）（熊本市川尻町）

銘文は池の間四区を埋め、全部陰刻である

（第１区）

大慈禅寺鐘銘

日本国鎮西肥後州飽田郷大渡津

始草大慈禅寺新鋳造青銅

洪鐘其銘日

開金鋼眼　振鉄酸拳　塵点五百　界浄三千

（第２区）

扶桑国裏　滄溟海辺　州之肥後　郷之飽田　撰地勝地　崇天中天　興大慈寺　著大梁便　拘留孫様

釈迦文伝　梵鐘剏作　宝器新研　撞斯鴻韻　驚彼聖賢　仏宗弘世　法子集莚　清暁鳴也　黄昏打焉

堆曹渓道　静少林禅　竜再峅聳　法乳並連　鬼畜嘗味　那落覚眠

（第３区）

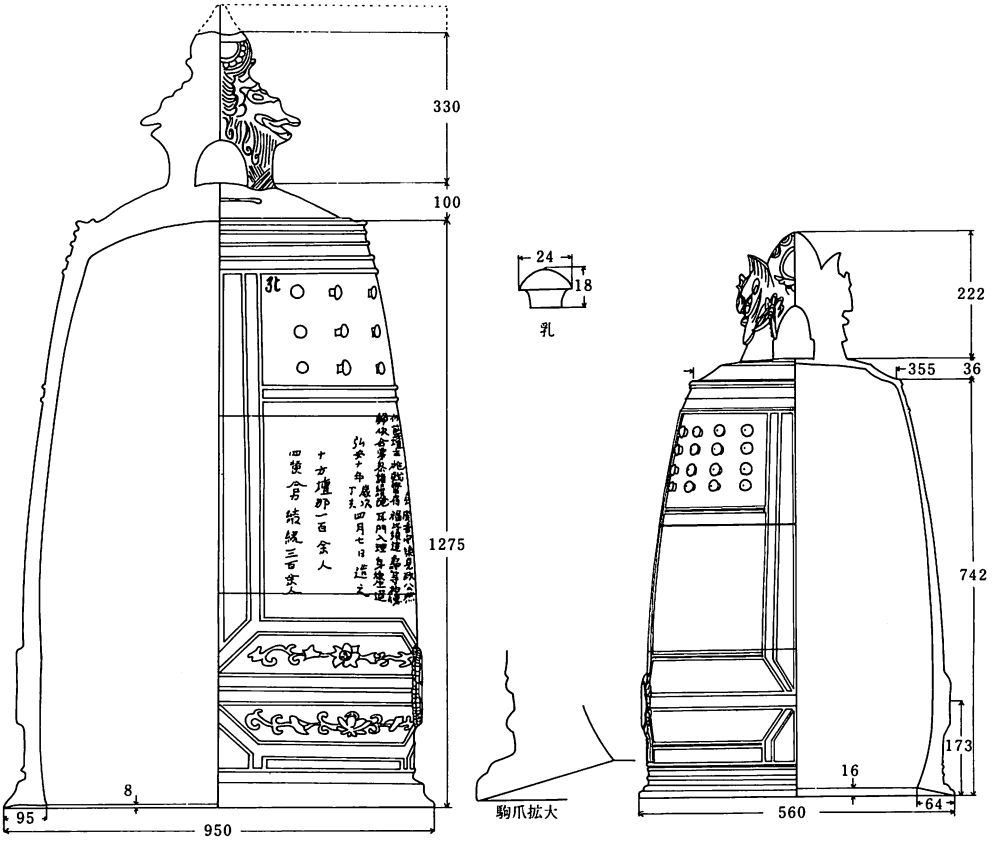
皇帝万歳　大将千年　聞音安楽　見政公然　伽藍壇主　施財斉肩　福比須達　寿等神僊　帰依合掌

参詣続踵　耳門入理　身後生蓮

弘安十年歳次丁亥四月七日造之

十方壇那一百余人

四輩合力結縁三百余人



第３図　肥後の梵鐘　（左）大慈禅寺（乙益重隆氏原図）　（右）利明寺　単位mm

（第４区）

幹縁僧都寺宗鑒行如智光恵秀可良

妙智禅勝崇智僧願覚道等十余輩也

両寺比丘衆三十余人　報恩寺法位修恵等尼衆卅余人

鋳冶大工四郎大夫大春日国正

鐘高都分六尺一寸口広三尺二寸小工一十八人用銭三百余十貫文雑用米廿六石六升八合也

伽藍壇主左金吾源泰明

開闢当山住持伝法比丘　義尹謹題

10）利明寺の梵鐘[註2]（天草郡栖本町）

青銅製梵鐘　銘文（陰刻）

鎮西肥州河尻荘、寶祐山善勝禅寺銘日、天之所命成大器、佛之取化権先投、荘公鋳茲鳧氏作、掛長在寶祐山頭一聲遠徹遍法界、万籟空盡南闘浮、寅乙啓蒙分曙色、夕ニ破闇出月樓、斯銘興鐘祝聖寿、寺門増昌億万秋

應永念六甲戌年十一月九日 住持是金、願主善通、大工氏國

11）熊野座神社の十三仏碑　（八代郡竜北町）

「干時　応仁三年 青陽吉日」

「各位寿位」

「奉造立石塔一基為伏願依此結縁現世安穏後生善処也」

「願主玄融謹書」

12）一字一石経（熊本市健軍町）

弘治四戊午七月吉日

(3)―２　記年銘のない仏教関係の資料は下記のごとくである。

１）石貫の穴観音　（玉名市）

古墳時代の横穴に瓦屋根を模した厨子があって、中に千手観音を刻んでいる。これには後世の追刻と当初からのものであるとの二説がある。千手観音は「千手千眼観自在菩薩」といわれ、千の慈眼と千の慈手によって衆生を救済するのを悲願としている。

２）阿蘇西巌殿寺の仏足石　（阿蘇郡）

天平勝宝４年(752) 銘のある奈良、薬師寺の仏足石系統のものである。阿蘇西巌殿寺の仏足石は肥後唯一のものである。

(3)―３　現国分寺境内には次の金石文が見られる。

１）宝篋印塔残欠

文明六年甲午七月九日

当寺再圓顕上囚

２）永正14年の板碑

□正十四年丁丑十月吉日仏子敬白　法印大和尚位豪与逆修之所

3）弥陀種子板碑

旨天文六年竜集丁酉二月上浣日天文二十二年癸丑　奉造立預修善根崇心禅門妙恵禅尼

4）豪潮宝篋印塔

5）天保十四年の芭蕉塚

(3)―4 塔心礎がおいてある熊野神社はもともと現熊本市体育館前にあったものであるが電車が健軍までのびたときに現在の地へ移転したものである。熊野神社境内には次の2点が見られる。

1）棟札

安政四年丁巳八月吉祥日

棟梁　木曽助兵衛兼光

2）猿田彦大神

安政六年己未年二月門前宮園氏子

現在の国分寺は「曹洞宗　国分寺」となっているが、中世は川尻の大慈禅寺の末寺となったこともある。たび重なる火災で寺伝も定かでない。

註1「県文化財指定申請書」による

註2「　　〃　　」による

第Ⅳ章　沿革と研究史

葦北の野坂の浦ゆ船出して

水島に行かむ波立つなゆめ

万葉集にある長田王の歌である。長田王は天平９年（737）６月に卒している。古代に関する肥後の史料は、肥後風土記も逸文のみで国分寺創建当時の肥後のようすを示す記録は少ない。最近、田辺哲夫氏は笠女郎贈大伴家持歌「託馬野爾生流紫衣染未服而色出来（3-395）」を「たくまのに、おふる紫、きぬに染め、未だきずして、色にでにけり。」とよみ、現熊本市大江町の託麻原一帯を託馬野に比定している。長田王の歌は次のようなものもある。

隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす

遠くも吾は今日見つるかも

聞きしごとまこと貴く奇しくも

神さび居るかこれの水島

県南葦北地方に比定されている水島については説がわかれるところである。

東大寺の天平写経の裏に、「天平十五年(743)八月廿九日　合志郡以東山裏　井出原」の禅房にて写経をしたことが記録されている。

玉名郡菊水町から発見された銅板墓誌は現物は行方不明であるが、発見当時の記録が残っている。それによると、

「開白七道西海道太宰府

玉名郡人権擬少領少初位下日置郑公

又治地高野山」

の墨書と「萬年通宝」「須恵器」などが共伴しており、古くみても８世紀後半よりはさかのぼりえない。

平城京出土の木簡に肥後関係のもので綿の付札がある。

「養老七年（723）

肥後国益城郡調綿壱伯屯　四両

〔呂力〕

□□□　」

さて、肥後国分寺の初見は『続日本紀』の天平勝宝八年(756)十二月廿日の条である。

己亥、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、阿波、讃岐、伊予、土左、筑後、肥前、**肥後**、豊前、豊後、日向等廿六國、國別ニ頒チ下ス灌頂幡一具、道場ノ幡卅九首緋網ニ條ヲ、以充シム周忌御齋荘餙。用了テハ収メ置テ金光明寺ニ、永ク為シ寺物ト。随レ事ニ出シ用ヒシム之。

これによると九州では筑前・大隅・薩摩各国の国分寺名が見られない。

国　名	延　喜　式（国分寺料）	弘　仁　式（国分寺料）	国　名	延　喜　式（国分寺料）	弘　仁　式（国分寺料）
筑前国	32293束	40000束	豊後国	20000束	20000束
筑後国	13394束	20000束	日向国	10000束	30000束
肥前国	33394束	40000束			当国　10000束
	当国壱岐島各　16697束	当国壱岐島各　20000束			大隅国　20000束
肥後国	47887束	80000束	大隅国	20000束	
		当国　60000束	薩摩国	20000束	
		薩摩国　20000束		（同寺十一面観世音菩	
豊前国	14274束	20000束		薩燈分料　1500束）	

第2表　西海道の国分寺料

西暦967年に令が施行された『延喜式』主税二六の大宰府管内国分寺料によると第·2表のように見られる。この頃になると九州各国の国分寺は完成し、その機能が十分に、はたされていたものと考えられる。

大宰府天満宮史料『水左記』によると、

承暦四年（1080）九月廿五日甲寅……此日肥後守時綱送大宰府解状、付右大辨正家朝臣了、彼国々分寺塔材木事、□□□前日付蔵人少納言欲令奏之処、件少納言来示云、大宰府解前々自官所上奏也者、仍所付右辨也

十二月二日庚申、……此日蔵人辨伊家持来宣旨大宰府進肥後国□□□作可送進子細事、副本解状等仰云、令官勘申前々司義綱朝臣不與解由状子細者、件事予前日所令覆奏也、

と見え11世紀末に肥後国分寺の塔が修復されたことがわかる。

江戸時代になると国分寺の位置について論考したものが見られる。

北島雪山は『国郡一統志』の託麻郡国分寺条に、

「託麻郡国分寺者、聖武皇帝天平九年三月詔、毎州造丈六釈迦及菩薩像、写大般若経一部六百巻、是国分寺之権輿也。天平十四年秋、納官租国分寺、官稲各二万束也。」

八木田政名は『新撰事跡通考』に、

「天平九年ニ始リ十二年ニ造終リ、十三年春寺田及僧尼ノ員数ニ寺ノ名ヲ定ラレシト見ユ。然レバ全備ハ十三年ナルコト不可疑」とし、さらに「肥後ノ国分寺ハ託摩郡今村ニアリ日本霊異記為在託摩郡。応仁文明ノ間兵火ニ罹テ久ク廃跡トナリシヲ、享禄年中、河尻大慈寺五十世ノ住天佐忍和尚一宇ヲ建テ、其跡ヲ残シ、貞享中大慈寺ノ僧実堂玄理ト云者、仏殿ヲ造立ス寺記。寺ノ左後口四十歩ノ畠中ニ大ナル石アリ柱居ヲ彫ル。所謂七層塔軸柱ノ礎ナルヘシ。又近傍ノ林中及畠等ニ古瓦出ヅ。今世ニ国分寺瓦ト称シテ、好古ノ徒習之。国分尼寺ノ遺跡分明ナラス。」

成瀬久敬は『新編肥後国志草稿』の国分寺医王山条に、

「禅洞家河尻大慈末寺也。寺領一石六斗、此畑畝数二反六畝、薮四反六畝二十歩也。」とし、

「延喜式、元享釈書ニモ当国国分寺ノ事ヲ載タリ。往古ハ七堂伽藍境内八町四方十二坊、才徳アル僧侶ヲ居シメ、国家安泰ノ祈ヲ命セラル而レトモ後ニ衰敗シ、且応仁文明ノ比兵火ニ罹りテ廃跡ト成シヲ、享禄年中大慈寺五十世天佐忍和尚漸ク一宇ノ禅刹ヲ建テ跡ヲ残セリ。爾来大慈寺末寺ニ属ス。其後又荒廃セシヲ貞享年中大慈寺門下、実道玄理国中ヲ勧化シテ仏殿ヲ再興シ、宝永六年十月廿五日遷化ス。本尊ハ薬師仏也。」

と述べている。明治以降では、大正７年に菊川末熊氏の「国分寺址」[註1]があり、下林繁夫氏は「熊本県下に於ける古代礎石と古瓦」[註2]において県下の寺院址の中に国分寺の位置付けをおこなった。下林氏は現国分寺の本堂が改築された時に現地を訪れ、済々黌『多土』[註3]に次の一文を寄稿されている。

（前略）やがて同邸を辞して、帰途を附近の国分寺へ向けた。

此国分寺は、聖武天皇が天平年間、勅願によりて、日本国中の国毎に、国分寺を創建せしめ給うたその一つであって、所謂肥後国分寺である。往時は境域広く、七堂伽藍の荘観もあったが、創建が極めて古いので、中世幾度か変遷し、衰微し今は僅かにその蹟の一部に、小規模の一堂宇の存するのみとなっている。只昔の面影を偲ぶには、巨大なる礎石の散在するのと、広大なる範囲から古代の所謂布目瓦が発見せらるるに過ぎない。

私は久し振りに国分寺を訪ねた。丁度寺は改築中で、古い庫裡の一部を残して、本堂は全部取壊されている。今度新しい設計によりもと本堂のあった所を地均し工事がされて、近日中地搗きをするとの事であった。然るに其の中に創建当時の大礎石が数個掘り起されてある。尚其中の或ものは新に幾つかに小さく割り砕かれてある様だ。之を見た私は誠に惜しい事をしたものだと残念に思った。庫裡をのぞいて見たが住職は不在で外に家の人が居った。それにいろいろと尋ねて見たら「今度本堂の跡を掘り起こして見たら昔の大きな礎石が幾個も埋もれていた。今度の改築に使用仕度いと思ったが、あまりに大きいので七、八人の人夫では到底動かす事も出来ない。それで石工を入れて小さく割って穴の中へ埋めてしまった」との話だった。

今までは肥後国分寺の研究者は、皆本堂の附近、床下等に古代の礎石の幾つかが遺っていることは知って居た。然し建物の床下の事だから実測する事も出来ないでいた。今回本堂が解かれた機会に、それ等の研究は誠によい機会であったと思われるのに、これは又無惨にも破壊し去られたとは、反って悪い機会を生んだ様なものだ、誠に惜しいと思ったがもうあとの祭りだ。其等の礎石の原位置は、古代の建築の配置を知るのに、唯一の資料であった筈なのに。（中略）この国分寺の遺蹟に関しては、大正時代、内務省から史蹟保存のために、柴田常恵氏が調査に出張されたことがあった。其当時内務省の指定史蹟にしようと現在の寺を中心に附近一帯の地を実測して、調査まで提出した事があった。其際発見せられて古代の築地の跡が今の木山往還をへだてた町裏に遺って居るのがあった。其後間も無く私が其の辺を通った頃には、その築地の跡は綺麗に取り去られて、その上に一軒の借家が建てられていた。（後略）

木山往還が整備され、電車道ができる直前の水前寺の様子である。柴田常恵氏が来熊された事は内務省によって国指定の動きもあったのであろう。公文書も残っているかも知れない。

また、坂本経堯氏は「肥後国分寺」[註4]で礎石、実測図、瓦の拓影をあげて紹介した。

戦後、松本雅明氏は城南町史作成にともない県下の寺院址発掘を行った。また田辺哲夫氏も立願寺跡を発掘し、玉名郡倉と比定される礎石の検出に成功した。松本雅明氏は肥後国分尼寺を陣山廃寺とし、更に国分僧寺伽藍の配置を『熊本市南部地区文化財調査報告書』[註5]に発表された。以下、国分僧寺の伽藍配置について同報告書から引用する。

伽藍配置

すでに前部にいくらか論じたが、現国分寺本堂下の礎石が、講堂であって、金堂でありえないことが明かであるとすれば、金堂は塔の東側に並ぶとしか考えようがない。しかも塔院が２町四方を８等分した地割のＥ２

～4Ｎ２～４の区画の中にそっくりはまり、講堂がその東北のＥ３～５、Ｎ５の線が南より第４石列の上を通るとすれば、金堂の位置もおのずから決まるであろう。これが国分寺の一般的法則に従っていないことは、先の石田茂作氏の説に対比しても明白である。

もっとも近いプランとして、陸奥国分寺と滋賀の甲可寺がある。前者は南大門・中門・金堂・僧房と南北に一列にならび、中門の両翼から出る回廊が金堂の左右につき、塔院は別に金堂の東側に独立して存在する。この金堂と塔との配置を、左右におき替えても、講堂の位置が異るので、肥後国分寺のプランに近づかない。また後者の甲可寺は塔と金堂とが左右にならび、中間の回廊を共通にし、それぞれ回廊につつまれている点、中間の回廊が塔の側の地割りに入り、金堂の回廊間がやや広くなっている点は、肥後国分寺の地割に適用するに都合がよい。それは鈴木嘉吉氏によって、「金堂院と塔院を等価値にあやかっていることも注意されてよい」と指摘されている。塔と金堂との関係は、肥後国分寺の地割ではこれ以上考えがたい。ただこの場合、塔と金堂との位置は、東西逆になる。それはＥ４～６、Ｎ２～４に金堂院を想定するプランである。ただ金堂の面積は塔よりかなり大であるから、回廊はその郭の外におくものであろう。塔院・金堂院はそれぞれ中門をもつと考えられる。しかしこの甲可寺とも根本的に相違があるのは、甲可寺のように、金堂院の背後に講堂・僧房・小房子とつらなる列が考えがたいことである。すなわち甲可寺と類似した意識をもちながら、基本的には法隆寺式のプランを維持するもので、塔と金堂とが東西にならび、その中央背後に南北に講堂・僧房・小房子（その他）とならぶ形である。したがって南大門はその中央線上、すなわちＥ４の上にある。

僧房はＮ６の線に接し、その北にあったであろうが、甲可寺のように両翼が南に直角に伸びたかどうかわからない。ただ肥後は大国で、後述のように、他の九州諸国とは比較にならぬような国分寺料を持っていたので、僧衆も多く、僧房も他に比べて広大であったと思われる。その北にＮ７に接して小房子を想定したが、それは異る建物であったかも知れない。経蔵・鐘楼は甲可寺のように金堂院回廊の先端ではなく、塔院・金堂院の両翼の回廊の先端、もしくは講堂の左右前面にあったであろう。

このように考えると、肥後国分寺はまさに異質である。しかしそれ故この伽藍計画がありえなかったとは言えないであろう。その特異性は次のことから生れたのではなかろうか。

(1)塔の尊重。全国に七重塔を建てしめたのは、天平12年６月で、「続紀」の同月甲戌条に「天下諸国をして国毎に法華経十部并七重塔を建てしむ」とある。それより前すでに天平９年３月３日の詔に、「国ごとに釈迦仏像一軀、挾侍菩薩二軀を造らしめ、兼ねて大般若経一部を写さしむ」とある。かくして国分寺造営の詔勅は、天平13年３月己巳（24日）に出されている。この時期の相違によって、塔が一般に、全体計画のなかで中心から外れたのではなかろうか。すなわち塔と、他の伽藍とが別々に計画され、そこから塔の位置がまちまちになり、統一を欠き、また塔軽視、その装飾性の強調の風潮が、それに拍車をかけたのではなかろうか。肥後の場合は七重塔着手がおくれ、そこから全体計画のなかに充分はめえたのではなかろうか。

(2)法起寺式・法隆寺式配置の尊重。肥後最古で、益城国府の守護寺院と思われる陳内廃寺が法起寺式（とくに観世音寺式）をとり、それにつづく立願寺（玉名郡寺）、国分寺とほぼ同時代と思われる渡鹿廃寺（託麻郡寺）、十蓮寺（菊池郡寺）、古保山廃寺（宇土郡寺）、興善寺（八代郡寺）をはじめとして、肥後の奈良朝寺院がほとんど法起寺式をとり、浄水寺（延暦９年）のみが法隆寺式をとっている。このことは国分寺のプランと関係ないであろうか。ことに観世音寺は九州の国分寺の総寺の形をとり、それが以後の肥後の寺院に影響し、塔の尊重も持続されたにちがいない。

(3)この一助となる九州の国分寺についての研究はまだほとんど進んでいない。それは田村・小田氏によると、「九州の国分寺ではまだ回廊の発掘例がないが、塔と金堂の接近の度合いによっては薩摩のばあいのように回

廊内に（塔が）とりこまれると考えられるものもある。現存する遺跡や推定によって塔の位置を知りうるもので塔・金堂の関係をみると、

塔が金堂の東南に位置するもの…筑前・薩摩

塔が金堂の西南に位置するもの…筑後・豊前・豊後

となる。という。「回廊内」の意味はよく判らないが、塔が回廊内で金堂の東南という配置も奇異であるが、これらも肥後と異ることはたしかである。

国分寺の地割は石田茂作氏が指摘するように、周防国のように正しく2町四方（一辺720尺）のものと、それを中心としながら、そのなかで別の地割が行われているものがある。例えば遠江国の100間（600尺）四方、駿河国の520尺四方、出雲国の500尺四方、伊豆国の南北588尺（天平尺100間）・東西470尺（同80間）、陸奥国の南北600尺・東西840尺、上野国の南北628尺・東西688尺、下野国の南北600尺・東西800尺、甲斐国の南北440尺、東西320尺、三河国の600尺四方、播磨国の500尺四方、山城国の3町四方、安芸国の南北400尺・東西720尺などと、地形その他によってさまざまの変形がある。それは経済事情によるところも大きかったと思われる。今九州の国分寺料を比較すると表(略)のようである。唯一の大国（天平時代は上国）である肥後では2丁四方の寺域がとられたであろうことは、先の塔院・講堂の配置からも明らかなところである。

そこから現在の地形に合わせると、講堂は木山往還(現在7m幅）の東端にかかるが、その東方は25m余で傾斜してやや下るので、建造物は予想できない。僧房の両端が南下すると考えられない一つの点も、ここにある。推定金堂は木山往還の西端（熊野神社との境）附近から東方に30余mのび、回廊は地割から45m附近に予想されるが、この部分はほぼ平地で、東方に傾斜することはない。僧房は女子商高校の南の墓地の南端を中心とし、木山往還を20～25mこえるであろう。その地点から地形が東にやや傾斜し下るからである。

かくして寺域は北は女子商高校と墓地の界、南は国府本村に向う水路の北（東端は水路に接し、西端は水路より35m余北)、東は電車通りを20mこえ、水前寺公園プールの南端より、約70mの地点（やや西南)から墓地の東側の道路を南下し、南端は木山往還より90mの地点、西は出水小学校の中央よりやや西よりで、その南端は西の道路より約10mのところにあたる。それはまさに条里の二条の線にあたるのである。それは条里からみると西南は二条の線を起点とし、東北は一条と二条の中間線に近い箇所におき、その地割りの中で構成されているように思われる。ただ条里が水路の傾斜にもとづくのに対して、寺域は南面していて、その間にくいちがいがある。なお注目されるのは既述の水前寺廃寺の塔（塔院か）が一条と二条の中間の線上に築かれていることである。

註1　文献目録⑧による

註2　〃　④による

註3　済々黌中学校友会誌　1937

註4　文献目録⑨による。

註5　熊本市教育委員会発行　1975. 3. 31

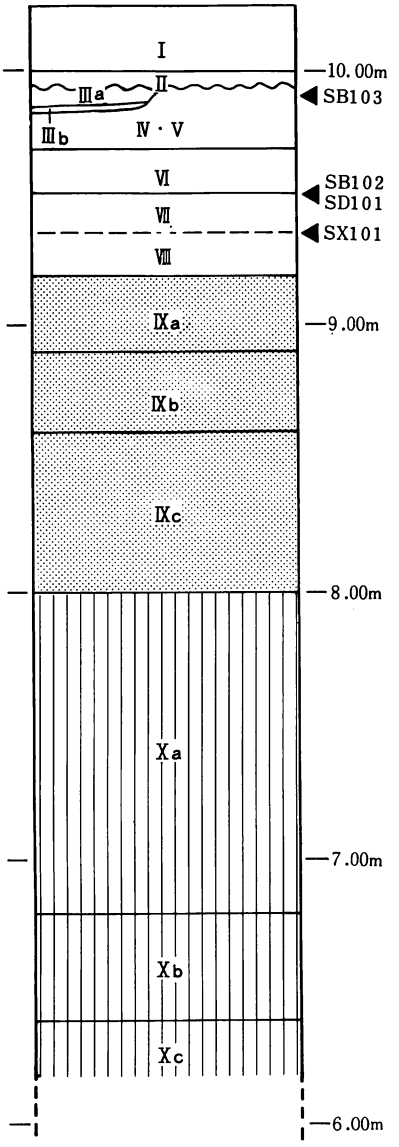
第Ⅴ章　検出遺構

1．基本層序と遺構の関係(第４図)

発掘地点は南方に低くなる緩傾斜地に位置し、標高は県道側で9.70～10.10m、西隣民家際で10.55ｍを測る。

検出した中世の井戸跡（ＳＥ101）の壁面観察によると、標高6.10～8.00ｍまでは粘土層の互層（Ⅹａ～Ⅹｃ層）で、その上部に砂層の互層（Ⅸａ～Ⅸｃ層）が標高9.18ｍまで堆積している。Ⅷ層は上層との漸移層である。

Ⅶ層の黒色土層は６世紀後半～７世紀代の土器を含む遺物包含層で、Ⅷ層上面から炉跡やピット群が検出されている。Ⅵ層のやや粘質の黒褐色土層は、国分寺の創建に伴う整地層とみられるものである。鉄分が付着して硬化しているとみられる赤黒い土塊を含むのが特徴で、Ⅶ層と同様の遺物が若干出土している。これと同一の土は、創建期と考えられる掘込み基壇（ＳＢ102）の築成土としても使用され



第４図　発掘地域の基本層序

Ⅰ	表土
Ⅱ	黒褐色土層
Ⅲａ	暗褐色土層（軟い）
Ⅲｂ	暗褐色土層（硬い）
Ⅳ	暗褐色土層（ＳＤ105埋土）
Ⅴ	暗褐色土層（やや硬い）
Ⅵ	黒褐色土層（創建期整地層）
Ⅶ	黒色土層
Ⅷ	暗褐色土層（漸移層・軟い）
Ⅸａ	明褐色砂層（軟い）
Ⅸｂ	褐色砂層（硬い）
Ⅸｃ	暗オリーブ色砂層（塊状）
Ⅹａ	黒褐色粘土層（軟い）
Ⅹｂ	黄色粘土層（硬い）
Ⅹｃ	暗オリーブ灰色粘土層（硬い）

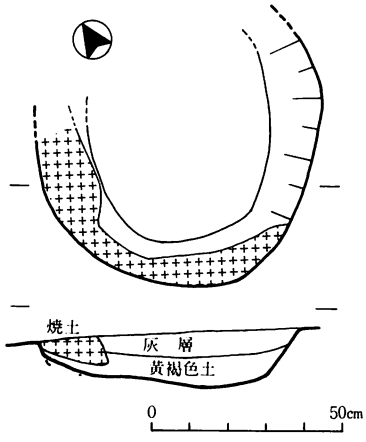
ている。Ⅴ層の黒褐色土層は、Ⅵ層で認められた赤黒色土塊やⅨ層の砂、砂塊を含んでいる。これとの先後関係は明確でないが、発掘区中央で検出された溝状遺構（ＳＤ105）の埋め立てに使用されたⅣ層も、Ⅴ層と同様の伴出遺物を出土し、面的に連続するとみられるため、同時期か極めて近接した時期の整地層であると考えられる。この整地後、褐色粘土を使って版築基壇（ＳＢ103）が築成されている。

Ⅲb層はＳＢ103建造後の堆積層で、上面は比較的硬化している。Ⅲa層はＳＢ103廃絶後の整地層とみられるもので、多数の瓦片や土師器片が混入する。この整地前には、発掘区西側で複数の土壙が重複して掘られている。Ⅱ層は近代以降の所産で、発掘区北側の溝状遺構を多数の瓦片を混えて埋め立てしているほか、発掘区の北側・西側に広がりが認められた。

2．遺構各説（第８～10図）

A　国分僧寺創建以前の遺構

ＳＸ101（第５図）　発掘区の北端のⅧ層上面で検出した炉跡である。北側３分の１を調査時に壊してしまったが、短径75cm・長径85cmの楕円形を呈するとみられる。深さ15cmを測り、最下に焼土や炭化物を若干混入するにぶい黄褐色土があり、その上部に炉の周縁に沿う焼土と炭化物・焼土を多く混入する灰層がある。灰層の上部に密着して６世紀後半の須恵器の有蓋高杯が出土している。炉跡の周辺にはピット群が検出されているが、炉跡との関係は不明である。



第５図　ＳＸ101実測図

ＳＢ101　後出のＳＤ105によって半分以上が削り取られている竪穴住居跡である。硬化した床面が認められ、その直上から７世紀後半代の須恵器の蓋が出土している。床の南縁に小ピットが連なって検出された。

B　国分僧寺創建以降の遺構

ＳＢ102　南北の長さ14.5ｍ、東西の長さ8．5ｍ以上の方形掘り込み地業を有する基壇で西半部を検出した。北辺の掘り込み上半部や西辺の大部分が、後出のＳＤ105やＳＤ109によって壊されていたが、南辺部は比較的良好な状態で検出された。掘り込みはⅦ層上面から行っており地山のⅨa層まで達する。深さは40～50cmであるが、さらに北辺、南辺の中央よりの部分には、Ⅸb層の硬い砂層に達するように２ｍ幅で溝状に掘り窪めている。同様の痕跡は西辺中央付近でも確認されている。

掘り込み内の築成土は、Ⅵ層と同一の黒褐色土であるが、硬くしまっており、７層程に分層さ

れる。各層は水平に堆積している。掘り込みの床面となる地山のⅨa層（明褐色砂層）上面には直径６～10cmの円文となって築成土の黒褐色土がくい込んでおり、搗棒使用の痕跡と推定される。築成土中からは瓦は出土せず、７世紀代の須恵器や土師器の破片が多く出土している。地業の方位は北辺がE3°30′S、南辺がE2°30′N前後である。

築成土上面には、後出の遺構がみられるだけで、礎石を置いた痕跡などは検出されなかった。現状での築成土の上面レベルは、周辺の整地層とみられるⅥ層上面と同じであることから、基壇上部はⅤ層の整地の前段階に削平されていると考えられる。築成土上面で検出された柱列（**ＳＳ101**）は、この削平後のものとみられる。

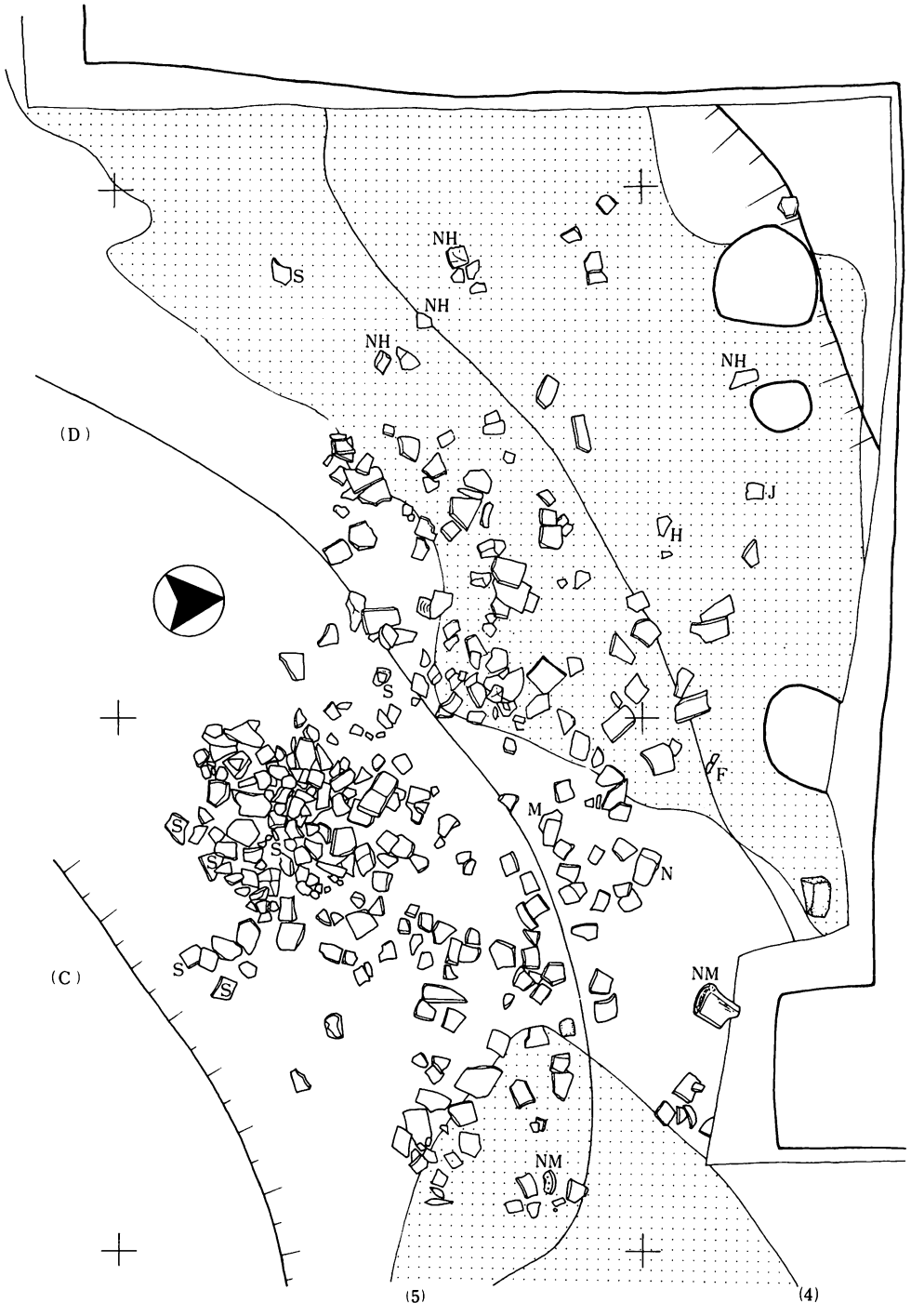
ＳＤ101　ＳＢ102と相前後してⅦ層上面から掘り込まれた溝状遺構である。南側ではⅧ層上面から掘り込まれ、断面は皿状を呈する。幅1.8～2.0ｍ、深さ50cmを測り、ＳＢ102の南辺に沿って走り、その西南角の地点で南折する。南折する溝の深さは30cm程深くなっている。埋土と包含される遺物は、ＳＢ102の場合と同様であるが、搗固めておらず軟い。

なお、ＳＤ101の上部に広がる黒褐色土（Ⅵ層）も、同様の土質を有するもので２～３層に分層できるが、比較的堅くしまっている。層中には間層となっているⅨa層の明褐色砂が、下層に食い込んで円文となっている状態が観察され、ＳＢ102と同様に搗棒の使用が推定される。層の厚さは20～30cmである。Ⅵ層は発掘区北端でも確認されており、ＳＢ102の基壇築成と相前後して周辺部の整地が行なわれたとみられる。

ＳＤ102　ＳＢ102の西辺に沿って走る溝状遺構であるが、西側土壙群によって大部分を壊されている。南方の発掘区外へ延びるが、北端はＳＢ102西辺のほぼ中央で終る。ここから西折していることも考えられる。幅140～170cm、ＳＢ102築成土上面からの深さは65cmを測る。埋土から少量の瓦片や須恵器片、牛の上顎の大臼歯１点(註1)を出土している。

ＳＤ105　ＳＢ102の北半部を壊して掘削された幅７～８ｍの大きな溝状遺構である。東西方向に走り、発掘区北西部で南方にゆるやかにカーブして発掘区外へ延びている。ＳＢ102築成土上面からの深さは80cm程を測り、西側でやや深くなる。この溝状遺構の南側斜面には、幅約25cm、深さ10～20cmの２本の小溝（**ＳＤ103・104**）が、ＳＤ105と同様の走向で約１ｍの間隔をもって平行して走る。

これらの性格については判然としないが、その後に埋め立てられて整地がなされる。埋め立てにあたっては、まず溝の斜面や底部に部分的に黄色粘土を最高11cmの厚さで人為的に張りつけており、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、地山の砂に加えてSB103の版築土と同様の褐色粘土を使用して埋め立てする。埋土の最上層は、搗固められて硬化しており、標高9.50ｍ前後に整えられている。埋土中からは比較的多くの瓦片が出土し、特にコーナー部の底部から南斜面にかけて集中している。出土した軒瓦は創建期のセットに限られている。この他、須恵器片、刀子、牛の下顎の大臼歯１点(註2)を出土している（第７図）。



※　NM　軒丸瓦　　S　須恵器
　　NH　軒平瓦　　H　土師器
　　M　　面戸瓦　　J　縄文土器
　　N　　熨斗瓦　　F　鉄製品（刀子）
　　スクリントーンは黄色粘土の広がりを示す

第6図　ＳＤ105遺物集中地点平面実測図　Ｓ＝1／40

ＳＢ103 Ｖ層の整地とＳＤ105の埋め立ての後に築成された版築基壇である。版築に先立って、基壇の内よりの部分を溝状に掘削する(**ＳＤ106・107**)。溝は幅120cm前後、深さ約40cmである。両溝の底部や外側斜面からは、柱痕を認め掘り方埋土を搗固めた径30cm程の柱穴群が検出された。この柱穴群は、柱間寸法が110～370cmと不揃いであるが、30cmの間隔をもつ２本の柱列に復原できる（**ＳＳ102・103**)。基壇の築成に関係するとみられるが、その性格については特定できない。基壇の版築は褐色粘土を使用し、溝状遺構を直接、あるいは褐色粘土と黒褐色土の混合土で埋め立てから行っている。

基壇の大半は、西側土壙群や最近のゴミ捨て穴などによって壊され、また、基壇上部も後世の度重なる削平をうけているが、幅450cmで発掘区中央西よりの部分がコーナーとなる基壇と推定される。現状から判断すると回廊基壇の可能性が強い。基壇上面の観察では、積極的に礎石設置の痕跡としうる遺構は認められないが、焼瓦を混入する径170cm、深さ10cm程の浅い土壙（**ＳＫ106**）や、径70cm、深さ80cmの土壙（**ＳＫ105**）などが検出されている。基壇の内側では雨落ち溝の可能性のある幅45cm余りの溝状遺構（**ＳＤ108**）が検出された。また、基壇の外側は30cm程低くなっている。基壇の方向はＳＤ108によって約Ｎ2°Ｅと推察される。

基壇下のＳＤ106・107や小土壙(**ＳＫ101・102**)、および版築層内からは瓦片が出土しているが、軒瓦は創建期のものに限られる。

ＳＢ104 発掘区の北西隅で、ＳＤ105を埋めた整地層上面から検出された掘立柱建物跡である。柱間寸法は5.5尺程で、北側の発掘区外へ広がるとみられる。一部の柱穴に柱痕を認め、掘り方の埋土は固められている。方向はＮ40°Ｅである。

ＳＫ104 ＳＢ104同様、整地層上面から掘られた浅い土壙である。一部の検出で規模は不明である。埋土にＳＢ103の版築土と同一の粘土を使い、比較的大きな瓦片が出土している。

西側土壙群 発掘区の西側において、ＳＢ103の基壇を壊して掘られた土壙群である。ＳＫ108・109→ＳＫ107・111・112の順序で掘られているが、個々の重複関係は明らかにできなかった。いずれも埋土中に多量の瓦片を含む。

この中でⅢb 層を切って掘られているＳＫ111は、径350cm・深さ50cmのほぼ円形を呈する土壙で、埋土に炭化物・焼土が混入し、北東部に焼土の広がりが認められる点で特異である。

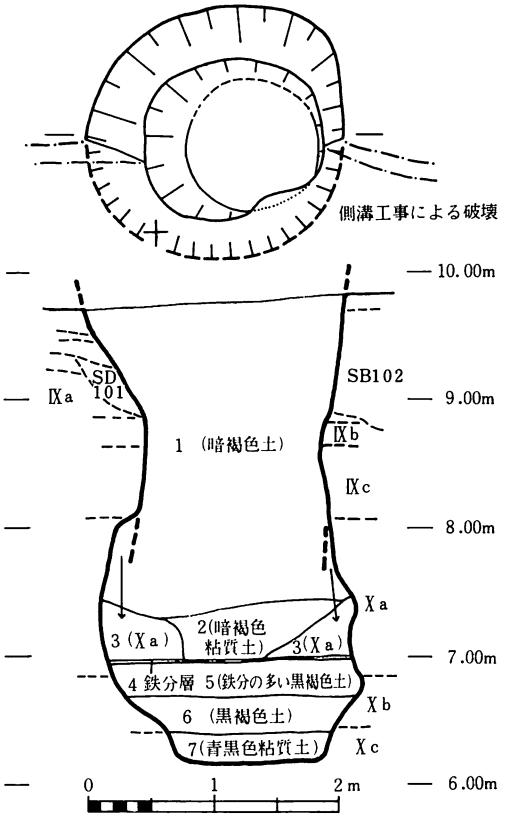
これらの土壙群の埋没後、ＳＢ103の基壇外側を多量の瓦片や土師器片を混在する土砂で整地している。**ＳＫ114**はこの整地後に掘り込まれたとみられ、多量の瓦片が埋土中にみられた。

ＳＫ113 整地以降に掘り込まれた長大な土壙で、多数の瓦片と五輪塔の火輪や中世陶器片が出土している。幅約３ｍ、最大深さ90cmを測る。

ＳＥ101（第６図） 発掘区南東部で検出された素掘りの井戸跡である。平面形は径135cmの円形を呈し、基底部は標高6.15mを測る。壁のⅩa 層が剝落して埋まったために埋め立している。６層の黒褐色土中から曲物や亀甲が出土しているほか、埋め立ての土砂に混じって瓦片や中

世陶器片が出土している。

ＳＤ109　発掘区北部で検出された東西方向の溝状遺構である。幅４ｍ、深さ0.8mを測る。多数の瓦片を投入して埋め立てしている。基底部から近代陶器片が出土している。



第7図　ＳＥ101実測図　Ｓ＝１／60

3．遺構の変遷

124地点の発掘によって検出された遺構群は、3枚の整地層を中心とする層位関係や遺構の重複関係、および伴出遺物によって、大略、7期に分類される。特に、3時期に亘って行なわれている整地の存在は、伽藍の一角における堂宇の建立と廃絶の繰り返しを示しているとみられ、国分僧寺の変遷上の画期として捉えることが可能である。

とはいえ、小面積の発掘であるため、検出遺構の全貌を明らかにしえたものは少なく、その性格や規模を断定するまで至っていないのが実情である。したがって、今後の発掘調査の進展によって検討、修正される必要がある。ここでは、そうした問題点を前提として、以下の遺構の編年を試みた（第12図）

Ⅰ期以前　国分僧寺の創建以前で、竪穴住居跡と炉跡が検出されている。伴出遺物による年代は竪穴住居が須恵器の杯蓋（第28図S－031）によって7世紀後半代、炉が須恵器の有蓋高杯（第29図S－048）で6世紀後半～終末に位置づけられる。この他に縄文晩期の深鉢や弥生中期の須玖式甕棺の破片が出土しており、近隣に遺構の存在が推定される。

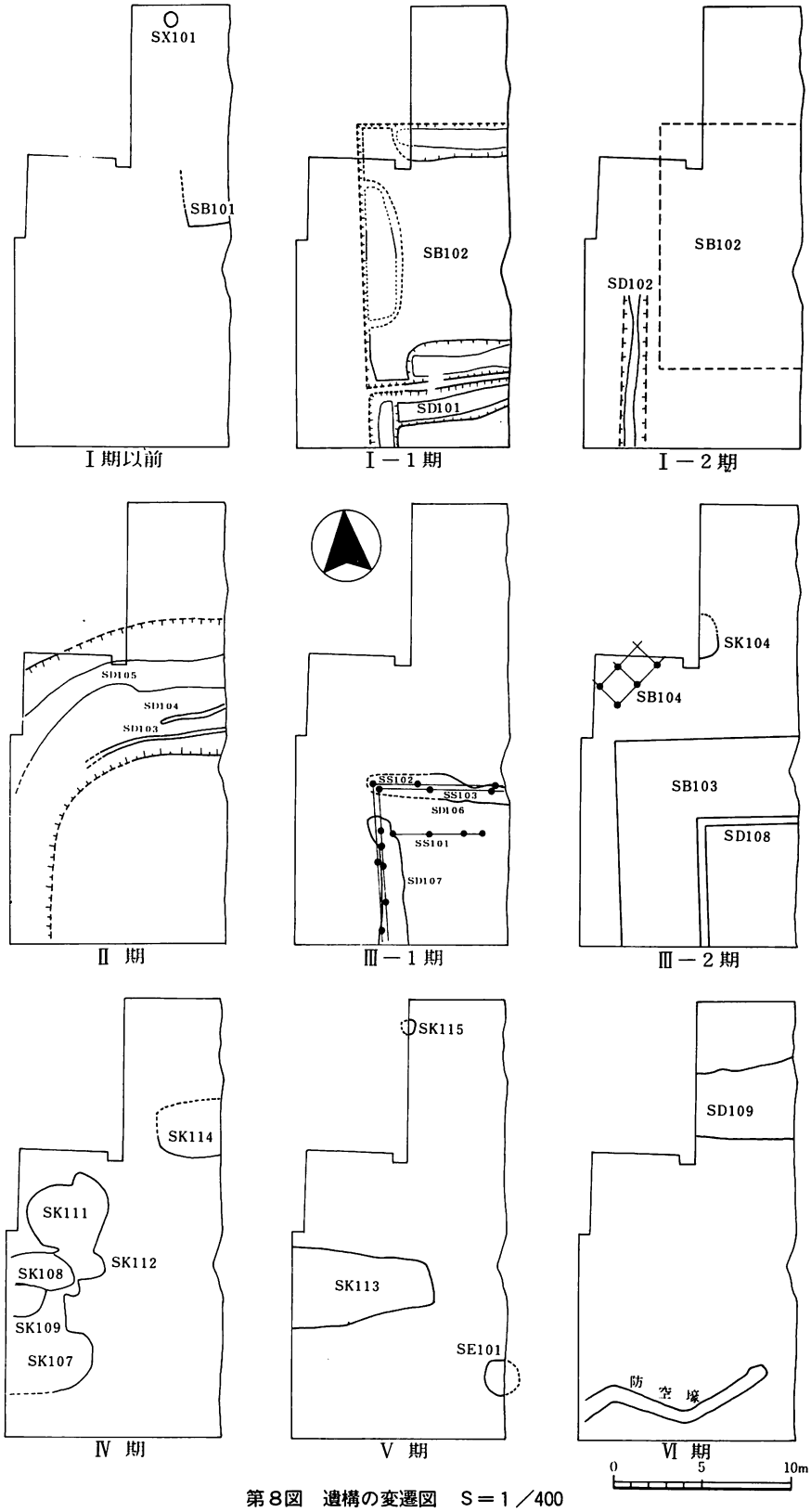
Ⅰ期　国分僧寺の創建期で、最初に方形の掘り込み地業を有する基壇の築成を行なう一方で、第1次整地にあたる周辺の整地をしている（Ⅰ－1期)。基壇の完成後に創建堂宇（SB102）の礎石建物を建造したとみられる（Ⅰ－2期）が、基壇上部はⅢ期のSB103の建造に伴って削平され、その規模が掘り込み地業によって推定されるにすぎない。この創建堂宇の西側には溝状遺構（SD102）が西辺に平行して走る。

基壇の築成土と整地層からは、Ⅰ期以前の土器を主体とする遺物が出土するが、下限を示すとみられる輪状つまみをもつ須恵器の杯蓋(第28図S－039)は、8世紀中頃に位置づけられる。したがって、SB102を創建堂宇と考えて妥当と思われる。瓦類が出土しないこともこれを支持する。

Ⅱ期　Ⅰ期の創建堂宇基壇の北半を壊して南行する鉤手状の大溝とその南斜面を走る2本の小構が掘られる。

Ⅲ期　大溝の埋め立てを含む全面的な第2次整地が行なわれ、SB103の基壇が築成される。まず削平したSB102基壇上面にSB103の下部遺構となる溝状遺構と柱穴列が造られる（Ⅲ－1期)。そして、幅450cmほどの版築を行い基壇とし、その内側に雨落ち溝とみられる溝を走らす（Ⅲ－2期)。また、SB103の北側整地層上面には、掘立柱建物や小土壙が出現する。

以上の第2次整地層やSB103基壇下・基壇版築中から出土する軒瓦は、軒丸瓦Ⅰ類の2種と軒平瓦Ⅰ・Ⅲa類に限られ、創建期からさほど降らない時期に大溝が掘られ、間もなく整地とSB103の建造が行われたことが推察される。その年代は、伴出している須恵器の杯（第27図S



第8図　遺構の変遷図　S＝1／400

—022)・杯蓋(第28図S—041)や土師器の高台付皿(第37図H—283)等によって、9世紀代と推定される。

Ⅳ期 SB103の廃絶後、SB103の基壇を壊して土壙群が形成される。その大まかな順序はSK108・109→SK107・111・112で、土壙の埋土中には多量の瓦片が混入している。これらの土壙埋没後に大量の瓦片・土師器片を混在する第3次整地がなされている。

これらの土壙群の埋土中には、先行する遺構にみられなかった土師器の小皿が出土しており、土壙群の形成期は大宰府において小皿の出現する10世紀以降(註3)と推定される。

Ⅴ期 井戸(SE101)や長大な土壙(SK113)小土壙(SK115)が形成される。井戸の埋め戻しの土層内とSK113の埋土内からは、同一個体とみられる火舎片が出土しており、ほぼ同時期の遺構とみられる。SK115出土の糸切り底の土師皿を含めて、伴出した遺物は室町期のものとみられる。

Ⅵ期以降 近代以降の遺構で、埋土に多数の瓦片を混入する溝状遺構(SD109)が形成される。また、太平洋戦争中の防空壕や家屋の基礎、ゴミ捨て穴等、多数の土壙がみられる。

4 検出遺構の性格

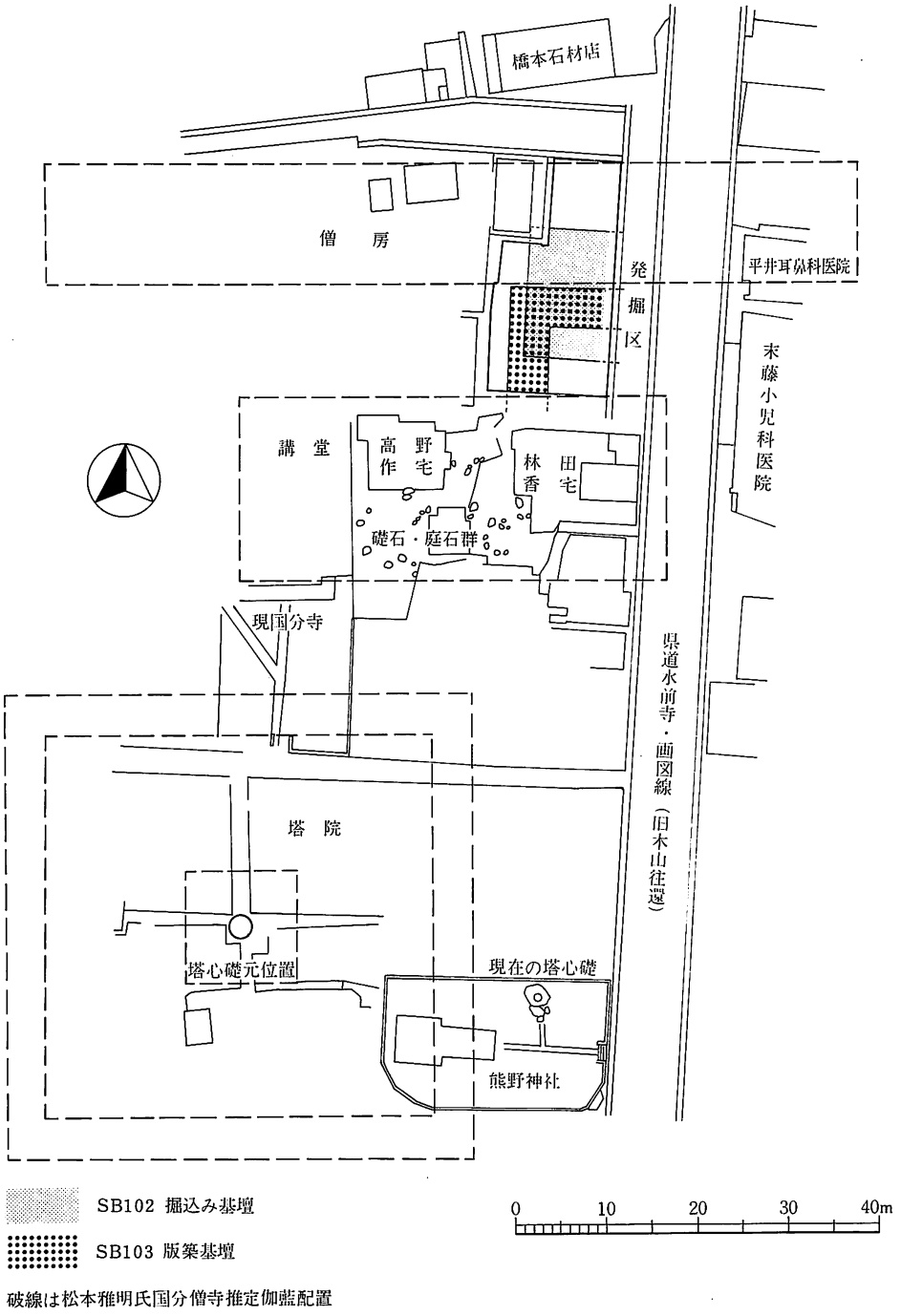
今回の発掘区において、主体となる検出遺構は、SB102の掘り込み基壇と、これに重複するSB103版築基壇である。基壇の上部は後続の遺構などによって完全に削平され、礎石・礎石の根固め石は検出されなかったため、基壇上の建物構造を知る手懸りはないが、その規模の一端は基壇の地業や基壇築成土の広がりによって知ることができた。

SB102は、方形の掘込地業の範囲がそのまま建物基壇になったとすれば、南北48.3尺、東西28尺以上の基壇となる。仮に建物の梁間を南北とし、その柱間寸法を10尺等間と考えると、梁間3間で梁間総長は30尺となり基壇の出は約9尺となる。また、梁間4間の場合は梁間総長40尺となり基壇の出は約4尺となる。

一方、SB103は基壇築成土の広がりや基壇下の溝状遺構と柱列の存在によって、発掘区が西北コーナーとなる回廊跡の可能性がある。回廊とみて間違いなければ、基壇幅が15尺と考えられるので単廊であったとみられる。この場合、SB103の単なる建て替えでなく、伽藍の変更があったことになり、その意味するところは重大である。

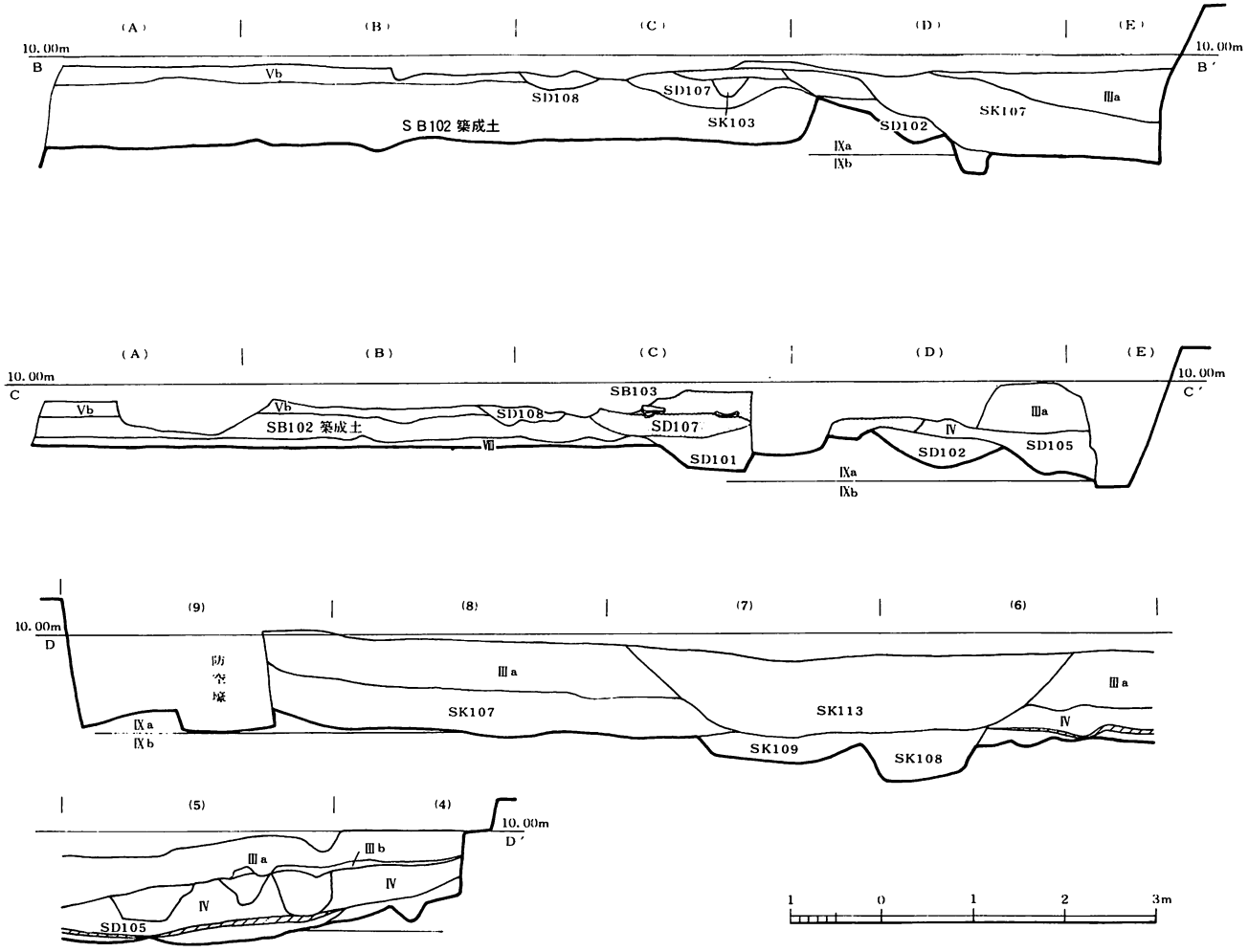
さて、松本雅明氏の国分僧寺推定伽藍配置(註4)によると、発掘区は講堂の背後の僧房推定地にあたる(第13図)。再建建物と考えられるSB103は別として、創建建物のSB102は、僧房推定より南に位置し講堂に極めて接近することになる。また、丁寧な掘り込み地業を有する点、基壇の一側面が48尺ほどに想定される点で、僧房よりは規模の大きな建物であったと考えられる。

しかし、何分にも小面積の発掘であり、建物の基壇の一画を検出したにすぎない。検出遺構

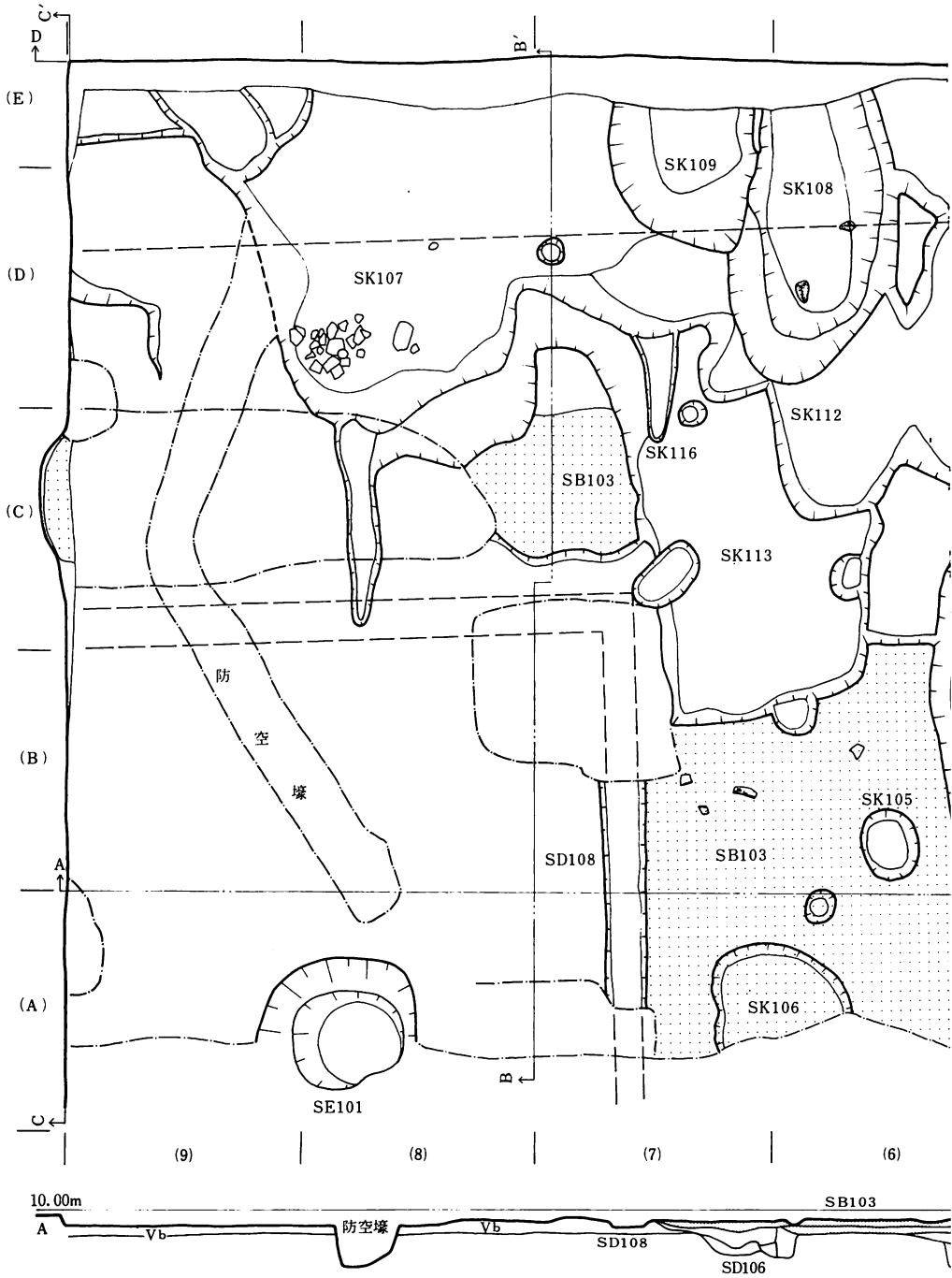


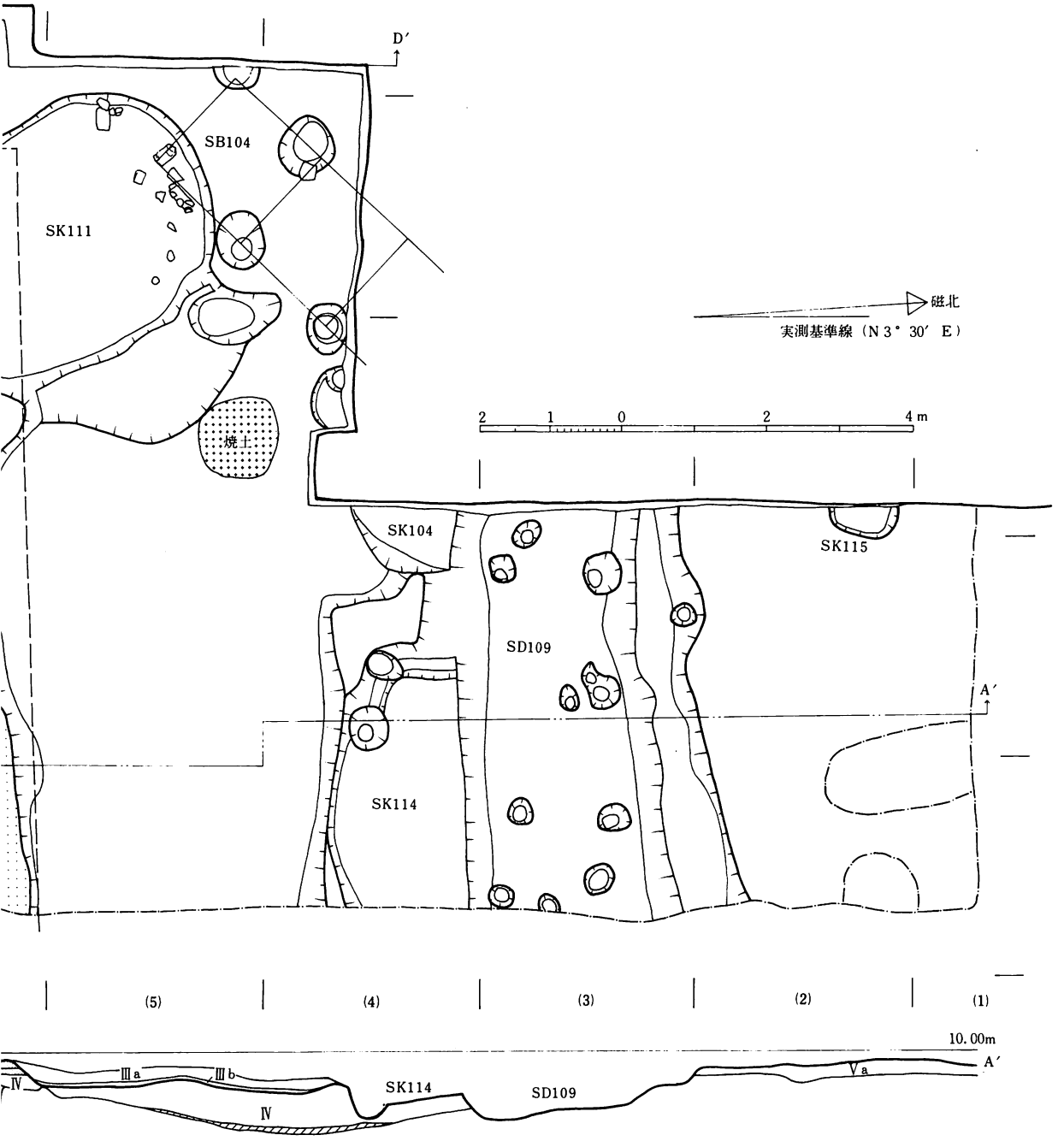
破線は松本雅明氏国分僧寺推定伽藍配置

第9図 検出遺構位置図 S＝1／800

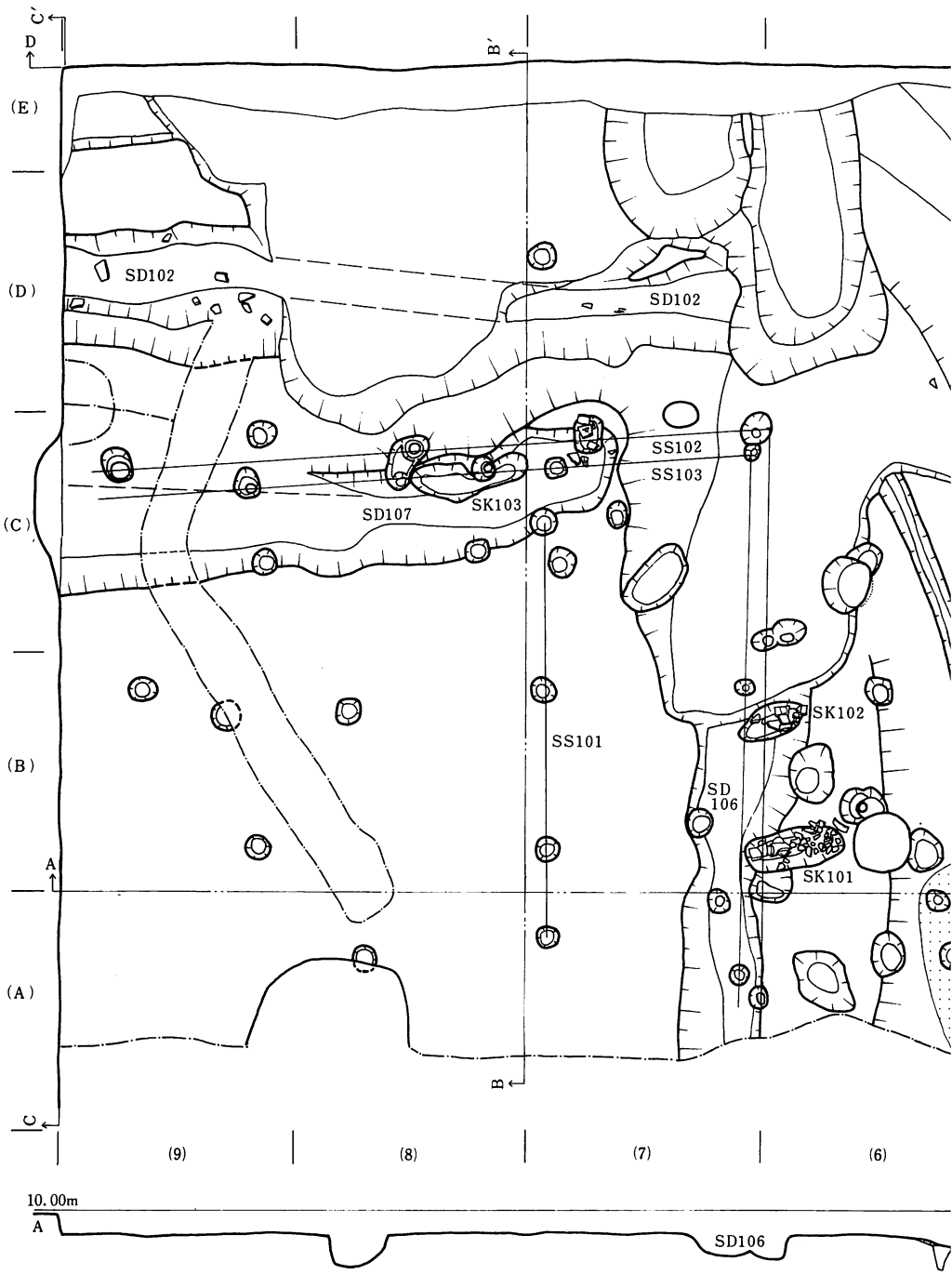


第10図　検出遺構断面実測図　S＝1／80

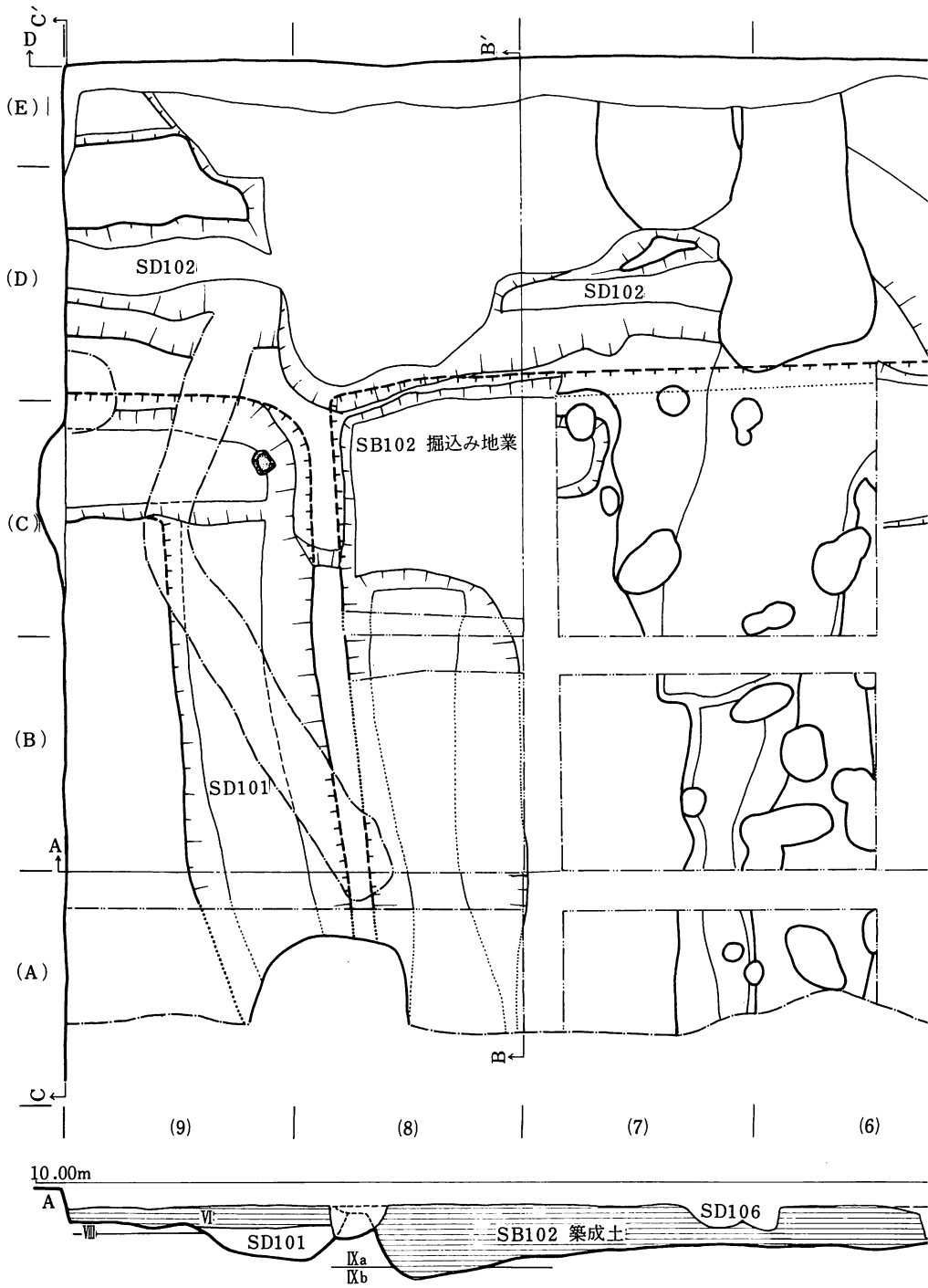

C'
D
B'
(E)
(D)
(C)
(B)
(A)
A
B
C
SK109
SK108
SK107
SK112
SK116
SB103
SK113
防
空
壕
SK105
SD108
SB103
SK106
SE101
(9)
(8)
(7)
(6)
10.00m
SB103
A
Vb
防空壕
Vb
SD108
SD106

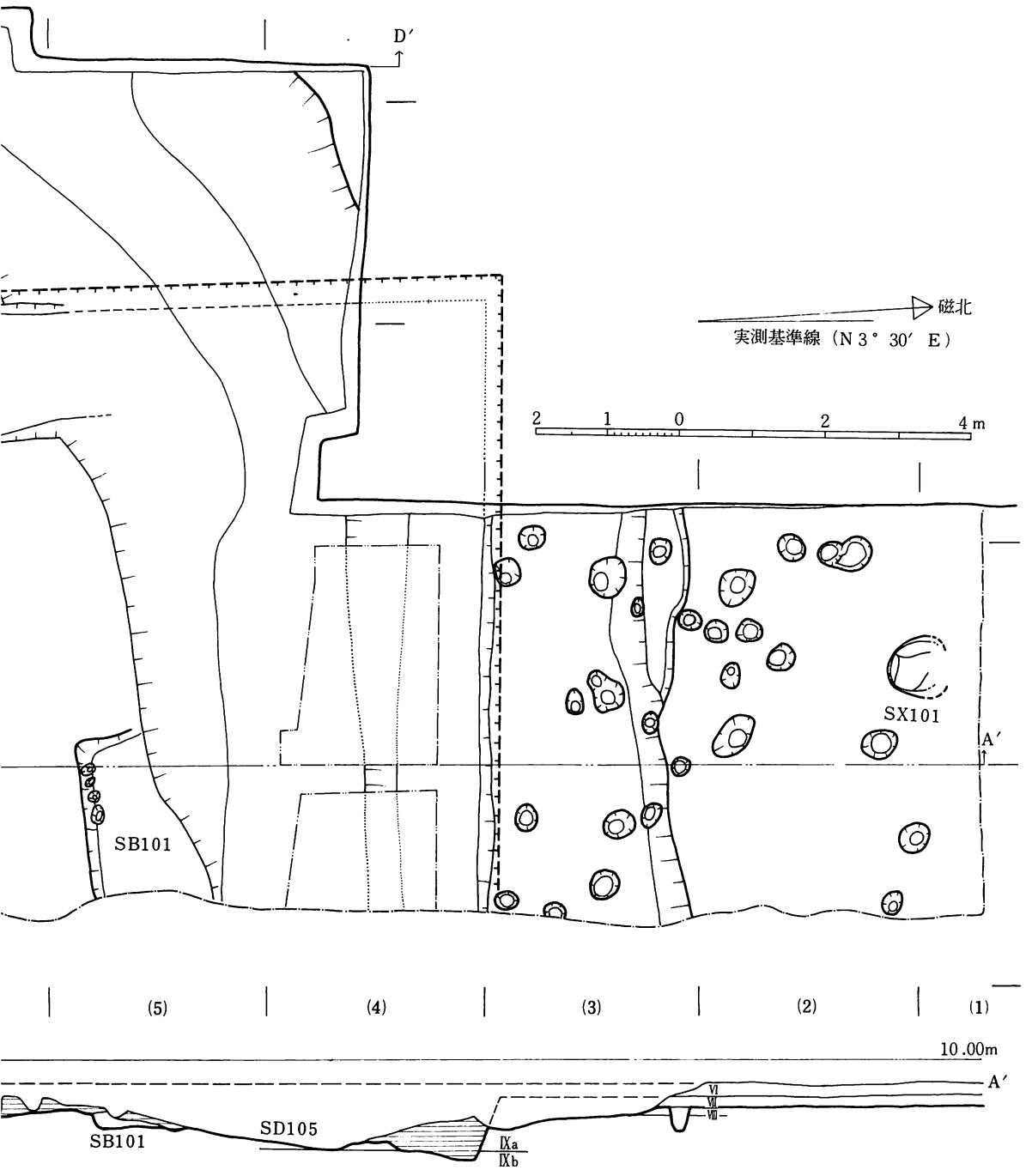


第11図　検出遺構平面・断面実測図(1)　S＝1／80


C'
D
B'
(E)
(D)
(C)
(B)
(A)
A
B
C
SD102
SD102
SS102
SS103
SK103
SD107
SS101
SK102
SD
106
SK101
(9)
(8)
(7)
(6)
10.00m
A
SD106

第12図　検出遺構平面・断面実測図(2)　S＝1／80


C'
D
B'
(E)
(D)
(C)
(B)
(A)
A
B
C
SD102
SD102
SB102 掘込み地業
SD101
(9)
(8)
(7)
(6)
10.00m
A
Ⅵ
Ⅷ
SD101
Ⅸa
Ⅸb
SB102 築成土
SD106



第13図　検出遺構平面・断面実測図(3)　S＝1／80

の性格については、今後の隣接地の発掘を含めて、全体的な伽藍配置の追求を行なう中で自ずと判明するものと思われる。

註１・註２　吉倉　真（熊本大学理学部名誉教授）の鑑定による。

註３　『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』　第８集（下）　福岡県教育委員会　1978

註４　松本雅明「肥後国分僧寺」『熊本市南部地区文化財調査報告書』　熊本市教育委員会　1975

第Ⅵ章　遺　　物

今回の発掘地から出土した遺物は、瓦・須恵器・土師器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器・金属製品・石製品・木製品におよび、他に縄文土器（晩期）・弥生土器（中期の甕棺）の出土があった。遺物の大半は、西側土壙群や整地層のⅢa層中から出土した。

1　瓦　類

今回の発掘で出土した瓦類は、土嚢袋にして600袋以上に達する。その中には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・道具瓦の類がみられるが、その圧倒的な数量を占めるのは丸瓦と平瓦である。具体的な数値は不明だが、瓦の大部分は、ＳＢ103廃絶後に掘られた西側の土壙群の埋土中やⅢa層の整地層およびＳＤ109の埋土内から出土している。これらの出土瓦のほとんどは水洗いまで完了しているが、丸瓦・平瓦に関しては整理が未了である。

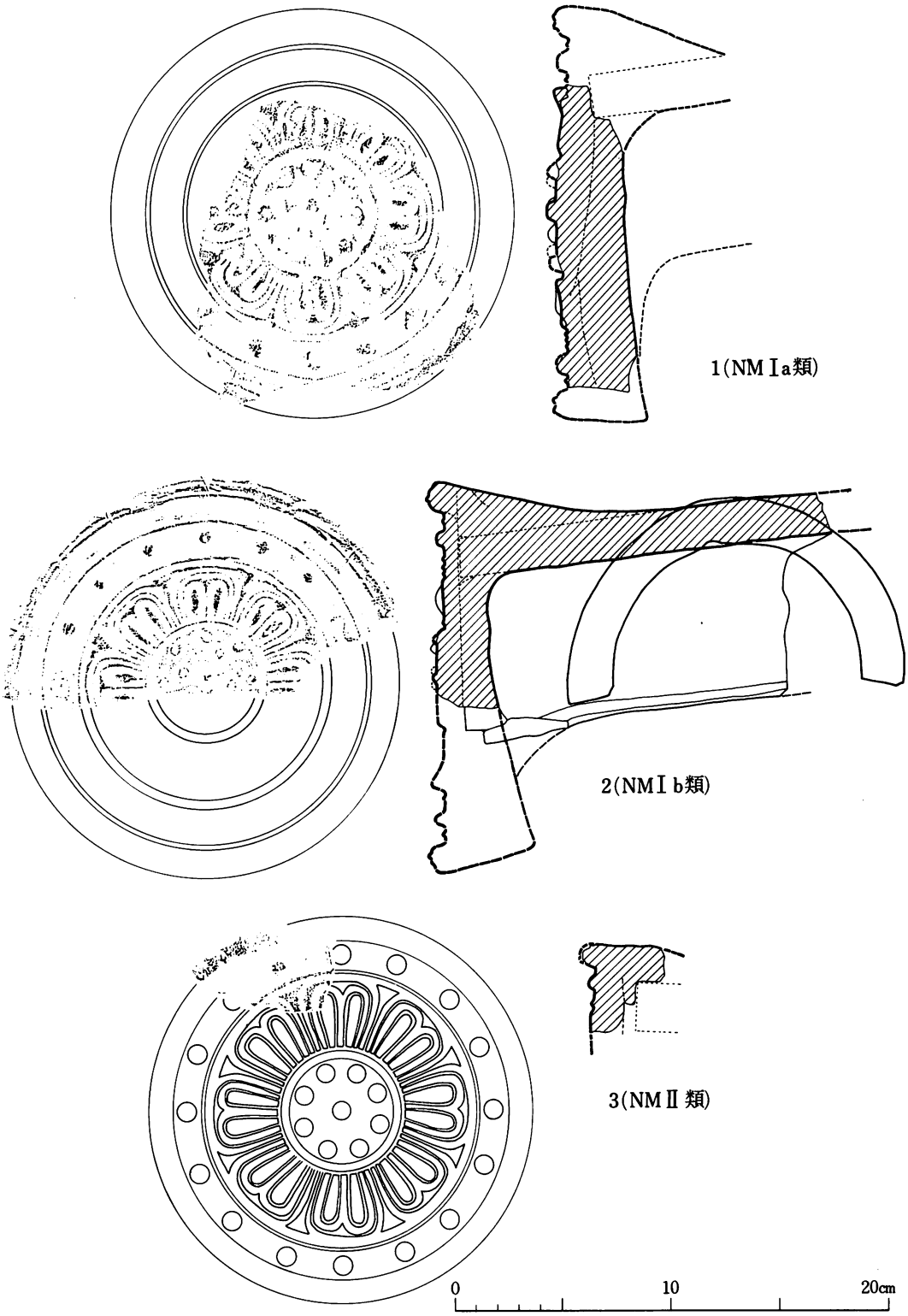
A　軒丸瓦（第14～16図・第３表）

小片まで含めて総数36点を数えるが、完形品は全くない。７型式８種に分類され、従来知られていなかった型式が３型式みられる。

ＮＭⅠa類（１）　従来から創建期の軒丸瓦として取り扱われてきた複弁8弁軒丸瓦である。径190mmを測り、蓮子・蓮弁・珠文・周縁がきわめて高く盛り上る。中房は径51mmでわずかに盛り上がり、中に大粒の蓮子を１＋４＋８で配する。内側の４つの蓮子は間弁の延長上に１つ置きに、また外側の８つの蓮子は複弁の中央延長上に配される。弁区径は118mmを測り、複弁を８弁配し、外区から中房に向って盛り上がっている。複弁の一単位は、外側を隆起線によって囲まれ、さらに間弁の先が互いに連続しているため二重の輪郭線によって

軒丸瓦分類 / 出土地点	Ⅰa	Ⅰb	不明	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
Ⅴ　層		1	1							2
ＳＤ１０５（Ⅳ層）	4	2	2							8
ＳＤ１０７	1									1
ＳＫ１０７					1					1
ＳＫ１１１								1		1
Ⅲｂ層	1									1
Ⅲａ層	3	1	1	1		1				7
ＳＫ１１４底ピット	2									2
ＳＫ１１４		1								1
ＳＫ１１３	1					3	1			5
ＳＤ１０９	1							1		2
工事用側溝埋土									1	2
出土地点不明	1	1								2
福田正文氏採集	1									1
合　　計	15	6	4	1	2	4	1	2	1	36
百　分　率（%）	41.7	16.7	11.1	2.8	5.6	11.1	2.8	5.6	2.8	100

第３表　軒丸瓦各型式の出土点数と割合



第14図　軒丸瓦実測図（1）

囲まれているという特徴がある。

外区内縁には、16個の大粒の珠文を複弁と間弁の延長上に規則的に配する。外区外縁は高く隆起し、内側に一条の隆起圏線を配し、外側にわずかに低くなる段差をもって瓦当端となる。瓦当面と丸瓦との接合方法は、笵に文様を表出するだけの粘土をつめ、これに丸瓦を置いて支持土を付加している。胎土は小石をわずかに含むものがあるが、砂粒を含まず緻密であり、焼成堅緻で灰色を呈する。総数15点出土し出土軒丸瓦の41.7%を占める。1はＳＤ109より出土している。

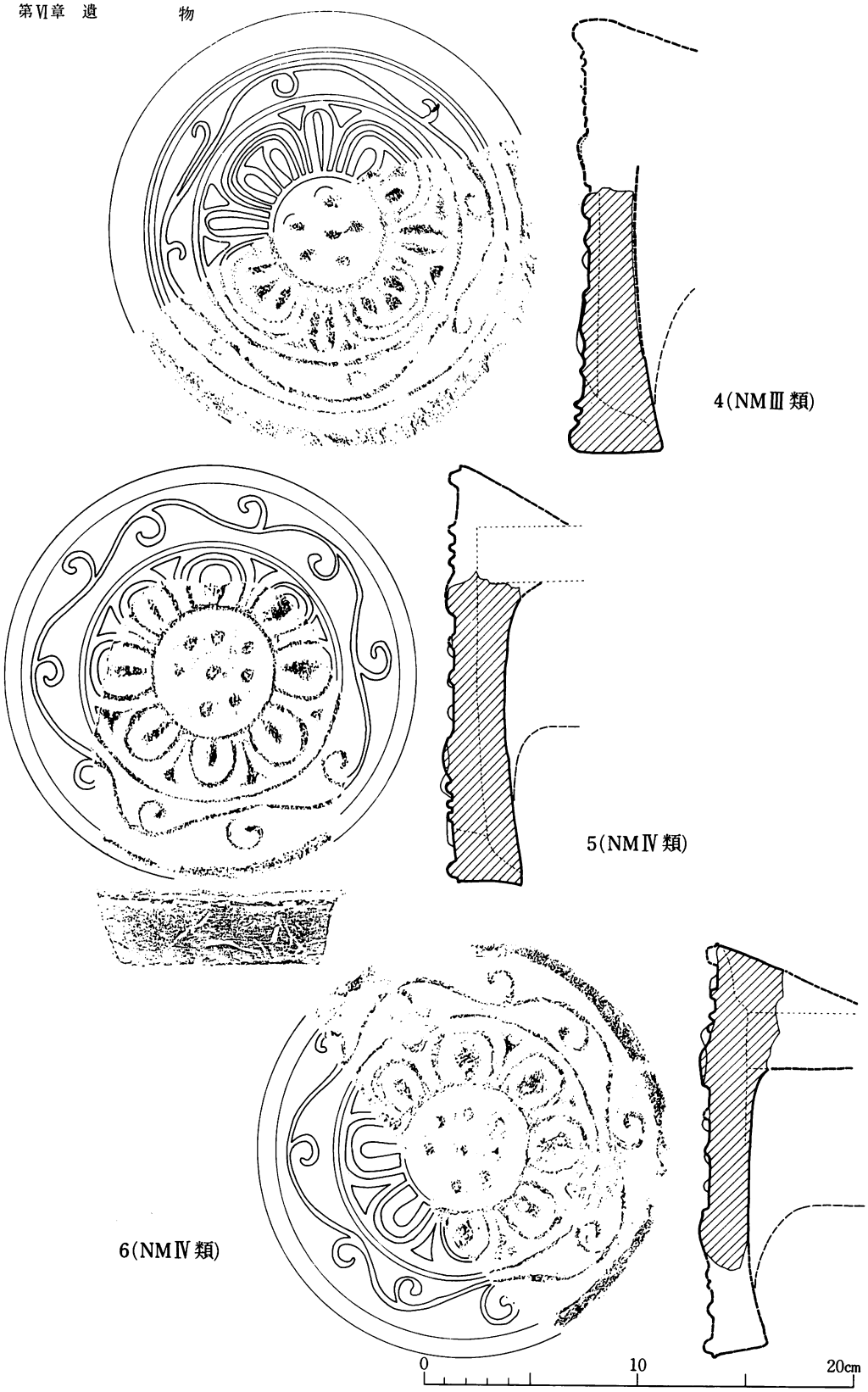
ＮＭⅠb類（２）　文様のモチーフはＮＭIa類と全く変らないが、径184mm・中房径49mm・弁区径110mmでＮＭIa類より若干各寸法が小さくなっている。また蓮子・珠文も小粒で蓮弁の盛り上りが小さい。瓦当面と丸瓦の接合方法はＮＭIa類と同一である。胎土は砂粒を含まず緻密で、焼成の堅緻なものは灰色を、焼成のやや軟質なものは黒灰色を呈する。総数６点出土し、出土軒丸瓦の16.7%を占める。2はＳＤ105埋土（Ⅳ層）の最下層である黄色粘土直上から出土している。

Ⅰ類には周縁部のみの破片が４点あり、ａ・ｂいずれか決しかねるが、これを含めるとⅠ類の総数は25点となり、出土瓦の69.4%を占める。

ＮＭⅡ類（３）　外区付近の小破片であるが、従来から知られている複弁８弁軒丸瓦（註１）であろう。それによると中房の１＋８の蓮子のうち外側の蓮子は間弁の延長上に配する。蓮弁は子葉を隆起線で表わした複弁を８弁配するが平板的である。外区内縁には複弁と間弁の延長上に大粒の珠文16個を配する。瓦当と丸瓦の接合方法はＮＭＩ類と同一である。胎土に砂粒を少し含むが緻密で、焼成堅緻で灰色を呈する。Ⅲa層中から１点だけ出土している。

ＮＭⅢ類（４）　福田正文氏が工事中に採集した唐草文縁複弁４弁軒丸瓦である。直径220mmと大型で、中房径46mm、弁区径132mmを測る。中房は平板で、大粒の蓮子を１＋５に配する。蓮弁は隆起線によって囲まれた大きな複弁４弁と、その間の極太の隆起線からなる素弁状のもの４弁、およびそれらの間に配される８個の三角形状間弁からなる。外区内縁には隅丸方形状で右回りに流れる唐草文がある。隅では内側に、辺の中央では外側に巻いており合計８個の支葉が反転する。外区外縁は低く、内側を緩やかに隆起させている。瓦当と丸瓦の接合方法はＮＭＩ類と同一である。胎土に白色の小石を微量に含むが緻密であり、焼成やや軟質で黒灰色を呈する。他にＳＫ107から出土した小片がある。

ＮＭⅣ類（５・６）　どちらもＳＫ113から出土した唐草文縁単弁８弁軒丸瓦である。径191mm、中房径55mm、弁区径124mmを測る。中房は平板で、１＋７の蓮子を配する。蓮弁は子葉１個を隆起線で囲んだ単弁８個とその間の間弁８個からなる。外区内縁はⅢ類のモチーフを模倣しているが、隅丸五角形状で右回りに流れる唐草文に変化しており、合計10個の支葉が反転している。外区外縁は素文である。調整の及ばない外周下半には笵痕の突起が回っている。丸瓦の接合方法はＮＭＩ類と同一である。胎土に砂粒を少し含むが比較的緻密で、焼成良好で赤褐色を



第15図　軒丸瓦実測図（2）

呈する。他に３点の小破片が出土している。

ＮＭⅤ類（７）　弁区先端から外区にかけての破片で全形を明らかにできないが、ＳＫ113から出土した新資料である。復原径173mm、復原弁区径120mmを測る。蓮弁は平板で、恐らく素弁であるとみられ、５～６弁の蓮弁と推定される。外区には圏線によって囲まれる珠文帯があり推定24個前後の珠文が配される。丸瓦の接合方法は不明である。胎土に白色の砂粒を含むが緻密で、焼成は極めて堅緻で須恵器の焼成に類似する。黒灰色を呈し、黄褐色の自然釉がみられる。

ＮＭⅥ類（８・９）　８はＳＤ109、９はＳＫ111から出土した。復原径171mm、復原弁区径119mmを測る。蓮弁は太い隆起線によって表わされる素弁で、蓮弁の先端には珠文状の小さな盛り上がりがある。外区は２重の圏線によって表わされているだけである。内側の圏線は極太の突帯によって表わされる。胎土に白色砂粒を多く混入している。焼成堅緻で灰色～黒灰色を呈する。

ＮＭⅦ類（10）　瓦当面が円形でなく、扇状となる特異な瓦である。推定でタテ130mm、ヨコ178mmを測る。瓦当面には、わずかに隆起線がみられるが判然としない。蓮華文でなく、他の意匠の可能性が強い。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成堅緻で暗灰色を呈する。丸瓦との接合方法はＮＭＩ類と同一とみられる。側溝工事の溝埋土から出土した。

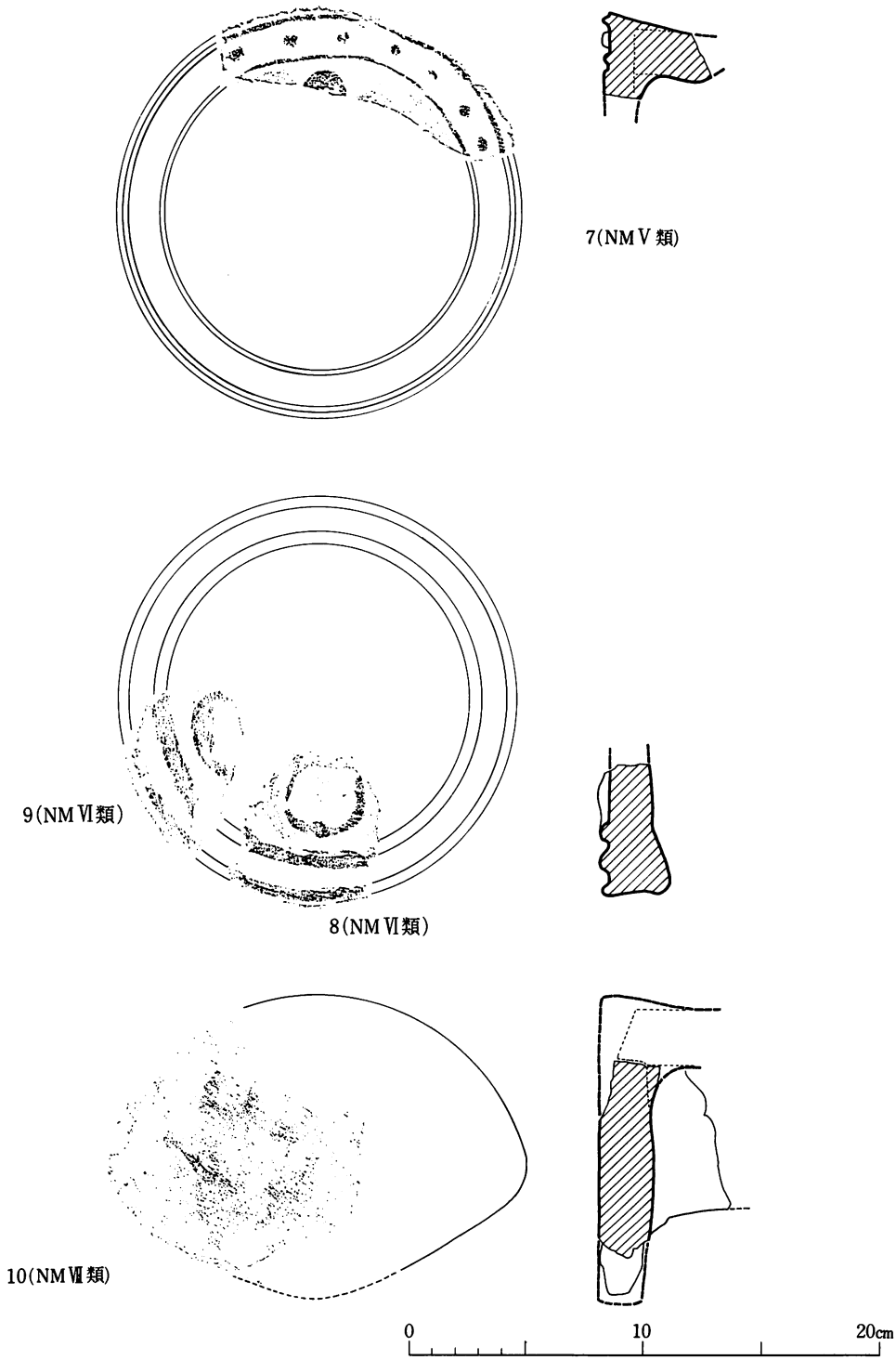
Ｂ　軒平瓦（第17～20図・第４表）

小片まで含めて総数36点を数えるが、瓦当全面が判明するものは少ない。９型式10種に分類され、従来知られていなかった軒平瓦が８種みられる。

ＮＭＩ類（１・２・３）　従来から創建期のものとされている均正唐草文軒平瓦である。１は上弦幅238mm、弧深53mm、下弦幅260mm、瓦当の厚さ60mmを測るが、瓦当文様の左右端まで表出されていない。熊本市立博物館蔵の完好な資料によると本来の瓦当寸法は上弦幅280mm、弧深62mm、下弦幅302mmを測る。内区の唐草文の単位は、大きく巻いた主葉の内測に２支葉をともなうもので、中心飾りの代りに左に流れる唐草文１単位が置かれ、

軒平瓦分類 / 出土地点	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	計
Ⅴ層			1								1
ＳＤ１０５（Ⅳ層）	5										5
ＳＫ１０１	1										1
ＳＫ１０８		1									1
ＳＫ１０７	2				1						3
ＳＫ１１１	1										1
Ⅲa層	5				1	3	1	1	1		12
ＳＫ１１４	1										1
ＳＫ１１３	1						1			1	3
ＳＥ１０１	1										1
Ⅱ層	1										1
工事用側溝埋土	1										1
出土地点不明	1										1
福田正文氏採集	2			1					1		4
計	22	1	1	1	2	3	2	1	2	1	36
百分率（%）	61.1	2.8	2.8	2.8	5.6	8.3	5.6	2.8	5.6	2.8	100

第４表　軒平瓦各型式の出土点数と割合



第16図　軒丸瓦実測図（3）

左右に連続する同様の唐草文が2回反転する（左隅の唐草は主葉の外側と内側に1支葉をもつ)。内区左右脇に珠文2、上下外区に珠文18を配する。内区脇・上外区の珠文に比較して下外区のものは小粒である。瓦当と平瓦の接合方法は、一枚の平瓦の下部に顎となる粘土帯を付加して瓦当部とする方法で、資料の多くは平瓦と顎の境で壊れている。顎の成形にあたっては、平瓦凸面の中ほどまで粘土帯を付加して縄叩きし、顎の深さとなる部分に刃物で切り込みを入れ余分の粘土を剝ぎ取る。したがって顎は段顎（深さ90mm前後）となる。顎の表面に赤色顔料が塗られているものがある。使用平瓦の凹面には糸切り痕・布目がみられるだけで、模骨痕・布の綴じ合せ目・粘土板の合せ目が観察されるものはない。一方、凸面の観察できる資料では、側縁に平行する縄目がみられる。胎土は小石を微量に含むものがあるが、砂粒を含まず緻密である。焼成堅緻なものは暗灰色・灰白色を呈し、やや軟質なものは黒色を呈する。1は福田氏が側溝工事中に採集し、2はⅢa層中から、3はＳＫ109から出土した。

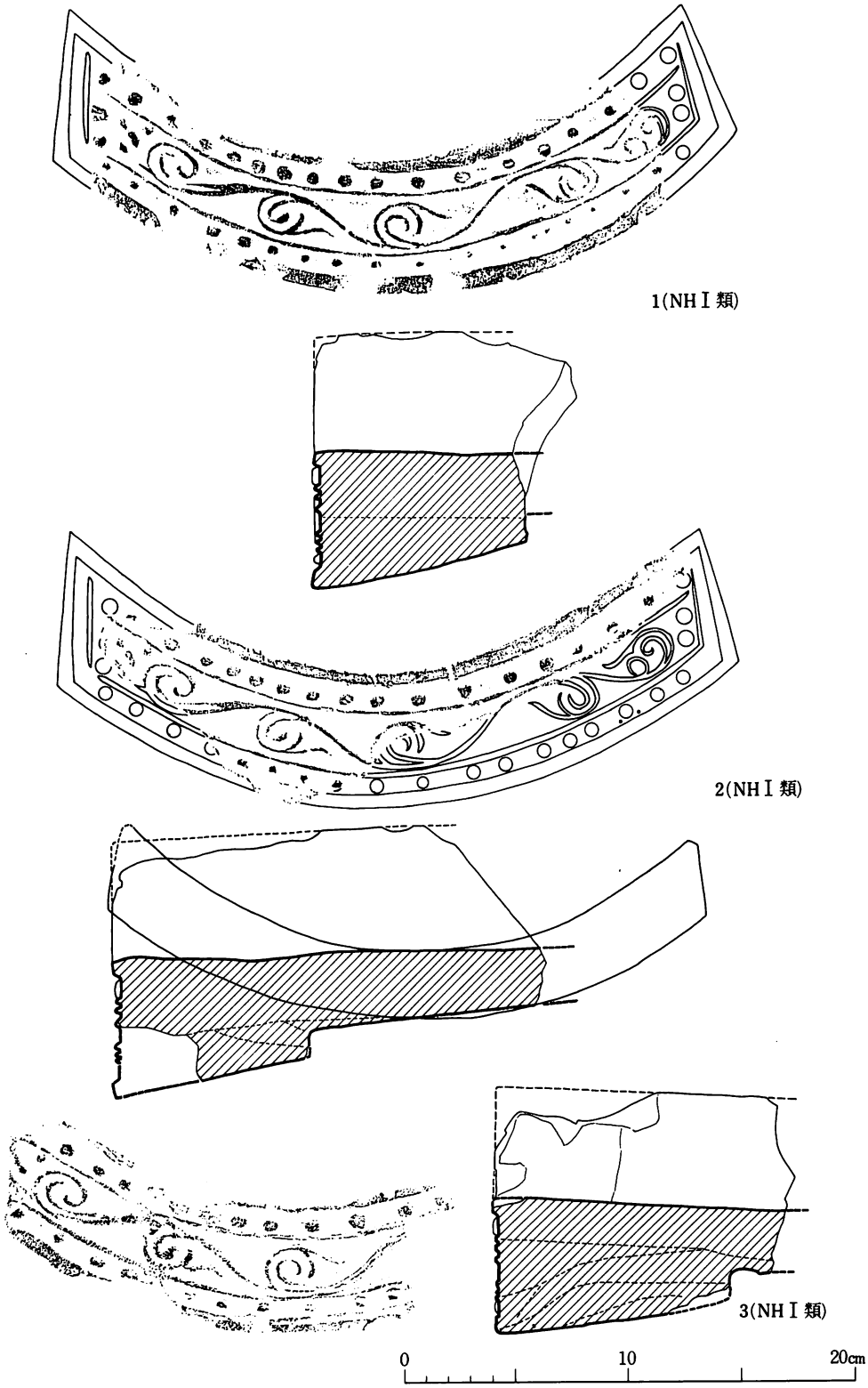
総数で22点出土し、全体の61.1％を占める。

ＮＨⅡ類（4）　瓦当左下半部のみの破片でＳＫ108から出土した。内区の唐草はⅠ類に類似するようであるが、右に流れる偏行唐草文とみられる。下外区には珠文とこれを横断する隆起線があり、後述するＮＨⅢb 類のモチーフに類似する。顎は段顎で深さ85mmを測る。平瓦と瓦当との接合はＮＨⅠ類と同様とみられる。胎土は細砂を若干含むが緻密である。焼成堅緻で灰色を呈する。

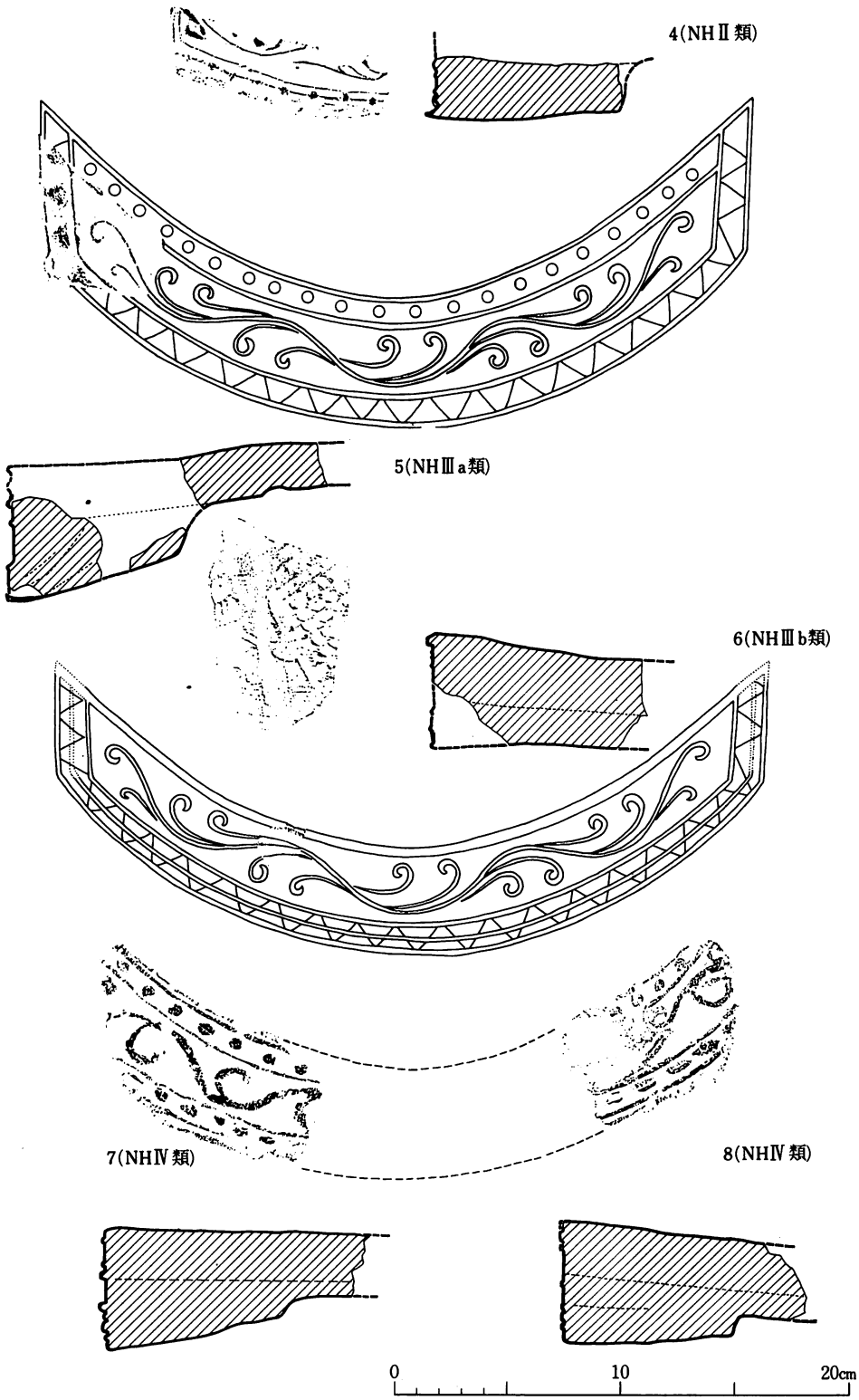
ＮＨⅢａ類（5）　菊池郡七城町十蓮寺廃寺出土の均正唐草文軒平瓦と同笵の軒平瓦である（実測図のバックの文様は、十蓮寺廃寺の軒平瓦の復原文様)。瓦当の左隅の破片で、内区には下方に巻く2つの支葉の頭部があり、内区より一段高くなった下外区と脇区に鋸歯文がみられる。鋸歯文はやや丸みをもち、外区平面との境が鮮明でない。顎は段顎で深さ85mmを測る。平瓦凸面に格子叩き目がみられる。胎土は細砂を少し含むが緻密である。焼成はやや軟質で、黒色を呈する。ＡⅠ区のⅤ層中から出土した。

ここで、十蓮寺廃寺の軒平瓦について説明しておく。この型式のものは現在まで破片6点余りが知られ、(註2)これらによってほぼ瓦当面の全形を復原できる。上弦幅314mm、弧深84mm、下弦幅310mm、瓦当の厚さ56mmを測る。内区の唐草文は、2つの支葉を1単位とし、中心に右に流れる唐草1単位を置き、左右に3回反転させる均正唐草文である。上外区に21個（推定）の珠文、下外区に16個、左脇区に3個、右脇区に3個（推定）の鋸歯文を配する。瓦当と平瓦との接合方法は、ＮＨⅠ類と同一である。胎土に砂粒を多く含むものは、焼成がやや軟質で暗灰色を呈し、砂粒を含まないものは焼成堅緻で灰色・黒灰色を呈する。

この十蓮寺廃寺の軒平瓦は、基本的には老司系の偏行唐草文軒平瓦のモチーフを模倣しているが、内区文様を均正唐草文に変化させ、内区と外区に段差があるのは鴻臚館系の均正唐草文軒平瓦の影響をうけていると考えられる。



第17図　軒平瓦実測図（1）



第18図　軒平瓦実測図（2）

ＮＨⅢb 類（６）　瓦当面をわずかに残すだけであるが、国分寺跡の東隣、宮園遺跡から出土した均正唐草文軒平瓦と同型式とみられる軒平瓦である。ＮＨⅢa類の笵の上外区を切除し、下外区に沈線を追刻したものと考えられる。隅切軒平瓦で、瓦当面と側縁のなす角度は37度である。平瓦の下部に顎となる粘土帯を付加しており、段顎とみられる。胎土に砂粒を含まず緻密であり、焼成堅緻で黒灰色を呈する。福田正文氏が側溝工事中に採集したものである。

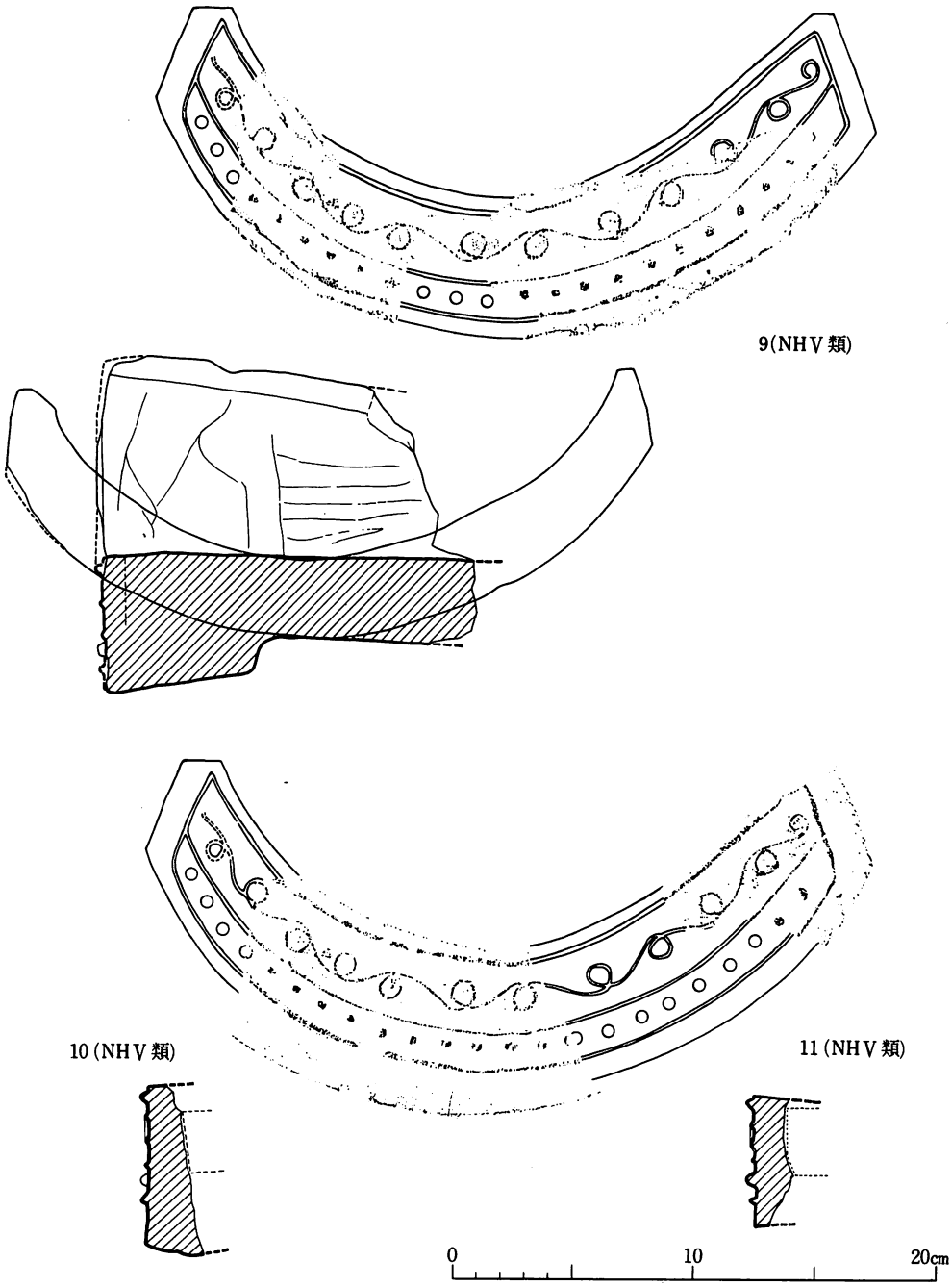
ＮＨⅣ類（７・８）　従来から知られていた左へ流れる偏行唐草文軒平瓦である。内区の唐草文は簡略化され、波状の茎の上下に支葉が巻く。上外区には珠文・下外区には長円または菱形状の珠文がみられる。７は文様が深く、８は浅い。どちらも瓦当文様の隅まで表出されておらず、途中で切断されている。瓦当面は平瓦の下部に粘土帯を付加したもので、顎は深さ80mm程の段顎となる。７の顎の表面には横方向にハケ目様の調整、８には縄叩き目がみられる。７・８とも胎土に砂粒をほとんど含まず緻密である。７は焼成やや軟質で黒灰色を呈し、８は焼成堅緻で灰色を呈する。７はＳＫ107、８はⅢa層中から出土した。

ＮＨⅤ類（９・10・11）　唐草文がかなり簡略化された軒平瓦である。３個体分の破片で、いずれもⅢ層中から出土している。９はほぼ完形で、上弦幅265mm、弧深75mm、下弦幅297mm、瓦当の厚さ58mmを測る。内区に一条の唐草を上下に11回（推定）ほど回転させ、右端の唐草頭部は内側に巻く。下外区に推定23個の珠文を配する。瓦当は笵に厚さ10mmほどの粘土をつめ、平瓦を置いて、その下部に顎となる粘土帯を付加し、上部に若干の支持土を加える。顎は深さ65mmの段顎で、表面に赤色顔料が塗られている。瓦当部の胎土は砂粒を含まず緻密であるが、９に使用の平瓦は砂粒を含み空隙がみられる。焼成堅緻で、灰色ないしは灰白色を呈する。

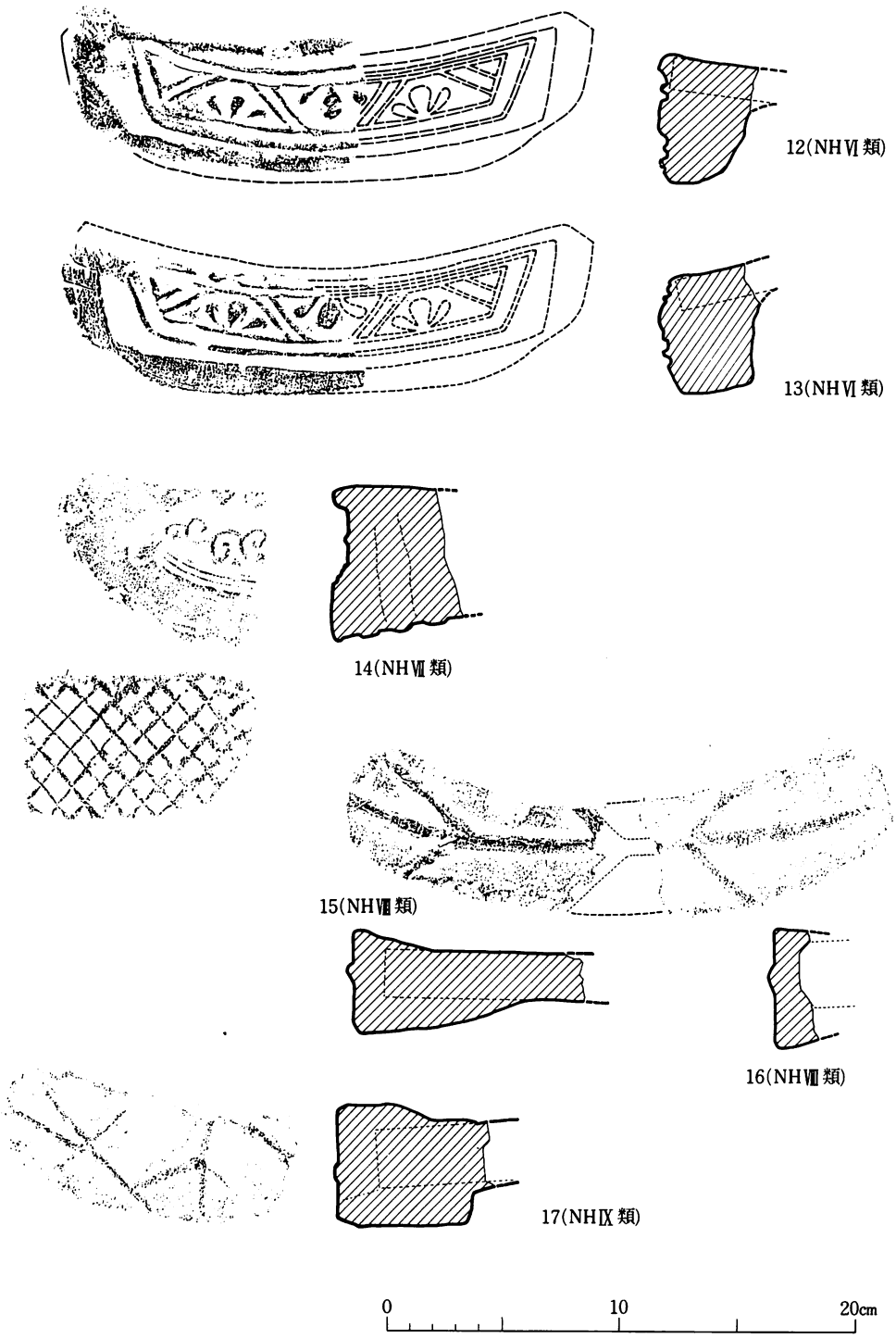
ＮＨⅥ類（12・13）　完形に復原すると上弦幅230mm、弧深19mm、下弦幅217mm、瓦当の厚さ55mmの比較的小型の軒平瓦となる。内区には三葉状の半截花文を中心・右・左に配し、それを２本の平行線で区画しているとみられる。内区の外側には、もう１本の隆起線がまわる。瓦当部は一枚の平瓦の端面、凸面、側縁に粘土帯を付加して作り、これを笵に押し当てて瓦当面を形成し、周縁を削り調整する。顎の深さ45mm前後の段顎で、縄叩きされる。胎土に白色の砂粒を多く含み、焼成は比較的堅緻で12は赤褐色を、13は灰白色を呈する。13はⅢa層中から12はＳＫ113より出土した。

ＮＨⅦ類（14）　瓦当面の左端の破片で、内区に簡略化した小さな唐草を反転させ、内区から下方の周縁までが階段状に傾斜している。笵に粘土をつめて、平瓦を接合しているとみられるが、その接合方法は判然としない。顎は深さ62mm以上で、段顎とみられ、格子叩きされる。胎土に小石や砂粒を含み、焼成やや軟質で赤褐色を呈する。Ⅲa層から出土している。

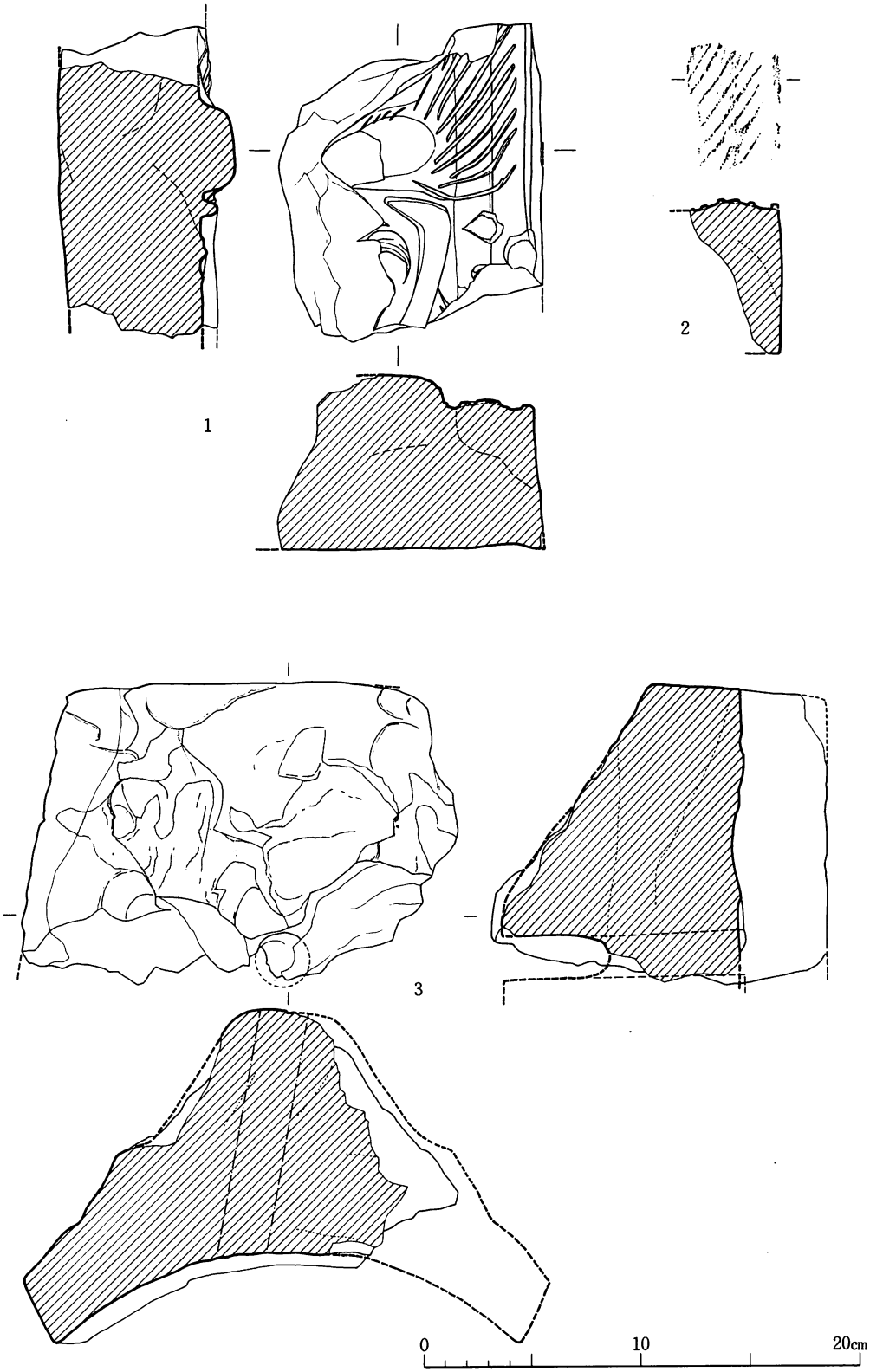
ＮＨⅧ類（15・16）　瓦当面にもはや唐草とは言い難い矢印状の文様がみられる軒平瓦である。15には左から中心へ２単位、16には右から中心へ１単位の矢印状文様があり、同一型式とみられる。瓦当と平瓦の接合方法はＮＨⅤ類と同一である。顎は深さ70mm前後の曲線顎となっ



第19図　軒平瓦実測図(3)



第20　軒平瓦実測図（4）



第21図　鬼瓦実測図

ている。胎土に白色の砂粒を多く含み、焼成堅緻で灰色を呈する。15はⅢa層中から出土し、16は福田正文氏が側溝工事中に採集したものである。

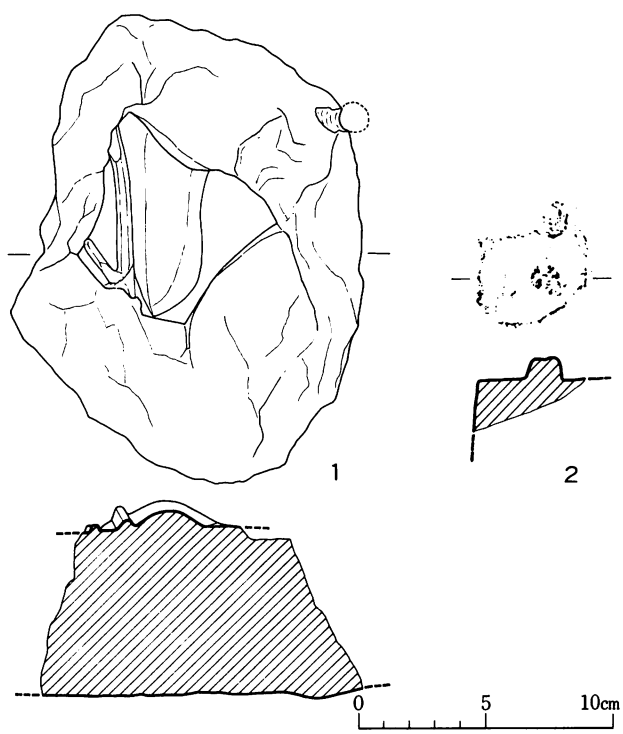
NHⅨ類（17）　瓦当の左半分の破片で、放射状に発する直線からなる幾何学文様の軒平瓦である。顎は深さ55mmの段顎となってⅧ類と瓦当文様の意匠が類似し、製作技法・胎土・焼成・色調も同一であるところから、Ⅷ類とほぼ同時期に同じ工房で製作されたとみられる。SK113から出土している。

C　鬼瓦（第21図）

1は鬼面の左頬から上顎にかけての破片である。頬は卵形で高く突出し、上面は平坦となっている。頬から外縁にかけて放射状に発する直線的な鬚を配する。口唇は太い突帯によって表され、内側に歯牙の一部が、外側の下方に鬚の一部がみえる。外縁は断面が山形状に盛り上っている。現存の厚さ76mmで、文様は笵型からおこしている。胎土に砂粒を含まず緻密である。焼成堅緻で暗灰色を呈する。Ⅲa層中から出土した。2は1と同笵の鬼瓦で、右外縁の鬚部である。

3は笵型を使用せず、手で押えこんで形作った鬼瓦である。上半部の破片で、鬼面の表面が剝落しており文様は鮮明でない。鼻は高く隆起し右眼・右頬とみられるかすかな盛り上がりがある。鼻部に焼成前に穿たれた直径20mmほどの釘孔がある。背面は平瓦の凹面のように窪み、粗い布目がみられるところから、凸型台上に布を敷き、粘土塊を重ねて成形したものとみられる。側面は削り調整されている。胎土に白色の砂粒を含み空隙がある。焼成は軟質で赤褐色を呈する。側溝工事後の埋土中から出土した。

このほか、鬼瓦の可能性をもつ瓦製品がある（第22図）。1は厚さ75mmで牙状の隆起部とこれに平行する隆起線があり、釘孔の一部が残る。鬼瓦の一部とみられるが、小片のため断定できない。笵型を使用しており、背面に指頭圧痕がみられる。胎土に小石を若干含むが緻密である。焼成堅緻で褐灰色を呈する。福田氏



第22図 不明瓦製品実側図

が側溝工事中に採集した資料である。2は小片のため器形が不明の瓦製品である。製品の角部で、径14mm高さ8mmの円形の突起がある。SB103の版築下層中から出土している。胎土に砂粒を含まず、焼成堅緻で、灰色を呈する。

D　塼（第23図1～3）

出土品と周辺採集品を合せて6点ある。小片のため厚さによって分類した。Ⅰ類（1）は厚さ76mm前後、Ⅱ類（2）は66mm前後、Ⅲ類（3）は56mm前後を測る。いずれも箱型の器を使用して製作されており、上面と側面をナデ調整し、下面は調整を行っていない。いずれの胎土も砂粒を含まず緻密であり、焼成がやや軟質である。黒灰色や褐灰色を呈する。1・3はⅢa層中から出土し、2は採集品である。

E　隅切瓦（第23図4～6）

完形品はないが隅切平瓦が2点、隅切丸瓦が3点出土している。

4は側縁に対して切り落し角度が58度を測る隅切平瓦である。凹面に糸切痕・布目があり、凸面には側縁に平行する縄叩き目がある。胎土に砂粒を若干含むが緻密である。焼成良好で外面が黒灰色、内部が灰白色を呈する。SB104の柱痕埋土中から出土している。

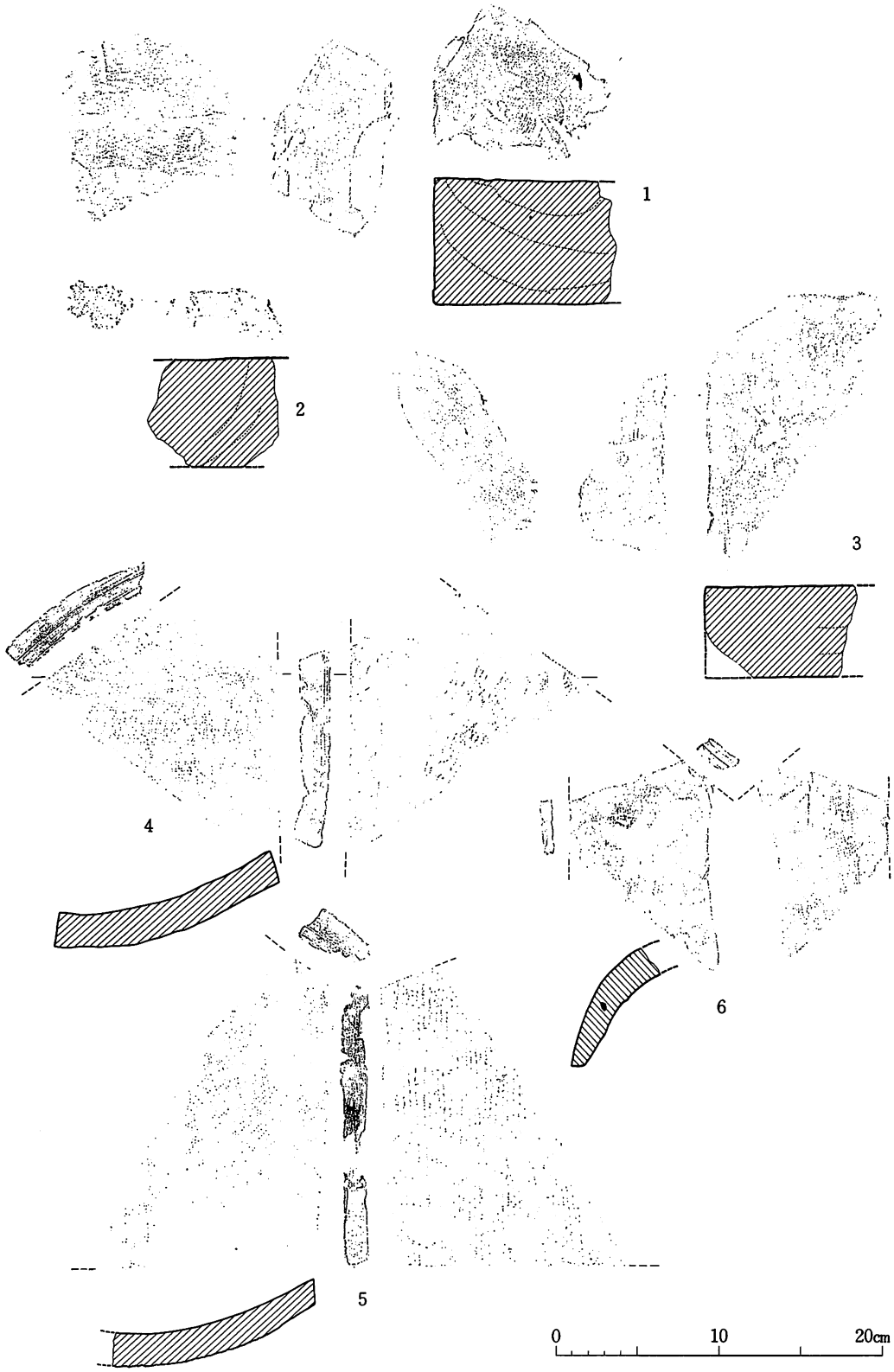
5は側縁に対して切り落し角度が71度を測る隅切平瓦である。凹面に糸切痕・布目があり、凸面に側縁に平行する縄叩き目がある。胎土・焼成・色調は4と同一である。SD102の底面直上から出土した。

6は隅切丸瓦の破片である。凹面の側縁と隅切部の縁を幅20mm前後で面取りしている。凸面は縄叩きの後にヨコナデし、凹面は布目がある。胎土は砂粒を含まず緻密で、焼成堅緻で暗灰色～褐灰色を呈する。SD109より出土した。

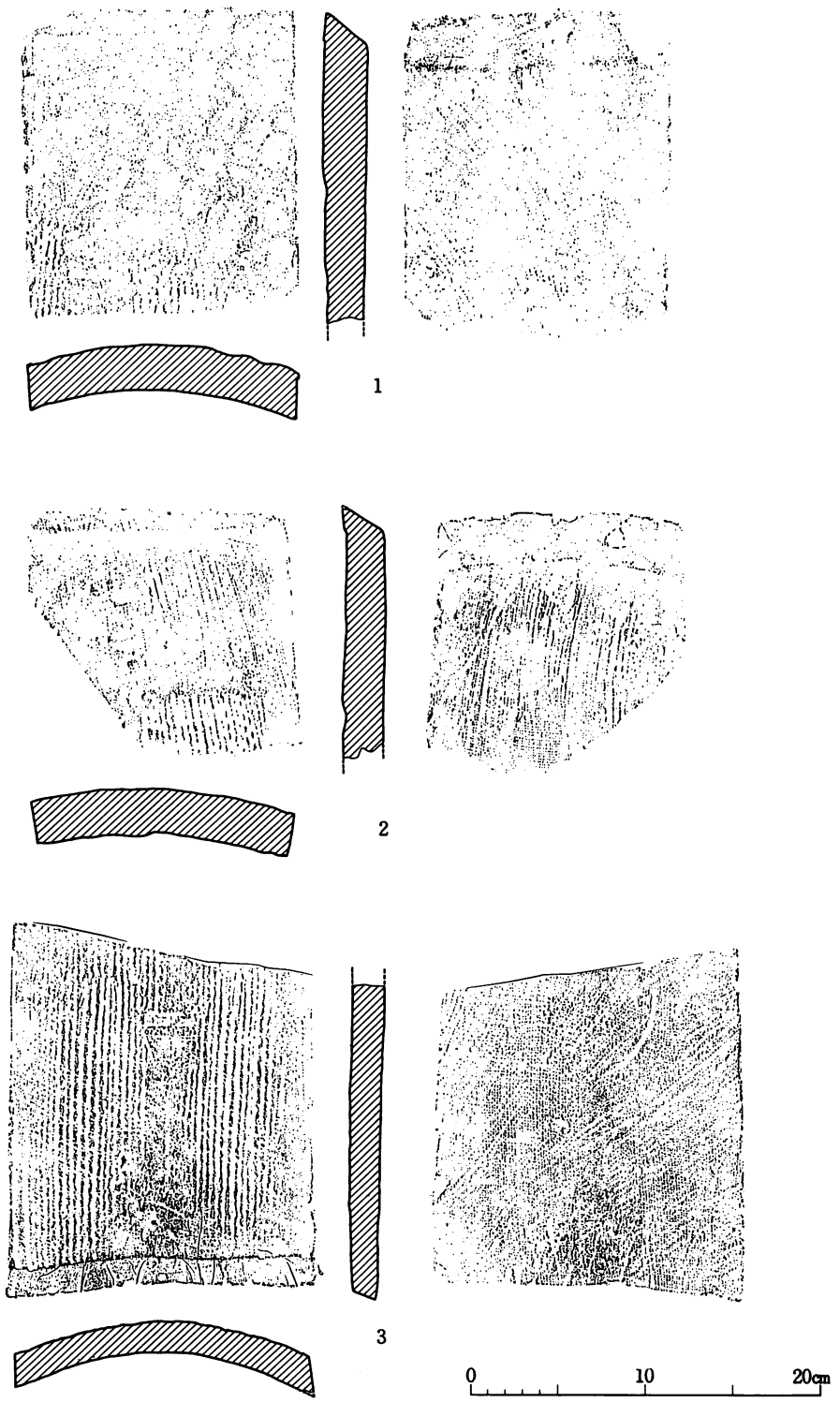
他の隅切丸瓦2点はA－1区のⅤ層中とSD102から出土している。この2点の胎土は6と変らないが、焼成がやや軟質で黒灰色を呈する。

F　熨斗瓦（第24・25図、第5表）

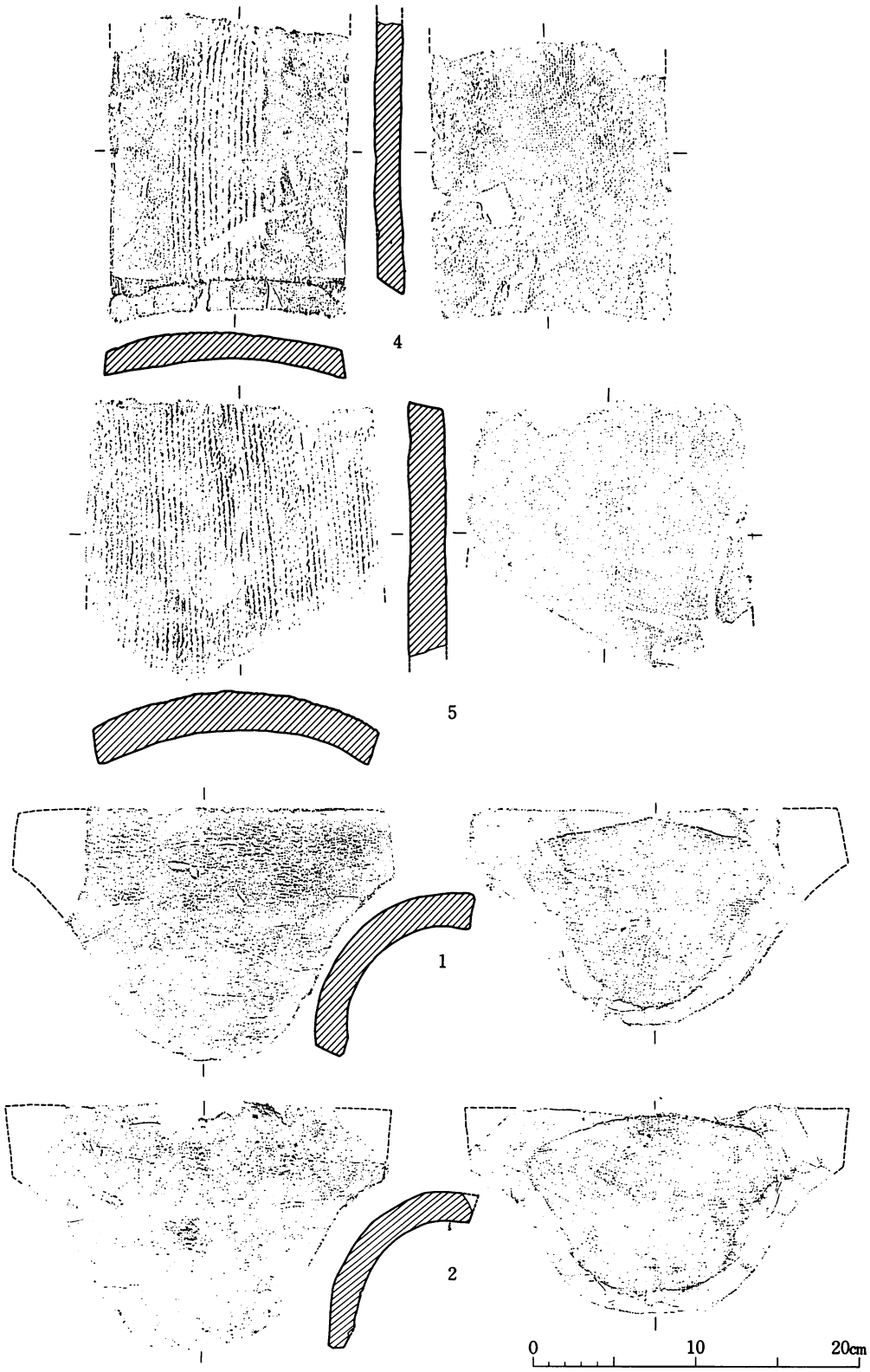
総数44点を出土しているが、完形品はなく、また全長の知れるものもない。1点(5)を除く43点は、一端の凸面側を鋭く鋭角に削り、もう一端を凹面側でやや鋭角に削る（1～4）。いわゆる削熨斗（そぎのし）(註3)とみられる。削熨斗の中で幅の判明するものが13点あり、幅170mm前後のものが2点あり、その他は145～155mmを測る。この削熨斗の凸面には、糸切痕があり、側縁に平行する縄叩き目がみられる（直交するもの1点）。縄叩き目は側縁よりや端縁よりの部分でみられないものが多く、代りに指頭圧痕を残すものがある。また凸面の側縁の一方や端縁に突出する段をもつものが23点みられる。凹面には粘土板の合せ目のあるものはなく、糸切痕・布目があるが、ほとんどのものが側縁・端縁よりの部分になると布目を残していない。また、布の綴じ合せ目をもつものは1点もない。側面は垂直方向に1回の動作で削られているものがほとんど



第23図　塼・隅切瓦実測図



第24図 熨斗瓦実測図 (1)



第25図　熨斗瓦実測図（2）・面戸瓦実測図

で、破面を有するものはない。以上の痕跡によって熨斗瓦の製作技法を推定すると、粘土板によって作られた生乾きの平瓦１枚を凹型台上にのせ、これを縦に半截したものとみられる。胎土に小石を少し混じえるものがあるが、砂粒を含まず緻密である。焼成の堅緻なものは灰色や灰白色を呈し、焼成のやや軟質なものは黒灰色を呈する。１・３はＳＫ101、2はⅢa層中、4がＳＤ105埋土（Ⅳ層）から出土した。

ＳＤ１０２	1		2.3	
ＳＤ１０５埋土中	17	26	38.6	59.1
ＳＤ１０６	2		4.5	
ＳＫ１０１	2		4.5	
ＳＫ１０２	1		2.3	
版築中	4		9.1	
Ｂ－６Ｐｉｔ１０７	1		2.3	
ＳＫ１０７	3		6.8	
ＳＫ１１４	1		2.3	
Ⅲ層中	11		25.0	
側溝工事後の埋土中	1		2.3	
総　　数	44		100%	

第5表　熨斗瓦の出土点数と割合

５は切り取り角度の浅い隅切平瓦の可能性もあるが、一応熨斗瓦として扱った。凸面は側面に平行する縄叩き目が全体に及び、凹面には布目がみられる。端面・左側面は垂直方向に削られるが、右側面は円孤の中心方向に削られる。胎土に砂粒を含まず緻密であり、焼成堅緻で灰色を呈する。ＳＤ107から出土した。熨斗瓦の出土地点をみると（第５表）、ＳＤ105の埋土（Ⅳ層）からが17点と最も多く、38.6％を占める。これとＳＢ103基壇の築成に関連するＳＤ106・ＳＫ101・ＳＫ102・版築土中のものを合計すると26点で、59.1％を占めることとなり、特に上記のＳＢ103基壇の築成に伴う遺構群に集中している状態がうかがえる。

Ｇ　面戸瓦（第25図、第６表）

現国分寺境内・側溝工事後の埋土中からの採集品を含めて、総数18点出土している。形状はいわゆる蟹面戸で、凸面の縄叩き目をすり消した丸瓦を使用し、凹面の縁部は、すべて削って面取りしている。全長の復原可能な１・２によると全長235mm前後を測る。胎土は砂粒を含まず緻密で、焼成堅緻なものは灰色・灰白色を呈し、やや軟質なものは黒灰色や灰褐色を呈する。１・２ともＳＤ105埋土（Ⅳ層）から出土している。面戸瓦の出土地点をみると（第６表）、熨斗瓦と同様にＳＢ103基壇の築成に伴う遺構群に集中している。

ＳＤ１０２	1		5.6	
ＳＤ１０５埋土中	10	13	55.6	72.2
Ａ－１Ⅳ層	1		5.6	
版築中	2		11.1	
Ⅲ層中	2		11.1	
側溝工事後の埋土中	1		5.6	
現国分寺境内採集	1		5.6	
総　　数	18		100%	

第6表　面戸瓦の出土点数と割合

２　軒瓦について

国分僧寺出土の軒瓦については、戦前に下林繁夫[註4]・坂本経堯[註5]両氏の論究があり、最近では松本雅明[註6]氏の論究がある。これらに報告されている軒瓦に、その後に採集されたものや今回の調査地と国分僧寺東隣の宮園遺跡から出土したものを加えると、軒丸瓦に16種、軒平瓦に22種あ

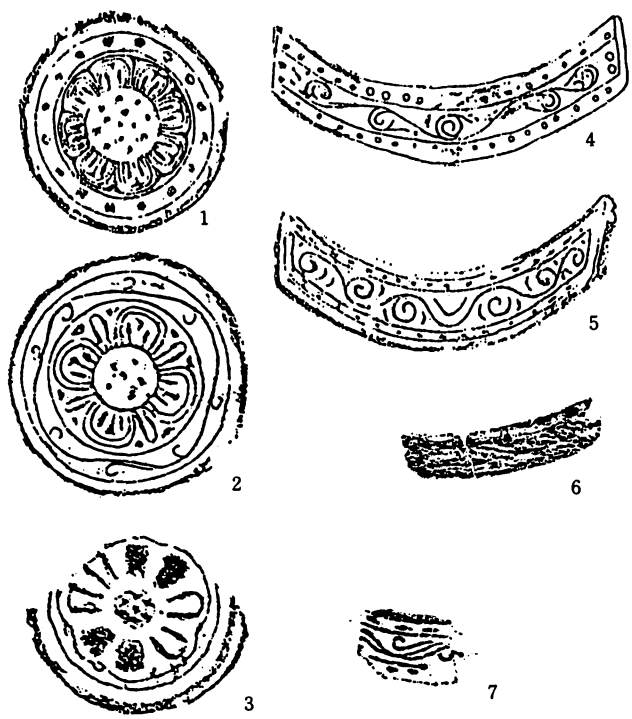
ることが知られる。本来、型式学的変遷を考慮した型式分類を呈示すべきであろうが、先の三氏が紹介されている資料中に今回実見できなかったものがあり、また、今後の発掘調査によって完好な資料や新出の資料の増加が期待される状況にあるので、今回は集成という形をとって、現在まで知りえたことを記すこととした（第7・8表）。

創建期の軒瓦　表採資料も含めて最も多く出土する複弁8弁軒丸瓦（1・2）と均正唐草文軒平瓦（2）が、従来からいわれているように創建軒瓦であることは間違いないとみられる。これは型式学的にも、今回の発掘における層位的な所見によっても支持される。

軒丸瓦は管見によれば直接祖型と考えられるものはないが、中房の蓮子は二重にめぐる1＋4＋8の鴻臚館系軒丸瓦の配置をとる。また、蓮弁の基部に圏線がまわり弁区と中房を明確に区画するのは、老司系軒丸瓦の特徴とみられ、外区外縁上の凸圏線は九州式単弁瓦と呼ばれる一群の軒丸瓦にみられるものである。創建軒丸瓦を特徴づける2重の輪郭線によって区画される複弁は、祖型となるものがないが、外区内縁の大粒の珠文は東大寺式軒丸瓦の配置を採っていることを考えると、平城宮に所用されている「間弁が長く伸び、先端が互いに連なって輪郭線と化して各複弁を区画する系統のもの」[註7]が原型となっている可能性がある。つまり、創建軒丸瓦の瓦当文様は、在来の大宰府系瓦当文様の強い伝統を基礎[註8]に、中央における新しいモチーフを導入して成立したと思われる。

一方、軒平瓦の場合も直接祖型と考えられるものはないが、内区の均正唐草文は鴻臚館式軒平瓦の主葉と支葉を連結するなど簡略化を図った結果と推定される。しかし、下外区には在来の強い伝統である鋸歯文に代り、平城宮で盛行する珠文が採られるなど、軒丸瓦と同様に中央瓦当文の影響が考えられる。

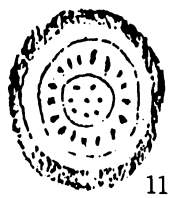
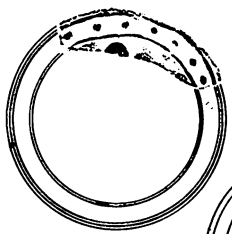
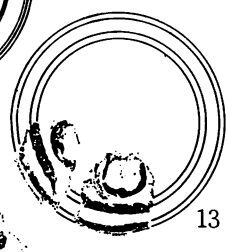
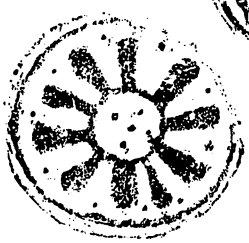
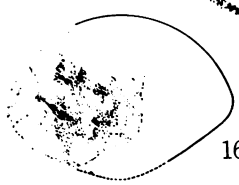
ところで、国分僧寺の創建軒瓦は国分尼寺においても出土しており（第26図）[註9]、二寺が同時期に造営されていることが知られる。一方、創建軒丸瓦を祖型とする軒丸瓦が、肥後国内の寺院跡や郡家想定地において出土している。すなわち、十蓮寺廃寺（律令期は菊池郡）・古保山廃寺（同宇土郡）・渡鹿A



第26図　肥後国分尼寺跡出土軒瓦（約1／6）

第7表　国分僧寺出土軒丸瓦集成表

集成番号	直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁数	外区 内縁	外区 外縁	同笵関係	保管	文献
1	190	51	1＋4＋8	118	F 8	S 16	Ke	国分尼寺	B	
2	184	49	1＋4＋8	110	F 8	S 16	Ke			d
3	160	43	1＋4＋8	130	F 8				B	
4	190		1＋8		F 8	S 16	素縁			c
5	220	46	1＋5	132	F 4 S 4	Ka	素縁	国分尼寺	G	d
6	191	55	1＋7	124	T 8	Ka	素縁		A	d
7			1＋8		F 8		S			c
8			13 不規則		F 8		素縁		E	a
9					F 8	S	素縁		D	c

集成番号	直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁数	外区 内縁	外区 外縁	同笵関係	保管	文献
10	168	41	1＋4	94	T 8		S t	池辺寺	C	c
 11	162	47	1＋7	99	S 17			池辺寺	X	a
 12	(173)			(120)	S 6以下	S (24)			A	d
 13	(171)			(119)	S (6)				A	d
 14	タテ 168 ヨコ 180	46	1＋4	138	S10				F	
15	(145)	43	1＋(7)	164	S (8)				C	c
 16	タテ 130 ヨコ 178								A	d

○寸法の単位は㎜
○弁数の記号　F－複弁　T－単弁　S－素弁
○内・外縁の記号　S－珠文　Ke－圏線　Ka－唐草文　St－階段状縁
○保管の記号　A－県教委　B－熊本大学　C－熊本市立博物館　D－済々黌高校
E－吉田鶴雄　F－林田豊蔵　G－馬原道彦　H－福田正文　X－不明
○文献の記号　a－熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告　b－国分寺の研究
c－熊本市南部地区文化財調査報告　d－本報告書

第8表 国分僧寺出土軒平瓦集成表

集成番号	瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区文様	上外区文様	下外区文様	脇区文様	顎の形	顎の深さ	同笵関係	保管者	文献
1				36	G4							A	
2	280	62	302	61	Kk	S	S		段	90	国分尼寺(古保山廃寺)	C	c
3					(HK)		S·A		段	85		A	d
4	(314)	(85)	(309)	56	Kk	S	RV	RV	段	85	十蓮寺廃寺	A	d
5				50	Kk		RV A	RV	段	88		A	
6					Kk	S	S	S				X	b
7					(Kk)	S	S	S			(託麻国府)	X	b
8	263	45	266	46	Kk	D	D	D	段	90	国分尼寺	B	c
9				54	Hk	S	E		段	80		A	d
10					Hk	S	RV		段	3寸		X	a
11	306	59	278	63	Hk	S	LV		段	86		A	d
12				56	(Hk)				段	70		A	d

集成番号	反当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区文様	上外区文様	下外区文様	脇区文様	顎の形	顎の深さ	同範関係	保管者	文献
13				43	k	S	S		段	65		B	c
14					k				段	65		A	
15					K k S							X	a
16	(265)	(75)	(297)	58	(H k)		S		段	65		A	d
17				66	(H k)				段	73		C	
18				68	K k				段	85		C	
19	(230)	(19)	(217)	55	F				段	45		A	d
20				67	k		St		(段)			A	d
21				51	J				曲線	70		A	d
22				51	J				段	55		A	d

○文様の記号　G－重弧文　Kk－均正唐草文　Hk－偏行唐草文　k－唐草文　F－半截花文
J－幾何学文　S－珠文　D－菱形状珠文　E－楕円状珠文　RV－凸鋸歯文
LV－線鋸歯文　A－弧線　St－階段状縁
○1・5・11・14は宮園遺跡の出土品である。

地点(同託麻郡)である。これについては、国分寺の造営が一段落した時点に、その造営に協力した郡司らの地方豪族によって、寺院造営が活発となった結果という興味ある説が出されている。(註10)

瓦当文様の変遷　創建軒瓦のモチーフは、軒丸・軒平瓦で各々1型式に踏襲されたのにとどまり(第7表3・第8表3)、多様な文様が展開される。軒丸瓦の瓦当文様は、大まかにみると、複弁→単弁→不整な素弁という変遷を示し、同時に中房が平板で蓮子は一重となり、外区内縁の消失という変化をみせる。この中には、11世紀後半から12世紀前半に比定される畿内の南都系軒丸瓦と類似するもの(第7表7)がある。(註11)

一方、軒平瓦の瓦当文様も大まかにみると、均正唐草文→簡略化された偏行唐草文→半截花文・幾何学文という変遷をたどり、同時に外区文様の消失と共に小型化の傾向が強くなる。特に半截花文は、畿内において11・12世紀を通じて採用されていたモチーフであり、肥後国分僧寺出土の小型化した半截花文軒平瓦(第8表19)もこの項に比定できる。先の軒丸瓦と併せて平安後期において中央の瓦当文様の導入が図られたことが窺われる。

なお、瓦当文様からすれば、確実に鎌倉時代と認定できるものはなく、軒瓦の下限を平安末期項とみてさしつかえないと考えられる。ただ、これは瓦葺きの堂宇の下限を示すもので、国分僧寺自身の下限を示すものではない。

軒瓦の製作技法　実見できた資料に限るが、軒丸瓦は創建期以来、基本的には笵に文様を表出するだけの粘土をつめ、これに丸瓦を置いて支持土を付加する方法をとっているとみられ、大きな技法の変化は認められない。これに対し、軒平瓦は明らかに時期差によるものとみられる技法の変化がある。すなわち、創建期以来、平瓦の広端部の凸面側に顎となる粘土を付加して瓦当部とし、笵に押捺する方法であったのが、第8表16～18・21・22では笵に文様を表出するための粘土をつめ、これに平瓦を置いて支持土を付加する方法に代っている。この変化は軒平瓦の小型化に対応しており、造瓦技法の変遷を考える上で、あるいは供給瓦窯を知る上で興味ある問題である。

国分僧寺の供給瓦窯　現在まで熊本県内には15カ所の瓦窯跡が確認されているが、(註12)国分僧寺所用の軒瓦が出土している窯跡は判明していない。本来、瓦窯で最も多く生産されるのは、特徴をとらえにくい丸・平瓦類であり、瓦窯と供給先の関係は、双方における丸・平瓦の製作技法の分析を必要とすることは論をまたないであろう。

しかし、幸いにも国分僧寺からは凸面に木葉の葉脈を思わせる特異な幾何学文叩き目を有する丸・平瓦が出土することから、同一の瓦を出土する熊本市東部の神園(こうぞの)山・小山(おやま)山の山麓に位置する神園山瓦窯跡と中山瓦窯跡が、国分僧寺の供給瓦窯であることが知られる。(註13)県道をはさんで対峙するだけの2群の窯跡は、一連の瓦窯群とみることができる。また、ここから南東に500m程離れて小山山の南麓に位置する楳谷寺(ばいこくじ)窯跡もまた、東　光彦氏によって「国分寺瓦とおおむね符合する」(註14)ことが確認されている。

註

註１　松本雅明「肥後国分僧寺跡」『熊本市南部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1975　Ｐ．89第18図の４

註２　菊池市田中義和氏所蔵品、および熊本大学文学部考古学研究室所蔵品

註３　一般に削熨斗と呼ばれる熨斗瓦は、降棟や隅棟の鬼際で棟に反りをもたせるために使用されるものである（玉置豊次郎監修、坪井利弘著「日本の瓦屋根」　理工学社　1976）。今回出土した熨斗瓦を「削熨斗」と呼称したのは、単にその形状が類似するためであり、使用箇所を限定するものではない。しかし、通有の熨斗瓦とは明らかに異なる形状であり、やはり使用箇所が限定された熨斗瓦の可能性が強い。

註４　下林繁夫「熊本県下に於ける古代礎石と古瓦」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第三冊　1925

註５　坂本経堯「肥後国分寺」角田文衛編『国分寺の研究』下巻　京都考古学研究会　1938

註６　前掲註１報文

註７　奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅸ」　1978　Ｐ．90

註８　肥後では８世紀前半代に下益城郡城南町陳内廃寺に老司式・鴻臚館式軒瓦、玉名市稲荷山遺跡に老司式軒丸瓦が導入されている。

註９　松本雅明「肥後国分尼寺」註１に同じ。これによると国分尼寺では創建軒丸瓦は１種（第７表１）しか出土していない。なお、１～５は前掲報文第30図を使用した。６は熊本大学部考古学資料館所蔵品、７は宮園遺跡の出土品を流用した。

註10　甲元真之・村田多津江「肥後の古瓦一技法と系譜一」『平原瓦窯址』熊本県教育委員会　1980

註11　上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号　1978　第26図の６・７・８

註12　「平原瓦窯址」熊本県教育委員会　1980

註13　上野辰男「中山窯跡」三島　格「神園山瓦窯跡」（熊本市教育委員会『熊本東部地区文化財調査報告書』所収1973）中山窯跡は２基の存在が確認されているが窯体構造は不明。報告者は供給先を渡鹿廃寺と考えているが、出土瓦の中には国分僧寺と同一の幾何学文叩き目をもつ平瓦がある。神園山瓦窯跡は２基並在し、発掘されている１号は地下式無階無段登窯である。これより谷を上った地点において窯体が露出した窯跡があり、広瀬正照と筆者は、先の叩き目をもつ丸・平瓦を採集している。

註14　三島　格「楳谷寺瓦窯跡」（前掲註13報告書に所収）　半地下式無階無段平窯で、８世紀中頃に比定されている。

註15　今回の調査で出土した丸・平瓦は、都合により分析できなかったが、丸瓦の中には、下益城郡富合町平原窯跡（「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」　熊本県教育委員会　1980）と同様に、粘土紐を使用し凸面と玉縁部に縄叩き目を残し、分割截面が凸面側にみられる丸瓦がある。平瓦もまた、廣瀬正照によって、平原窯跡と同様に平瓦の凹・凸面を数条にわたってナデるものがあることが指摘されている。平原窯跡は瓦と同時に生産された須恵器によって、９世紀代の操業であることが判明している。因みに、国分僧寺遺跡との直線距離は約10kmを測る。

3　須恵器

土師器と比べて出土量は少なかったが、杯・壺・杯蓋・甕・高杯がある。ＳＤ105埋土（Ⅳ層）やⅤa・Ⅵ・Ⅶ層から多く出土し、これより後出の遺構には極端に少ない。

(1)杯・壺（第27図・第10表）

Ｓ－001～015は杯である。001は口唇部が丸く仕上げられ、外傾する直線的な体部を持つ。Ⅲa層から出土。003は底径が口径の２分の１ほどの大きさの杯で、不安定な印象を受ける。内面での底部と体部の境は明瞭でなく、内彎気味の体部を持つ。Ⅶ層から出土。これと002・004～006は形態が類似する。014・015は底径が10cm程の大形の杯である。014はＳＤ109・015はＳＤ105から出土。

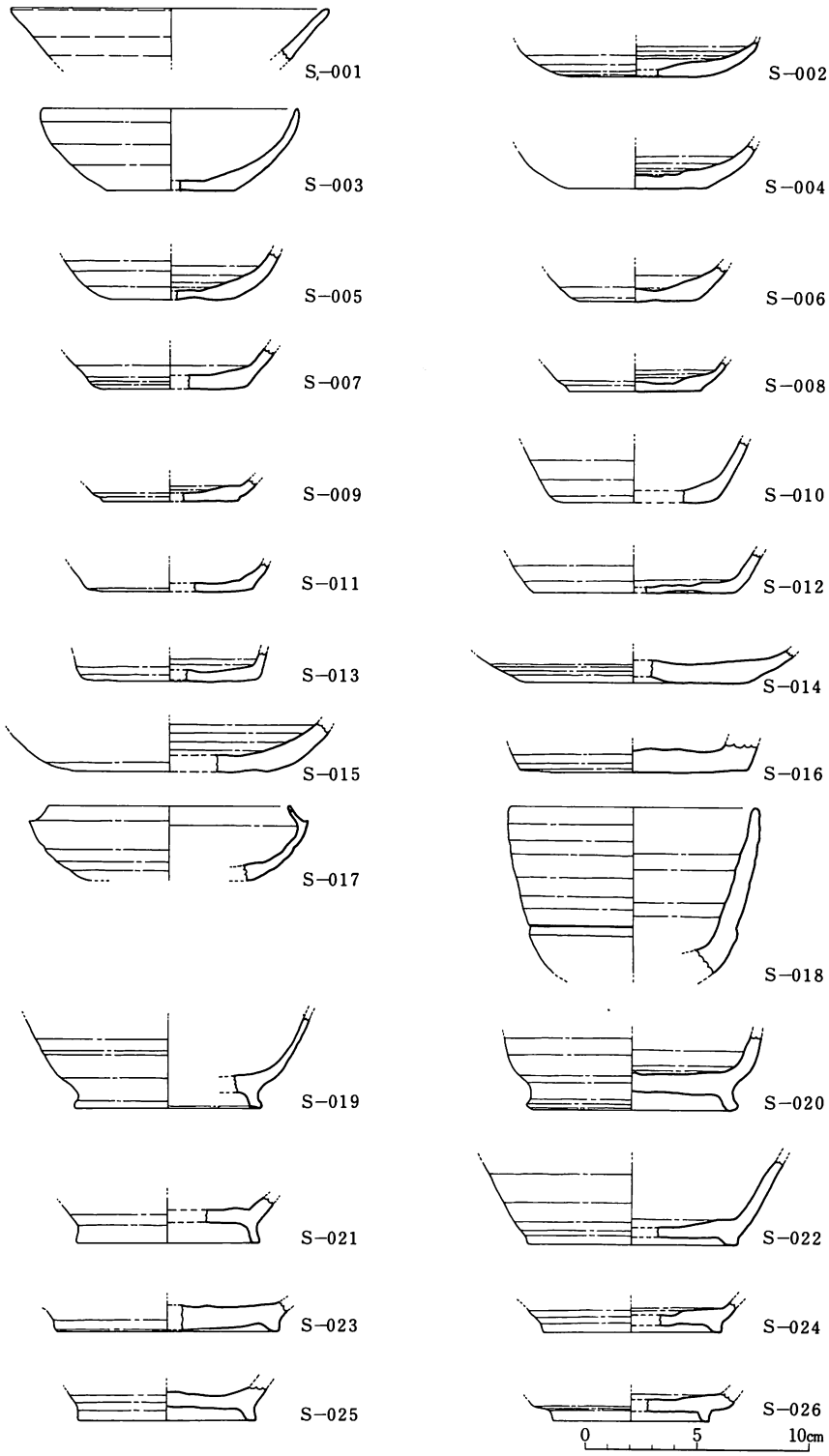
019～026は高台を有する杯であるが、高台は026が底部端よりやや内側に貼り付けられるの

胎土	焼成	色			調	
(a)－accuracy 緻密	(g)－good 良好	(o)－orange 橙色	(b)brown 褐色	(g)－gray 灰色	(y－g)－yeliowish gray 貴灰色	(re)－red 赤色顔料
(s－r)－some rough やや粗	(c)－common 普通	(d－o)－dull orange 淡橙色	(d－b)－dull brown 淡褐色	(l－g)－light gray 淡灰色	(d－g)－dark gray 暗灰色	(r－b)－reddish brown 赤褐色
(r)－rough 粗	(b)－beinferior 不良	(l－o)－light orange 明橙色	(g－b)－grayish brown 灰褐色	(g－w)－grayish white 灰白色	(b－g)－black gray 黒灰色	(g－y)－grayish yellow 灰黄色

第９表　アルファベット略記号一覧表

実測図No.	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
Ｓ－001	Ⅲa層	14.2	－	－	s－r	g	l－g	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	杯
Ｓ－002	ＳＫ111	－	－	6.7	a	g	l－g	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－003	Ⅶ層	11.4	3.6	5.7	r	g	l－g	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－004	ＳＤ105	－	－	6.4	s－r	c	l－g	ナデ。ヘラ痕あり	ヨコナデ	杯。外面の調整はやや粗
Ｓ－005	ＳＢ102	－	－	5.5	s－r	c	l－g	ナデ。調整は粗	ヨコナデ	杯。版築土。外面の調整は粗
Ｓ－006	Ⅲa層	－	－	5.1	s－r	c	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－007	Ⅲa層	－	－	7.0	a	c	l－g	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－008	Ⅲa層	－	－	5.9	s－r	c	l－g	調整は粗	ナデ	杯
Ｓ－009	ＳＫ107	－	－	6.0	r	b	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－010	Ⅲa層	－	－	7.5	r	b	g－b	調整は粗	ヨコナデ	杯
Ｓ－011	ＳＫ111	－	－	7.4	s－r	c	g－b	ヨコナデ	ナデ	杯
Ｓ－012	ＳＫ107	－	－	9.0	r	b	g－b	ヨコナデ。調整は粗	ナデ	杯。底面に歪みあり
Ｓ－013	ＳＫ107	－	－	8.0	s－r	c	g－b	ヨコナデ	ナデ	杯
Ｓ－014	ＳＤ109	－	－	10.3	r	c	g－b	ヨコナデ。調整は粗	ヨコナデ後ナデ	杯
Ｓ－015	ＳＤ105	－	－	8.8	a	c	l－g	ヨコナデ。指頭圧痕あり	ヨコナデ	杯
Ｓ－016	ＳＤ109	－	－	10.1	s－r	b	g－b	ヘラ状工具によるハケ目あり（回転）	ヘラ状工具によるハケ目あり（回転）	壺？
Ｓ－017	ＳＢ102	10.9	－	－	r	c	(d－g / g－b)	体部ヨコナデ	体部ヨコナデ	杯
Ｓ－018	Ⅶ層	11.3	－	－	r	c	d－g	ヘラケズリ後ヨコナデ。体部ヨコナデ	体部ヨコナデ	杯。体部下位に二条の沈線
Ｓ－019	ＳＢ104	－	－	4.1	s－r	c	(r－b / d－g)	体部ヨコナデ	体部ヨコナデ	杯。柱穴
Ｓ－020	Ⅲa層	－	0.9	9.4	s－r	g	l－g	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る	杯
Ｓ－021	Ⅲa層	－	0.9	8.2	s－r	g	l－g	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－022	ＳＫ103	－	0.3	9.4	s－r	c	l－g	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	杯
Ｓ－023	ＳＫ109	－	0.3	10.0	s－r	g	d－g	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－024	ＳＫ111	－	0.3	7.8	s－r	b	l－g	ヨコナデ。調整は粗	ヨコナデ	杯
Ｓ－025	Ⅲa層	－	0.7	7.9	a	g	l－g	ヨコナデ	ヨコナデ	杯
Ｓ－026	Ⅲb層	－	0.05	6.9	a	g	d－g	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	杯

第10表　須恵器一覧表 (1)



第27図　須恵器（杯・壺）実測図

に対し、他は底部端に貼り付く。

高台が力強く外方へ張り出すもの（019・020）、細い高台を持つもの（021）、比較的低い高台を有するもの（022～026）がある。

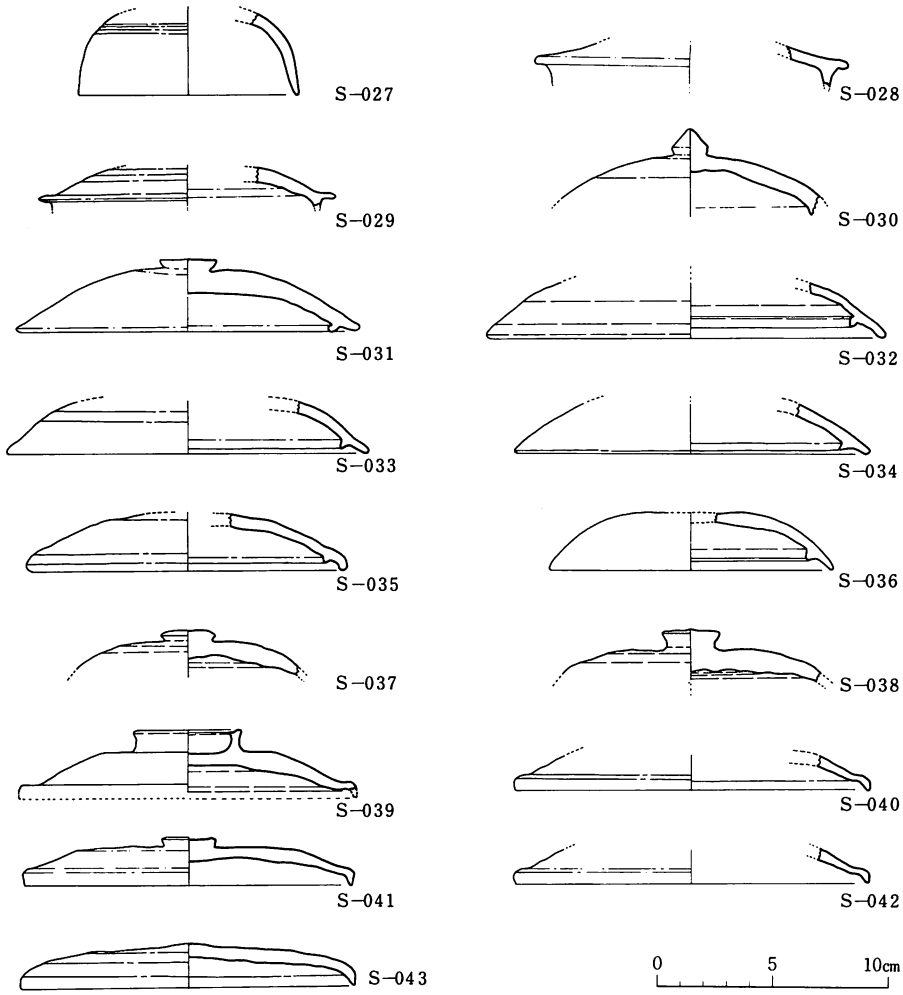
016は底部が厚く、壺の底部かと思われる。ＳＤ109から出土。017は杯身で、器高が低いため扁平な感じを受ける。器体の立ち上がりは短く、口縁部は内傾し端部は丸い。ＳＢ102から出土。018は底の深い杯で、体部下位に一条の沈線がめぐる。体部下半は、ヘラ削りの後にヨコナデしている。丸底と見られる。Ⅶ層から出土。

(2)杯蓋（第28図・第11表）

027は小型の蓋で、器高が高い。体部は丸味を帯びた天井部からわずかに外反し、口縁先端部は単純にまとまる。ＳＢ102から出土。028・029は天井部を欠失している。わずかに内側に張り出す体部（028）および比較的丸味を持つ体部（029）は、口縁部で平らになり、口唇部は丸く収める。内面には垂直なかえりがつく。028はⅤ層から出土。030はやや肉厚で、天井部に断面菱形のつまみを有する。器体は全体的に丸味をおびており、外面には黄褐色の自然釉が付着している。内面にはかえりの痕跡が認められる。Ⅵ層から出土。031～036は天井部が比較的丸味を帯びながら開き、口唇部で、ほぼ丸く収める。また口唇部から８㎜ほど内側に小さなかえりを有する。 031には天井部に扁平なかえりがある。ＳＢ101から出土。037・038は肉厚で、天井部に扁平なつまみを持ち、口縁部は欠失している。天井部は031～036に類似する。037はⅥ層・038はⅤ層から出土。039～042は天井部を欠失しているものもあるが、口唇部はいずれも口嘴状で断面三角形を呈する。天井部を有するものはヘラ削りによって扁平に仕上げられている。039は径4.7㎝の輪状つまみを有し、041は中窪みのつまみを有する。039はⅥ層から041はＳＤ105から出土。043は全体が扁平で、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口唇部は断面三角形を呈する。ＳＫ113から出土。

(3)甕・壺・高杯（第29図・第12表）

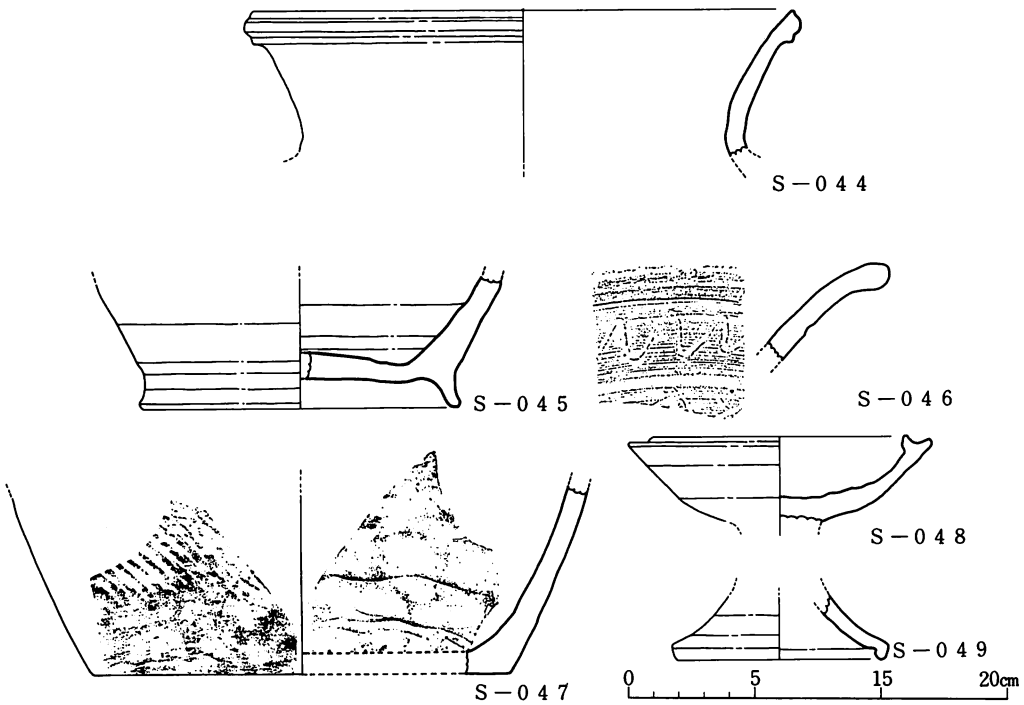
044は甕の口縁部で、緩やかに外反した後、先端部はさらに外方へ屈曲し、断面凸状の段を有する。口頸部はくの字形を呈すると思われる。ＳＤ105から出土。045は壺の底部と思われ、器壁の厚さに比べて高台は薄い。高台は下外方にのび畳付のまま平坦となる。ＳＫ111から出土。046は壺の口縁部で、直線的に開いた口縁部は先端部で水平となり、口唇部は丸く収める。ＳＤ105から出土。047は壺の底部と思われ、平底を呈する。ＳＫ114から出土。048は小型の有蓋高杯で、脚部を欠失している。体部は杯底部から比較的単純に開き、内側に低く内傾した立ち上がりを有する。Ⅶ層から出土。049は高杯の脚部と思われ、先端部は下方やや内側に屈曲する。050は須恵器の甕である。口縁部は短く外反し、鈍い尖りを呈する口唇部に至る。頸部は若干内側に張り出し内彎する胴部に連なる。胴部外面は格子タタキ目のあと平行タタキ目が施される。051は、器形が050とほぼ類似する須恵器の甕であるが、外面はナデ調整でタタキ目がみら



第28図　須恵器（杯・蓋）実測図

実測図No.	出土位置	口径	器高	現存高	胎土	焼成	色調	器面調整 天井部外面	天井部内面	体部外面	体部内面	備考
S−027	SB102	9.7	−	3.5	a	g	d−g	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ	版築土
S−028	V層	13.7	−	1.7	a	g	l−g			ヨコナデ	ヨコナデ	
S−029	工事用個溝埋土	13.0	−	1.7	a	g	b−g			ヘラケズリ後ヨコナデ。ヨコナデ	ヨコナデ	
S−030	VI層	−	−	3.7	a	g	b−g	ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に黄褐色の自然紬が付着
S−031	SB101	短径14.1 長径15.1	3.0	−	s−r	c	d−g	ヘラケズリ　ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
S−032	SD102	16.8	−	2.3	a	g	l−g	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
S−033	SB102	15.9	−	2.2	a	g	b−g			ヘラケズリ　ヘラケズリ後ヨコナデヨコナデ	ヨコナデ	版築土
S−034	VI層	15.6	−	2.2	r	g	d−g			ヨコナデ	ヨコナデ。ナデ	
S−035	SD101	14.0	−	2.4	a	g	g−w	ヘラケズリ後ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ　ヨコナデ	ヨコナデ	
S−036	SD105	12.4	−	2.7	s−r	g	g	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
S−037	VI層	−	−	1.9	a	c	g	ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ			
S−038	V層	−	−	2.2	s−r	g	g	ヘラケズリ　ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ			
S−039	VI層	14.8	2.7	−	r	b	g−b	ヨコナデ　ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ　ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ	
S−040	SB103	15.4	−	1.5	a	g	l−g			ヨコナデ	ヨコナデ	版築土
S−041	SD105	14.6	2.1	−	r	g	g	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ　ナデ	
S−042	SK113	15.3	−	1.4	a	b	y−g			ヨコナデ	ヨコナデ	
S−043	SK113	15.6	2.1		s−r	c	g	ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ　ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ	

第11表　須恵器一覧表 (2)



第29図　須恵器（甕・壺・高杯）実測図

実測図No.	出土位置	口径	器高	現存高	胎土	焼成	色調	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
S－044	SD105	23.6	－	5.8	a	c	b－g	ヨコナデ	ヨコナデ	甕。灰色・白色の自然釉付着
S－045	SK111		高台高1.1	5.1	s－r	g	l－g	ヨコナデ。ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	壺
S－046	SD105	－	－	3.8	s－r	g	b－g	ヨコナデ。ヘラケズリ、カキ目	ヨコナデ	壺内面に黄白色の自然釉付着。また釉のよにガラス化した珠砂が付着。外面に1条のヘラ描き波状文。
S－047	SK114		－	7.3	s－r	g	g－w	ヨコナデ。ヨコナデ後タタキ目（平行）	ヨコナデ	
S－048	Ⅶ層	12.2	－	3.3	a	g	d－g	ヘラケズリ後ヨコナデ	ヨコナデ	有蓋高杯
S－049	表採		－	2.5	s－r	g	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ	高杯

第12表　須恵器一覧表（3）

れない。

4　土師器[註1]

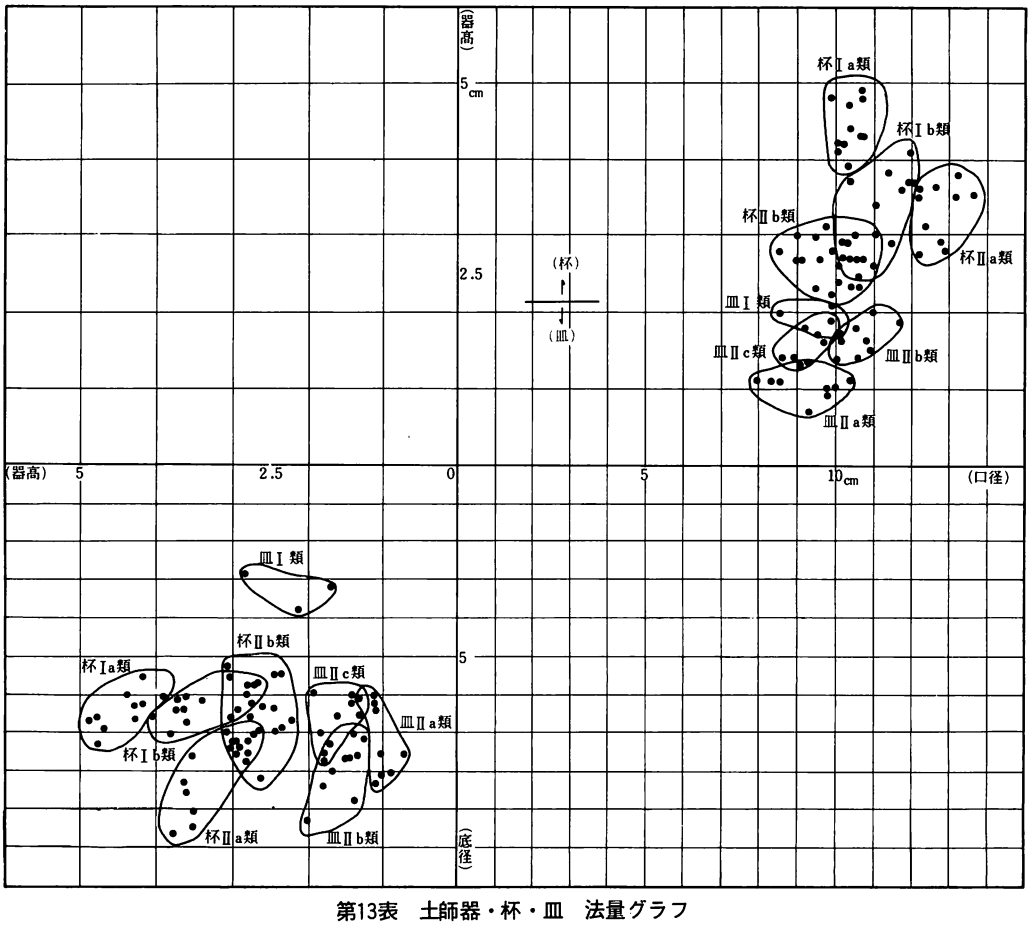
杯・皿・高台付杯・高台付皿・内黒土器・甕・鉢・高杯・糸切り皿があった。いずれも破片が多く、完形品は極めて少なかった。杯・皿・高台付杯・高台付皿・内黒土器の底部は、H－342～344を除いて総て回転ヘラ切り離しで、ヨコナデ・ナデ調整がされていた。

(1)杯・皿

出土した土師器の大部分を占める。ここでは杯と皿について、形態と法量から幾つかの分類を試みる。

杯は形態の特徴により、Ⅰ類（器体はラッパ状を呈する）とⅡ類（器体は船底型を呈する）に、皿はⅠ類（器体は断面半楕円形を呈する）・Ⅱ類（器体は、丈の低い船底型を呈する）に大別され、法量によって杯Ⅰ類は、Ⅰa類（平均器高4.4cm）・Ⅰb類（平均器高3.7cm）に、杯Ⅱ類はⅡa類（平均器高3.3cm・平均口径10.9cm）・Ⅱb類（平均器高2.7cm・平均口径9.4cm）に、

皿Ⅱ類はⅡa類（平均器高1.7cm・平均底径8.0cm）・Ⅱb類（平均器高1.7cm・平均底径6.6cm）・皿Ⅱc類（平均器高1.1cm・平均底径7.2cm）に分けられる。さらに細部の特徴により、杯Ⅰa類が1～4・杯Ⅰb類が1～3・杯Ⅱa類が1～5・杯Ⅱb類が1～8に、皿Ⅱa～c類が各々、1～4に細分可能である。



第13表　土師器・杯・皿　法量グラフ

杯（第30～33図・第14～17表）

杯Ⅰa 1類（H－001～011）

平均口径10.5cm・平均器高4.8cm・平均底径6.9cmを測る。器体は直線気味に開き、002・003は口縁部の近くで、わずかに外反する。平底で体部外面との間は、内側に屈曲している。001は、特に著しく外底端は外側へ突き出す。001～003にはススが付着し、002・004の外底に板目圧痕を認める。Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

杯Ⅰa 2類（H－012～015）

口径10.6cm・器高4.3cm・平均底径6.9cmを測る。杯Ⅰa 1類よりも器高が低く、器体は、その分だけ、より広く直線気味に開き、口縁部の近くで、わずかに外反する。平底で、体部外面との間は、内側に屈曲しており、外底端は、やや角張る。013の体部外面には2条のヘラ跡が残り、

外底には015とともに板目圧痕を認める。Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

杯Ⅰa3類（H－016～031）

口径10.3cm・器高4.2cm・平均底径6.6cmを測る。杯Ⅰa2類よりも底径が丸味を帯びて、底径がやや小さい。021は、円錐状の丸底で、器の安定を欠く。器体は、019が、やや内彎する外は、いずれも直線気味に開く。019・020の体部外面は、ナデ調整による凹凸が著しい。体部外面との間は、内側に屈曲している。017・018・021には、ススが付着しており、021・022の外底に板目圧痕を認める。026・028の外底は、ナデ調整が雑である。SK111・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

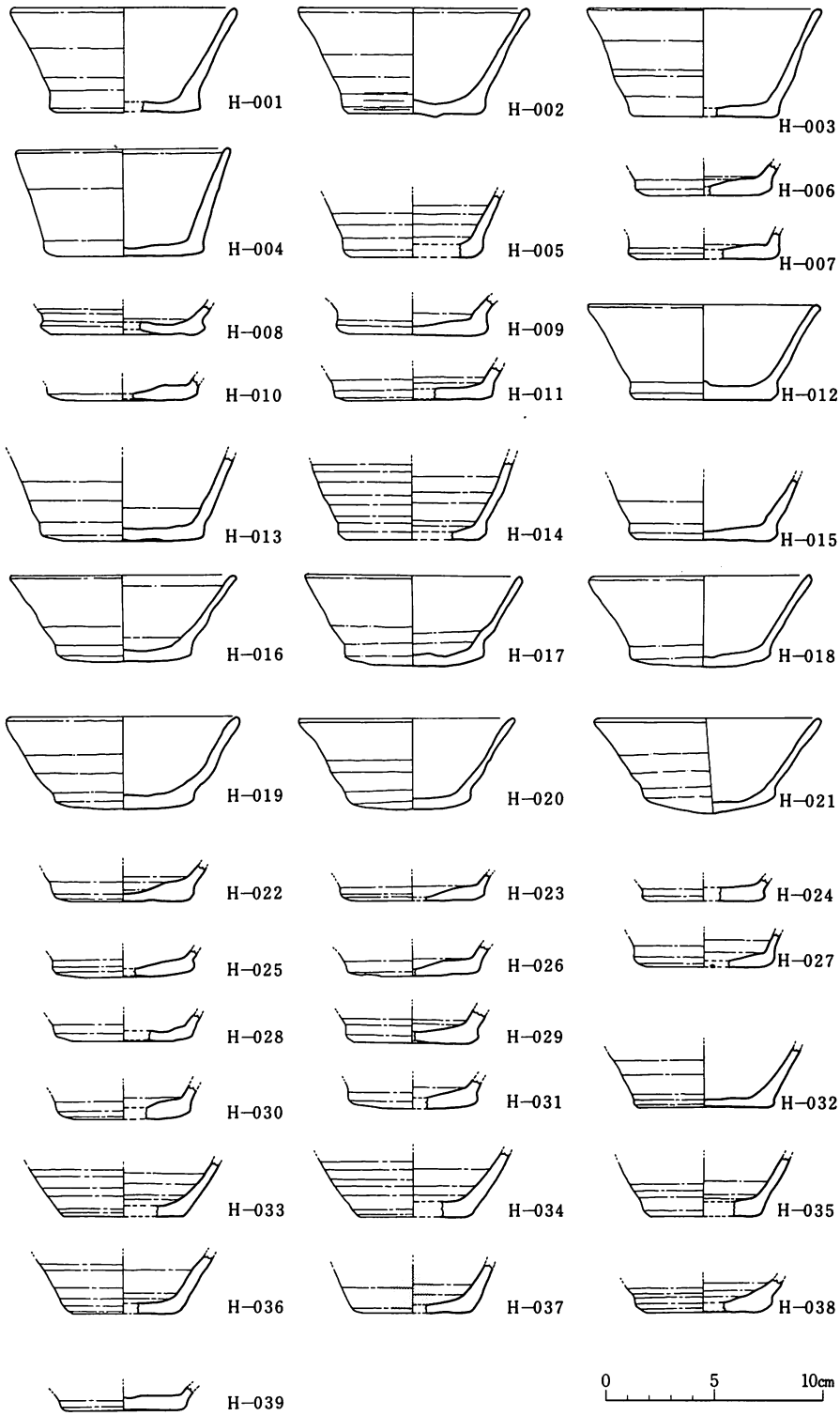
杯Ⅰa4類（H－032～039）

器体は、直線気味に開く。平底で平均底径5.7cmを測る。杯Ⅰa3類よりも底径が小さい。SB103・SK104・SK111・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

杯Ⅰb1類（H－040～052）

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－001	1	Ⅲa層	10.4	4.7	6.9	s－r	g	d－o	回転ヘラ切り離しの痕跡明確，ヨコナデ	ヨコナデ	口縁（両面）にススの付着あり
H－002	1	Ⅲa層	10.4	4.8	6.6	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ。板目圧痕あり。	ヨコナデ後ナデ	内面は淡褐色味を帯びる。体部の内面にススの付着あり
H－003	1	Ⅲb層	10.7	4.9	6.7	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	内面に口縁から底部にかけてススの付着あり
H－004	1	Ⅲa層	9.9	4.8	7.3	s－r	c	g－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ	
H－005	1	Ⅲa層	－	－	6.4	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－006	1	Ⅲa層	－	－	6.2	a	g	d－o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ。指頭による窪みあり	
H－007	1	Ⅲa層	－	－	6.8	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－008	1	Ⅲa層	－	－	7.5	a	g	d－o	ナデ	ヨコナデ	
H－009	1	Ⅲa層	－	－	7.0	r	c	g－b	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る。	ナデ	
H－010	1	Ⅲa層	－	－	6.8	s－r	c	o	ナデ	ヨコナデ	底面は比較的いびつ
H－011	1	Ⅲa層	－	－	7.2	a	g	d－b	ナデ	ヨコナデ	
H－012	2	Ⅲa層	10.6	4.3	6.7	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－013	2	Ⅲb層	－	－	7.4	s－r	g	r－b	ヨコナデ。板目圧痕による凹凸が著しい	ヨコナデ後ナデ	体部の外面に2条のヘラ跡あり
H－014	2	Ⅲb層	－	－	6.8	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－015	2	Ⅲa層	－	－	6.7	a	g	o	ヨコナデ。板目圧痕による	指頭による窪みあり	
H－016	3	SK111	10.3	3.9	6.1	a	g	d－o	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しがわずかに残る	ヨコナデ。指頭による窪みあり	
H－017	3	SK111	10.1	4.1	6.5	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	口縁（両面）の一部にススの付着あり。
H－018	3	SK111	10.2	4.2	6.3	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ。底面の半分に歪みあり	ヨコナデ	ほぼ完形。口縁（内面）をよちどるようなススの付着あり。
H－019	3	SK111	10.7	4.3	6.3	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	内面は灰色味を帯びる
H－020	3	SK111	10.1	4.2	5.5	a	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－021	3	Ⅲa層	10.4	4.4	6.0	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ。板目圧痕による凹凸が著しい	ヨコナデ。指頭による窪みあり	内面は淡橙色。体部の内面にススと（灯明のシン跡）が3条付着
H－022	3	SK111	－	－	6.5	a	g	d－o	回転ヘラ切り離しの跡が残る。板目圧痕あり	ヨコナデ後ナデ	
H－023	3	Ⅲa層	－	－	6.5	s－r	g	o	ナデ。調整はやや粗	ヨコナデ。指頭による窪みあり	
H－024	3	Ⅲa層	－	－	5.6	s－r	g	o（外）d－d（内）	ナデ	ヨコナデ	
H－025	3	Ⅲa層	－	－	6.3	r	c	g－b	ヨコナデ	ナデ	
H－026	3	Ⅲa層	－	－	6.2	a	g	d－o	調整は粗	ナデ	
H－027	3	Ⅲa層	－	－	6.4	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－028	3	Ⅲa層	－	－	6.4	s－r	c	g－b	調整は粗	ヨコナデ後ナデ	
H－029	3	Ⅲa層	－	－	6.2	s－r	c	d－6	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－030	3	Ⅲa層	－	－	6.1	s－r	g	o	ナデ	ナデ	
H－031	3	Ⅲb層	－	－	6.0	s－r	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－032	4	Ⅲb層	－	－	6.3	a	g	d－o	ヨコナデ。回転ヘラ切り離し跡わずかに残る	ヨコナデ後ナデ	
H－033	4	SK104	－	－	5.5	a	g	d－o	調整はやや粗	ヨコナデ	
H－034	4	Ⅲb層	－	－	5.4	s－r	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－035	4	SK111	－	－	5.4	a	g	d－b	ナデ	ヨコナデ	
H－036	4	Ⅲa層	－	－	5.5	r	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	
H－037	4	SB103	－	－	5.6	a	g	r e	ナデ	ヨコナデ後ナデ	版築土
H－038	4	Ⅲb層	－	－	6.1	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は褐色
H－039	4	Ⅲb層	－	－	5.6	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	

第14表　土師器（杯Ⅰa類）一覧表



第30図　土師器（杯）実測図(1)

口径12.0cm・器高4.1cm・平均底径6.8cmを測る。杯Ⅰb類は杯Ⅰa類よりも口径が大きい。器体は直線気味に大きく開く。040の体部外面は、ナデ調整による凹凸が目立つ。外底と体部外面との間は、040を除いて内側に屈曲する。040・043・045・047は平底で、他は丸味を帯びる。050・052は丸底に近い。047は器壁が薄く、ススが付着する。041・042・044の外底に板目圧痕を認める。Ⅲb層・Ⅲa層・ＳＫ112・Ⅱ層下部から出土。

杯Ⅰa２類（Ｈ－053～062）

平均口径11.8cm・平均器高3 7cm・平均底径6.7cmを測る。杯Ⅰｂ１類よりも器高が低い。器体は直線気味に開く。平底で、056・060～062は、体部外面との間が内側に屈曲する。055は、口縁部が、わずかに外反する。

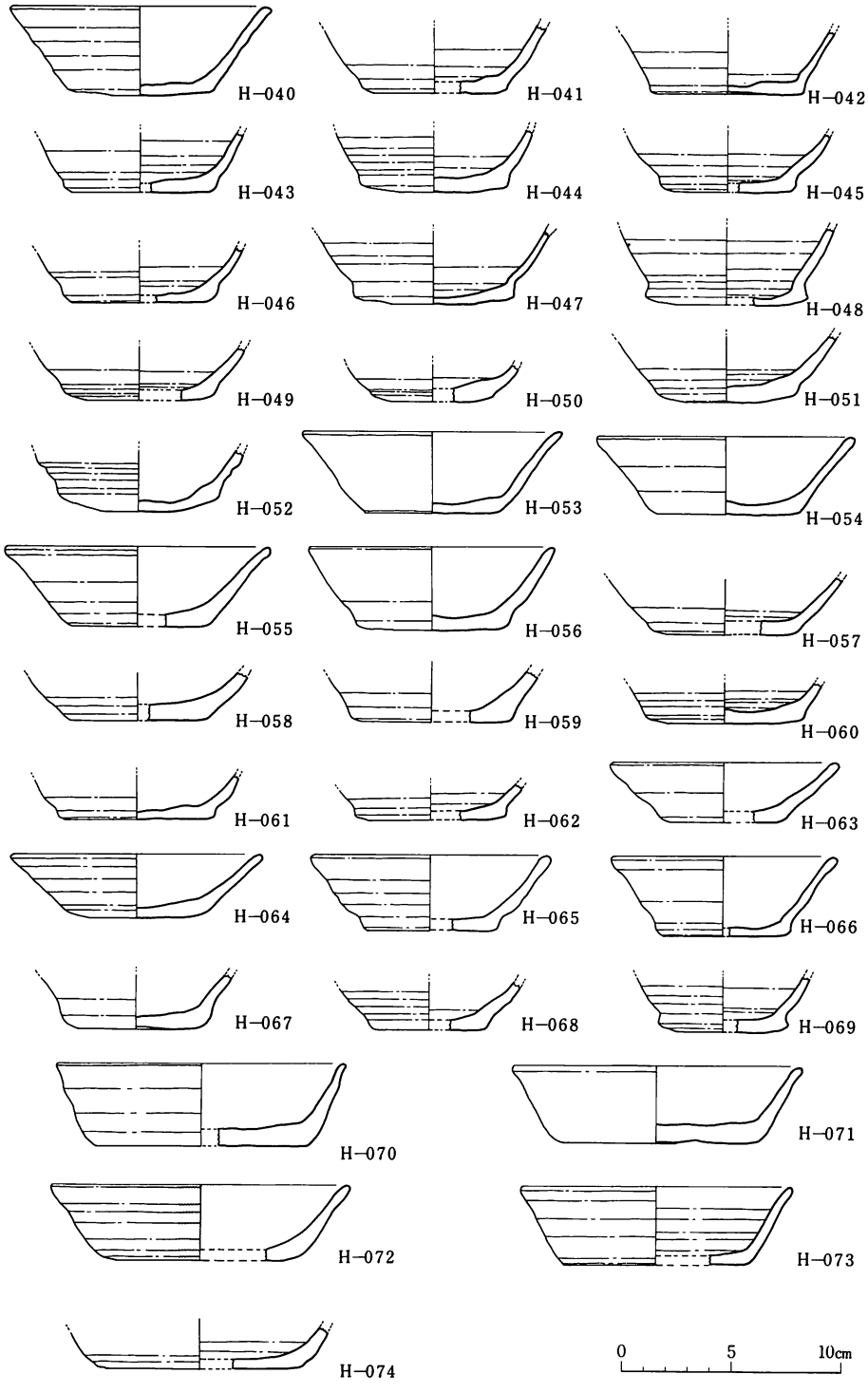
054・059にはススが付着し、060の外底に板目圧痕を認める。Ⅲa層・Ⅱ層下部から出土。

杯Ⅰa３類（Ｈ－063～069）

平均口径10 9cm・平均器高3.2cm・平均底径6.0cmを測る。杯Ⅰｂ２類と比べて、口径・器高・底径のいずれも小さい。066は口縁部がわずかに外反する。平底で、065～069は体部外面との間が、内側へ屈曲する。069は、屈曲の度合が最大である。065・068の器体外面は、ナデ調整による凹凸が著しい。064・065にはススが付着する。Ⅲa層・Ⅱ層下部から出土。

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
Ｈ－040	1	Ⅲａ層	12.0	4.1	6.6	s－r	c	d－b	ヨコナデ後ナデ	ナデ	内外面とも灰色味を帯びる
Ｈ－041	1	Ⅱ層下部	－	－	6.7	s－r	g	d－o	ヨコナデ。板目圧痕あり	指頭による窪みあり。ナデ	内面は褐灰色味を帯びる
Ｈ－042	1	Ⅲａ層	－	－	7.0	s－r	c	o	ナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ	
Ｈ－043	1	Ⅲａ層	－	－	6.9	s－r	g	d－o	ナデ	ヨコナデ後ナデ	
Ｈ－044	1	Ⅲｂ層	－	－	6.7	s－r	c	b－d	ヨコナデ。板目圧痕あり	指頭による窪みあり。ヨコナデ	
Ｈ－045	1	Ⅱ層下部	－	－	6.2	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
Ｈ－046	1	ＳＫ112	－	－	7.0	s－r	c	g－b	ナデ	ヨコナデ後ナデ	
Ｈ－047	1	Ⅲａ層	－	－	7.4	s－r	c	d－b	ナデ。回転ナデ切り離しの跡が明確。	ヨコナデ後ナデ	体部と底部の内面にススの付着あり。器壁薄し.
Ｈ－048	1	Ⅲａ層	－	－	7.3	s－r	c	b－d	ヨコナデ	ヨコナデ	
Ｈ－049	1	Ⅲａ層	－	－	6.8	s－r	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－050	1	Ⅲｂ層	－	－	5.6	s－r	c	o	ナデ	ナデ	
Ｈ－051	1	Ⅲｂ層	－	－	6.3	a	g	d－o	ヨコハデ	ヨコナデ	
Ｈ－052	1	Ⅲｂ層	－	－	7.3	a	g	o	ヨコナデ後ナデ。底面にわずか歪みあり	ヨコナデ後ナデ	内面の色調は淡褐色
Ｈ－053	2	ＳＫ104	12.0	3.7	6.2	a	g	b－d	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
Ｈ－054	2	Ⅲａ層	11.8	3.6	6.8	a	g	b－o	ナデ	ヨコナデ	口縁の両面にススの付着あり
Ｈ－055	2	ＳＳ102	12.1	3.7	6.4	a	g	b－o	ナデ	ヨコナデ	柱穴の掘り方の埋土より出土
Ｈ－056	2	ＳＫ111	11.4	3.8	7.1	a	g	b－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－057	2	Ⅲａ層	－	－	6.3	s－r	c	d－o	ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－058	2	Ⅲａ層	－	－	6.2	a	c	g－y	ナデ	ナデ	
Ｈ－059	2	Ⅲａ層	－	－	7.3	a	c	d－o	ナデ	ナデ	体部の内面にススの付着あり
Ｈ－060	2	Ⅲａ層	－	－	7.1	s－r	c	d－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ後ナデ	
Ｈ－061	2	Ⅲａ層	－	－	7.0	s－r	c	d－o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ後ナデ	灰色味帯びる
Ｈ－062	2	Ⅲａ層	－	－	7.0	a	g	b－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－063	3	Ⅲａ層	10.4	2.7	5.8	r	c	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
Ｈ－064	3	Ⅲａ層	11.5	2.9	6.4	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	口縁(内面)にススの付着あり
Ｈ－065	3	Ⅲａ層	11.1	3.4	6.2	a	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－066	3	Ⅱ層下部	10.4	3.7	6.1	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	体部の内面にススの付着あり
Ｈ－067	3	Ⅲａ層	－	－	6.3	a	g	d－b	ナデ	ヨコナデ	底部の外面は灰色味を帯びる
Ｈ－069	3	Ⅲａ層	－	－	5.3	s－r	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
Ｈ－069	3	Ⅲａ層	－	－	5.9	a	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	

第15表　土師器（杯Ⅰb類）一覧表



第31図　土師器（杯）実測図(2)

杯Ⅱa 1類（H－070～074）

平均口径13.2cm・平均器高3.6cm・平均底径9.1cmを測る。器体は、072がやや直線気味に開く外は、いずれも内彎する。070は口唇部で、071・072は口縁部でやや外反する。平底である。072には、赤色顔料が塗られている。074の外底に板目圧痕を認める。ＳＢ103・ＳＫ103・ＳＫ107 Ⅲb層から出土。

杯Ⅱa 2類（H－075～079）

口径12.1cm・器高3.6cm・平均底径8.2cmを測る。器体は、内彎し、口縁部でわずかに外反する。平底である。ＳＫ103・ＳＢ103・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

杯Ⅱa 3類（H－080～085）

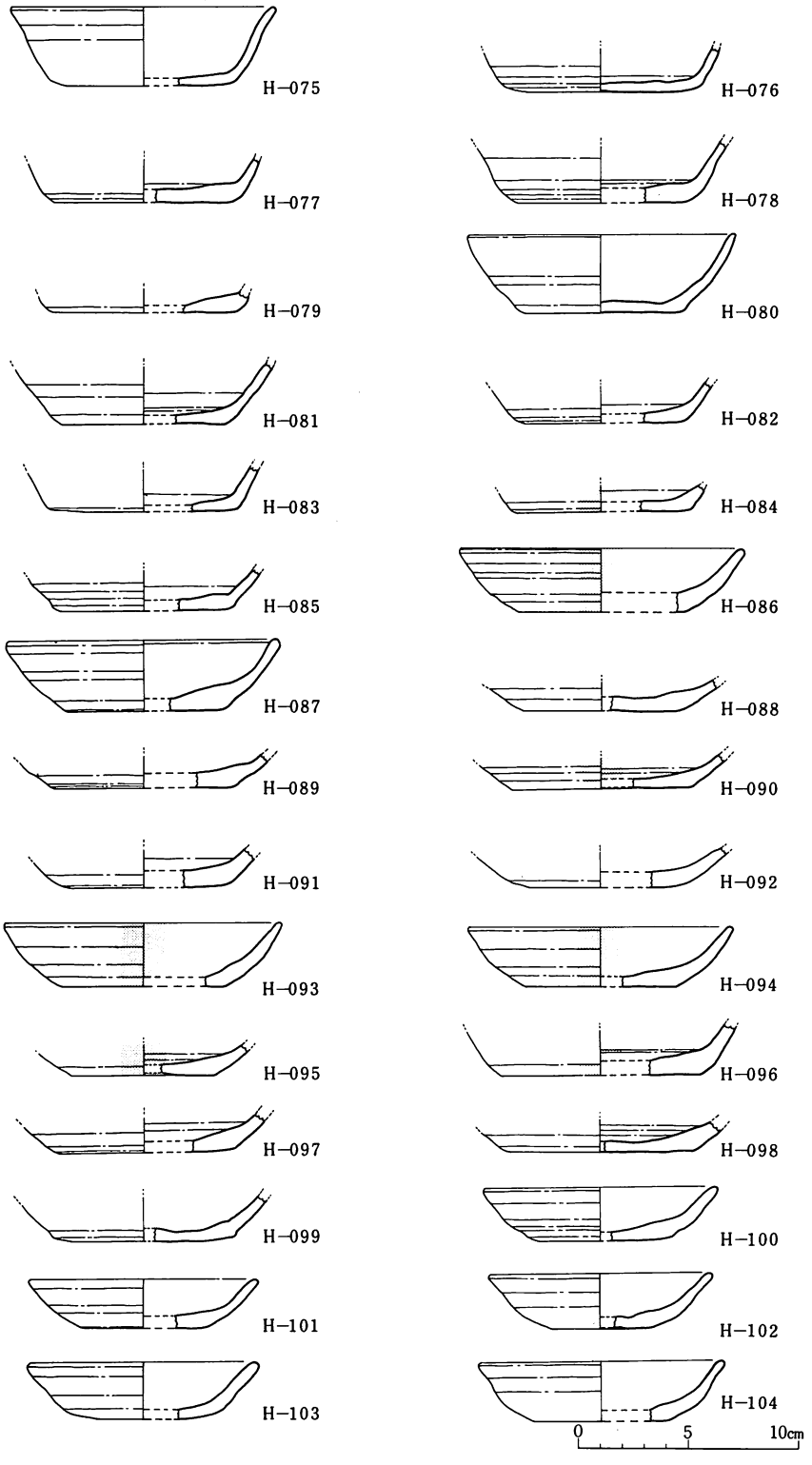
口径12.2cm・器高3.5cm・平均底径8.0cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開き、口縁部で若干、内傾する。平底で、080・084は、体部外面との間が、内側へわずかに屈曲する。080の外底は未調整で、回転ヘラ切り離しの跡が、くっきりと残る。084には赤色顔料が塗られている。ＳＢ102・ＳＤ107・ＳＫ111・Ⅲa層から出土。

杯Ⅱa 4類（H－086～092）

平均口径12.7cm・平均器高3.0cm・平均底径7.4cmを測る。器体は、内彎するものの、やや直線気味に大きく開く。087は、口縁部が内傾し、肥厚する。底部はやや丸味を帯びる。087の外

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－070	1	Ⅲb層	13.8	3.8	9.7	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－071	1	ＳＫ107	13.2	3.5	9.5	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－072	1	Ⅱ層下部	13.7	3.5	9.0	a	g	r e	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－073	1	ＳＫ103	12.4	3.6	8.5	a	c	g	ナデ	ヨコナデ	
H－074	1	Ⅲa層	－	－	9.4	s－r	c	d－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ナデ	
H－075	2	ＳＫ103	－	－	8.7	a	g	g－w	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－076	2	Ⅲb層	12.1	3.6	8.3	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－077	2	Ⅲa層	－	－	8.5	s－r	c	d－o	ヨコナデ後ナデ	ナデ	
H－078	2	ＳＢ103	－	－	8.2	s－r	c	d－b	ナデ	ナデ	版築土
H－079	2	Ⅲa層	－	－	8.4	s－r	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－080	3	ＳＫ111	－	－	7.6	a	g	d－b	ヨコナデ。回転ヘラ切り離し跡が残る	ヨコナデ後ナデ	
H－081	3	Ⅲa層	12.2	3.5	7.6	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ナデ	
H－082	3	Ⅲa層	－	－	7.6	a	g	o	ナデ	ヨコナデ	
H－083	3	ＳＤ107	－	－	8.6	s－r	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－084	3	ＳＢ102	－	－	8.2	a	c	r e	ナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落している版築土
H－085	3	Ⅲa層	－	－	8.2	s－r	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	内面は橙色
H－086	4	ＳＫ104	12.9	2.8	7.5	a	g	r e	ヨコナデ後ナデ	ナデ	
H－087	4	Ⅴ層	12.4	3.1	7.0	a	g	o	底面調整なし	ヨコナデ	
H－088	4	Ⅱ層	－	－	7.1	a	c	r e	ヨコナデ。底面の端はヘラ削り	ヨコナデ	体部の外面にヘラ跡あり
H－089	4	Ⅲa層	－	－	8.3	a	g	d－o	ナデ	ナデ	
H－090	4	Ⅲa層	－	－	7.3	s－r	c	r e	ヨコナデ	ヨコナデ	底部の内面にススの付着あり
H－091	4	ＳＫ111	－	－	7.3	r	c	g－b	ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－092	4	ＳＢ103	－	－	8.1	a	g	d－b	ナデ	ナデ	
H－093	5	Ⅲa層	12.7	2.9	7.5	a	g	r e	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－094	5	Ⅲa層	12.1	2.7	7.0	a	g	r e	ヨコナデ後ナデ	ナデ	版築土
H－095	5	Ⅲa層	－	－	9.1	a	g	r e	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	赤色顔料はほとんど剝落している
H－096	5	Ⅲb層	－	－	8.3	s－r	c	r e	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－097	5	ＳＫ104	－	－	9.1	a	c	d－b	ナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る	ヨコナデ	ヘラ研磨あり
H－098	5	Ⅱ層	－	－	6.4	s－r	g	d－b	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る	ヨコナデ	体部の外面と底部の内面にヘラ研磨あり
H－099	5	ＳＫ111	－	－	6.5	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	

第16表　土師器（杯Ⅱa類）一覧表



第32図　土師器（杯）実測図(3)

底は調整が極めて雑である。088は、体部外面にヘラ跡が残る。090にはススが付着し086・088・090には赤色顔料が塗られている。ＳＢ103・Ⅴ層・ＳＫ104・ＳＫ111・Ⅲa層・Ⅱ層から出土。

杯Ⅱａ５類（Ｈ－093～099）

平均口径12.4cm・平均器高2.8cm・平均底径7.6cmを測る。器体は、やや内彎気味に開く。平底で、体部外面との間に稜を有する。093～096には赤色顔料が塗られ、097・098は内面をヘラ研磨する。ＳＫ104・ＳＫ111・Ⅲb層・Ⅱ層から出土。

杯Ⅱｂ１類（Ｈ－100～104）

平均口径10.5cm・平均器高2.7cm・平均底径6.3cmを測る。杯Ⅱa類と比べて、杯Ⅱb類は、口径が小さくなる。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。104は、口縁部の近くで、わずかに外反する。底部はやや丸味を帯びる。Ⅴ層・ＳＫ111・ＳＫ107・Ⅲa層から出土。

杯Ⅱｂ２類（Ｈ－105～120）

口径9.6cm・器高2.7cm・平均底径6.6cmを測る。器体は内彎する。底部は、やや丸味を帯びる。107にはススが付着し、113・114・118に赤色顔料が塗られている。ＳＢ103・ＳＫ107・ＳＫ111・Ⅲb層・ＳＫ112・Ⅱ層から出土。

杯Ⅱｂ３類（Ｈ－121～124）

口径11.0cm・器高2.6cm・平均底径7.6cmを測る。杯Ⅱb２類と比べて、口径と底径が大きく、器体の内彎がより大きくなる。底部は丸味を帯びる。122には、ススが付着する。Ⅲb層・Ⅲa層・Ⅱ層から出土。

杯Ⅱｂ４類（Ｈ－125～129）

口径10.7cm・器高2.7cm・平均底径7.5cmを測る。器体は、内彎するものの、杯Ⅱb３類に比べて、やや直線気味に開き、口縁部は、わずかに外反する。底部は、127がやや丸味を帯びる外は、平底である。127には、赤色顔料が塗られており、126・129の外底に板目圧痕を認める。

杯Ⅱｂ５類（Ｈ－130～139）

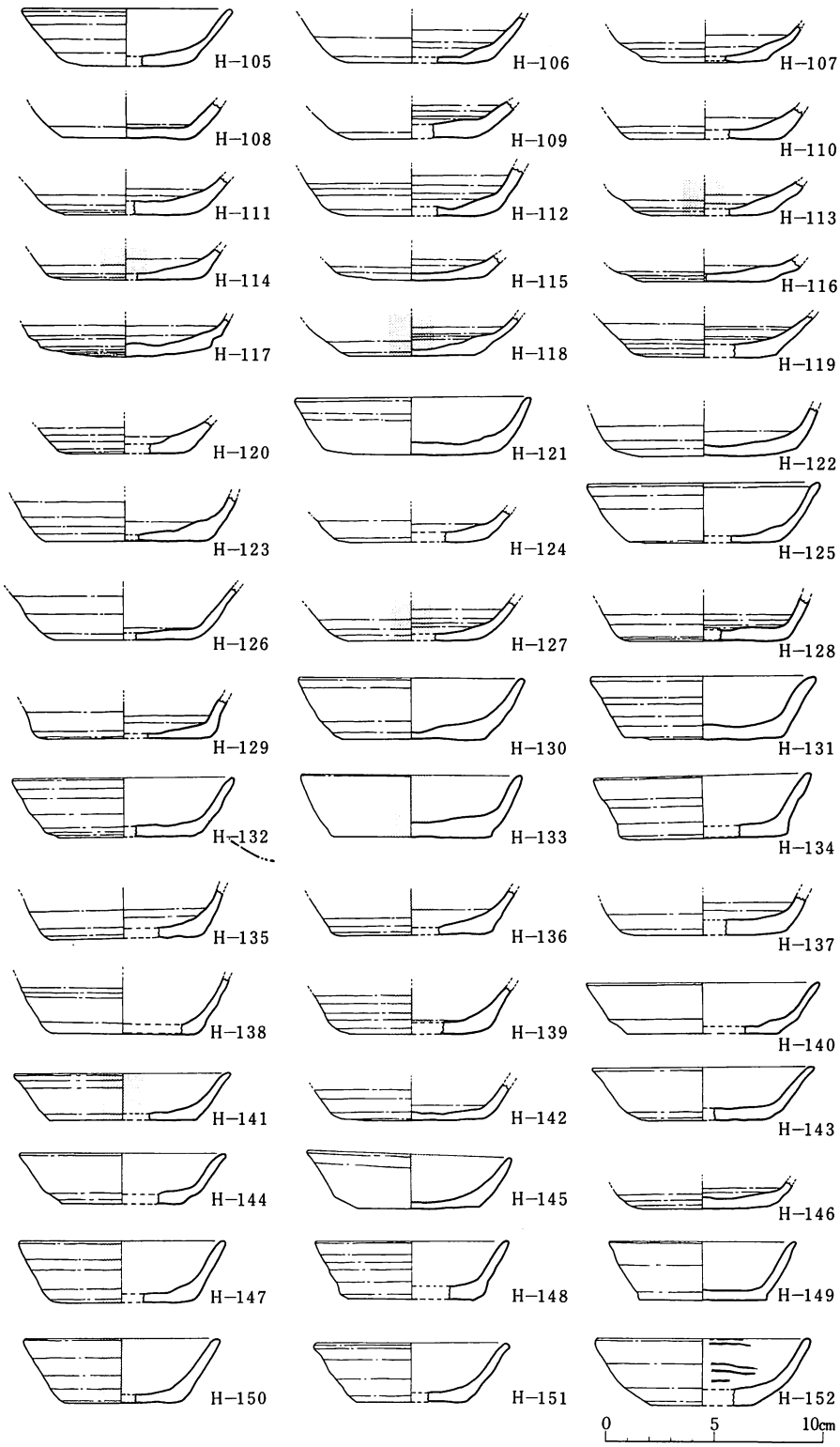
平均口径10.3cm・平均器高2.8cm・平均底径7.2cmを測る。器体は、やや直線気味に開く。平底で、体部外面との間に稜を有する。132・134にはススが付着し、139には赤色顔料が塗られている。ＳＢ103・ＳＫ103・ＳＫ104・ＳＫ111・Ⅱ層から出土。

杯Ⅱｂ６類（Ｈ－140～146）

平均口径9.9cm・平均器高2.3cm・平均底径6.7cmを測る。器体は直線気味に大きく開く。平底で、140・144は、体部外面との間が、わずかに屈曲する。141・143・144は口縁部がやや外反する。141・145にはススが付着する。ＳＢ103・ＳＫ103・ＳＫ104・ＳＫ111・Ⅱ層より出土。

杯Ⅱｂ７類（Ｈ－147～149）

平均口径9.0cm・平均器高2.8cm・平均底径6.3cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。平底である。147～149には、ススが付着し、149の外底に、板目圧痕を認める。



第33図　土師器（杯）実測図(4)

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H−100	1	SK107	10.2	2.9	7.4	s−r	c	d−o	ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H−101	1	SK111	10.4	2.3	5.5	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−102	1	Ⅲa層	10.1	2.6	6.3	a	g	d−o	ナデ	ヨコナデ	底部(外面)は灰色を帯びる
H−103	1	Ⅴ層	10.5	2.7	6.3	a	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−104	1	SK111	11.1	2.8	6.0	s−r	c	g−d	ナデ	ヨコナデ	
H−105	2	SK112	9.6	2.7	6.2	s−r	c	d−b	ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H−106	2	Ⅲa層	−	−	7.3	r	c	g−b	ナデ。板目圧痕あり。底面の半分に歪みあり	ヨコナデ	
H−107	3	Ⅲa層	−	−	5.9	s−r	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	底部内面にススの付着あり
H−108	2	Ⅲa層	−	−	6.0	a	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−109	2	Ⅱ層	−	−	6.6	s−r	c	d−o	ナデ	ヨコナデ	
H−110	2	SK107	−	−	7.4	a	g	d−b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−111	2	SB103	−	−	6.4	s−r	c	d−b	ナデ	ヨコナデ	版築土
H−112	2	Ⅲb層	−	−	7.0	a	g	d−c	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−113	2	Ⅲa層	−	−	6.2	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H−114	2	Ⅲa層	−	−	6.8	s−r	g	re	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−115	2	SK111	−	−	7.1	s−r	c	o o	板目圧痕あり。調整は粗	ヨコナデ後ナデ	底部の器壁は薄い。内面は淡褐色
H−116	2	Ⅱ層下部	−	−	6.4	a	g		ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H−117	2	SB103	−	−	7.8	a	g	o	調整は粗	ヨコナデ	版築土
H−118	2	Ⅲb層	−	−	6.0	a	g	d−o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	底部の外面のみ赤色顔料あり
H−119	2	Ⅲa層	−	−	7.0	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H−120	2	Ⅲa層	−	−	6.2	a	g	o	ナデ	ヨコナデ	
H−121	3	Ⅲb層	11.0	2.6	8.2	a	g	d−b	ヨコナデ後ナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る。	ヨコナデ後ナデ	
H−122	3	Ⅱ層	−	−	7.1	a	g	d−o	ナデ	ヨコナデ後ナデ	体部の内面にススの付着あり
H−123	3	Ⅲa層	−	−	8.2	a	c	d−o	ナデ	ナデ	
H−124	3	Ⅲb層	−	−	7.0	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−125	4	SK111	2.7	2.7	7.0	a	g	d−o	ナデ	ヨコナデ	
H−126	4	SK113	−	−	7.2	s−r	c	d−b	板目圧痕あり	ナデ	体部と底部の内面にススの付着あり.
H−127	4	SK107	−	−	7.1	s−r	c	re	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落
H−120	4	Ⅲb層	−	−	7.6	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ。指頭による窪みあり	
H−129	4	Ⅲa層	−	−	8.4	a	g	d−o	ヨコナデ板目圧痕あり	ヨコナデ後ナデ	
H−130	5	SK111	10.5	3.0	7.3	s−r	c	d−b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ。指頭による窪みあり	
H−131	5	SK103	10.3	2.9	7.2	s−r	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H−132	5	Ⅱ層	10.2	2.7	7.2	s−r	c	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	体部の両面にススの付着あり
H−133	5	SK107	10.6	2.4	6.4	a	g	re	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡が残る	ヨコナデ後ナデ	口縁(両面)の全面に垂れるようなススの付着あり.
H−134	5	SK104	9.9	2.8	7.7	a	g	o	ナデ	ヨコナデ	体部両面にススの付着あり
H−135	5	Ⅲa層	−	−	7.2		g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−136	5	SK113	−	−	7.4	a	g	re	ナデ	ヨコナデ	
H−137	5	Ⅱ層	−	−	7.6	s−r	c	d−b	ナデ。調整はやや粗	ナデ	
H−138	5	Ⅲa層	−	−	6.8	a	c	g−w	ナデ	ナデ	
H−139	6	Ⅲa層	−	−	7.3	a	c	re	ナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落
H−140	6	SK111	10.6	2.3	6.9	a	g	d−b	ヨコナデ調整はやや粗	ヨコナデ	
H−141	6	SK104	9.9	2.2	6.7	a	g	re	調整は粗	ヨコナデ	口縁(内面)にススの付着(灯明のシン跡)あり
H−142	6	SK104	−	−	6.8	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H−143	6	SB103	10.1	2.4	7.0	a	g	o	回転ヘラ切り離しの跡	ヨコナデ後ナデ	版築土
H−144	6	SB103	9.5	2.3	6.9	a	g	d−o	ナデ	ヨコナデ	版築土
H−145	6	SK103	9.5	2.4	5.5	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ。指頭による窪みあり	口縁(両面)の一部にススの付着あり
H−146	7	Ⅱ層	−	−	7.0	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ナデ	
H−147	7	SK104	9.5	3.0	6.6	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	口縁(両面)にススの付着あり
H−148	7	SK104	9.0	2.7	6.6	s−r	g	d−o	ナデ	ヨコナデ	口縁(両面)にススの付着あり
H−149		SK103	8.5	2.8	5.8	a	g	d−o	ヨコナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ	器壁薄し。口縁(内面)にススの付着あり
H−150	8	SB103	90	3.0	5.5	s−r	g	re	ナデ	ヨコナデ後ナデ	口縁(内面)にススの付着あり。版築土
H−151	8	SK103	9.1	2.7	5.7	a	g	d−o	板目圧痕あり.	ヨコナデ後ナデ	口縁(内面)の一部にススの付着あり
H−152	8	SB103	9.8	3.1	5.2	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	体部の内面に暗文あり。版築土

第17表　土師器（杯Ⅱb類）一覧表

ＳＫ103・ＳＫ104から出土。

杯Ⅱｂ８類（Ｈ－150～152）

平均口径9.3cm・平均器高2.9cm・平均底径5.5cmを測る。杯Ⅱｂ7類と比べて底径が小さく器体は、内彎するものの、直線気味に開く。151の口唇部は、やや外反する。150・151にはススが付着し、151の外底に板目圧痕を認める。152は体部内面をヘラ研磨する。ＳＢ103・ＳＫ103から出土。

Ⅲ（第35図・第18表）

Ⅲ Ⅰ類（Ｈ－153～155）

平均口径9.5cm・平均器高1.9cm・平均底径3.3cmを測る。器体は内彎するものの、直線気味に大きく開く。底部は丸底に近い。Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

ⅢⅡａ１類（Ｈ－156～159）

平均口径10.4cm・平均器高1.7cm・平均底径8.2cmを測る。器体は内彎する。底部はやや丸味を帯びる。156は器体に歪みが見られ、157～159の外底は調整が雑である。159の底部は器肉が厚く、外底に板目圧痕を認める。ＳＫ109・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

ⅢⅡａ２類（Ｈ－160）

口径11.7cm・器高1.8cm・底径8.4cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。平底で体部外面との間に稜を有する。Ⅲa層から出土。

ⅢⅡａ３類（Ｈ－161～162）

平均口径10.8cm・平均器高1.5cm・平均底径7.6cmを測る。ⅢⅡａ２類と比べて器高が低い。器体は内彎するものの、直線気味に開く。平底である。ＳＤ109・ＳＫ111から出土。

ⅢⅡａ４類（Ｈ－163）

口径10.1cm・器高1.7cm・底径7.3cmを測る。器体は内彎し、口縁部で外反して肥厚する。平底である。Ⅲa層から出土。

ⅢⅡｂ１類（Ｈ－164～165）

平均口径9.6cm・平均器高1.7cm・平均底径7.2cmを測る。ⅢⅡa類と比べて、口径と底径が小さい。器体は、やや直線気味に開く。平底である。ＳＫ112から出土。

ⅢⅡｂ２類（Ｈ－166）

口径9.9cm・器高1.9cm・底径6.0cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。口唇部は、わずかに肥厚する。平底である　Ⅲa層から出土。

ⅢⅡｂ３類（Ｈ－167）

口径9.2cm・器高1.8cm・底径7.0cmを測る。ⅢⅡｂ３類に比べて口径が小さい。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。器肉は厚い。平底である。ＳＫ110から出土。

ⅢⅡｂ４類（Ｈ－168～170）

（皿Ⅰ類）

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－153	1	Ⅲb層	8.5	2.0	2.8	a	g	g－b	ヨコナデ	ナデ	
H－154	1	Ⅲa層	9.9	2.1	3.8	a	g	o	ナデ	ナデ	
H－155	1	Ⅲa層	10.1	1.7	3.2	s－r	g	d－o	ナデ	ナデ	

（皿Ⅱa類）

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－156	1	Ⅲb層	11.0	2.0	9.4	a	g	d－o	回転ヘラ切り離しの跡明確に残る。底面の半分に歪みあり。	ヨコナデ後ナデ	
H－157	1	Ⅲa層	10.5	1.8	7.8	a	c	d－o	ナデ。回転ヘラ切り離しの跡残る。	ヨコナデ	
H－158	1	Ⅲa層	10.0	1.4	8.7	r	c	d－b	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡残る。	ヨコナデ後ナデ	
H－159	1	SK109	10.0	1.4	7.0	r	c	d－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ後ナデ	
H－160	2	Ⅲa層	11.7	1.8	8.4	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－161	3	SD109	10.6	1.4	7.6	s－r	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－162	3	Ⅲb層	10.9	1.5	7.6	s－r	c	d－o	回転ヘラ切り離しの跡わずかに残る。底面の半分に歪みあり	ヨコナデ	
H－163	4	Ⅲa層	10.1	1.7	7.3	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	

（皿Ⅱb類）

実測園No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－164	1	SK112	9.7	1.6	6.6	s－r	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	
H－165	1	SK112	9.5	1.7	7.7	a	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－166	2	Ⅲa層	9.9	1.9	6.0	s－r	c	d－o	ナデ	ヨコナデ	
H－167	3	SK107	9.2	1.8	7.0	a	g	d－o	ナデ	ヨコナデ	
H－168	4	Ⅲa層	8.6	1.4	6.2	s－r	c	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－169	4	Ⅲa層	9.1	1.3	6.5	a	c	d－b	ナデ	ヨコナデ	
H－170	4	SK111	8.9	1.4	6.0	a	g	d－o	ナデ	ヨコナデ	

（皿Ⅱc類）

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－171	1	SK107	9.2	1.3	6.1	a	g	o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ	底部の内面にススの付着あり
H－172	2	Ⅲa層	9.2	1.3	7.1	a	g	d－o	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡残る	ヨコナデ	
H－173	2	Ⅲb層	10.4	1.1	8.4	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－174	2	SK107	10.2	1.0	8.1	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－175	3	SK111	9.8	0.9	8.0	s－r	c	d－b	ヨコナデ。回転ヘラ切り離しの跡残る	ヨコナデ後ナデ	
H－176	3	SK111	9.8	1.0	7.6	a	g	d－b	ナデ	ナデ	
H－177	3	SK107	9.3	0.7	7.5	s－r	c	d－b	回転ヘラ切り離しの跡明確。調整は粗	ヨコナデ後ナデ	器壁薄し
H－178	4	Ⅲa層	8.3	1.1	6.4	a	g	d－o	ヨコナデ後マデ	ヨコナデ	
H－179	4	SK111	8.4	1.1	6.3	a	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－180	4	Ⅲa層	7.9	1.1	6.0	a	c	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	

第18表　土師器（皿）一覧表

平均口径8.9cm・平均器高1.4cm・平均底径6.2cmを測る。器体は、内彎するものの直線気味に開く。168は口縁部で、やや外反する。平底である。ＳＫ111・Ⅲa層から出土。

皿Ⅱc１類（Ｈ－171）

口径9.2cm・器高1.3cm・底径6.1cmを測る。皿Ⅱb類と比べて器高が低い。器体は、やや内彎しながら直線気味に開く。平底である。ＳＫ107から出土。

皿Ⅱc２類（Ｈ－172～174）

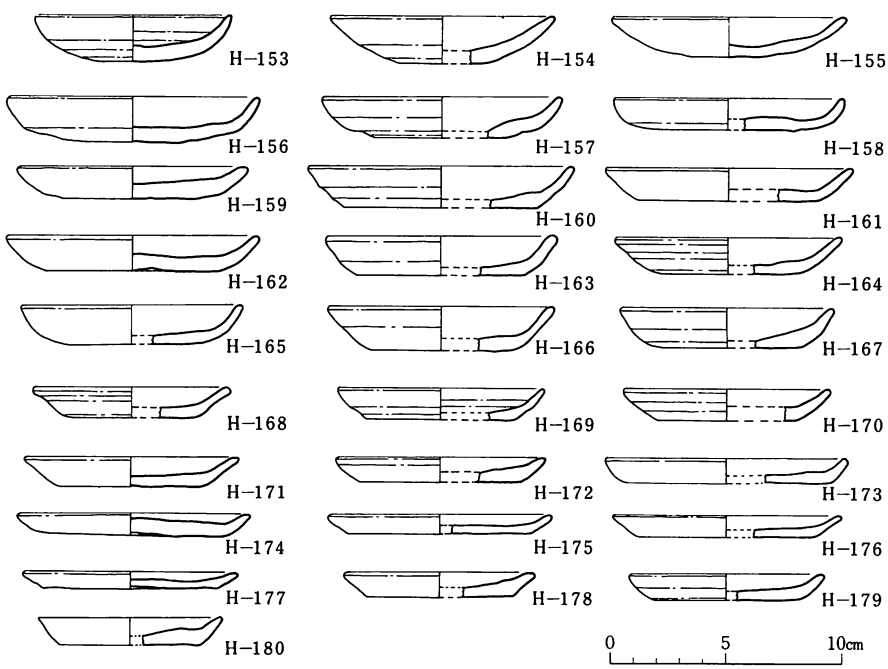
平均口径9.9cm・平均器高1.1cm、平均底径7.9cmを測る。皿Ⅱc１類よりも器高が低い。器体は直線気味に開く。174は器肉が厚く、上げ底である。172・173は平底である。ＳＫ107・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

皿Ⅱc３類（Ｈ－175～177）

平均口径9.6cm・平均器高0.9cm・平均底径7.7cmを測る。器体は内彎する。平底で器壁は、極めて薄い。177は、やや上げ底となる。177の外底は、調整が極めて雑である。ＳＫ110・ＳＫ111から出土。

皿Ⅱc４類（Ｈ－178～180）

平均口径8.2cm・平均器高1.1cm・平均底径6.2cmを測る。器体は、直線気味に開く。平底である。ＳＫ111・Ⅲa層から出土。



第34図　土師器（皿）実測図

その他の杯・皿（35図・第19表）

その他の杯・皿の中には、一つの類を形成しながらも、口縁部を大きく欠いたため、器形の完全復元が出来ず、杯と皿の分類に組み入れられないものがあった。ここでは、これらについて一括して説明する。

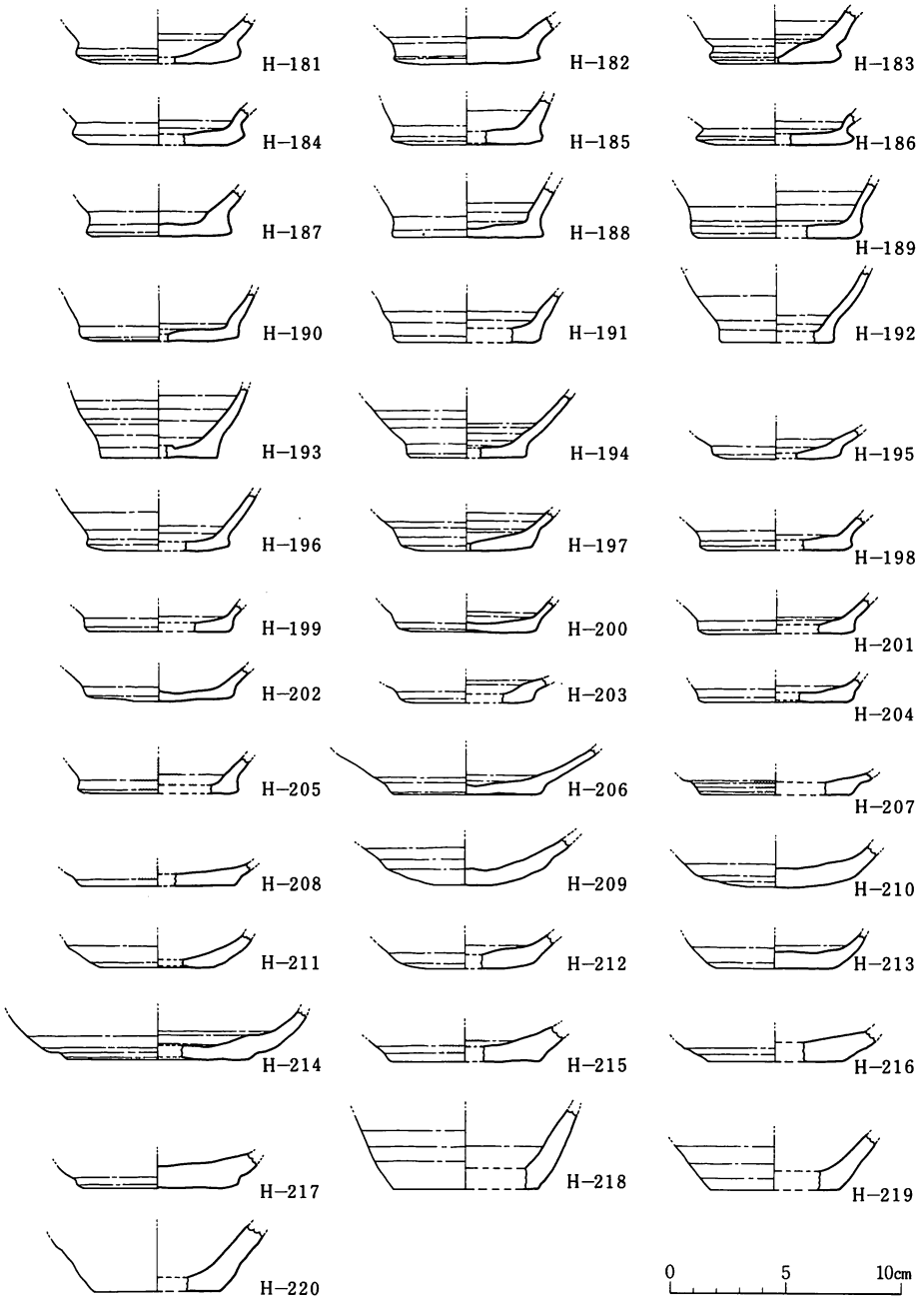
ＥＸ－１（Ｈ－181～186）

平均底径6.7cmを測り、器体は直線気味に広く開く様相を呈する。底部はやや丸味を帯び、体部外面との間は極端に屈曲して外側へ突き出す。181～183の底部は器肉が特に厚い。183・185の外底に、板目圧痕を認める。杯Ⅰa類に属するものと思われる。ＳＫ107・ＳＫ111・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

ＥＸ－２（Ｈ－187～191）

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 庭部内面	備考
H－181	EX-1	Ⅲa層	—	—	7.1	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－182	EX-1	SK111	—	—	6.4	a	c	d－b	ナデ。調整はやや粗 底面はやや歪む	ヨコナデ	
H－183	EX-1	Ⅲa層	—	—	5.7	r	b	g－b	ナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ後ナデ	黒色味を帯びる
H－184	EX-1	SK107	—	—	7.5	a	c	d－o	ナデ	ヨコテデ	
H－185	EX-1	Ⅲa層	—	—	6.7	a	g	d－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ナデ	
H－186	EX-1	Ⅲb層	—	—	6.8	a	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は橙色
H－187	EX-2	Ⅲa層	—	—	6.3	s－r	b	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－188	EX-2	Ⅲa層	—	—	6.7	s－r	c	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は淡褐色
H－189	EX-2	SK111	—	—	7.4	s－r	c	d－b	ナデ	ヨコナデ後ナデ	内面は灰褐色
H－190	EX-2	Ⅲa層	—	—	7.0	a	g	o	ナデ	ナデ	
H－191	EX-2	Ⅲa層	—	—	6.5	s－r	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－192	EX-3	Ⅲa層	—	—	5.0	s－r	c	d－b			黒色味を帯びる
H－193	EX-3	SK112	—	—	5.1	a	g	o	ヨコナデ	ナデ	
H－194	EX-4	Ⅲa層	—	—	5.3	a	g	o	ヨコナデ。調整は粗 粘土の付着あり	ナデ	
H－195	EX-4	Ⅲa層	—	—	5.5	s－r	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－196	EX-5	SK111	—	—	6.2	s－r	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－197	EX-5	Ⅲa層	—	—	5.9	s－r	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－198	EX-5	SK112	—	—	6.6	a	c	d－o	ナデ	ヨコナデ	
H－199	EX-5	Ⅲa層	—	—	6.4	a	g	o	ナデ。調整はやや粗	ヨコナデ後ナデ	
H－200	EX-5	Ⅲb層	—	—	6.1	s－r	g	d－b			
H－201	EX-5	Ⅲa層	—	—	6.8	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－202	EX-5	SK111	—	—	6.4	r	c	g－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－203	EX-5	Ⅲa層	—	—	5.9	r	c	d－b	ナデ。調整はやや粗		内面は淡橙色
H－204	EX-5	SK108	—	—	6.7	a	c	d－b			外面は黒色味を帯びる
H－205	EX-5	Ⅲa層	—	—	7.0	s－r	c	re	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落している
H－206	EX-6	Ⅲa層	—	—	6.6	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－207	EX-6	Ⅲa層	—	—	6.6	s－r	c	re	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－208	EX-6	SB103	—	—	6.8	a	c	re	ナデ。調整はやや粗	ヨコナデ後ナデ	赤色顔料はほとんど剝落している
H－209	EX-7	Ⅵ層	—	—	—	a	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－210	EX-7	Ⅲb層	—	—	—	s－r	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－211	EX-7	Ⅲa層	—	—	—	s－r		d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－212	EX-7	Ⅲa層	—	—	—	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－213	EX-7	SK111	—	—	—	a	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－214	EX-7	Ⅲb層	—	—	—	s－r	c	d－b	ナデ。調整は粗	ヨコナデ	体部外面は調整がやや粗い
H－215	EX-8	Ⅲa層	—	—	6.7	s－r	c	re	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落している
H－216	EX-8	Ⅲa層	—	—	5.8	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は淡褐色
H－217	EX-8	Ⅲa層	—	—	7.0	a	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ	桃色味を帯びる
H－218	EX-9	SK109	—	—	6.5	s－r	g	o			
H－219	EX-9	Ⅲa層	—	—	5.6	a	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－220	EX-9	SK111下部	—	—	5.5	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は灰褐色

第19表　土師器（その他の杯・皿）一覧表



第35図　土師器（その他の杯・皿）実測図

分類			実測図No.	器高/口径	口径/底径	口径 A v	器高 A v	底径 A v	出土位置 個体数	板目圧痕 個体数	スス付着 個体数	赤色顔料 個体数
杯 Ia	1		H-001 ～ H-011	0.46	0.66	10.5	4.8	6.9	Ⅲb層1 Ⅲa層10	2	2	
	2		H-012 ～ H-015	0.41	0.63	(10.6)	(4.3)	6.9	Ⅲb層2 Ⅲa層2	2		
	3		H-016 ～ H-031	0.41	0.59	(10.3)	4.2	6.6	SK111·6 Ⅲb層1 Ⅲa層9	1	3	
	4		H-032 ～ H-039	—	—	—	—	5.7	SB103 1 SK111 1 SK111 1 Ⅲb層4 Ⅲa層1			1
杯 Ib	1		H-040 ～ H-052	0.34	0.55	12.0	4.1	6.8	Ⅲb層4 Ⅲa層6 SK112 1 Ⅱ層下部2	3	1	
	2		H-053 ～ H-062	0.32	0.56	11.8	3.7	6.7	SS102 1 SK104 1 SK111 1 Ⅲa層7	1	2	
	3		H-063 ～ H-069	0.30	0.56	10.9	3.2	6.0	Ⅲa層6 Ⅱ層下部1		2	
杯 IIa	1		H-070 ～ H-074	0.28	0.70	13.2	3.6	9.1	SK103 1 SK107 1 Ⅲb層1 Ⅲa層1 Ⅱ 層1	1		
	2		H-075 ～ H-079	(0.30)	(0.69)	(12.1)	(3.6)	(8.2)	SB103 1 SK103 1 Ⅲb層1 Ⅲa層2			
	3		H-080 ～ H-085	(0.29)	(0.62)	(12.2)	(3.5)	(8.0)	SB102 1 SD107 1 Ⅲa層3			
	4		H-086 ～ H-091	0.24	0.57	12.7	3.0	7.4	SK104 1 SK111 1 Ⅲa層3 Ⅱ 層1			2
	5		H-092 ～ H-099	0.23	0.59	12.4	2.8	7.6	SB103 1 SK104 1 SK111 1 Ⅲb層1 Ⅲa層3 Ⅱ 層1			4
杯 IIb	1		H-100 ～ H-104	0.25	0.42	10.5	2.7	6.3	SK107 1 SK111 2 Ⅲa層2			
	2		H-105 ～ H-120	(0.28)	(0.44)	(9.6)	(2.7)	6.6	SB103 2 SK107 1 SK111 1 Ⅲb層2 Ⅲa層7 SK112 1 Ⅱ 層2	2	1	1

第20表　土師器（杯・皿）分類表

（　）は対象の土師器が1個体の場合を示す。

分類		実測図	実測図No.	器高 口径	口径 底径	器高 A v.	器高 A v.	底径 A v.	出土位置 個体数	板目圧痕 個体数	スス付着 個体数	赤色顔料 個体数
杯 Ⅱb	3		H-121 ～ H-124	(0.24)	(0.32)	(11.0)	(2.6)	2.6	Ⅲb層 2 Ⅲa層 1 Ⅱ 層 1			
	4		H-125 ～ H-129	(0.25)	(0.39)	(10.7)	(2.7)	7.5	SK103 1 SK107 1 SK111 1 Ⅲb層 1 Ⅲa層 1			
	5		H-130 ～ H-139	0.27	0.39	10.3	2.8	7.2	SB103 1 SK104 1 SK107 1 SK111 1 Ⅲa層 3 SK113 1 Ⅱ 層 2		3	1
	6		H-140 ～ H-146	0.23	0.35	9.9	2.3	6.7	SB103 2 SK103 1 SK104 2 SK111 1 Ⅱ 層 1		2	
	7		H-147 ～ H-149	0.31	0.45	9.0	2.8	6.3	SK103 1 SK104 2		3	
	8		H-150 ～ H-152	0.32	0.54	9.3	2.9	5.5	SB103 2 SK103 1	2	2	
Ⅲ Ⅰa	—		H-153 ～ H-155	0.21	—	9.5	1.9	3.3	Ⅲb層 1 Ⅲa層 2			
Ⅲ Ⅱa	1		H-156 ～ H-159	0.16	0.20	10.4	1.7	8.2	SK109 1 Ⅲb層 1 Ⅲa層 2			
	2		H-160	(0.15)	(0.21)	(11.7)	(1.8)	(8.4)	SK111 1 Ⅲa層 1			
	3		H-161 ～ H-162	0.14	0.19	10.8	1.5	7.6	SK111 3 Ⅲb層 1 SD109 1			
	4		H-163	(0.17)	(0.23)	(10.1)	(1.7)	(7.3)	SD105 1 Ⅲa層 1			
Ⅲ Ⅱb	1		H-164 ～ H-165	0.17	0.23	9.6	1.7	7.2	SK112 2			
	2		H-166	(0.19)	0.32	(9.9)	(1.9)	(6.0)	Ⅲa層 1			
	3		H-167	(0.20)	0.26	(9.2)	(1.8)	(7.0)	SK107 1 Ⅲa層 1			
	4		H-168 ～ H-170	0.15	0.22	8.9	1.4	6.2	SK111 1 Ⅲa層 2			
Ⅲ Ⅱc	1		H-171	(0.14)	0.21	(9.2)	(1.3)	6.1	SB103 1 SK107 1 Ⅲa層 1			
	2		H-172 ～ H-174	0.13	0.14	9.9	1.1	7.9	SK107 1 Ⅲb層 1 Ⅲa層 1			
	3		H-175 ～ H-177	0.09	0.11	9.6	0.9	7.6	SK107 2 SK111 1 Ⅲa層 1			
	4		H-178 ～ H-180	0.13	0.17	8.2	1.1	6.2	SK111 1 Ⅲa層 2			

平均底径6.8cmを測り、器体は直線気味に開く。平底で、体部外面との間は191を除いて屈曲している。杯Ⅰa類に属するものと思われる。SK111・Ⅲa層から出土。

ＥＸ－３（Ｈ－192～193）

平均底径5.1cmを測り、器体は内彎する。平底で、体部外面との間は、ゆるやかに屈曲する。杯Ⅰa類に属するものと思われる。SK111・Ⅲa層から出土。

ＥＸ－４（Ｈ－194～195）

平均底径5.4cmを測り、器体は内彎するものの、やや直線気味に開く、平底で、体部外面との間は稜を有し、大きく屈曲する。杯Ⅰb類に属するものと思われる。Ⅲa層から出土。

ＥＸ－５（Ｈ－196～205）

平均底径6.4cmを測り、器体は内彎するものの、直線気味に開く。EX-4と比べて底径が大きい。平底で体部外面との間は屈曲する。杯Ⅰb類に属するものと思われる。SK108・SK111・Ⅲb層・Ⅲa層・SK112から出土。

ＥＸ－６（Ｈ－206～208）

平均底径6.7cmを測り、器体は直線気味に大きく開く。平底で、体部外面との間は屈曲する。SB103・Ⅲa層から出土。

ＥＸ－７（Ｈ－209～214）

丸底の一部が残る。Ⅳ層・SK111・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

ＥＸ－８（Ｈ－215～217）

器肉の厚い底部のみが残る。平均底径6.5cmを測る。Ⅲa層から出土。

ＥＸ－９（Ｈ－218～220）

平均底径5.9cmを測る。器体は器肉が厚く、直線気味に開く。平底で、体部外面との間に稜を有する。SK109・SK111下部・Ⅲa層から出土。

土師器の杯・皿の分類について（第20・21表）

杯Ⅰa１～４類と杯Ⅰb１～２類は、器形からするとむしろ椀に近いものである。これらは底部端と体部との境に明瞭なふくらみをもつ杯Ⅰa１～３類と、ふくらみをもたない杯Ⅰa４類と杯Ⅰb１～２類に大別できる。後者はSB103建造に伴う遺構から出土し、前者は建造後の遺構や層位から出土している。したがって、杯Ⅰa１～３類は、杯Ⅰa４類や杯Ⅰb１～２類より後出のものであることが明らかである。

次に本来の杯の形態をもつ杯Ⅱ類は、法量によって大型の杯Ⅱa類と小型の杯Ⅱb類に分けられるが、器形の特徴からすると、口縁が外反する杯 Ⅱa1～2類と、体部が比較的大きく開く杯Ⅱa３～５類と杯Ⅱb１～６類、および口径に対して器高の大きな小型の杯Ⅱb７・８類に大別される。これからの大半は、SB103建造に伴う各遺構から出土しており、先後関係を知ることができ

分類 / 遺構	土師器															須恵器				
	杯Ⅰa	杯Ⅰb	杯Ⅱa	杯Ⅱb	皿Ⅰ	皿Ⅱa	皿Ⅱb	皿Ⅱc	高台杯Ⅰ	高台杯Ⅱ	高台付皿	高杯	甕	鉢	糸切り底	杯	杯蓋	高杯	甕	壺
SB101(Ⅶ層)												2	1			2	1	1		
SD101 SB102(Ⅵ層)			1										4			2	7			
SD102																	1			
SD105(Ⅴ層)									1		1		3			2	4		1	1
SD107			1																	
SS102		1																		
SK103			1	5												1				
SB103	1		2	6					2		1						1			
SB104																1				
SK104	1	1	2	4					1											
SK108									1	3										
SK109						1			2							1				
SK107			1	4			1	3		4	3					3				
SK111	7	1	2	5			1	3	10	7	4		1	2		3				1
SK112		1		1			2			3										
Ⅲb層	8	4	3	5	1	2		1	2	2			1			1				
Ⅲa層	22	19	12	14	2	4	3	3	8	11	5	1		1		8				
SK114									1		1		1							1
SK113															1		2		1	
SK115															2					
Ⅱ層		3	3	6					1		1									
SD109						1			3							2				
その他												1	1				1	1	1	

第21表　遺構別出土遺物の出土個数一覧表（土師器・須恵器）（実測したものに限る）

ない。ただ、杯Ⅱa３類はＳＢ102の基壇築成土中から出土しており、他のものより先行する可能性がある。

一方、皿の場合はそのすべてが、杯とは反対にＳＢ103建造後の遺構や層中から出土している。法量によってａ・ｂ・ｃに細分されるが、各類はほとんどの遺構・層位にまたがって出土しており、先後関係を明らかにできない。恐らく、この大半は椀形を呈する先の杯Ⅰa１～３類と共存するものと考えられる。

なお、ここで言うＳＢ103建造に伴う遺構とは、ＳＤ107・ＳＫ103・ＳＢ103(版築土のこと)・ＳＳ102をさし、ＳＢ103建造後の遺構や層位とは、Ⅲb層・ＳＫ111・ＳＫ107・ＳＫ112・ＳＫ109・Ⅲa層をさしている。

(3)高台付杯・皿（第36～38図・第22・23表）

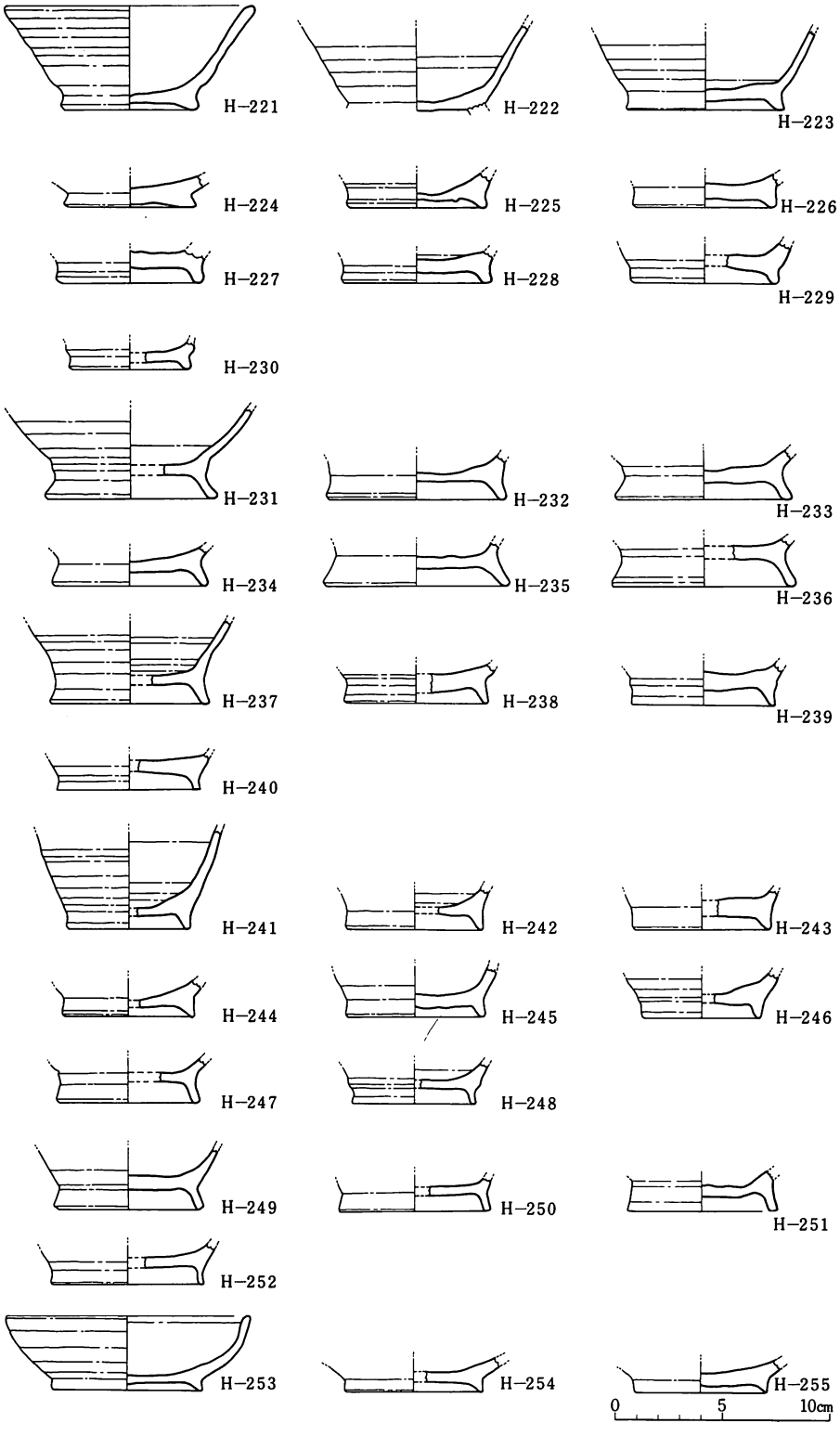
高台付杯は、杯部の形態によりⅠ類（杯Ⅰ類に属する）とⅡ類（杯Ⅱ類に属する）に分けられ、法量や細部の特徴により高台付杯Ⅰ類は１～５・皿類は１～５に細分される。

高台付杯Ⅰ１類（Ｈ－221～230）

221は口径11.7cm・器高4.9cm・高台径6.4cm・高台高0.3cmを測る。杯部の器体は杯Ⅰb１類に類似しており、直線気味に開き、口唇部はやや肥厚する。杯部の底径は6.4cmを測る。体部外面はナデ調整による凹凸が目立ち、平底である。高台は断面舌状形で、底部端に貼り付けられる。接合面の調整は荒い。222は高台が剥離している。223の高台は外面が、わずかに内側へ屈曲す

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	高台高	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－221	高台付杯Ⅰ1	Ⅲa層	11.7	4.9	6.4	0.3	sr	g	d－o	調整は粗	調整は粗	高台の接合面は調整が粗い
H－222	〃	SD109	－	－	－	－	sr	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	体部内面にスス付着
H－223	〃	SD109	－	－	7.3	0.5	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
H－224	〃	SD105	－	－	6.2	0.1	r	c	d－r	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ	高台外面はナデ
H－225	〃	Ⅲa層	－	－	6.7	0.3	sr	c	o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ	内面は淡橙色
H－226	〃	SK111	－	－	6.7	0.3	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－227	〃	SK109	－	－	6.9	0.6	sr	c	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－228	〃	SK111	－	－	7.1	0.5	sr	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－229	〃	Ⅲa層	－	－	6.9	0.5	a	g	d－o	ヨコナデ後　ナデ	ヨコナデ。指頭圧痕あり	
H－230	〃	SK108	－	－	5.7	0.4	sr	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	高台にやや歪みあり
H－231	高台付杯Ⅰ2	SK111	－	－	8.1	1.1	sr	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む。器壁は薄い
H－232	〃	SK104	－	－	8.6	0.8	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－233	〃	Ⅲa層	－	－	8.2	0.7	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	底部内面に指頭圧痕あり
H－234	〃	SK111	－	－	7.3	0.8	a	g	d－0	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－235	〃	SK111	－	－	8.8	0.8	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	底部内面のナデ調整
H－236	〃	SD109	－	－	8.6	1.2	sr	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－237	高台付杯Ⅰ3	Ⅲa層	－	－	7.4	0.9	sr	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色味を帯びる
H－238	〃	Ⅲa層	－	－	6.8	0.7	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－239	〃	Ⅲb層	－	－	6.7	0.8	sr	g	d－o	ヨコナデ。ヘラ跡10条残る	ヨコナデ後ナデ	
H－240	〃	SK111下部	－	－	6.7	0.6	a	g	d－o	ナデ	ヨコナデ	
H－241	高台付杯Ⅰ4	Ⅲb層	－	－	5.8	0.7	a	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－242	〃	SK111下部	－	－	6.5	0.7	a	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－243	〃	SB103	－	－	6.4	0,6	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ　指頭圧痕あり	
H－244	〃	Ⅲa層	－	－	6.2	0.5	sr	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－245	〃	Ⅲa層	－	－	6.6	0.5	sr	c	d－o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ	内面は橙色
H－246	〃	SB103	－	－	6.5	0.6	a	g	d－o	ナデ	ヨコナデ。指頭圧痕あり	
H－247	〃	SK109	－	－	6.7	1.0	sr	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－248	〃	SK114	－	－	5.9	0.7	sr	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－249	高台付杯Ⅰ6	SK111下部	－	－	7.0	0.9	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－250	〃	Ⅱ　層	－	－	7.2	0.8	a	g	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－251	〃	SK111	－	－	7.0	0.8	r	b	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－252	〃	SK111下部	－	－	7.2	0.8	sr	g	d－o	ナデ	ヨソナデ　ヨコナ	胎土に小礫を含む
H－253	高台付杯Ⅱ	Ⅲa層	11.5	3.5	7.1	0.3	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－254	〃	SK111	－	－	6.6	0.4	a	c	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－255	〃	Ⅲb層	－	－	6.2	0.4	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	高台の調整は雑。底部内面にスス付着
H－256	－	SK107	－	－	6.3	0.4	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－257	－	SK112	－	－	8.2	0.5	a	c	re	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	赤色顔料はほとんど剝落
H－258	－	Ⅲa層	－	－	7.0	0.5	a	c	g－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－259	－	SK108	－	－	6.6	0.5	a	c	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	内面は灰色を帯びる
H－260	－	SK112	－	－	7.1	0.7	sr	c	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－261	－	SK112	－	－	7.0	0.7	sr	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－262	－	Ⅲa層	－	－	7.6	0.3	a	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	内面は灰白色
H－263	－	SK107	－	－	7.6	0.6	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－264	－	SK111	－	－	7.2	0.4	a	c	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ。調整はやや粗	
H－265	－	Ⅲa層	－	－	8.6	0.8	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ナデ	
H－266	－	Ⅲa層	－	－	7.5	0.5	a	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ナデ	内面にスス付着
H－267	－	SK111	－	－	9.1	1.3	sr	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	内面は淡褐色
H－268	－	Ⅲa層	－	－	9.5	1.2	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－269	－	SK111	－	－	7.2	0.9	a	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－270	－	Ⅲa層	－	－	6.5	0.8	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－271	－	SK111	－	－	6.0	0.8	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－272	－	Ⅲa層	－	－	6.5	0.9	a	c	d－o	ナデ	ナデ	
H－273	－	Ⅲb層	－	－	5.6	1.3	a	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－274	－	Ⅲa層	－	－	8.9	0.7	sr	g	re	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－275	－	SK111	－	－	7.1	0.8	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－276	－	SK107	－	－	7.8	0.7	a	c	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－277	－	SK108	－	－	8.3	0.6	a	c	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－278	－	SK108	－	－	7.1	0.9	sr	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－279	－	SK111	－	－	8.6	0.9	sr	c	d－b	ヨコナデ。板目圧痕あり	ヨコナデ	
H－280	－	Ⅲa層	－	－	9.5	1.0	sr	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－281	－	Ⅲa層	－	－	6.8	0.7	a	c	g－b	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ後ナデ	
H－282	－	SK107	－	－	7.7	0.7	a	g	g－w	ヨコナデ	ヨコナデ	

第22表　土師器（高台付杯）一覧表



第36図　土師器（高台付杯）実測図

る。高台径7.3cm・高台高・0.5cmを測り、断面舌状形を呈する。224～230は平均高台径6.6cm・平均高台高0.4cmを測る。高台は断面舌状形をなすが、224の端部は、やや鋭角気味である。SD105・SD109・SK108・SK111・Ⅲa層から出土。

高台付杯Ⅰ2類（H－231～236）

231の杯部は底径7.3cmを測る。器体は、直線気味にやや広く開く。平底である。杯Ⅰb類に属するものと思われる。高台は断面半長円形で底部端に貼り付けられて、外側に開く。高台高1.1cm・高台径8.1cmを測る。端部はやや肥厚する。232～236は平均高台径8.3cm・平均高台高0.9cmを測る。高台は断面半長円形をなすが236の端部は、やや肥厚する。SD109・SK104・SK111・Ⅲa層から出土。

高台付杯Ⅰ3類（H－237～240）

237の杯部は底径6.9cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。平底である。高台は断面半三日月形、底部端に貼り付けられて、わずかに外側へ開く。高台高0.9cm・高台径7.4cmを測る。238～240は、平均高台径6.8cm・平均高台高0.7cmを測り、断面半三日月形を呈する。SK111下部・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

高台付杯Ⅰ4類（H－241～248）

241の杯部は底径5.7cmを測る。器体は内彎する。平底である。高台は断面楕円形で、底部端に貼り付けられ高台径5.8cm・高台高0.7cmを測る。242～248は平均高台径6.4cm・平均高台高0.7cmを測り、断面楕円形を呈する。SB103・SK109・SK111・SK114・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

高台付杯Ⅰ5類（H－249～252）

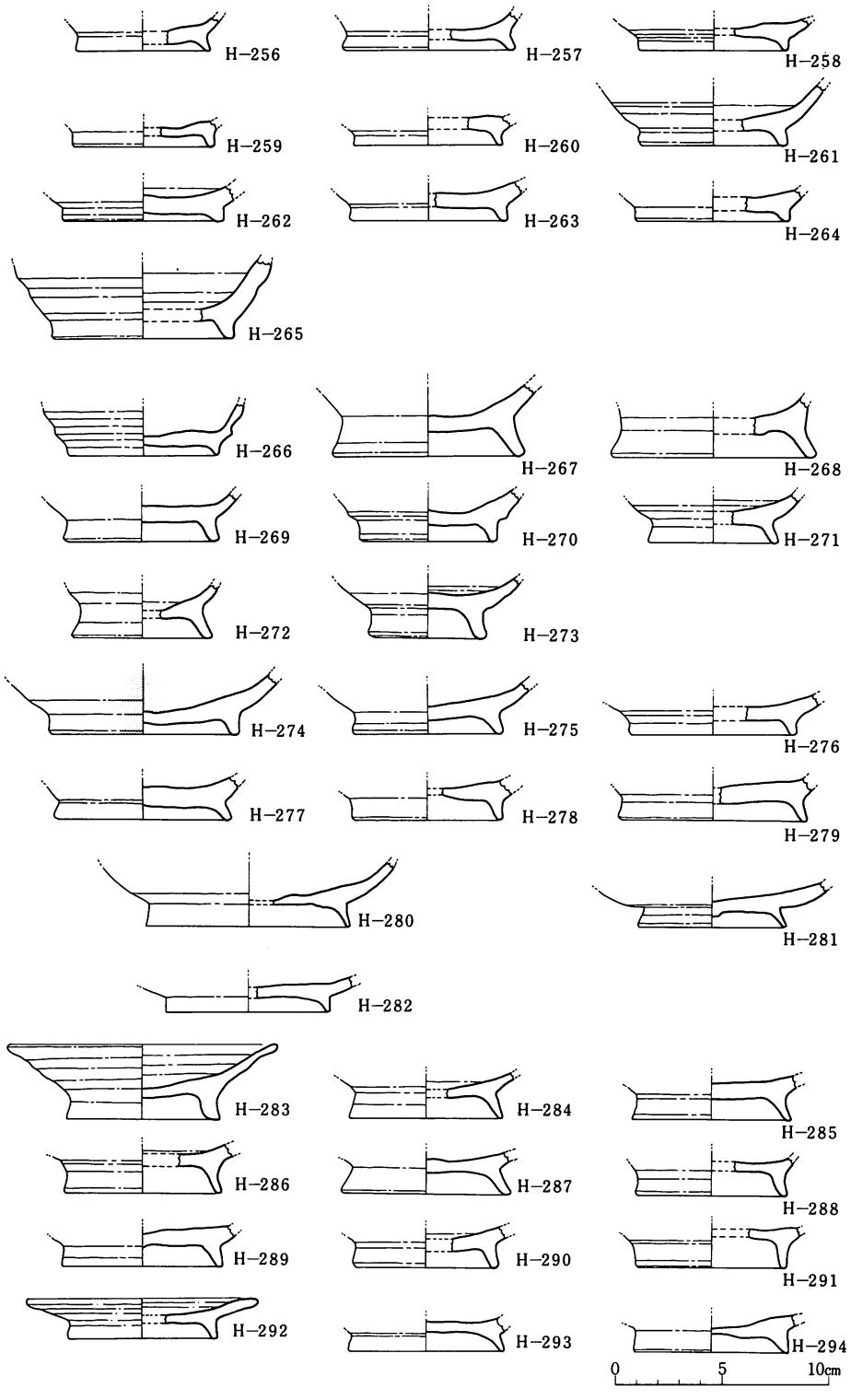
249の杯部は底径6.5cmを測る。器体は内彎するものの、やや直線気味に開く。平底である。高台は断面長方形で、底部端に貼り付けられて、わずかに外側へ開く。高台径6.5cm・高台高0.9cmを測る。250～252は平均高台径7.1cm・平均高台高0.8cmを測り、断面長方形を呈する。SK111下部・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

高台付杯Ⅱ類（H－253～282）

253は、口径11.5cm・器高3.5cm・高台径7.1cm・高台高0.3cmを測る。杯部の器体は、内彎し、口縁部は、やや内傾する。平底である。底径7.0cmを測る。高台は断面三角形（端部はやや丸味を帯びる）で、高さ0.3cm・高台径7.1cmを測る。底部端に貼り付けられている。254・255は、平均高台径6.4cm・平均高台高0.4cmを測り、断面三角形を呈する。SK111・Ⅲb層・Ⅲa層から出土。

その他の高台付杯Ⅰ・Ⅱ

261の杯部は、底径6.8cmを測る。器体は、内彎するものの、やや直線気味に開く。高台は断面半楕円形で底部端に貼り付けられている。高台径7.0cm・高台高0.7cmを測る。



第37図　土師器（高台付杯・皿）実測図

265の杯部は底径8.6cmを測り、器肉が厚い。器体は内彎するものの、直線気味に開く。高台は、断面台形で、底部端に貼り付けられている。高台径8.6cm・高台高0.8cmを測る。Ⅲa層から出土。

267・268の高台は断面長円形で器肉が厚く、底部端に貼り付けられて、外側に開く。平均高台径9.3cm・平均高台高1.3cmを測る。ＳＫ111・Ⅲa層から出土。

273の高台は断面楕円形で器肉が厚く、底部端に貼り付けられて、やや外側に開く。高台径5.6cm・高台高1.3cmを測る。Ⅲa層から出土。

274の高台は断面舌状形で、底部端に貼り付けられている。高台径8.9cm・高台高0.6cmを測る。赤色顔料が塗られている。Ⅲa層から出土。

280の高台は断面鋭角三角形（端部はやや偏平）で、底部端に付けられている。高台径9.5cm・高台高1.0cmを測る。Ⅲa層から出土。

高台付皿Ⅰ類（Ｈ－283～291）

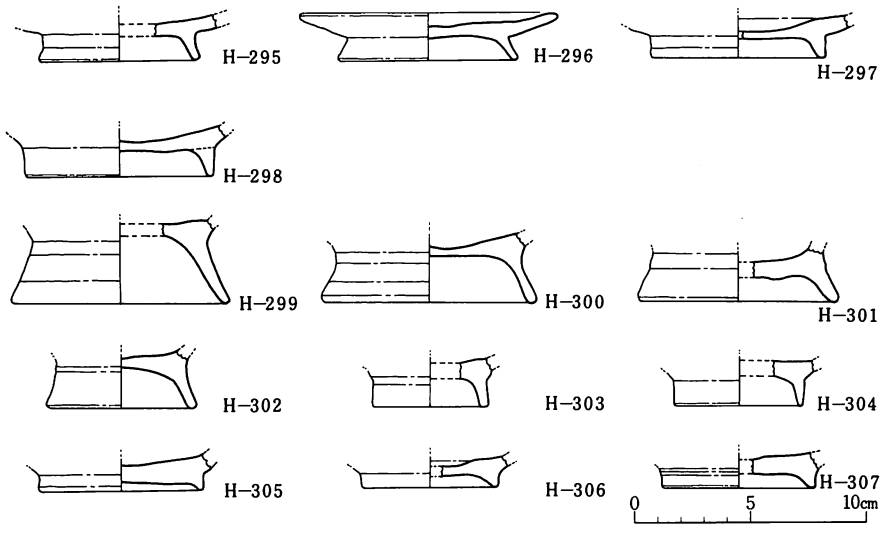
283は、口径12.7cm・器高3.6cm・高台径7.2cm・高台高1.2cmを測る。皿部の器体は、直線気味に大きく開き、口縁部でわずかに開く。皿部の底径は6.8cmを測る。高台は断面半三日月形で器肉が厚く、底部端に貼り付けられている。284～291は、平均高台径7.4cm・平均高台高1.1cmを測り、断面半三日月形を呈する。ＳＢ103・ＳＤ105・ＳＫ111・ＳＫ114・Ⅲa層・Ⅱ層から出土。

高台付皿Ⅱ類（Ｈ－292～295）

292は、口径10.9cm・器高1.9cm・高台径7.0cmを測る。皿部の底径は6.8cmを測る。皿部の器体は、外反気味に大きく開く。高台は断面三日月形で、底部端に貼り付けられている。293～

実測図No.	分類	出土位置	口径	器高	底径	高台	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H－283	1	ＳＢ103	12.7	3.6	7.2	1.2	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－284	1	Ⅲa層	—	—	7.4	1.1	s－r	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－285	1	Ⅲa層	—	—	7.5	1.0	s－r	g	d－b	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－286	1	ＳＫ114	—	—	7.4	1.3	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－287	1	Ⅲa層	—	—	8.1	1.0	a	g	d－.o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－288	1	ＳＤ105	—	—	7.1	1.1	a	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－289	1	ＳＫ111	—	—	7.6	1.0	a	g	d－o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	
H－290	1	Ⅱ層	—	—	7.0	0.9	a	g	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－291	1	Ⅲa層	—	—	7.1	1.3	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－292	2	ＳＫ107	10.9	1.9	7.0	0.7	s－r	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－293	2	ＳＫ107	—	—	7.5	0.9	s－r	g	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－294	2	ＳＫ111	—	—	7.3	0.7	a	g	o	ヨコナデ。指頭圧痕あり	ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む
H－295	2	Ⅲa層	—	—	7.0	1.0	a	c	d－o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H－296	3	ＳＫ107床面	11.4	2.0	8.0	1.0	a	g	o	ヨコナデ。調整はやや粗	ヨコナデ後ナデ	
H－297	3	ＳＫ111	—	—	7.6	0.8	a	c	d－b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－298	3	ＳＫ111	—	—	8.2	1.1	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ後ナデ	高台の接合面が調整が粗い

第23表　土師器（高台付皿）一覧表



第38図　土師器（高台付皿・その他）実測図

実測図 No.	出土位置	口径	器高	底径	高台	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H−299	Ⅲa層	—	—	9.5	2.9	s−r	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む
H−300	Ⅱ層	—	—	9.5	2.0	a	g	o	ヨコナデ後ナデ	ヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む
H−301	SK111	—	—	8.7	1.1	a	g	d−b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−302	Ⅲa層	—	—	6.5	1.6	a	g	d−o	ナデ	ヨコナデ後ナデ	胎土に小礫を含む
H−303	Ⅲb層	—	—	5.1	1.2	a	g	d−b	ヨコナデ	ヨコナデ	
H−304	Ⅲb層	—	—	5.6	1.3	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H−305	SK111	—	—	7.2	0.3	s−r	c	g−b	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	内面は淡褐色
H−306	SK112	—	—	6.0	0.5	s−r	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ後ナデ	
H−307	Ⅲa層	—	—	6.6	0.6	s−r	c	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	

第24表　土師器（高台付・その他）一覧表

295は平均高台径7.3cm・平均高台高0.9cmを測り、断面半三日月形を呈する。SK107・SK111・Ⅲa層から出土。

高台付皿Ⅲ類（H−296〜298）

296は口径11.4cm・器高2.0cm・高台径8.0cm・高台高1.0cmを測る。皿部は直線気味に大きく開く。皿部の底径は7.0cmを測る。高台は、断面長方形(端部は丸味を帯びる)で、底部端に貼り付けられて、外側へわずかに開く。297・298の高台は、やや肉厚で断面半楕円形を呈し、底部端に貼り付けられて直立する。平均高台径7.9cm・平均高台高1.0cmを測る。SK107から出土。

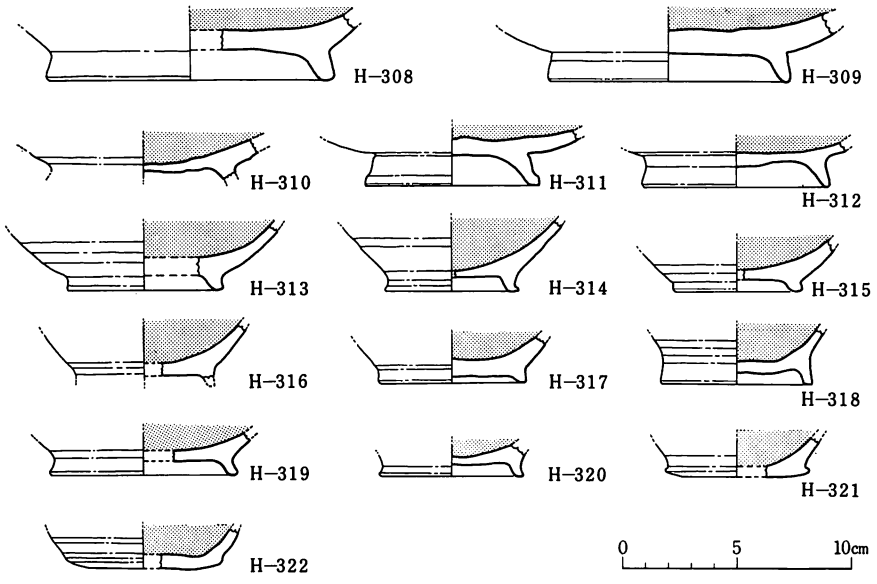
その他の高台付土師器（第38図・第24表）

299の高台は断面長方形で、底部端に貼りつけられて外側へ大きく開く。高台径9.4cm・高台高2.9cmを測る。303の高台は断面長方形で底部端に貼り付けられて直立する。高台径5.1cm。高台高1.2cmを測る。

(4)内黒土器（第39図・第25表）

SB103（319・320）・SD102（316）・SK110（314）・SK111（308・310）・Ⅲb層（309・312・321）・Ⅲa層（313・315・317・318・322）から出土。器面は磨耗しているものが多い。308～320は高台をもつ杯である。底径10.6～12.5cmを測る大型のもの（308・309）、底径7.6cm～8.2cmを測る中型のもの（311・312・319）、底径5.5～6.5cmを測る小型のもの（314・315・317・318・320）に分かれる。317が底部端より、やや内側に高台がつくほかは、全て底部端に張りつけられている。

321・322は底径6.2cm・6.5cmを測る小型の杯で、底部端は底部中央より浮きあがる。



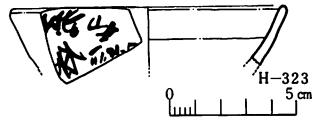
第39図　内黒土器実測図

実測図No.	出土位置	口径	器高	底径	高台	胎土	焼成	色調	器面調整 底部外面	器面調整 底部内面	備考
H−308	SK111	−	−	11.5	1.3	r	b	q−b	ヨコナデ	やや雑な研磨	胎土に小礫を含む　土器の風化がかなり進んでいる。
H−309	Ⅲb層	−	−	10.6	1.2	s−r	b	q−b	ヨコナデ	雑な研磨	内部は桃色味を帯びる
H−310	SK111	−	−	−	−	r	b	d−b	ヨコナデ	研磨	
H−311	SK110	−	−	7.6	1.3	s−r	b	d−b	ヨコナデ	やや雑な研磨	
H−312	Ⅲb層	−	−	8.1	0.9	s−r	g	d−b	ヨコナデ。板目圧痕あり	丁寧な研磨	
H−313	Ⅲa層	−	−	−	−	a	g	o	ヨコナデ	研磨	
H−314	Ⅱ層	−	−	5.8	1.2	s−r	g	d−o		研磨	体部外面の調整はやや粗
H−315	Ⅲa層	−	−	5.5	0.5	s−r	c	d−b	ヨコナデ	丁寧な研磨	
H−316	SD102	−	−	−	−	a	c	d−b	ナデ	研磨	
H−317	Ⅲa層	−	−	6.5	0.3	a	c	q−b	ヨコナデ後ナデ	丁寧な研磨	底部外面にスス付着
H−318	Ⅲa層	−	−	6.5	0.5	s−r	c	q−b	ヨコナデ	研磨	
H−319	SB103	−	−	8.2	0.6	a	g	d−b	ナデ	研磨	
H−320	SB103	−	−	6.3	0.5	s−r	c	d−b	ヨコナデ後ナデ	丁寧な研磨	
H−321	Ⅲb層	−	−	6.2	−	s−r	c	d−b	ヨコナデ後ナデ	研磨	
H−322	Ⅲa層	−	−	6.5	−	a	g	d−b	ヨコナデ	研磨	

第25表　内黒土器一覧表

(5)墨書土器（第40図）

口縁部の一部が残る。復元口径は10.9cmで、口縁部がわずかに内傾する。赤色顔料が塗られている。体部外面に墨書があり、一部、「山」と判読来る。



第40図　墨書土器実測図

(6)甕・鉢・高杯（第41・42図，第26表）

Ⅶ層（329・332・334・339）・Ⅵ層（324・328）Ⅴ層337）・ＳＢ102・326・330）・ＳＤ105（325・335・336）・ＳＫ111（327・331・341）・Ⅲａ層（333・340）から出土。

323〜329は甕の口縁部である。323は器壁が厚く、口唇部近くでわずかに外傾し、口唇部は平坦になる。324〜330の口縁部は外反し、口唇部は丸い。口頸部は「く」の字形をなす。

331は鉢で、口唇部は短く外反する。胴部下半は、外面に格子タタキ目、内面にヘラ削りが施される。また胴部内面上位には粘土紐の境が２ケ所認められる。

332・333は高杯で331の体部は微かに丸味をもって開くと思われる。脚部は緩やかに開いている。333は体部がわずかに丸味をおびて開き、口縁部との境は段をなす。口縁部は外傾気味に開く。334は高杯の脚部と思われる。

335〜339は甕である。335・336は直線的にのびた口縁部が端部でさらに外傾し、口唇部は丸く収まる。337は外傾ぎみの口縁部である。338･339は膨らみをもつ胴部が、短く外反する口縁部へ連なる。口唇部は、338は平坦に339は丸く収まる。

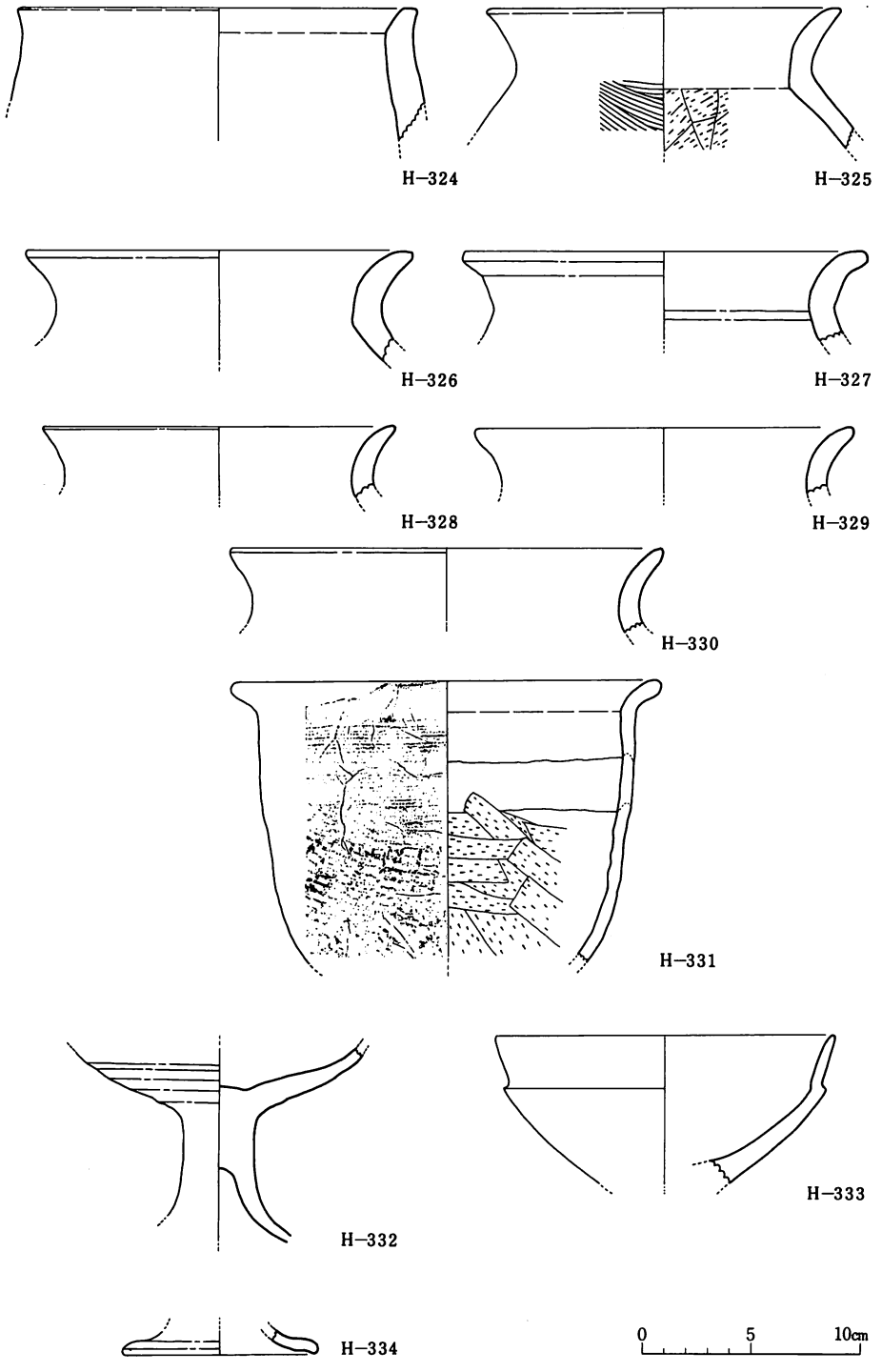
340・341は鉢である。340は、口縁部は短く比較的大きく外傾し、口唇部はやや角ばる。341は口縁部と胴部との境が不明瞭で、口唇部ちかくでわずかに外傾し、口唇部は平坦となる。また外面は調整により波状を呈する。

(7)糸切り底土師器（第43図・第27表）

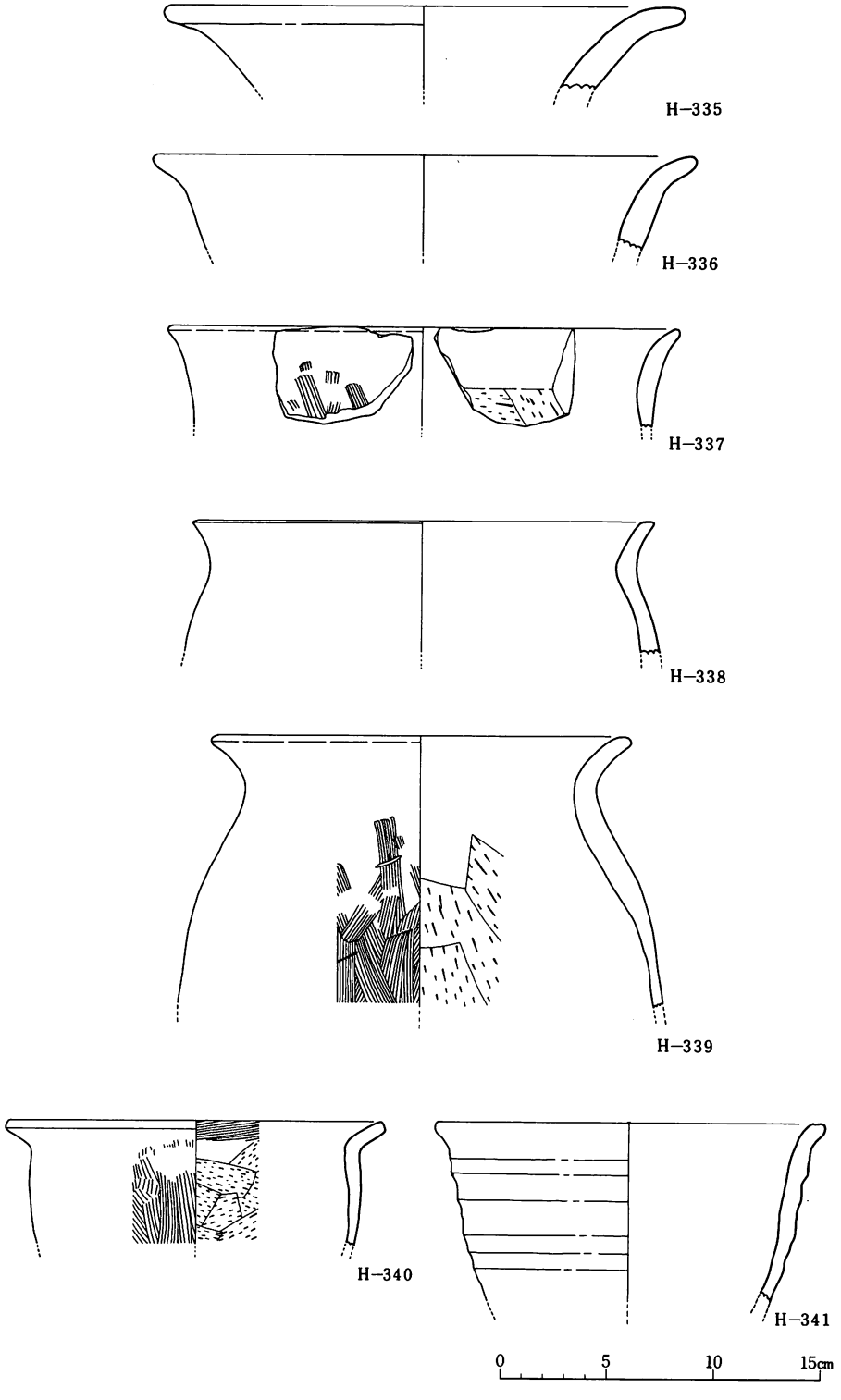
342・343は小皿である。体部は比較的、単純に上外方にのびる。342はＳＫ115・343はＳＫ113から出土。344は杯の底部である。ＳＫ115から出土。

実測図No.	出土位置	口径	器高	現存高	胎土	焼成	胎土	器面調整				備考
								口縁部外面	口縁部内面	胴部外面	胴部内面	
H−324	Ⅵ層	18.3	—	6.0	s−r	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	甕
H−325	ＳＤ105	16.3	—	6.4	s−r	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ目	ヘラケズリ	甕
H−326	ＳＢ102	17.8	—	4.9	r	g	d−b	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ（不明瞭）	甕。版築土(最上層)
H−327	ＳＫ111	18.7	—	4.1	s−r	g	d−o	ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ	浅いハケ目	ヘラケズリ（不明瞭）	甕
H−328	Ⅵ層	16.3	—	3.2	a	c	d−o	ヨコナデ	ナデ			甕
H−329	Ⅶ層	17.5	—	3.0	r	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ			甕
H−330	ＳＢ102	18.1	—	3.8	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ			甕。版築土
H−331	ＳＫ111	19.8	—	12.8	s−r	c	d−b	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ後ハケ目格子多キ目	ヨコナデ　ヘラケズリ	鉢。外面にスス付着
H−332	Ⅶ層	—	—	8.9	a	g	l−o			ヘラケズリ後ヨコナデ。脚部ナデ	ヨコナデ　脚部ナデ	高杯
H−333	Ⅲａ層	15.7	—	6.7	a	g	d−o	ヘラ研磨	ヘラ研磨	ナデ	ヘラケズリ	高杯
H−334	Ⅶ層	底径9.1	—	1.1	a	g	d−o			底部ナデ	底部ナデ	高杯
H−335	ＳＤ105	22.7	—	3.8	r	c	b	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ（不明瞭）	甕。外面にスス付着
H−336	ＳＤ105	24 8	—	4.5	r	c	r−b	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ（不明瞭）	甕。外面にスス付着
H−337	Ⅴ層	22.3	—	4.5	s−r	g	o	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ後浅いハケ目	ヘラケズリ	甕
H−338	ＳＫ114	21.9	—	6.1	a	g	d−o	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	甕
H−339	Ⅶ層	19.9	—	12.6	s−r	q	d−b	ヨコナデ	浅いハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ。ハケ目	ヘラケズリ	甕
H−340	Ⅲａ層	17.5	—	5.8	a	c	d−o	ヨコナデ	ハケ目	ヨコナデ。ハケ目	ヘラケズリ	鉢。外面にスス付着
H−341	ＳＫ111	18.5	—	8.4	r	c	q−b	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	鉢。外面にスス付着

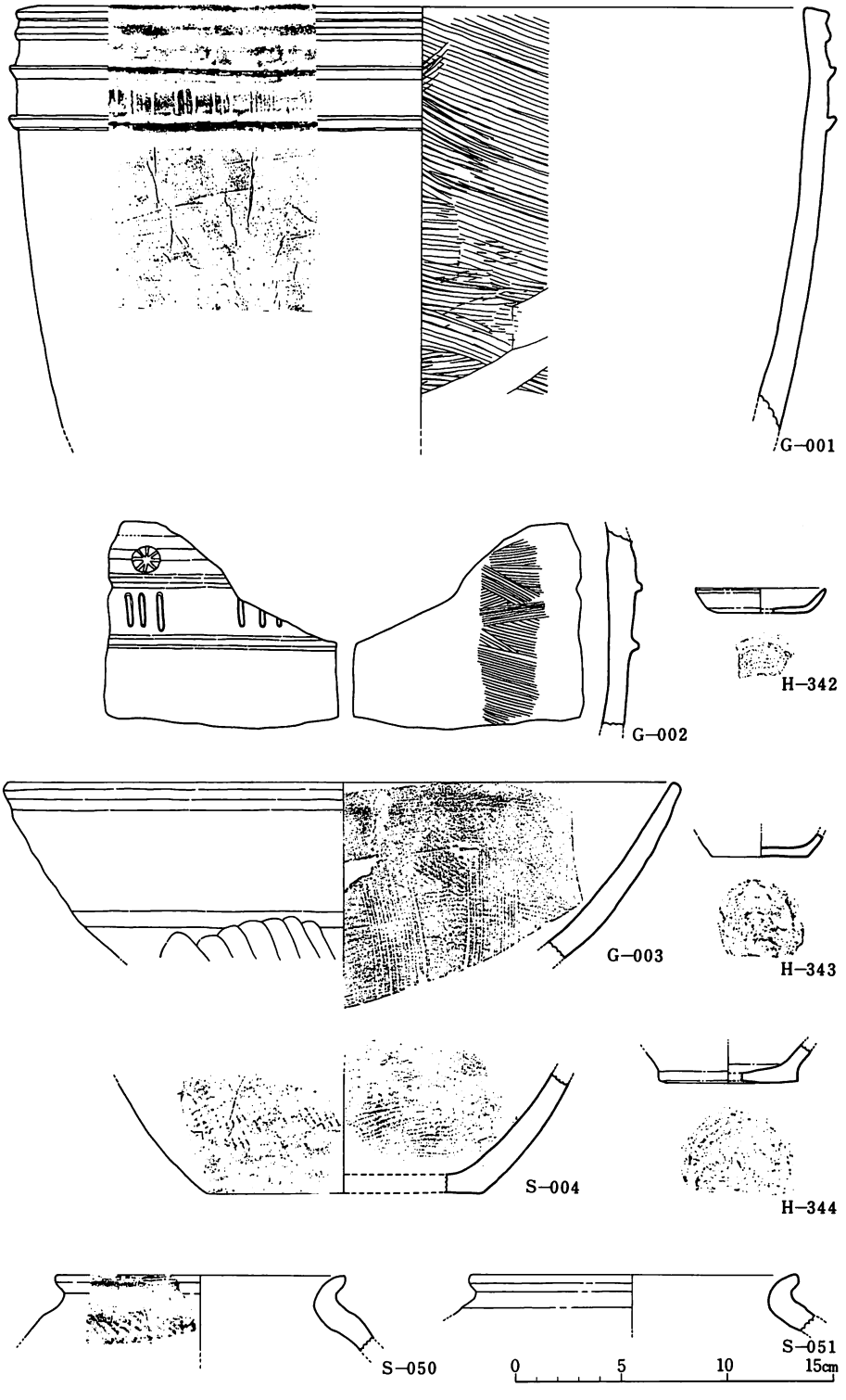
第26表　土師器（甕・鉢・高杯）一覧表



第41図　土師器（甕・鉢・高杯）実測図



第42図　土師器（甕・鉢）実測図



第43図　瓦質土器・須恵質土器・土師器実測図

実測図No.	出土位置	口径	器高	現存高	胎土	焼成	色調	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
G－001	SE101	38.5	－	19.7	s－r	c	g－b	ヨコナデ。胴部は磨いた痕跡がある。	ヨコナデ。口縁部は↗方向ハケ目後↖方向ハケ目。胴部は↖方向ハケ目	火舎。胴部上位に菊花文。平行三条文のスタンプ
G－002	SK113	－	－	10.1	a	c	d－b	ヨコナデ	ハケ目	火舎。胴部上位に菊花文・平行に三条文のスタンプ
G－003	SK113	32.1	－	8.2	r	c	g－w g－b	ナデ	ヨコナデ　溜いハケ目	擂鉢。鉢部外面下半に指頭圧痕あり
G－004	SK113		－	5.7	s－r	g	g			
S－050	SK113	13.6	－	2.6	a	g	g	ヨコナデ。格子多キ目	ハケ目	須恵質土器。甕
S－051	工事用側溝埋土	15.7	－	2.6	a	g	d－g	ヨコナデ。格子多キ目	ヨコナデ	須恵器。甕
H－342	SK115	6.1	1.1	－	a	g	d－b	のあと平行多キ目 ヨコナデ	ヨコナデ	須器器。甕
H－343	SK113		－	1.1	r	b	d－b	底部は糸切り 底部は糸切り	ヨコナデ	土師器小皿。口縁部内外面に微量のスス付着
H－344	SK115		－	1.8	s－r	c	d－o	底部は糸切り　調整はヤスリ	ナデ	土師器小皿

第27表　瓦質土器・須恵質土器・土師器一覧表

5　瓦質土器・須恵質土器（第43図・第27表）

G－001は瓦質の火舎である。口唇部は平坦で断面三角形を呈す。口縁部外面に３条の貼付突帯をめぐらし、その間に上位に菊花文、下位に平行三条文のスタンプを連続して押している。ＳＥ101より出土。002は、001と同類の火舎である。ＳＫ110より出土。

003は、瓦質の擂鉢で体部はやや内彎しながら開き、丸味をおびた口唇部に至る。内面に８条を１単位とするクシ目が刻まれる。ＳＫ107より出土。

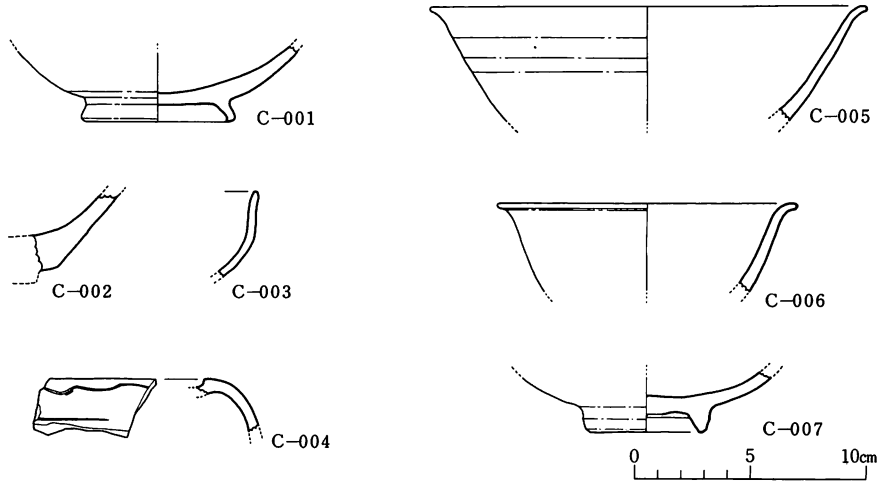
004は須恵質土器で甕の底部と思われる。ＳＫ113より出土。

6　陶磁器（第44図・第28表）

C－001は縁釉碗片である。高台は薄く短く外方に開いて、畳付きの近くで小さく内傾する。体部は緩かな丸味を持って立ち上がる。縁釉が畳付きまで施される。ＳＫ107より出土。

002は越州窯産と思われる碗片である。腰部はヘラ削りによって稜がつき、体部は直線的な立ち上がりを見せる。ＳＫ111より出土。

003は天目茶碗片である。口縁部のひねり返しがほとんどなく、浅くわずかに開くものと思われる。ＳＤ109から出土。



第44図　陶磁器実測図

実測図No.	出土位置	口径	底径	高台高	現存高	胎土	焼成	釉調	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
C－001	SK107	－	3.4	0.8	3.2	a	g	緑釉。高台間は露胎	ヨコナデ。体部はヘラケズリ	ヨコナデ	緑釉碗
C－002	SK111	－	－	－	－	a	g	浅黄色釉、うすい施釉である。			越州窯。見込みに目跡が認められる。
C－003	SD109	－	－	－	－	a	g	褐色の地釉に黒色釉がかかる。			天目。体部内面にわずかに白色の亀裂文が認められる。
C－004	SD101	－	－	－	－	s−r	c	屈曲部外面が黒褐色釉。他は褐釉			褐色。外面にヘラ描又様あり。
C－005	SK114	19.0	－	－	4.9	a	g	口縁部外面および体部下手内の外面は暗緑背色釉。他は緑色釉。うすい施釉である	ヨコナデ	ヨコナデ	青磁碗
C－006	SK111	13.1	－	－	3.8	s−r	g	半透明のやや濁った緑色釉。うすい施釉である	ヨコナデ	ヨコナデ	青磁碗
C－007	SE102	－	2.4	0.7	2.6	s−r	c	灰緑色釉	ヨコナデ。高台内はヘラケズリ	ヨコナデ	青磁碗

第28表　陶磁器一覧表

004は褐釉壺と思われる破片である。頸部から肩部にかけて一段を有し、肩の張った壺になるものと思われる。SD101より出土。

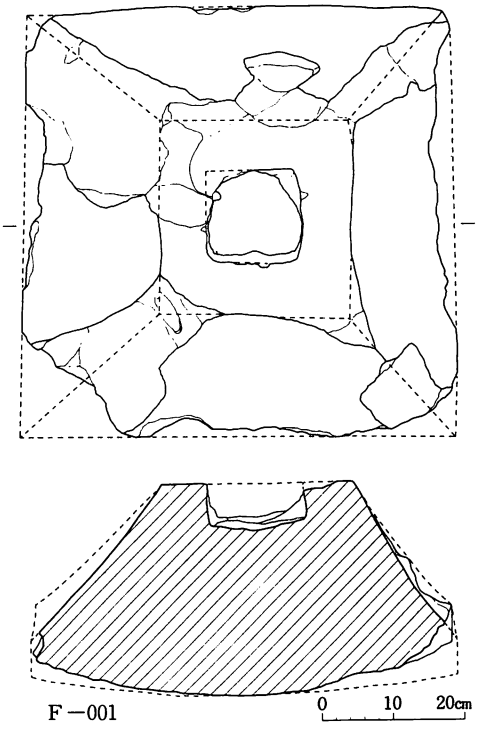
005～007は青磁無文碗片である。005・006は体部がやや内彎しながら立ち、口縁部は外反する。005はⅢa層・006はSK111より出土。

007は高台断面がほぼ三角形を呈し、体部は内彎気味に立ち上がるものと思われる。畳付きから高台内部は露胎である。SE102から出土。

7　金属製品・石製品・鞴羽口（第45・46図）

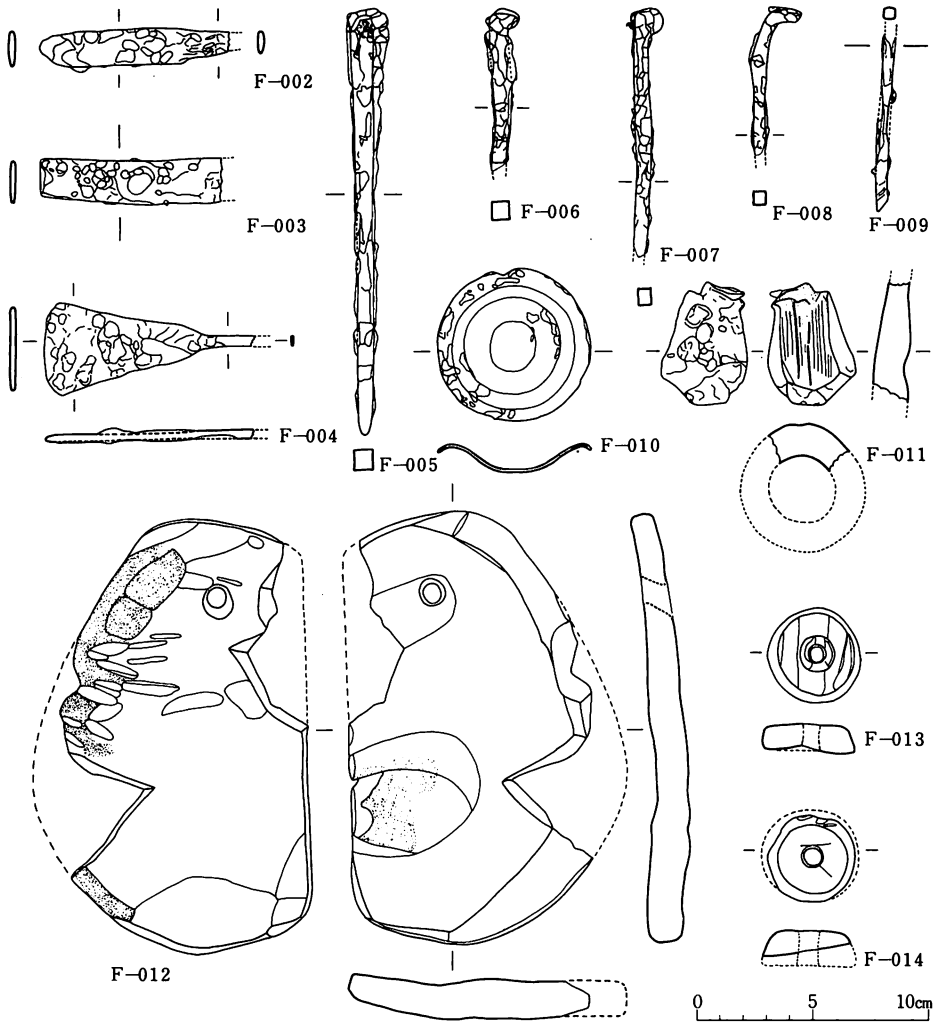
F－001は五輪塔の火輪である。凝灰岩製でSK113より出土。

F－002は鉄製刀子でVb層から出土した。茎尻を欠失し身長6.1cm・身幅1.5cm・身背厚さ0.25cmを測り、ふくらを有する。刃関である。F－003は鉄鎌でVb層から出土した。最大幅1.8cm・現存長8.0cmを測る。身幅は直線的で厚さ0.2cmを測り、刃部は若干の反りをもつ。F－004は鉄鏃でSD102の上位から出土した。平根式で、茎尻を欠失する。両削関で現存長9.1cm・身長6.3cm・身の最大幅3.9cm・茎幅0.5cm・厚さ0.2cmを測る。刃部先端は直線的ながら両隅は丸い。F－005～009は鉄製の角釘である。頭部は折り曲げている。005は完形で全長18.1cm、中央部で方0.9cmを測る。005・007・008は先端部を欠くが、中央付近で0.85×0.8cm・0.8×0.6cm・方0.6cmを測る。009は頭部を欠失するが中央付近で方0.5cmである。005・006・008・009はⅢa層、007はⅢb層から出土している。F－010は銅製品であるが、用途は不明である。全面に緑青がみられる。円形で断面は皿状を呈する。径6.6cm・器高1.3cmを測る。Va層から出土した。



第45図　五輪塔（火輪）実測図

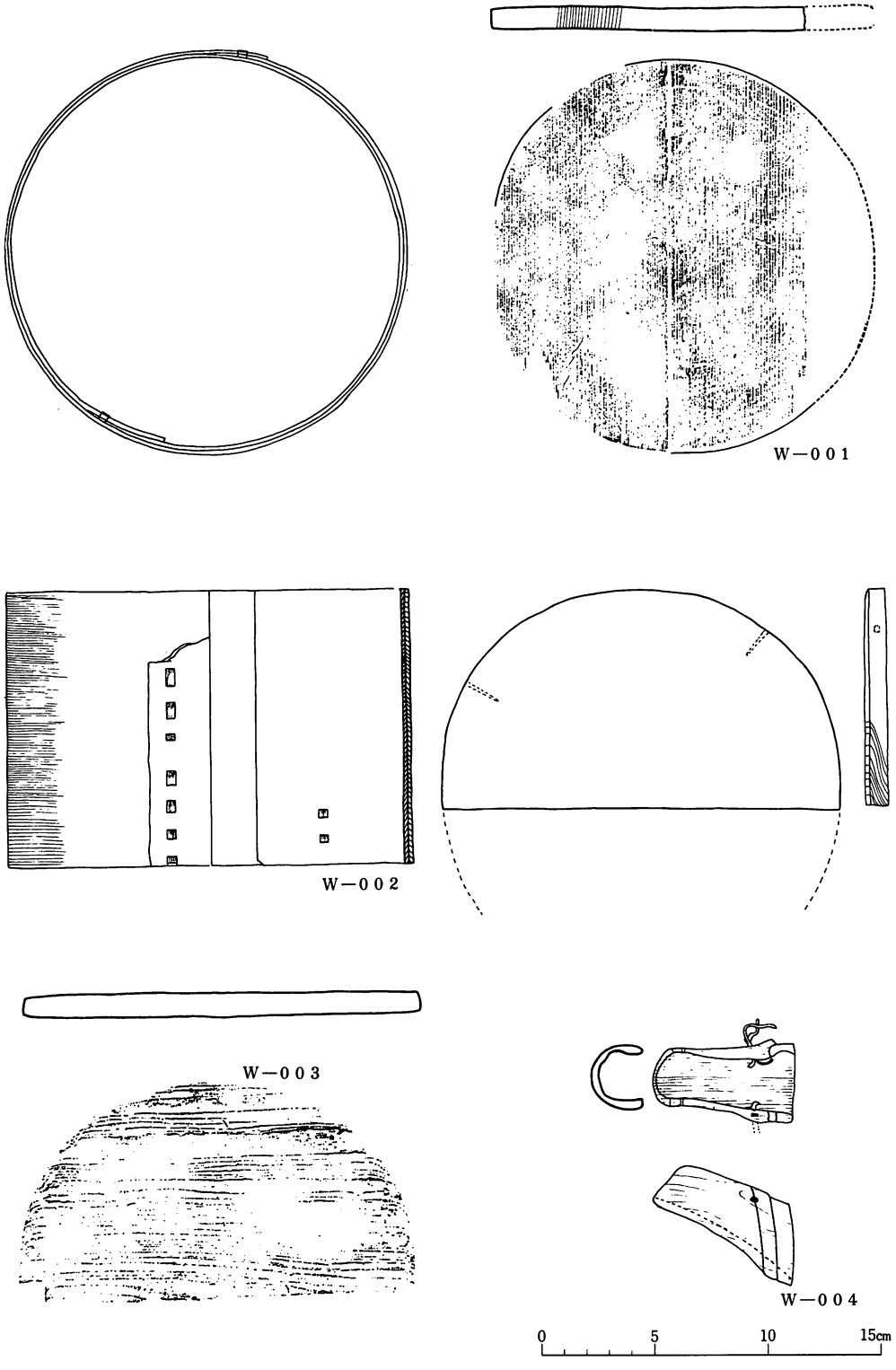
F－011は土製の鞴の羽口である。先端部の破片で、外径5.5cm以上・孔径2.8cmに復原され



第46図　金属製品・石製品・鞴羽口実測図

る。胎土は精良で外面に鉱滓が付着する。Ⅶ層中の炉跡（ＳＸ101）から約２ｍ離れた地点から出土した。

Ｆ−012・013は滑石製の紡維車である。截頭円錘形を呈し、012は下面の一部を欠失するが、最大径4.1cm・厚さ1.2cm・孔径0.75cmを測り、上面の孔の周囲に径1.55cmで沈線がめぐる。Ａ２区Ⅶ層中より出土した。013は下半を欠失するが、上面径約3.0cmを測る。 Ｃ８区の小土壙（ＳＫ116）より出土した。Ｆ−014はⅡ層中より出土した滑石製有孔円板である。一部を欠失するが、長径18.5cm・短径10.9cm（推定）・厚さ0.9cm〜1.6cm・孔径0.8cmを測る。形状は一辺が直線的な不整楕円形を呈し、縦断面・横断面はゆるやかに彎曲し、周縁の角は丸く仕上げられる。凹面は平滑で長径方向に細かな条痕が走り、凸面は短径方向に0.3〜0.5cm幅の加工痕がある。両面の一部に煤が付着し黒変している。



第47図　木製品実測図

8　木製品（第17図）

蓋付曲物（径５寸９分）

底板・本体・蓋板と三っにわかれ、底板はさらに二っにわかれている。

底板(W-001)は一部欠損しているが２枚に割れている。厚さ1.0cmで蓋板と同材質である。

本体(W-002)は柾目の剝板を利用しており、高さ12cm、径18.0cmである。つぎ目は約４cmを重さね、内側をうすくそいでいる。幅４mmの桜皮で縫いあわせてある。

蓋板(W-003)は、柾目の板を円形に切り、側板にはめこんだもので約半分が現存する。２ケ所に釘穴があるが釘は現存しない。周縁部をまるく縁どりしている。径17.8cm・厚さ1.0cmを測る。

片口注口部片（W-004）

木製の注口で、本体にさしこむようになっている。長さ6.3cm、最大幅3.6cm、注口部はＵ字型になっている。さし込み部は７mmで段差がつき固定しやすくなっている。又、上部２ケ所に穴があき幅２mmの桜皮で本体に固定したもので桜皮が残存する。先の曲物とは直接つながらないので別個体と考えられる。

註１　「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第１～第８集(下)　福岡県教育委員会

第Ⅶ章　総　　括

肥後国分僧寺跡の寺域は、熊本市出水町から水前寺一帯であるとの見方は衆目の一致するところである。考古学的見地からは、松本雅明氏の調査成果による伽藍配置図作成などがある。

今回の発掘調査は、寺域一帯に行なわれる熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業の本格的始動を発起とする。

①　遺構について

発掘調査によって検出し得た国分寺に直接関係すると見られる遺構は、４期に分けることができる。Ⅰ期は８世紀中頃の創建期の方形掘り込み地業を有する基壇が造られ、周辺に第１次整地がなされる時期である。Ⅱ期は創建時の基壇の北側半分を壊してＳＤ105が掘られる時期である。Ⅲ期は全面的な第２次の整地作業が行なわれ、回廊の版築基壇の可能性のあるＳＢ103が築成される時期で、９世紀代と推定される。Ⅳ期はⅢ期の基壇を壊して土壙群が形成され、その後第3次の整地が行なわれる10世紀以降と考えられる。

調査区からはこのほかに、国分僧寺築造前の遺構として６世紀後半代の炉跡や７世紀後半代のものと推察される住居址の一部を検出した。さらに室町時代と推察される大きな土壙と素掘りの井戸を検出した。

②遺物について

創建期の瓦については、従来から言われている複弁８弁軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦がセットをなすことは間違いなく、今回もこれに先行すると考えられる瓦の出土はなかった。後続するものとして軒丸瓦３種、軒平瓦８種が新しく発見された。寺域外の宮園遺跡から出土した瓦も加えると軒丸瓦16種、軒平瓦22種があることが判明した。

文様については、創建期軒丸瓦の複弁から単弁→不整な素弁と変遷し、同時に蓮子や珠文が省略されていく傾向をたどる。また、軒平瓦も均正唐草文から次第に偏行唐草文→半截花文→幾何学文に変遷し、全体が小型化していく。このことは、国分寺の存続期間が長期に亘ることを意味しているものと考えられる。

瓦はこのほかにも、鬼瓦・面戸瓦・熨斗瓦などが出土した。小片ではあったが塼の出土もみた。

土師器については、今後の調査の指標となるべく、形態と法量の面からの分類を試みたが、完形品が少なかったことと、良好な状態を保つ遺構からの出土が少なかったことから、編年までには至らなかった。

遺物はこのほかに縄文晩期の土器片や弥生中期の須玖式甕棺片が出土した。また、有孔円板・紡錘車などの石製品や刀子・鎌・鏃・釘などの金属製品および鞴羽口の出土をみた。

下って、室町時代にみられる土壙内からは火舎・擂鉢などの中世陶器をはじめ、五輪塔（火輪）が出土したほか、井戸からも火舎および曲物類の木製品が出土した。中世の遺物に関しては、現国分寺境内にある板碑群と関連あるものと思われる。

③ 最後に

調査区は、今日、道路に面した市街地の一角であり、旧状況は宅地と公的機関の建造物が立ち並んでいた所である。

「かつては一面の桑畑で、調査区周辺には布目瓦がうず高く積まれて小山をなしていた。」という古老の言葉が信じ難い程の変貌である。したがって、たとえ肥後国分僧寺跡の中心部に近い寺域内とはいえ、地下の遺構は壊滅的な破壊を受けているのではないかと危惧した面もあったが、結果的には、予想以上に遺構の残存度合いが良好で、5か月間に亘る発掘調査で大きな成果を得ることができた。

したがって、今後、寺域で予定されている発掘調査の成果も大いに期待されよう。

文献目録

国分寺に関する文献は次のとおりである。

①小田富士雄　「九州における大宰府系古瓦の展開(1)～(4)」九州考古学1・2・5・6・13　九州考古学会　1957～61

②松本雅明　「九州の古瓦一飛鳥から江戸初期まで」　熊本日日新聞社　1965

③九州歴史資料館　「九州の古瓦と寺院」　九州歴史資料館　1974

④下林繁夫　「熊本県下における古代礎石と古瓦」　熊本史蹟調査報告第3冊　1925

⑤松本雅明　『熊本県史』総説編　1965

⑥菊川末熊　熊本県史蹟調査報告第1冊　1918

⑦江上敏勝　「熊本県八代地方における古代中世の寺院址」　『歴史考古』15号　1967

⑧松本雅明　「肥後国分寺の講堂」　夜豆志呂23・24号　八代史談会　1972

⑨坂本経堯　「肥後国分寺」『国分寺の研究』　下　1938

⑩高野啓一　「肥後国分寺塔跡」　日本考古学年報24（1971年版）　〔A〕　日本考古学協会

⑪平野流香　『肥後史談』　1927

⑫松本雅明　「肥後の国分寺の復元」　日本談義341号　日本談義社　1972

⑬田辺哲夫　「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」　熊本史学10号　熊本史学会　1956

⑭三輪嘉六　『国分寺』　日本の美術　No.171　至文堂1980

⑮北嶋雪山　『国郡一統志』　1669

⑯「興善寺志水遺跡」　『興善寺Ⅱ』　八代市興善寺町所在遺跡の調査　熊本県教育委員会　1980

⑰松本雅明　「興善寺廃寺調査報告」　熊本県教育委員会　1961

⑱「高山瓦窯跡」『生産遺跡基本報告書Ⅱ』　熊本県教育委員会　1980

⑲松本雅明　「田島廃寺調査報告」　泗水町教育委員会　1972

⑳「富合平原窯跡」『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』　熊本県教育委員会　1980

㉑三島　格　「楳谷寺・神園山瓦窯址」『熊本市東部地区文化財調査報告』　熊本市教育委員会　1973

㉒佐原真　「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻２号　日本考古学会　1972
㉓乙益重隆　「浄水寺廃寺」　熊本県文化財調査報告第３集　熊本県教育委員会　1967
㉔八木田政名　『新撰事遺通考』　1841
㉕松本雅明　「陳内廃寺」『城南町史』城南町　1965
㉖松本雅明　「池辺寺考」『熊本史学』17号熊本史学会　1959
㉗乙益重隆　「池辺寺廃寺址」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1969

（付論）　文献よりみた肥後国分寺の推移

熊本市立高校教論　**阿蘇品保夫**

天平13年(741)、聖武天皇の勅願によって諸国に置かれた国分寺、国分尼寺は、七重塔を有する伽藍と僧20人尼10人を擁して三綱が寺内を統率し、10町ずつの寺田を有し、国の正税より法会経費を負担する官寺であった。従って、国分寺、国分尼寺は国府との所縁で、その近隣に位置する場合が多く、今日もその遺跡を残すものが少なくないが、平安中期以降は律令制の衰退に伴って国家の保護を失い、廃絶、若しくは新興諸宗に改められたり、神社の宮寺となったりしたとされている。

肥後国における国分寺の文献上からの考察が本論の目的であるが、これについて最もまとまった所説は、『新撰事蹟通考』をまとめた八木田政名が同書の「編年考徴」において述べる次の内容である。

「肥後ノ国分寺ハ詫摩郡今村ニアリ日本霊異記ニモ為在詫摩郡、応仁文明ノ間、兵火ニ罹テ久ク廃跡トナリシヲ、享禄中、河尻大慈寺五十世ノ住職天佐忍和尚一宇ヲ建テ、其跡ヲ残シ、貞享中、大慈寺ノ僧実堂玄理ト云者、仏殿ヲ造立ス寺記、寺ノ左後四十歩許ノ畠中ニ大ナル石アリ、柱居ヲ彫、所謂層塔軸柱ノ礎ナルヘシ、又近傍ノ林中及畠等ニ古瓦出ツ、今世ニ国分寺瓦ト称テ好古ノ徒翫之、国分尼寺ノ遺跡分明ナラス」

肥後の国分寺が詫摩郡に所在していたことは、『日本霊異記』の「産生肉団之作女子修善化人縁第十九」の中に

「時ニ託磨ノ郡之国分寺ノ僧」

が豊福生れの異形の尼を嫌って悪口したので、神人におどされて死去したという説話により知ることができる。

ところでこの『新撰事蹟通考』は天保12年（1842）に成立したものであるが、その前半の部分は、明和９年（1772）に成立した『肥後国誌』に載せられていて、典拠となった寺記がこの段階以前に成立していることを示している。

更にさかのぼるなら、宝永６年（1709）に成立している。『肥後地誌略』では、

「応仁文明之比兵火に罹りて廃跡と成りしを、享禄年中大慈寺の僧一宇を建て、纔に跡を残す」

元禄２年（1689）頃の成立とみられる『肥後名勝略記』では、

「享禄年中、川尻大慈寺派の僧、当寺の廃壊を嘆き、一宇を立て、国分寺の跡を遺せり」

と述べる部分が、江戸時代前期にさかのぼる国分寺に関する伝承の最も古い部分であり、廃絶した国分寺を再興した大慈寺系の同寺が伝える伝承の根幹であったと考えられる。

寛文７年（1667）成立の『国郡一統志』は、古代国分寺についての史料を引用し、今村に国

分寺が所在することだけを記していることからも、寺記や寺記のもととなった伝承内容が他に知られるようになるのは寛文年間より後のことであろう。

江戸時代の同寺は、1石6斗の寺領を認められていることが『肥州録』に記されている。同書第三十四、「寺領之事」の中に載せられている諸寺の中では最少の部類であるが、藩ではその名跡が他宗による再興のものとはいえ、国分寺の由緒を評価してのことであったということができよう。この『肥州録』の内容も宝永頃までの内容を示すとみられる。

ところで、江戸時代を越える中世肥後国分寺についての確実な史料は、詫摩文書（大分県史料）所収の「国内荘々名々坪付注文」（以下「名々坪付注文」と略す）1点のみであり、しかも、その中の1行のみであるが、史料検討のために全文を挙げよう。

国内郡郡之内郷郷之内庄　庄内名

一、詫摩西郷庄

新庄　神蔵庄内田数七百十六町五段

国分　得永　寺　重富　三郎丸　岩永　小枝吉　得丸　平丸　清永　福永　松石　光吉

今牛　石丸　金光　弥石　石丸弥石　石丸　石丸内石能　石丸内石安　枝吉　千見　清松

春武　与安（松）　弘納　国武

以上廿八名也

本庄　安富庄田数百五拾九町八反

安弘名　久吉名　枝吉名

以上三ケ所也

八王寺庄　三十八丁

一、詫摩東郷

健軍宮　二百三拾丁五段

四至内　廿丁

本不輸　拾八丁

神宮寺　五拾丁

片寄　百四拾弐丁五段本家源少将入道預所北条殿

一　国分寺干寺（ママ）領五十余町神蔵庄被押領了（カ）

六ケ庄　三百四十丁二反

（略）

神蔵庄

本家　最勝光院

領家　浄土寺大納言法印御房

預所　出雲左近将監重兼名田八十丁

下司　掃部頭殿　並木・永富・鳥栖三ケ所名田八十余丁

惣公文　川尻三郎源実明兼名田五十一丁

惣別当　小国十郎安高兼名田五十余丁

ここで「国分寺干寺領」の「干」は「于」の原本誤記、又は「尼」と同音として通じるので、「国分干(于)寺領」　又は「国分寺干(尼)寺領」と理解したい。

この国分寺・尼寺領50余町はどのようにして生じ、「神蔵庄被押領候」というこの「名々坪付注文」の時代はいつのことになるのであろうか。まず古代以末の国分両寺の経営についての要点理解からはじめよう。

『続日本紀』は、天平13年(741)国分両寺の建立を詔して、七重塔の建立、諸経の整備を定め

「又毎国僧寺　施封五十戸、水田十町　尼寺　水田十町、僧寺必令有二十僧、（略）尼寺一十尼」

として、毎月八日の最勝王経の読経を義務付けているが、天平神護２年(766)の太政官符は、

「国分二寺田者、国司佃收以実入寺下符已畢、自今以後宜付三綱耕営、又聞彼田或悪徒費佃功得実甚少、如是悪田宜改易便以乗田及没官田随近沃美者永奉三宝之用」

と、それまで国司が経営代行して寺に渡していた寺田の收入を、以後は田地そのものも寺の役僧である三綱の手に移し、直接耕営・賃貸による寺田收入の増加をはかったのであり、又　耕営収取に便利な寺院所在地に近い美田を与えて、永く寺用として存続させることを命じたのであった。これによって良田20町が国分両寺の近隣に選定されたであろうが、肥後の場合は、国分寺の所在地の詫摩郡であったことが「名々坪付注文」からも察せられるのである。しかし、両寺の田地20町が「名々坪付注文」の50余町となっている事情はいかなるものであったか。

律令制下の各国の国司が、例年中央に報告する年間決算報告書である正税帳の中には、国分両寺に関する諸項目が正税である租稲の束數に換算されて報告されねばならなかった。その内容は次の通りである。

①修理国分寺料　②最勝王経転読布施　③吉祥悔過法布施　④安居布施　⑤転読金剛般若経布施　⑥講師年中供養布施　⑦春秋釈奠先聖先師供養布施

⑧その他　(イ)寺家封戸（国分寺分50戸含む）(ロ)新任講師の場合の単料（法服）

これらは『延喜式』に具体的な内容が示されるが、繁雑であるので、簡単な一例として正月８日から14日にかけて行われる②の最勝王経転読会の布施の内容は次の通りである。

「其布施、三宝絲卅斤、僧尼各施一疋、綿一屯、布二端、定座沙弥尼各布二端」

すなわち、寺に絹糸卅斤、僧尼１人当り施（あしぎぬ）１疋、綿１屯　布２端、下級僧侶たち

も各1人につき布2端が与えられるが、国分両寺の僧尼は計30人、役僧らに所属する沙弥・童子などの下級僧侶や僧侶見習などの分をも含めるものであった。布施の内容はこれらにとどまらず、供養の性格に従って、米や雑菜等の食料にまで及んでいるが、律令政府は国単位に禄物価法を立てて稲との換算率を定め、現物の調進、中央政府への報告のための基準とした。たとえば、九州諸国では、絹1疋＝直稲80束、絲1絇＝10束、綿1屯＝6束、調布1端＝40束、庸布1段＝30束となっているので、これによって最勝王経転読供養の30人のみ僧尼に限って換算すれば、1人当り126束、30人で37束、これに寺への布施、下級僧侶への布施を加えると4000束を越える負担となったと解せられる。「延喜式」の「諸国出挙正税公解稲」の中では、肥後国は、

「肥後国正税公解各卅万束、国分寺料四万七千八百八十七束、文珠会料二千束（略）」

とあることと照合すれば、①～⑧の内容は大体首肯される数字であるといえよう。

ただし、このような支出も、律令制下の地方政治が一応機能している間は実施されたであろう。肥後国分寺跡の布目瓦は奈良～平安初期までの範囲で、三つの時代のものに分類されるというが、これが認められるならば、国衙による官寺としての国分寺の経営維持の努力が行われている証拠となるであろう。

しかし、平安中期以降の庄園の増加、公領の減少は、肥後国正税の1割を占める国分寺諸経費の負担にどこまで耐えることができたであろうか。加うるに、摂関政、院政と続く律令制の変質に伴う地方支配の弛緩、受領による正税請負と私的な収奪の強化が、国分寺の官寺本来の興行を存続させたとは思われないが、「国分寺尼寺領五十町」と記す、「名々坪付注文」の内容は、国衙政治の後退、国分寺保護の低下に対応した国分寺存続の方向を示している。

延暦2年(783)の太政官符は、国分寺20僧の定員欠員補充のために、

「宜当土僧之中擢堪為法師者補之」

と現地の僧侶の抜擢を認め、更に弘仁12年（821）の太政官符も、中央僧侶の地方国分寺赴任を好まず、法会僧員の不足を補うためにも

「当国百姓年紀六十巳上、心行既定始終無変者度之」

と民間の人物すら僧に採用することを認めるようになった。又、天長5年(828)の太政官符は大宰府の上申を認めて、欠員に備え、寺毎に25才以上の者5人を撰び、僧侶として育成することを認めるようになった。この結果は在庁や郡司らの地方有力者の子弟が僧侶として国分寺にも入寺する契機を生じたものと考えられ、官寺である国分寺も、地方の一般の社寺同様、その地域の有力者の族縁に結びついた僧侶で寺内が構成されるようになったと思われる。又、このような人間関係が一方では国分寺を国衙や地方郡司らと結びつけ、存続させる力となったものであろうが、そのような私的な権利や関係が従来の機構の存続と結びついたのが平安中期以降の律令制の変質期に発生するのである。

国衙に頼るだけでは従来の収入は維持できないこと、国衙の従来同様の収入力が低下して来

ると、お互いに従来の権利と義務の関係を清算する場合が生じた。

「名々坪付注文」の中の詫摩東郷の健軍宮(健軍社領)は、四至領、本不輸領、神宮寺領、片寄領より成り、持に全社領の3分の2近い田地を占める「片寄百四拾二町」と記されている部分は、阿蘇文書、建久6年の「肥後国司庁宣」及び「甲佐社領文書案」によれば、阿蘇社、甲佐社の神田と共に、国衙から給付されていた神用米を停止する代りに、これに相当する神田半分を片寄せ、三社の各々の神田として認め、神領として各社が直接支配收取することにして国衙との関係を解消したのであった。このようにして、国衙は神用米の義務を免れ、三社は固定した神領の支配権を入手したのであった。これと同じように国衙が国分寺の年間諸祭料・供養料の負担・調達に苦労したであろうことは推測できるところであり、正税からの支出に代えて具体的な田地を指定し、更にはその土地を国分両寺領として与える形で解決された結果が、本来の寺田20町よりも多い50余町という寺領面積となったものということができよう。そのような取りはからいが円滑に行われた背景には、国分寺が中央の社寺権門の支配下に入り、その権威で国衙が動かされた場合か、国分寺の僧侶と在庁役人や郡司の人脈・族縁から解決されたかのいずれかであろうが、後に国分寺が神蔵庄に押領されているところからすれば、国寺には背後にこれを保護する権威がなかったのではないか、即ち後者の場合と考えられる。

次に「国分寺尼寺五十余町」に続く「神蔵庄被押領了」という語句であるが、これは、国分両寺領五十余町は、神蔵庄に押領されたのか、神蔵庄を押領して成立したのかという解釈上の問題が解決されねばならない。

この「名々坪付注文」の史料全体の表現の仕方から判断して、その項目は、庄名、田積、注記の順の三段階の表現が行われ、国分寺の場合でも、これに準じて、国分寺子寺領（庄名）、五十余丁（田積）、神蔵庄被押領了（注記）の順に記載されているとみてよい。又、同史料の構成は、詫摩西郷、詫摩東郷、国分両寺、六ケ庄、神蔵庄領主庄官一覧と5項目に分類されるが、第5項の領主庄官は別種として　残る四項は庄園、社寺領についての記載である。この四項は更に検討すると一ツ書きで三つに分れるので、整理するならば、詫摩西郷、詫摩東郷、その他（国分両寺、六ケ庄）に分れると解釈できる。

なぜ国分両寺と六ケ庄を別項として立てているのか、両者とも、詫摩東西郷のいずれかのうちに所属させてしまえない事情があるからであろう。六ケ庄は、その名の通り一円の庄園でなく六ケ所に庄領が散在し、他郡にもある故に詫摩郡内だけの問題でないとして別記させねばならなかったとみられ、国分両寺領はまず寺社領として郡内でも庄領とは支配が異なる故に、或は両郷に寺領がまたがる故に別記されたとみられる。若し詫摩西郷の神蔵庄の一部を奪って寺領を立てているなら国分寺尼寺領　西郷内に何町と注記されてしかるべきである。

この史料が詫摩郡における庄園・公領・寺社領を記入しているのは、建久の図田帳を下敷きにして記載している故だと考えられる。鎌倉時代には各国への諸賦役が、この図田帳の公田を

基準として賦課されていた故に、現実は相違していても、図田帳作製当時の田積に応じて、図田帳作製当時の所領を継承する者へ負担がかかったからに外ならない。国分寺国分尼寺領は鎌倉時代初め、図田帳が作製された時には、未だ独立していたのであったが、その後神蔵庄に押領されたとみるべきであろう。神蔵庄の名は、この「名々坪付注文」の段階では28名あるが、この内に「国分」「寺」の名がみられることは注目される。

「国分」は、国分寺所在地に近い故、或は国分寺にゆかりのある収取単位故の命名かも知れず「寺」も、この地においては国分寺を指す可能性はきわめて強いとみなければならない。そうでないとしても、神蔵庄の庄域は、国分寺の周辺を埋めているとみることができ、押領されやすい条件下にあったとみられる。ただ、神蔵庄方の詫摩文書が自己の非を認めるような「押領」の語を用いていることに疑点はあるが、詫摩氏は同庄内に地頭職・下司職・名主職は有していても、神蔵庄の所有者、即ち荘園領主ではなく、荘内の一庄官に過ぎなかったのである。所領の押領は鎌倉時代とはいえ、必ずしも地頭武士たちに限らず、条件次第では領家側が行ってもよいわけで、これを武家の詫摩氏が押領と文書の中で評価することも不可能ではない。

国分寺は一国の官寺としての地位は失われ一庄園の所領の中に埋没してしまったともいうこともできようが、江戸時代の伝承の応仁文明の戦火焼失まで堂塔が存続していたとするならばある意味では更に力を失った国分寺側が神蔵庄を頼った存続への道であったかも知れない。

以上、肥後の国分寺は、詫摩国府に近い所に創建され、その位置は移動していないものと考えられる。奈良、平安初期には官寺として存在したはずで、平安初期成立の「日本霊異記」の中に詫摩の国分寺の僧のことが示される。平安中期以降、国家の保護が衰える段階で、寺田や国衙の補助を50町余の寺領という形に替えて存続していたであろうことが鎌倉初期まで推定されることは詫摩文書の「国内荘々名々坪付注文」から読みとれるところであるが、その後、同史料の成立する鎌倉時代のうちに神蔵庄に押領吸収されたとみられる。しかし、どれだけかの堂塔、伽藍がなお存続した可能性はある。江戸時代前期の寺記にもとずく伝承は、室町時代の戦火による焼失、室町末戦国期の川尻大慈寺系禅宗僧侶による再建、江戸前期の再興を伝えているからである。

（付論）　国分僧寺出土木材

熊本大学教育学部助教授　**大迫　靖雄**

国分僧寺から出土した木製品のうち、ここで樹種鑑定を行った製品は、No.1ワッパ側板、No.2ワッパ底板、No.3うるし塗り物（箱物？）底板、No.4片口、No.5ヘラ状木製品である。

以上の出土物は前述したごとく、国分僧寺遺跡からの出土物であるが、No.1～4は上記国分僧寺内の井戸跡から出土したものである。これに対してNo.5は国分僧寺東限外郭線推定地（351地点）から出土している。これらの木製品はいずれも水中にあったため原型をとどめていた。しかしながら、老化は進んでおり、木色、香などによる特徴は明らかでない。そこで、いずれも顕微鏡による微視的観察によって鑑定を行った。結果は次の通りである。

No. 1　ワッパ側板

本出土物は厚さ約1.5mmの柾目板である。図1(a)は木口面を示す。下方が樹心、上方が樹皮方向である。早材から晩材への移行は急で、晩材中に黒色の内溶物を持つ樹脂細胞がみられる。図1(b)に示される柾目面から早材部は幅の広い仮道管を示し、大きな有縁壁孔の正面が数多くみられる。中央部にある放射組織は総べて柔組織で仮道管は存在しない。また、分野壁孔はスギ型で、一分野に2～3個存在する。図1(c)は板目面を示す。早材部で比較的大きな仮道管からなり、仮道管壁に多くの有縁壁孔の断面をみせている。放射組織の高さは1～14程度である。

以上の特徴から、本樹種はスギ(Cryptomeria　japonica　D. Don)と鑑定される。

No. 2　ワッパ底板

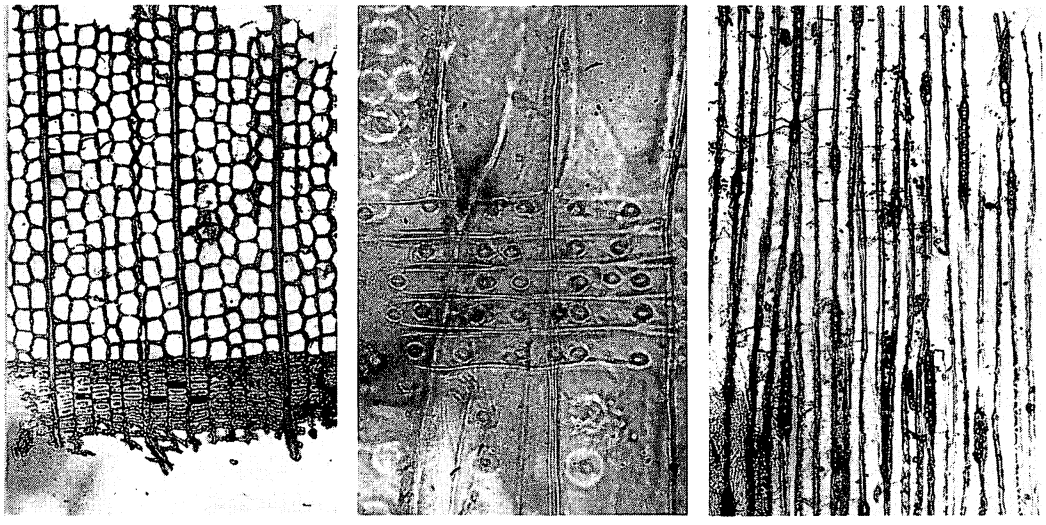
本出土物は板目板で使用されている。本製品は老化の激しい部分を試験片としたため、切片の作製が困難であった。図2(a)は木口面をあらわし、下方が樹心、上方が樹皮側となる。年輪界は比較的はっきりしており、晩材部に接線状に樹脂細胞がみられる。図2(b)は柾目面をあらわす。上、下に2本の放射組織が走っている。放射組織はすべて柔組織のみからなっており、分野壁孔はスギ型でほとんどの組織が一分野に2個存在するが、1個のものもある。早材部のため、仮道管は大きく、有縁壁孔が存在する。図3(c)は板目面をあらわす。左下に樹脂細胞がみられる。また、放射組織の他に仮道管壁に数多くの有縁壁孔の断面がみられる。

以上の結果から、本樹種はスギ(Cryptomeria　japonica　D. Don　)と鑑定される。

No. 3　うるし塗り物（箱物？）底板

本出土物は表面にうるしが塗られ、板目板として用いられている。図3(a)は木口面を示す。下方が樹心、上方が樹皮側を示す。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材幅は狭い。晩材部に接線状に樹脂細胞がみられる。図3(b)と(c)は柾目面を示す。図3(b)左側に晩材部がみられる。右側の早材部には大型の有縁壁孔の正面が多数みられる。また晩材部に樹脂細胞が存在するのがみられる。図3(b)・図3(c)とも、放射組織はすべて柔組織で放射仮道管は存在しない。

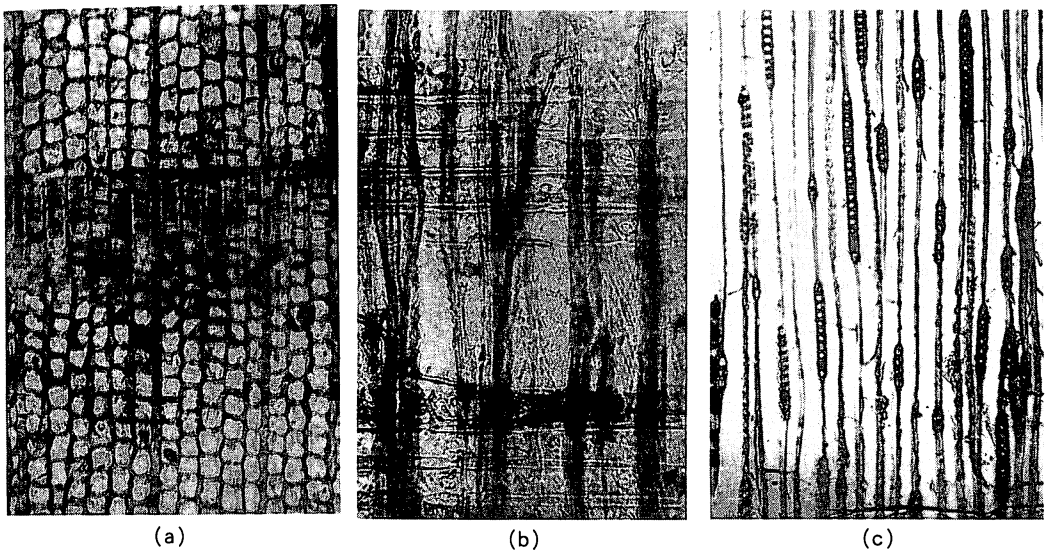
図１No１ワッパ側面



(a)　(b)　(c)

（a）木口面（X70）　（b）柾目面（X280）　（c）板目面（X70）

図２No２ワッパ底板



(a)　(b)　(c)

（a）木口面（X70）　（b）柾目面（X280）　（c）板目面（X70）

分野壁孔はヒノキ型をあらわし、その数はほとんど一分野に2個存在している。図3(d)は板目面をあらわす。黒い内溶物を含む3本のストランド状樹脂細胞がみられる。放射組織は単列で1～10組胞高を示している。また、本図は晩材部をあらわすため、接線壁に小型の有縁壁孔が存在することがみられる。

以上の特徴から、本樹種はヒノキ(Chanaecyparis obtusa Endl.)と鑑定される。

No. 4 片口

図4(a)に木口面を示す。下方が樹心、上方が樹皮側を示す。早材から晩材への移行は比較的急で、晩材部に多くの樹脂細胞が存在する。図4(b)は早材部の柾目面を示す。早材部の仮道管は大きく、大型の有縁壁孔の正面が数多くみられる。放射組織は柔組織のみからなり、放射仮道管は存在しない。分野壁孔はスギ型で、ほとんどの分野で一分野に2個の分野壁孔が含まれている。図4(c)は板目面を示す。右側に樹脂細胞がみられる。放射組織はほぼ1～10細胞高からなる。

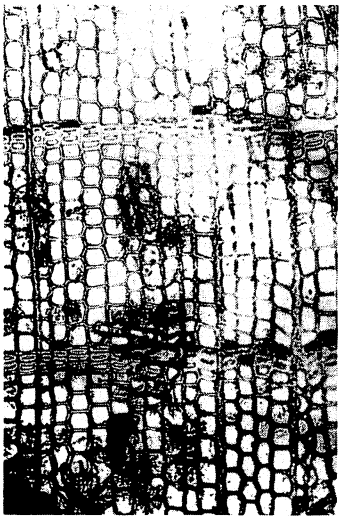
以上の特徴から、本樹種はスギ(Cryptomeria japonica D. Don)と鑑定される。

No. 5 ヘラ状木製品

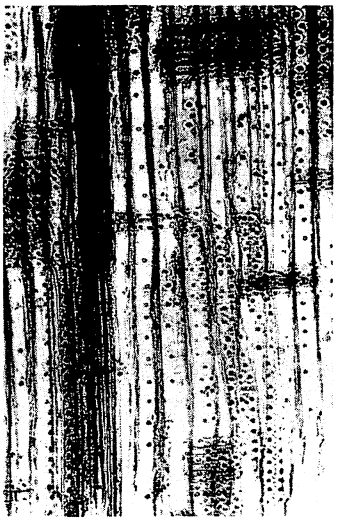
本試料は他の試料と異なった場所から出土したものであり、最も劣化が進んでいた。図5(a)は木口面を示す。下方が樹心、上方が樹皮側を示している。早材から晩材への移行はゆるやかで、樹脂細胞は年輪の中にほぼ平等に散在する。図5(b)に柾目面の早材部を示す。仮道管には多くの有縁壁孔の正面がみられるが、螺旋肥厚はみられない。放射組織は柔組織のみからなり、放射仮道管は存在しない。分野壁孔はヒノキで一分野に1～2個存在する。図5(c)は板目面を示す。柾目面でみられた有縁壁孔はほとんどみられない。樹脂細胞が多くみられる。放射組織はほぼ1～10細胞高からなりたつ。

以上の結果から、本樹種はイヌマキ(Podocarpus macroqhyllus D. Don)と鑑定される。

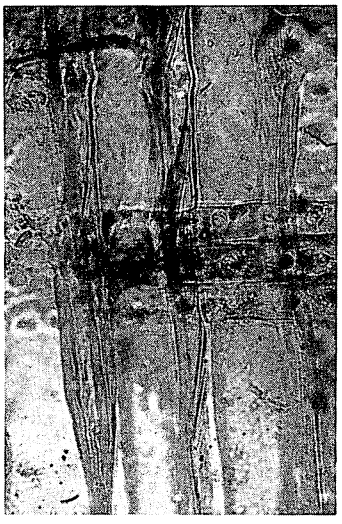
図3No3うるし塗り物（箱物？）底板



(a)



(b)



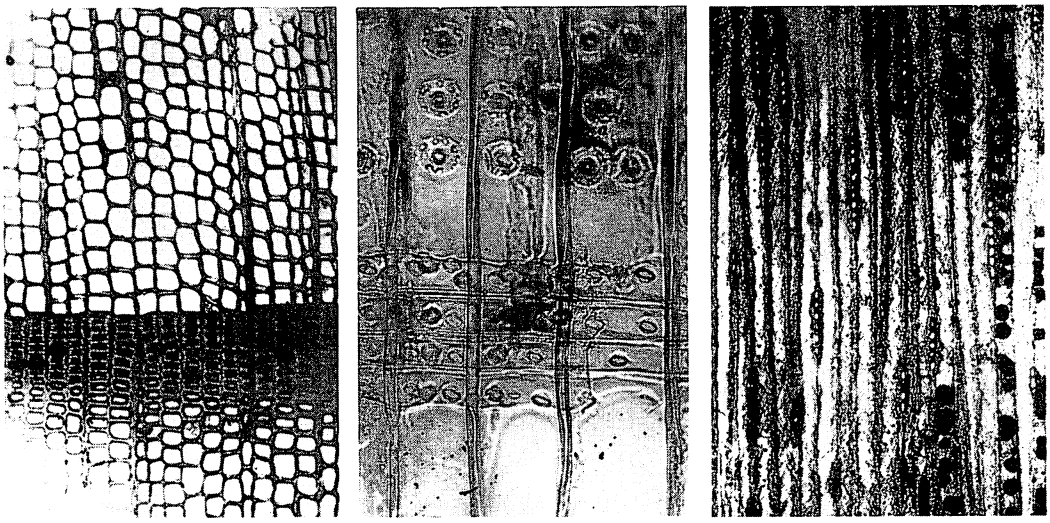
(c)

(d)

（a）木口面（X70）　（b）柾目面（270）

（c）柾目面（X280）　（d）柾目面（X70）

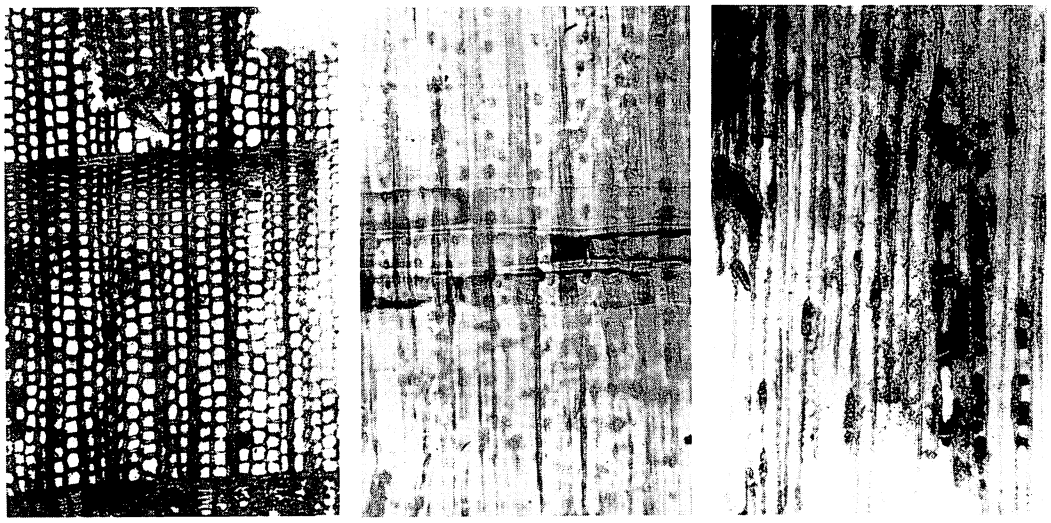
図4No　片口



(a)　(b)　(c)

(a) 木口面 (X70)　(b) 柾目面 (X280)　(c) 板目面 (X70)

図5No5ヘラ状木製品



(a)　(b)　(c)

(a) 木口面 (X70)　(b) 柾目面 (X280)　(c) 板目面 (X70)

水前寺地区土地区画整理事業に伴う試掘調査報告

目　　次

1．　351地点の試掘調査……廣　瀬　正　照
（国分僧寺東限外郭線推定地）

2．　281地点の試掘調査……平　岡　勝　昭

3．　283地点の試掘調査……鶴　嶋　俊　彦

国分僧寺東限外郭線推定地の試掘調査
(351地点)

廣　瀬　正　照

1.試掘調査の目的

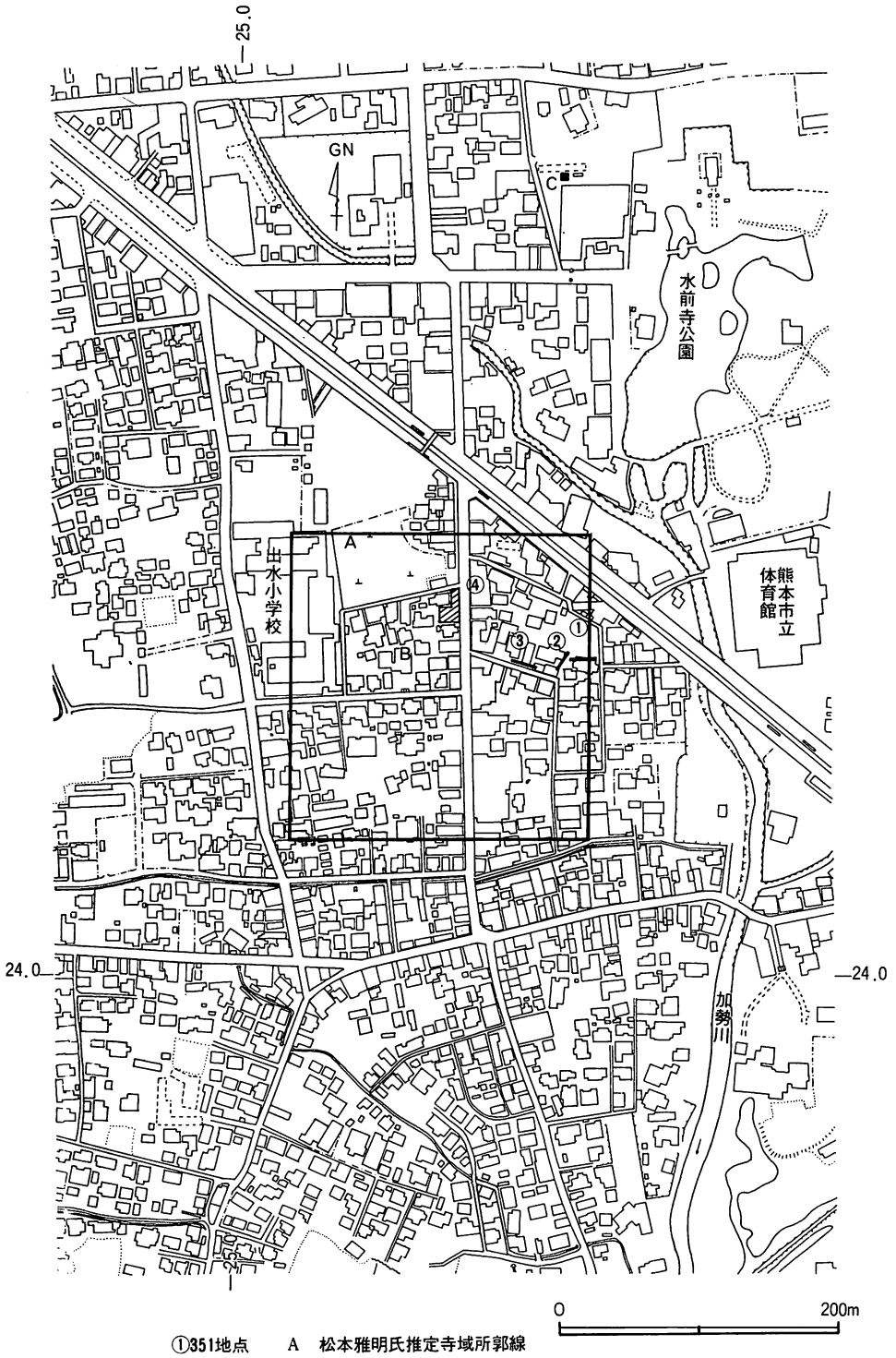
国分僧寺の寺域については、これまでにいくつかの推定がなされていた。それぞれの説については、坂本経堯氏[註1]や松本雅明氏[註2]が詳しく紹介されているので、ここでは簡単にしか触れないが、それ等の説の大凡は、寺域8町4方説と2町4方説の2つに分けられる。このうち8町説を述べられたのは菊川末熊氏[註3]である。その根拠としては、瓦の出土地点の広がりと地名を用いて推定されたものであった。それに対して寺域を2町4方と考えられたのは平野流香氏[註4]と松本雅明氏[註5]である。平野流香氏は菊川氏の方8町説は広過ぎるとして、方2町と推定されたのであるが、その根拠は菊川氏と同じく瓦の出土地点の分布であった。このようにこの二氏の説はいずれも遺構の確認はされずに推定されたものであったのに対して、松本雅明氏は国分僧寺の推定地に初めて発掘調査の手を加えられたのであった。その結果、塔心礎の旧位置が確認され、塔を囲む回廊跡や講堂跡らしい地点も認定され、それ等の所見から、九州では他に例を見ない特異な伽藍が復原された。そして、松本氏はその伽藍配置の上から寺域が2町4方であると推定された。ただし、その時の調査では、実際の寺域外郭線については全く調査の手が加えられなかった。

松本雅明氏の昭和46年の国分僧寺跡の発掘調査は、昭和50年4月にその成果が公刊されたが、それ以後は今回の調査に至るまで国分僧寺跡に調査の手が加えられた事はなく、国分寺については尼寺も含めて松本氏の説が半ば定説化した感があった。さらに、国分僧寺付近は早くから宅地化が進み、容易な事では調査が行えないという状況にあった。しかし、国分僧寺付近一帯が県の区画整理事業の対象となり住宅が移転し、道路等も改修される事になった。そうした状況下で、たまたま松本雅明氏の推定された寺域外郭線上にある住宅が移転する事になったため、今回の調査が行われる事になったのである。

2.試掘調査の状況

試掘調査の対象地は、熊本市出水1丁目5番15号の室原氏宅跡である。地番が351であるので351地点と名付けた。試掘日時は昭和56年5月27日、28日の両日である。

現地は建物の撤去後きれいに地均しされており試掘の障害になるようなものは何も無いように思われたので、試掘溝を数本入れるよう計画を立てた。それは、松本氏の推定線を正確に地図に落したものが公刊されておらず、現地では推定線の大凡の位置しかつかめないため、試掘溝を数多く設ける事によって、そのどれかが推定線に重なるようにするためである。ところが、いざ調査を始めようとした所、現地には建物こそ無くなったものの、地下に上水道管が縦横に走っている事がわかったのである。仕方がないので松本氏[註6]の報告に掲載されている地図を頼り



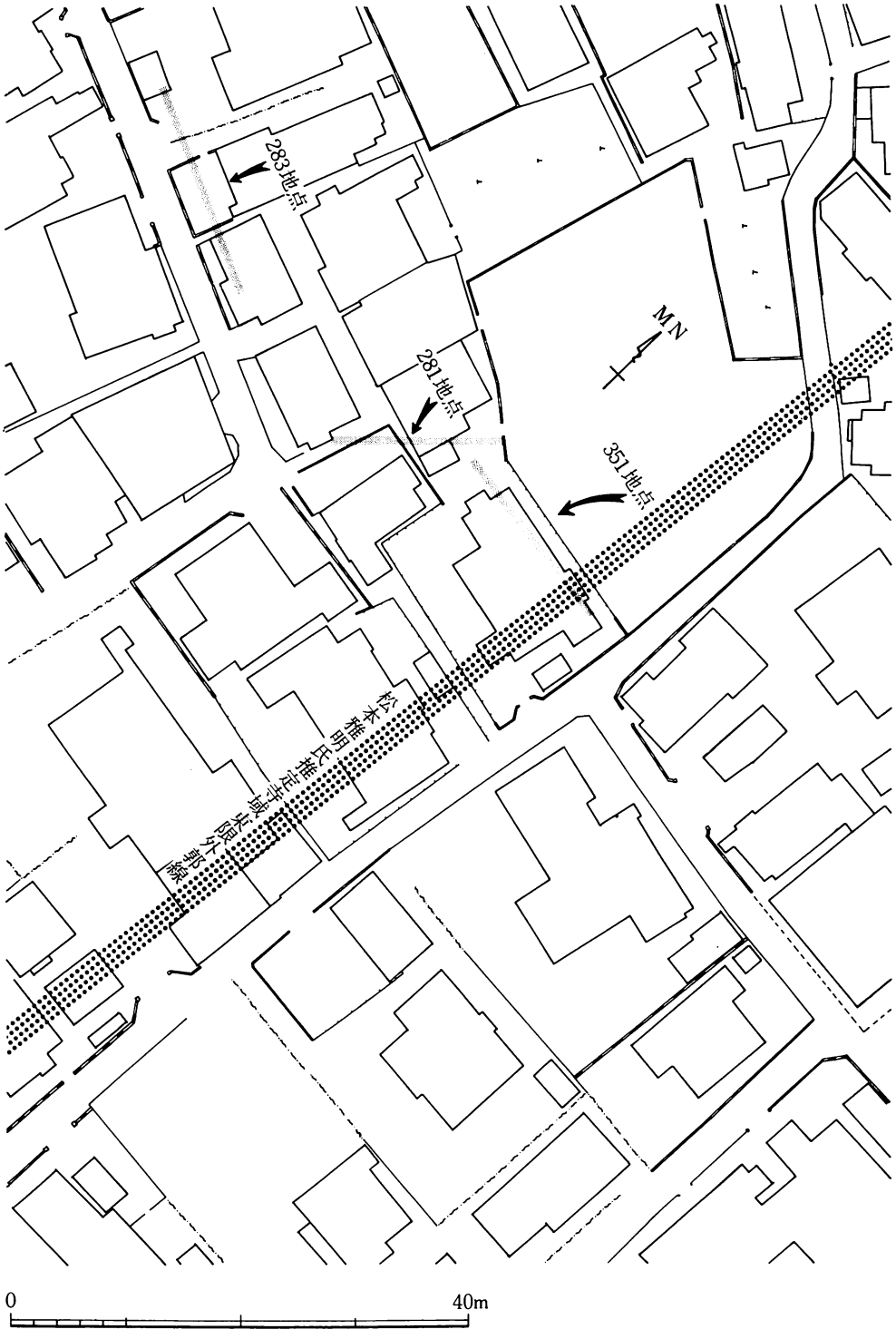
①351地点　A　松本雅明氏推定寺域所郭線

②281 〃　B　現国分寺

③283 〃　C　水前寺廃寺塔跡

④124 〃

第1図　国分僧寺跡調査位置図



第2図 試掘地点位置図

に外郭推定線上に何とか試掘溝がかかるように、南北に走る東限外郭線を直角に横切るような形で、出来るだけ長く試掘溝を設定する事にした。（第２図参照）

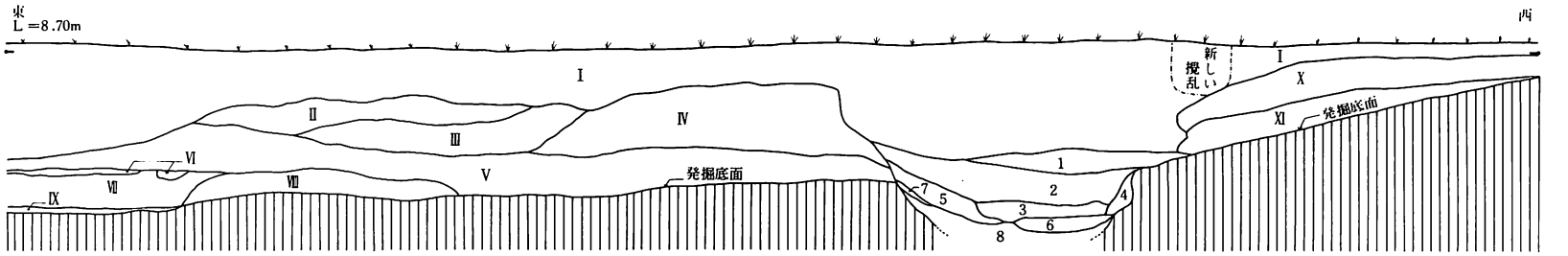
試掘溝は磁北に対してほぼ直角の東西方向に17m の長さで、幅1.2m の寸法に設定した。外郭推定線と試掘溝の重なる大凡の見当は、試掘溝の東端から約４ｍまでの間という目安であった。

3.試掘の結果

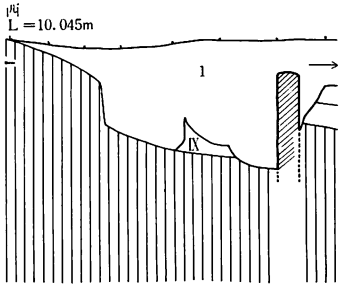
試掘溝で見られた土層は、全体的に軟弱で砂や粘土の堆積層がほとんどであった。又、それ等の層には酸化した鉄分の堆積が見られ、ある時期に河川か低湿地になっていたために形成された土層と考えられる。そこから出土する遺物は布目瓦のみで、地表下約1.8m まで掘り下げたが、その深さまでは確実に瓦を含んでいる。今回は土質による危険防止のためさらに下部の基盤層までは確認出来なかったものの、かなり下部まで瓦を含んでいることが予想された。尚、試掘溝の東端から13m より以西では、硬質砂層の上に白色粘土層と明褐色粘質土層が見られたが、その上部は削平を受けており、そこにも国分僧寺に伴うような遺構は見られなかった。

試掘溝の東端から西へ９ｍ～13m にかけては、粘土層や砂層を切っている落ち込みが検出された。その落ち込みは上幅約3.8ｍ、下幅約1.8ｍで、深さは前記の理由で最下底部まで掘り下げることが出来なかったが、発掘底面までは地表下約2.1ｍを測り、下底までさらに0.3m 程あるものと思われた。その形状は、東側は斜に緩やかに立ち上がり、西側は白色粘土層や明褐色粘質土層が一部剝落しているので、立ち上がりの中途で段差が付いているが、本来は東側と同じように緩やかに立ち上がったものであろう。この落ち込みの土層は、大凡８層に分けられるが、それぞれの層に布目瓦を含んでおり特に第３層の青黒色粘土層からは軒平瓦（第４図１）が１点出土した。又、第６層には木や竹の小枝や木葉が厚さ約18cm 堆積しており、その中から小形の箆状の木製品（第４図３）と近世瓦の小片が１点検出された。さらに、最下部の第８層には砂が堆積しており、この中から石臼（第４図４）が１点出土した。

この落ち込みは、明らかに東側の砂層や粘土の堆積層を切っており、それ等の層が形成された後掘り込まれた事は間違いない。又、試掘溝西側の第Ⅹ層やⅨ層は、この落ち込みの所まで見られ、それより東側には全く見られない。つまり、この落ち込みはそのⅩ層やⅨ層の東端と第Ⅱ～Ⅸ層までの砂や粘土の堆積層との境に掘り込まれていると言える。さらに、この落ち込みの年代については、第６層から近世瓦の小片が出土しているので、近世を大きく外れる事はないと考えられる。又、この落ち込みの性格であるが、井戸状のものか、溝なのか、判然としないものの、木枝や木葉の堆積層がある事から、水は流れていたのではなく溜まっていた可能性が強い。



３５１地点南壁土層図



（３５１地点）

Ⅰ　表土撹乱層
Ⅱ　粘土粒炭化物粒混入軟質暗褐色土層
Ⅲ　褐色粘土塊混入青黒色砂層
Ⅳ　褐色粘土塊層
Ⅴ　褐色粘土塊混入粘質暗褐色土層
Ⅵ　黄色砂層
Ⅶ　暗褐色粘土層
Ⅷ　黒褐色粘質土層
Ⅸ　褐色粘土層
Ⅹ　明褐色粘質土層
Ⅺ　白色粘土層

1　暗褐色粘質土層
2　褐色粘質土層
3　青黒色粘土層
4　Ⅺ層落下土層
5　褐色粘土粒混入暗褐色軟質土層
6　木、竹、細枝、木葉等堆積層
7　褐色砂層
8　青色硬質砂層

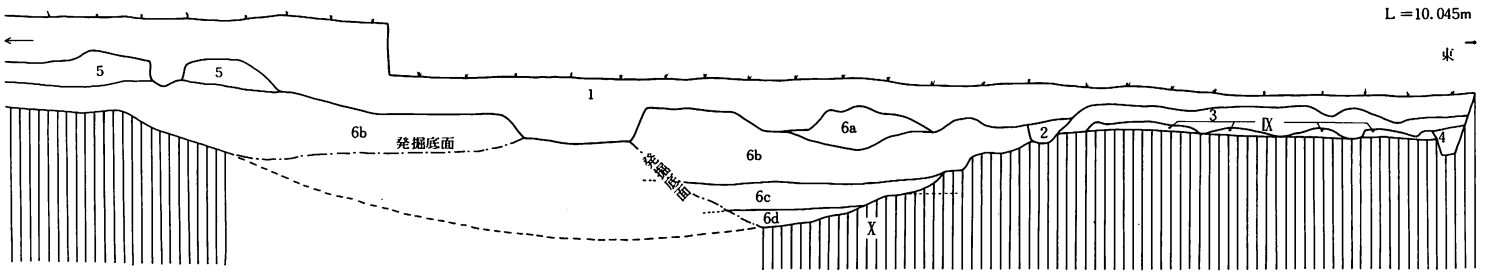
（廣瀬）作図

（２８３地点）

1　表土、撹乱
2　黒褐色土層（Ⅸ層の砂をわずかに含む）
3　黒褐色土層（Ⅸ層の砂を２層より多く含む）
4　黒褐色土層（Ⅸ層の砂を３層より多く含む）
5　暗褐色土層
6a　赤褐色と黒色砂の混合した砂層
6b　褐色砂と黒色砂の混合した砂層
6c　褐色砂と黒色砂の互層（堅い）
6d　6cと同層で6cより堅い
Ⅸ　褐色砂質土（堅い）
Ⅹ　暗灰黄色粘質土（堅い）
} １２４地点の土層番号と対応する

（鶴嶋）作図

※土層番号は２地点の間で共通する土層が無い為別々に付番した。その為、同じ番号であっても２地点の間での共通性はない。



２８３地点北壁土層図

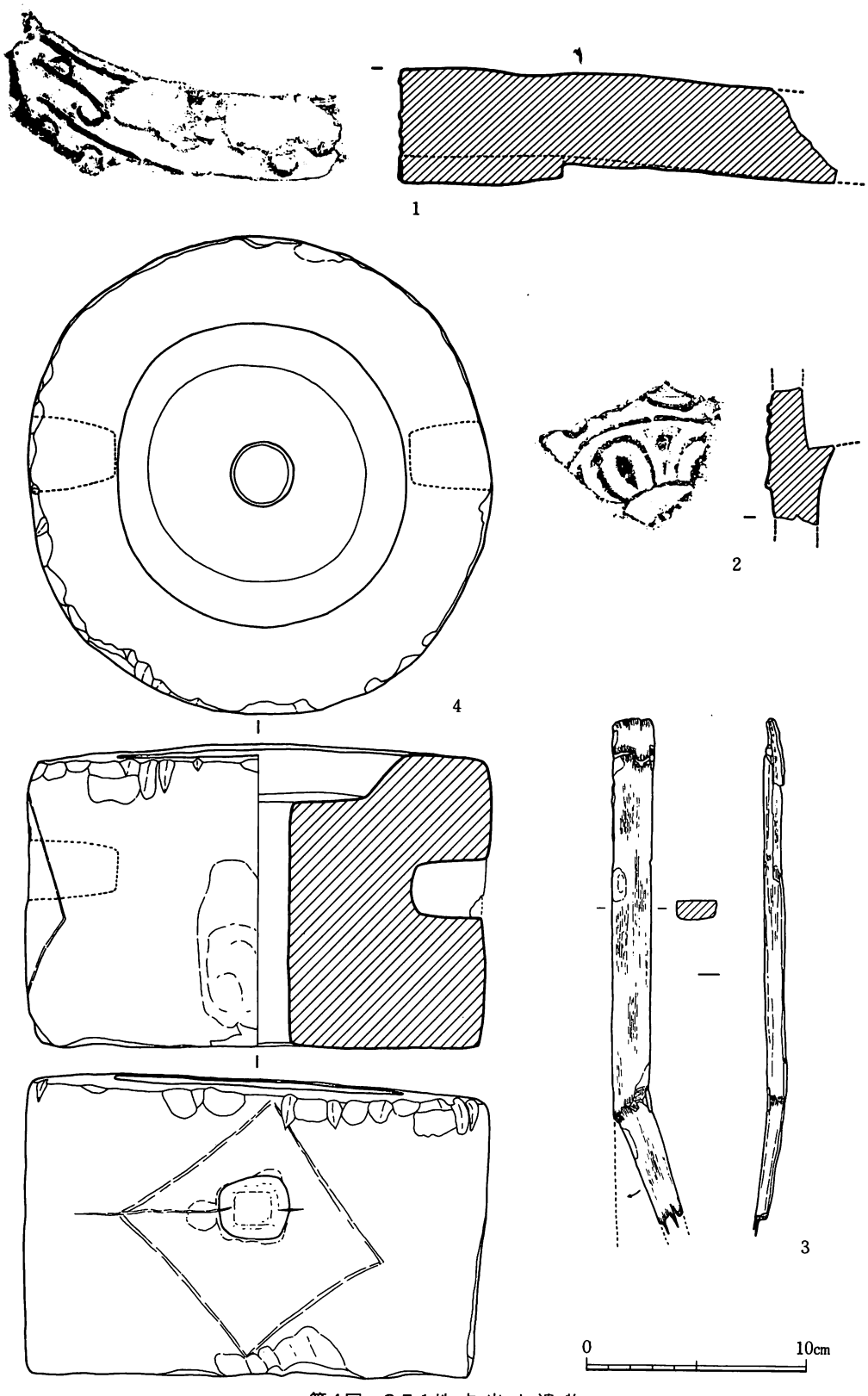
第3図　３５１地点２８３地点試掘溝土層図

4.出土遺物

今回の調査による出土遺物の主なものは、Ⅰ～Ⅸ層中から出土した布目瓦と、性格の判然としない落ち込みの中から出土した軒平瓦、木製品、石臼等である。その内、まずⅠ～Ⅸ層中から出土した布目瓦は、ほとんど縄目叩き痕の有る平瓦や丸瓦の小片で、磨滅しているものが多く、特記すべきものは見られなかった。又、他に試掘溝周辺で軒丸瓦の破片が1点表採された。

軒平瓦（第4図1）　前記の落ち込みの中の第3層から出土した。瓦当部は向って左側の一部が残っており横方向に流れる唐草文を配している。唐草は中央の茎から上下に互い違いに丸く巻いた蔓が延びているが、唐草の流れは全体的に硬化しており、均正唐草文か扁行唐草文かは判然としない。又、唐草文の周囲には、それを囲む圏線が巡っている。さらに、その圏線下部の外区には凸線による山形文を配している。この瓦の製作技法は、糸切りの粘土板による平瓦の一端に、端から約20cmの長さに瓦当部側に厚く、後に行くに従って薄くなるように斜に粘土を貼り付け、瓦当部側の端から7.5cmの所に横方向に切り込みを入れ、その切り込みより後の粘土を掻き取り顎部を形作っている。顎部の調整は、縄目叩きを施した後、横方向の削りを施している。又、粘土を掻き取った所は横方向の撫でを施している。さらに、笵との接着は平瓦の先端と、後から貼付した顎とに行っているが、平瓦の先端が直接笵と接着して唐草文様を写し取っている。この技法は、国分寺創建期の軒平瓦の製作技法と同じものであるが、この瓦は唐草文の退化から平安時代中頃に位置付けられ、この時期まで長く創建期以来の技法が受け継がれて来た事を示すものである。尚、この製作技法では、平瓦が軟らかい内に顎部を作って笵と接着しなければならず、顎の下面を叩いている事などから、凸形整形台の存在を予想させるものである。又、平瓦の凸面には桶の模骨痕が全く見られず、凸面の縄目叩きも側縁と平行であり、凸形整形台による1枚作りの平瓦を使用している可能性も考えられる。瓦当の側縁から平瓦部の側縁にかけては削りによる調整を施し、凹面側端部には削りによる面取り調整を加えている。さらに、平瓦部凸面には側縁と平行方向の縄目叩きを施し、凹面には部分的に縮れた布目痕があり、瓦当部側にはその上から削り調整を施している。尚、凹面のやや瓦当寄りに、指三本分の指頭押圧痕が見られる。瓦当部の厚さ7.0cm平瓦部の厚さ4.0cm、瓦当の復原幅約25cmを測る。胎土には、砂、小石を含む。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

木製品（第4図3）　落ち込みの中の第6層とした木、竹の小枝や葉の堆積した層から出土したものである。これは、板を細い箆状に加工したもので、やや幅の広い方と狭い方がある。狭端部は折損しており、全長を復原出来ないが現存長は23.5cm、最大幅2.0cm、厚さ0.9cmを測る。広端部は撫肩に削り、狭端部側に行くに従って細くなるよう整形している。狭端部は折損のため原形は不明である。全体的に柾目が縦方向に良く通っており、表面は平らに削り、裏面はやや荒く削られている。この製品の用途は不明であるが、何か他の木製品の部分品か、又はそれ等の破片とも考えられる。尚、この木種については、熊本大学教育学部の大迫靖雄助教授



第4図　351地点出土遺物

に鑑定を御願いした。その結果は本報告書付論として掲載されているので参照されたい。

石臼（第４図４）　落ち込みの中の第８層とした最下層の青色硬質砂層から出土したものである。直径約21.5cm、高さ約13.7cm、重さ約9.3kgを測る砂岩製の雌臼でほぼ完形品である。上面には深さ約2.3cm、径約13.5cmの窪みを設け、縁は平たく整形している。その窪みの中央に下面まで貫通した径2.5cmの穴を設け、この穴が供給口と軸受けの両方を兼ねている。側面には中程よりやや上位に挽手の穴を対にして２ケ所穿っているが、どのような形状の挽手が装着されていたのかは判然としない。さらに、挽手穴の周囲にはやや変形した菱形文が薄く陽刻されている。又、下面には全く刻線は見られず平面となっており、本来なかったのか刻線があったものが、長期間の使用により摺り減って無くなったのかは不明である。本例は石臼としてはやや小型の部類にはいり、石臼の中央に供給口が貫通している事や、挽手穴の周囲に見られる菱形文が茶挽臼に間々見られる装飾である所から、この石臼も茶挽き或いは薬挽き等に使用されたのではないかと考えられる。

軒丸瓦（第４図２）　この軒丸瓦は試掘溝の南側で表採されたものである。124地点の調査報告の中で軒丸瓦のⅣ類としているものと同じものである。復原形は単弁８弁で中房はやや窪み蓮子は中心から1.7の配列となっている。又、蓮弁の外側には波形に全周する唐草文を配しており、同じくⅢ類としているものの退化形態の軒丸瓦で、奈良時代末期から平安時代前期に位置付けられるものである。瓦当裏面は、丸瓦を差し込んだ接合面から剝離しており、丸瓦差し込み面の削り調整痕を見る事が出来る。又、丸瓦差し込み面の内側に足された支持土の表面は、丸瓦の内縁に沿って撫でた後、縦方向に撫でを施している。中房部での厚さ2.1cmを測り、胎土には砂、小石を含み、焼成は堅緻である。色調はにぶい褐色を呈している。

5.調査のまとめ

今回の試掘調査における最大の目的は、松本雅明氏推定の国分僧寺の東限外郭線の存在を確認することであった。国分僧寺の外郭線に予想される遺構は、他で調査された国分寺の例から築地や土塁、溝等である。今回の調査で設定出来た試掘溝は、２で述べたような事情で１本のみであった。そこから検出された遺構は溝状の落ち込みと、それに切られている河道様の土の堆積を示している窪地である。最初に溝状の落ち込みを検出した時は、平安時代中期の軒平瓦を検出した事等から、これが国分僧寺に伴う遺構ではないかと考えたが、土層を良く観察した処第６層の木、竹の小枝や木葉の堆積した層の中から近世瓦の小片を１点検出した。それによって、この落ち込みがかなり新しい時期に開口していた事が判明し、さらに、その下の第８層出土の石臼も、近世を上るものとは考えられない処から、この落ち込みは近世頃のものと判断された。又、その落ち込みに切られている土層は酸化した鉄分の堆積が多く見られ、又、粘土の混入した砂層が厚く堆積しているなど、河川の土砂の堆積状況を良く示しており、決して人為的に作られた層とは考えられないものであった。調査では前記のように危険防止のため表土下

約1.8mの深さまでしか掘り下げなかったが、さらに下層まで同じような層が続いているようであった。それ等の土層中には布目瓦が混入しており、それより新しい時期の遺物は見られなかった。では、何故深い土層まで布目瓦が混入しているのであろうか。その原因を考えるには、この付近一帯の地形を考えてみる必要がある。ここでの河川の存在を考えてみると、試掘地点の約80m東側を加勢川が流れている。加勢川は水前寺公園の南側から始まっているが、その上流のしょうけ堀川と水前寺公園付近の湧水を源としている。水前寺公園付近は、古くから豊富な湧水地として知られており、その付近より南の加勢川一帯は低湿地であったと思われる。特に試掘地付近から東側にかけては、加勢川が託麻台地の崖線下から沖積平野に注ぎ出す出口に当り、水量の多い時期には付近一帯は洪水に見舞われていたものと思われる。。試掘地については、加勢川の流路の変更によって形成された土層か、それとは別の流れがあったのかは判然としないが、河川の影響によるものである事は前述したように明らかである。それ等の事から考えると、試掘地は国分僧寺が創建された時期には、河川となっていたか、又は窪地状の低湿地となっていた可能性が強い。そして、加勢川等の氾濫によって土砂が運ばれ、それに国分僧寺の瓦が混入したものと考えられる。そのために現在の地表からかなり深い土層にまで瓦が混入している状況が出現したのであろう。

このように今回の調査では、外郭線の遺構と見られるものは何も検出されず、又、外郭線推定地付近が河川の堆積土のような軟弱な地盤の場所である事が明らかになった。ただし、今回の調査は試掘溝1本のみであり、それだけで外郭線の存否を論ずる事が出来ないのは言うまでもない。しかし、今回の試掘調査の結果を踏まえて一つの可能性を指摘しておきたい。試掘溝の中の西側部分に硬質砂層の上によく締った白色粘土層と明褐色粘質土層が有った事は前にも述べた通りであるが、この調査の後の7月に本試掘溝より西側の2地点281地点・283地点を県文化課で試掘調査をした。それぞれの詳細は調査担当者が後述しているが、前記した本試掘溝西側の明褐色粘質土層は281地点でも検出され、かなりの広がりを予想させ、そのまま124地点で確認された国分僧寺付近の地山層へと続くものと思われた。ところが、さらに西側の283点の試掘調査では、本試掘溝で見られた砂層に近似した砂層が検出された。それから考えられる事は、この付近一帯に幾筋かの河川の流路が存在していた可能性が強いという事である。ただ、283地点の試掘溝の西端部で、この付近一帯の地山層が検出され、標高もそのあたりから高くなって、本報告書で詳細に述べられている124地点へと続いている。以上の事から考えられるのは、国分僧寺の東限外郭線は283地点の西端から124地点の間で、寺域全体は松本氏の推定よりもっと西へ寄る可能性があるという事である。つまり、283地点より東側は河川の流路や低湿地によって地盤が軟弱な一帯であり、そこが国分僧寺の寺域の中に含まれ、外郭線の施設として築地や土塁が築かれたとするには無理があると考えるからである。この事は今後の国分僧寺の発掘調査の進展によってその当否が確認されるであろう。今後の国分寺の調査は尼寺も含め

た伽藍全体を視野に入れた調査が行われる事が必要であるといえる。

註１、角田文衛編『国分寺の研究』下巻　坂本経堯　「肥後国分寺」　1938年

註２、熊本市文化財調査会『熊本市文化財調査報告書Ⅳ』　松本雅明「肥後国分僧寺」　1975年

註３、熊本県教育会史蹟調査部編　『熊本県史蹟調査報告』第１回　菊川末熊「国分寺址」　1918年

註４、平野流香　『肥後史談』　1927年

註５、註２に同じ

註６、註２に同じ

281地点の試掘調査　　平　岡　勝　昭

昭和56年７月10日、先に試掘が行われた351地点の西側に、水前寺土地区画整理事業に伴って、新たに道路を通す事になり、住宅の移転と共に道路工事が行われる事になった。その、新たに道路敷地となる部分の中で、特に側溝部分が深く掘り込まれるため、工事開始前に調査を行う事にした。調査地点を２カ所設定し、それぞれの地番により、281地点と283地点と呼ぶ事にし、同時に調査に着手した。281地点では、測溝の設計に合わせて351地点よりやや北側から、磁北から東へ約45°傾いた方向に幅1.0m 長さ15m の試掘溝を設定した。その結果、厚さ約30cm の表土を除去すると、すぐに明褐色土が露出した。この土層は351地点の試掘溝の西側部分に見られたものと同じものであるが、土層上面を宅地造成によって削平されており、遺構らしきものは何ら検出されず、遺物も表土中に若干の布目瓦が混入しているのを検出したのみで、特記すべきものは何も見られなかった。

283地点の試掘調査　　鶴　嶋　俊　彦

124地点の調査中、末藤医院の東方住宅地において、区画整理に伴う道路側溝の工事が行われることになった。そこで、工事に先立ち、側溝となる部分にトレンチを入れ、遺構の有無を確認することにした。(第２図参照)

この 283地点（出水１丁目５番34号、地番282、283、284）から東側は60cm程地形的に低くなっていることから、この段差が国分寺に係るものではないかと思われた。トレンチは、県道より30m 程入った地点から東方19ｍまで設定した。この付近は松本雅明氏の推定プランでは、講堂の東方で鐘楼の北側にあたる。

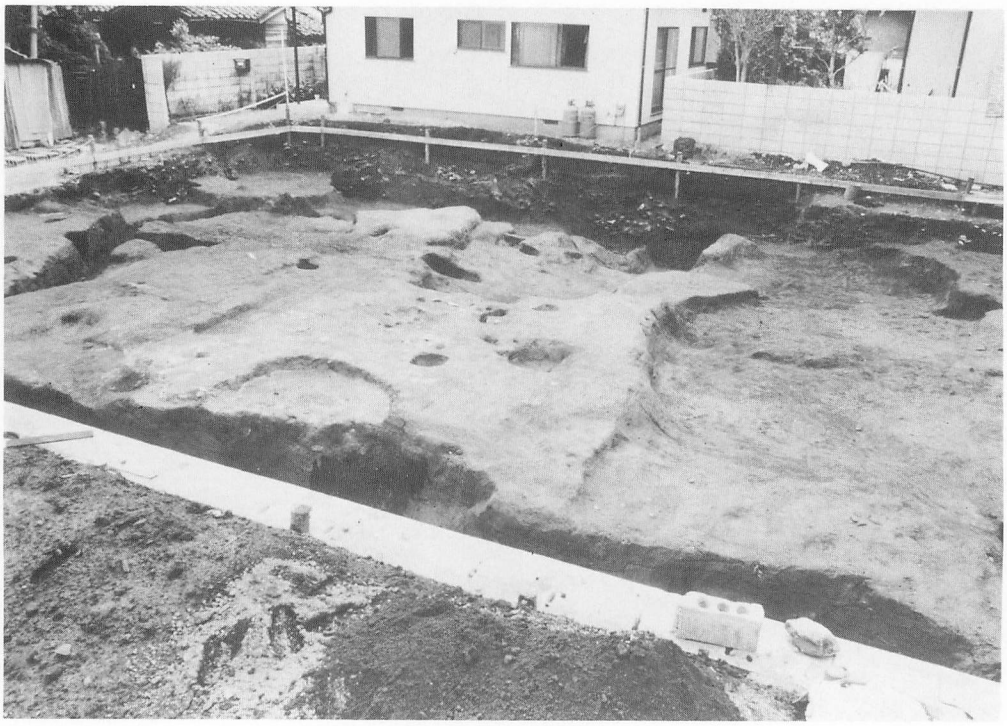
調査の結果、トレンチの全長にわたって、地表下40～50cmが最近の住宅建設によって攪乱をうけており、攪乱層下に直に地山の褐色砂層（124地点のⅨ層）がみられ、先の段差は宅造の際の造作によるものと判断された。トレンチ中央で攪乱層下に認められた幅10m 余、深さ1.5m の溝状の落ち込みは、褐色砂と黒色砂によって埋没している。埋土内には遺物が全く含まれず、埋土下半では褐色砂と黒色砂が互層となって堆積していたことから、自然的な流路であると考えられる。攪乱中から数点の平瓦片が出土しただけで、特筆すべき遺物は出土していない。(第３図参照)

a. 発掘前の調査地（南東から）

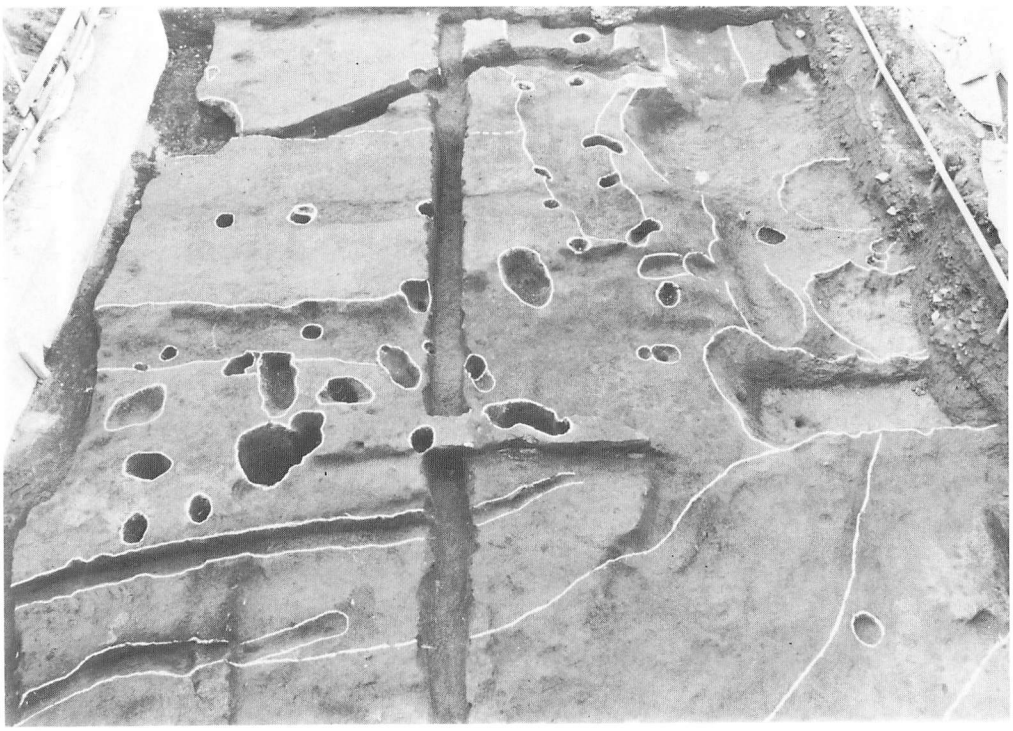
b. 調査地近景（南東上方から）

図版 2

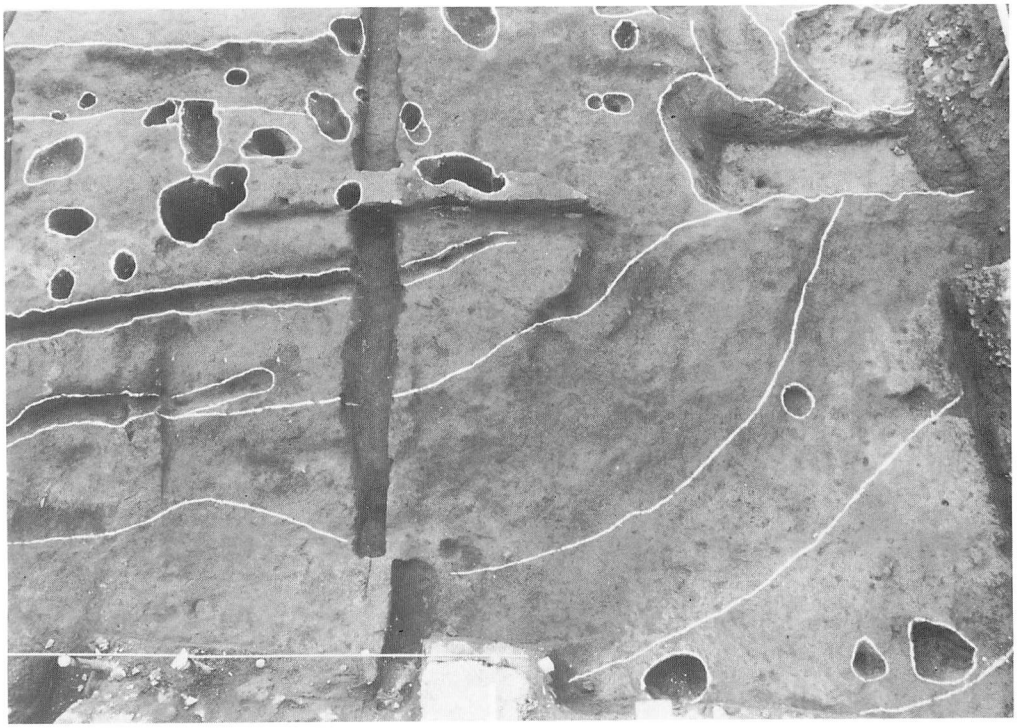
a. SB103・西側土壙群（北から）



b. SB103（東から）



a. SD106・107とSS101～103（北上方から）

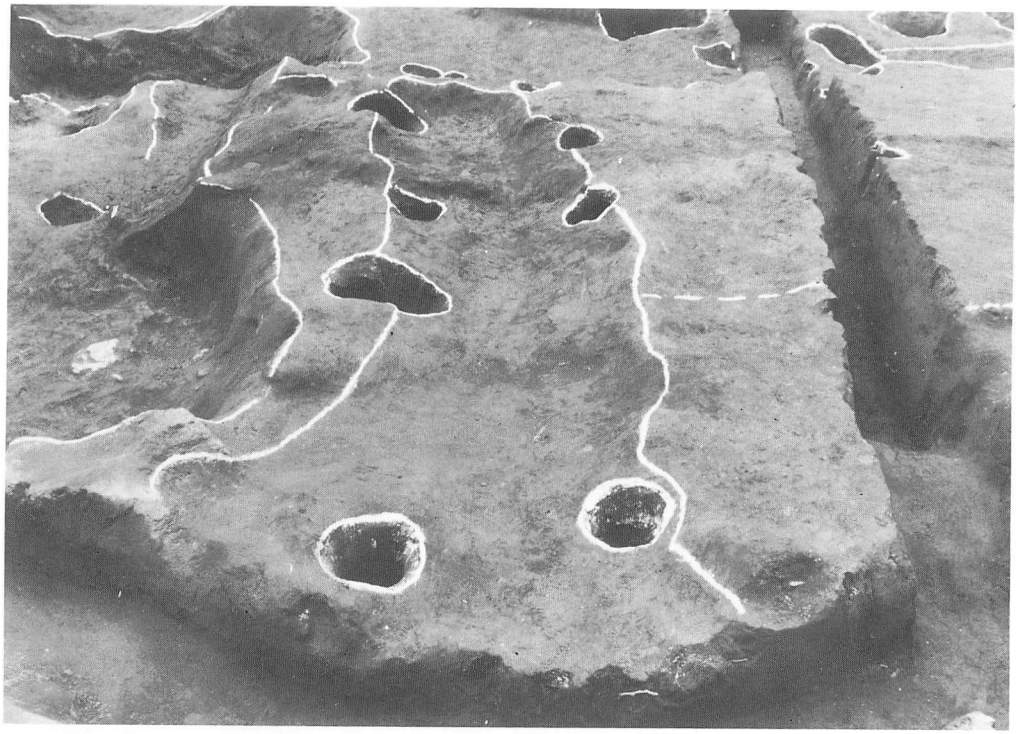


b. SD103～105（北上方から）

図版 4

a. SB103版築断面

b. SK101



a. SD107（南から）

b. SD105底部の瓦の出土状況（東から）

図版 6

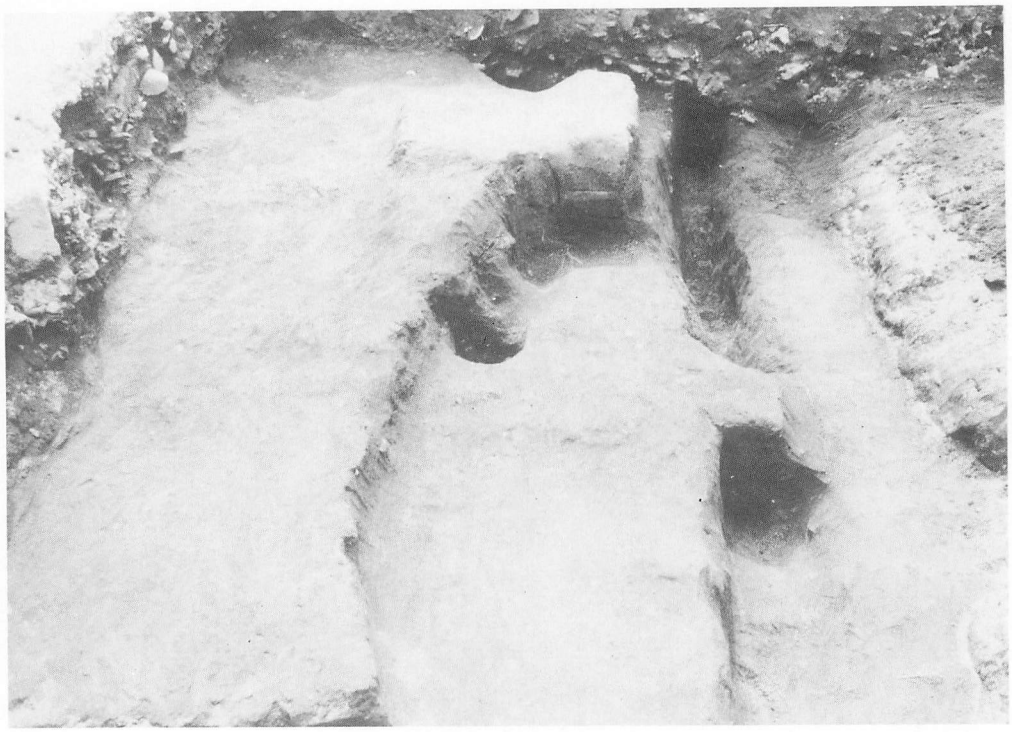
a. SB102・SD101
（東から）

b. SB102掘込み地業・SD101
（北から）

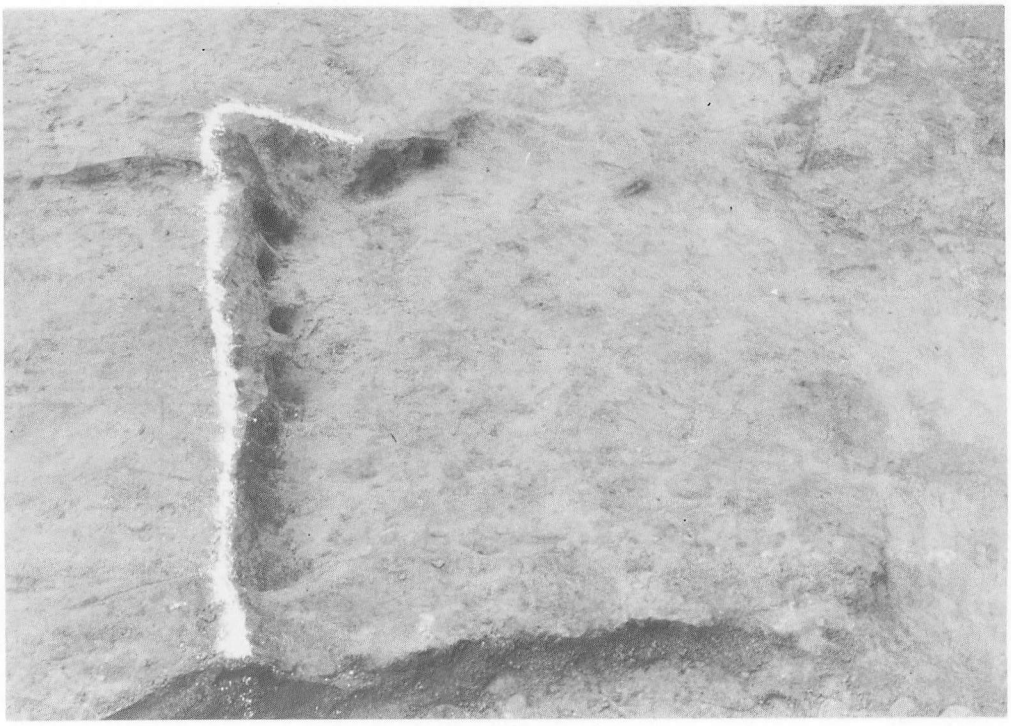
a. SB102掘込み地業基底面の円文

b. B 9区Ⅵ層中の円文

図版 8

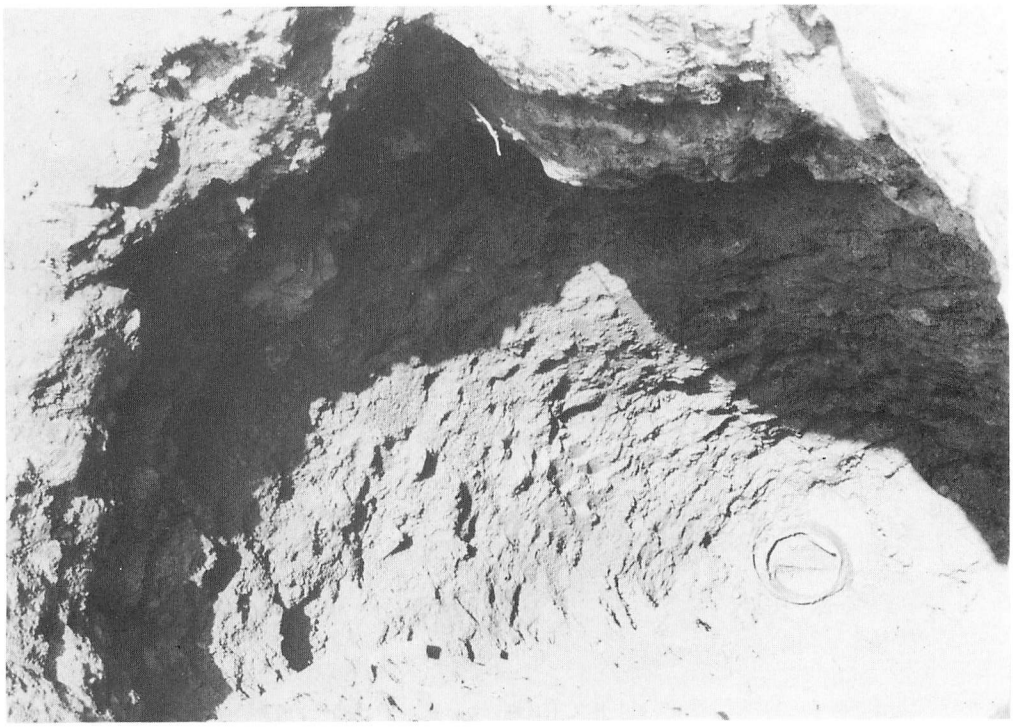


a. SB102 掘込み地業北辺とSK114（東から）



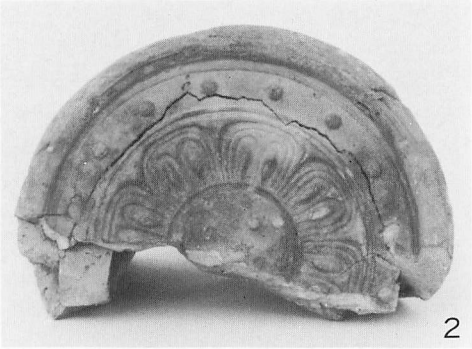
b. SB101（東から）

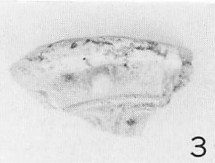
a. SX101

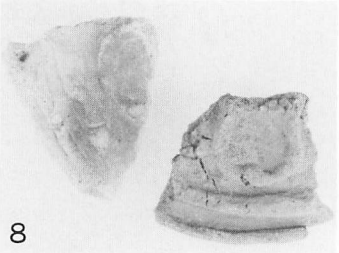


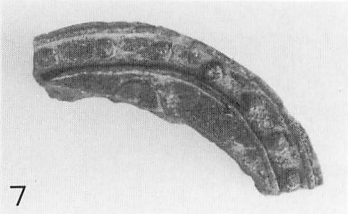
b. SE101

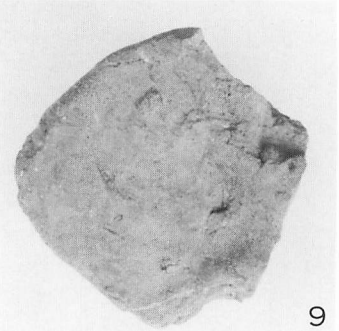
図版10



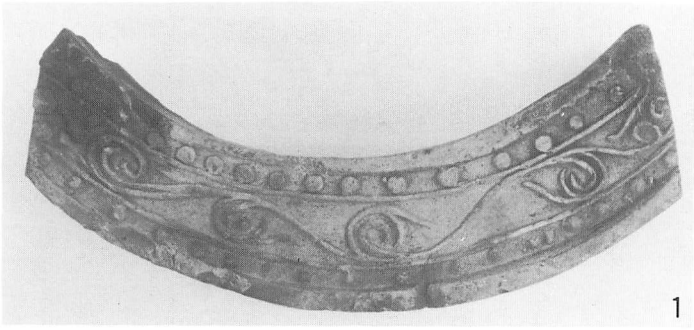


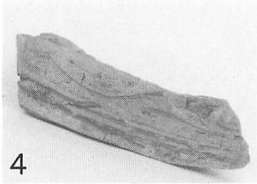


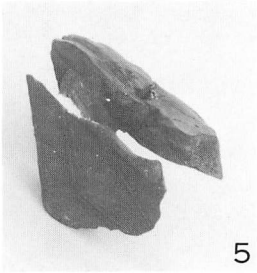


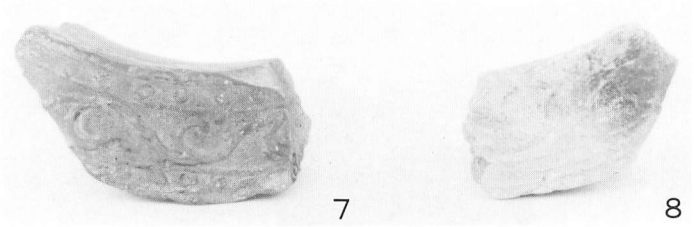


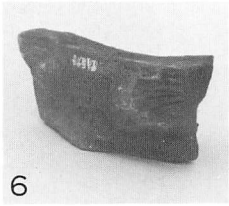
出土軒丸瓦（1：3）

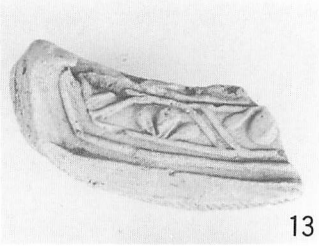


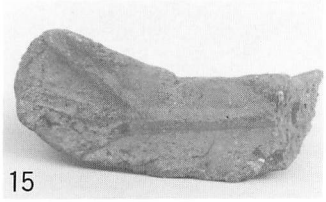


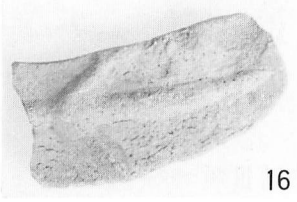






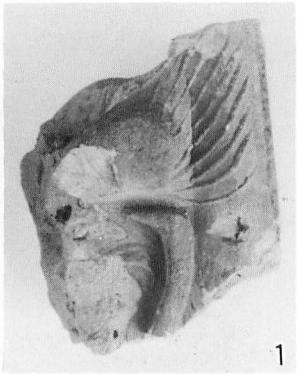


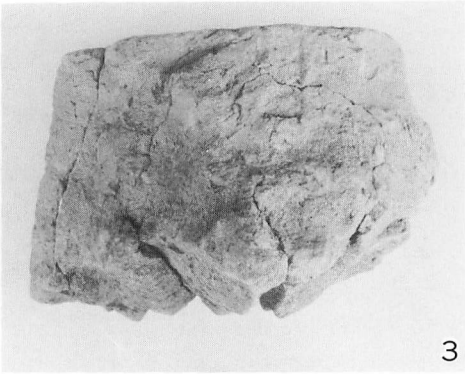


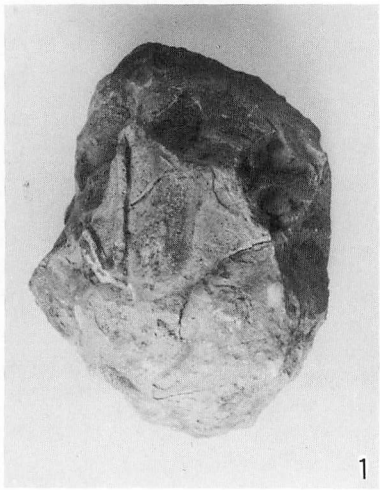


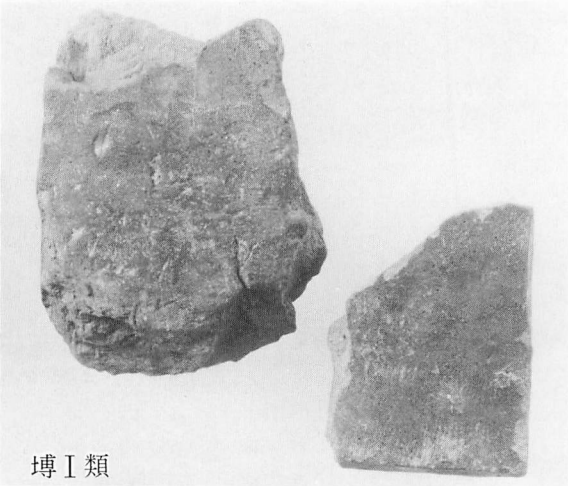
出土軒平瓦（1：3）

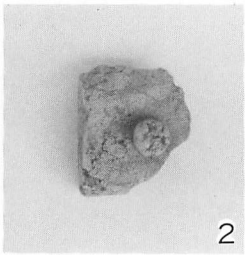
図版12

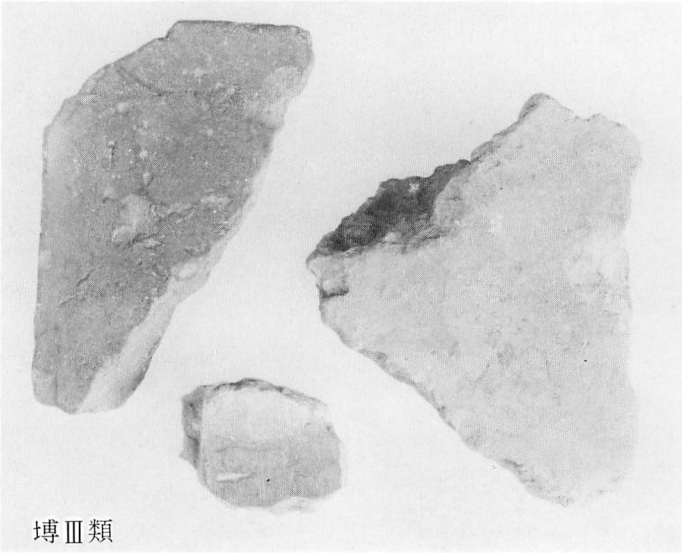




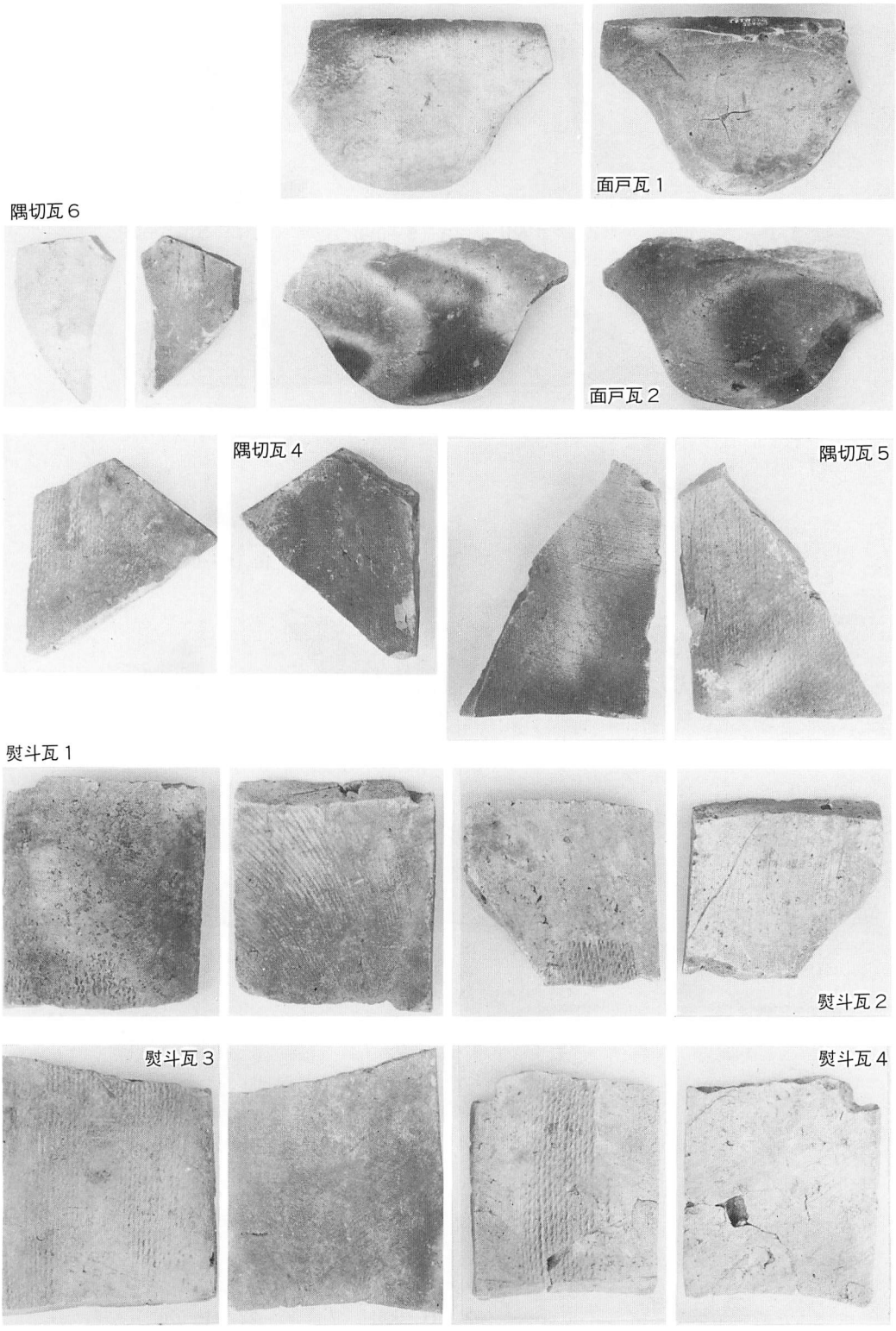








鬼瓦・不明瓦製品・塼（1：3）



面戸瓦・隅切瓦・熨斗瓦（１：５）

図版14

1.（S－003）

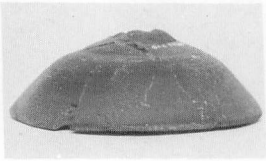
2.（S－004）

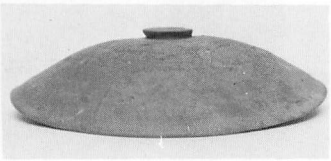
3.（S－019）

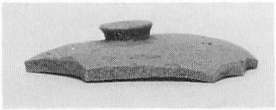
4.（S－022）

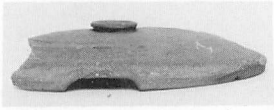
5.（S－24）

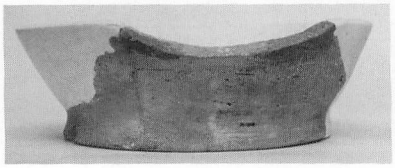
6.（S－026）

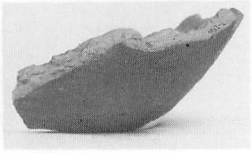

7.（S－031）


8.（S－35）

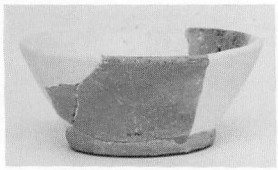

9.（S－038）

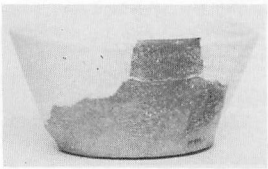

10.（S－041）

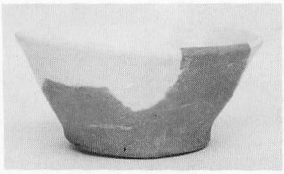

11.（S－045）

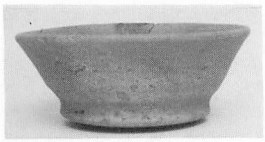

12.（S－047）

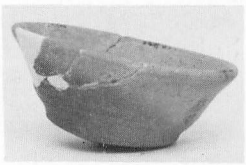
13.（S－48）


14.（H－002）

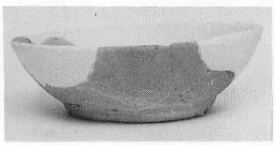

15.（H－004）

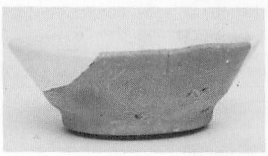

16.（H－012）

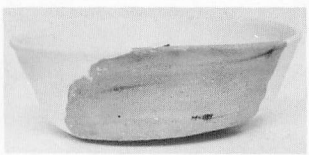

17.（H－017）


18.（H－021）

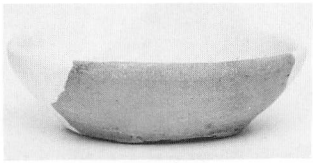
19.（H－040）

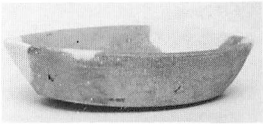

20.（H－056）

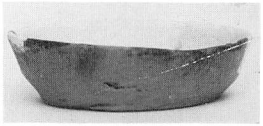

21.（H－066）

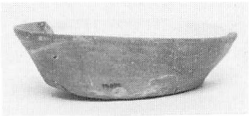

22.（H－070）

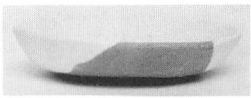
須恵器・土師器（1：3）

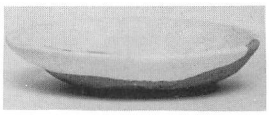

1．(H－075)

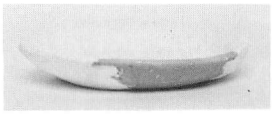

2．(H－121)

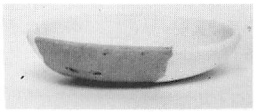

3．(H－133)

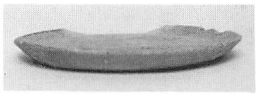

4．(H－145)

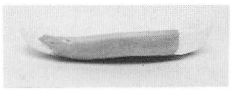

5．(H－155)

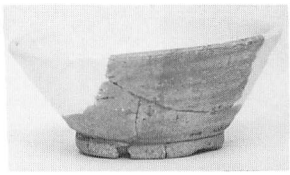

6．(H－161)

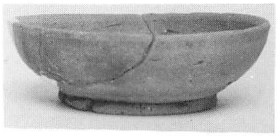

7．(H－163)

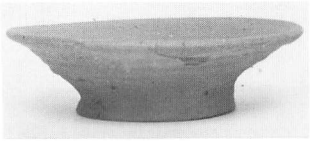

8．(H－164)

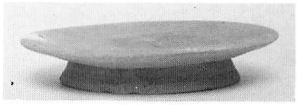

9．(H－193)


10．(H－197)

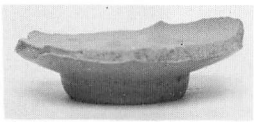

11．(H－221)


12．(H－253)

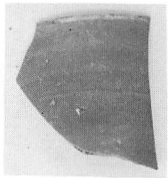

13．(H－283)


14．(H－296)

15．(H－323)


16．(C－001)

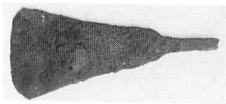
17．(C－004)


18．(C－005)

19．(C－006)

20．(F－002)

21．(F－003)


22．(F－004)

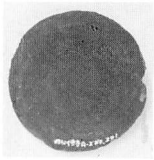
23．(F－005)

24．(F－006)

25．(F－007)

26．(F－008)

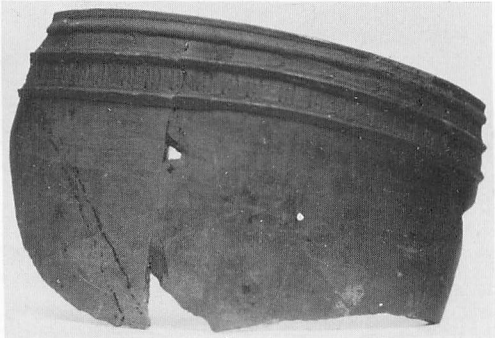
27．(F－009)


28．(F－010)

29．(F－011)

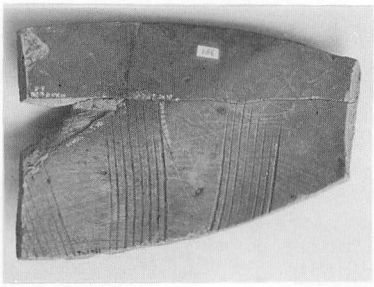
土師器・青磁・黄瀬戸・鉄製品・銅製品・鞴羽口（1：3）

図版16

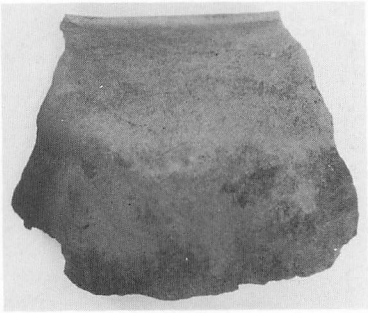


1.（G－001）

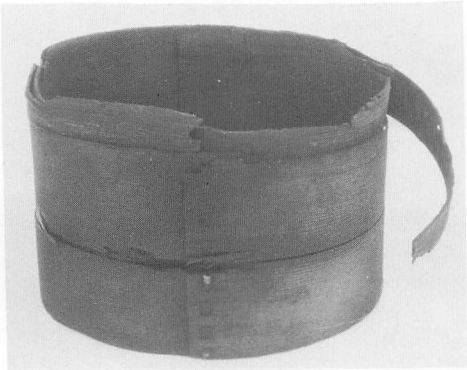
2.（G－002）



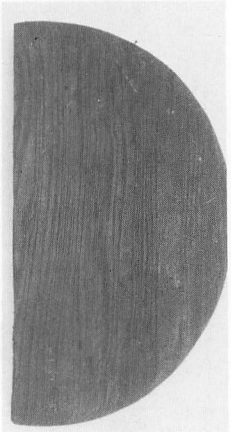
3.（G－003）



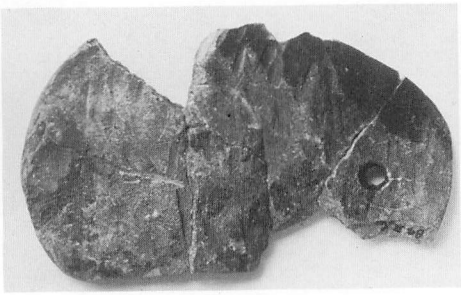
4.（H－339）



5.（W－002）



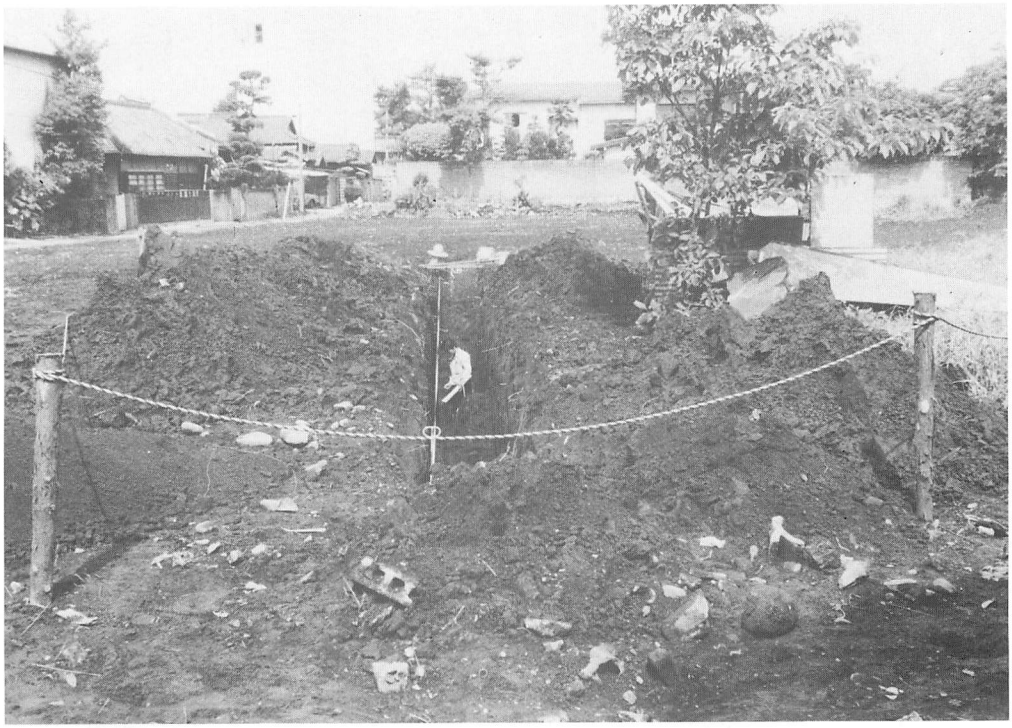
6.（W－003）



7.（F－012）

1のみ（2：9）
2～7（1：3）

火舎・擂鉢・土師器・木製品・石製品



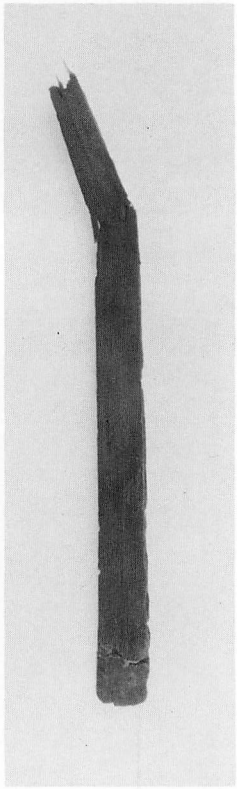
a．351 地点試掘溝　（東より）

b．351 地点落ち込み　（南壁）

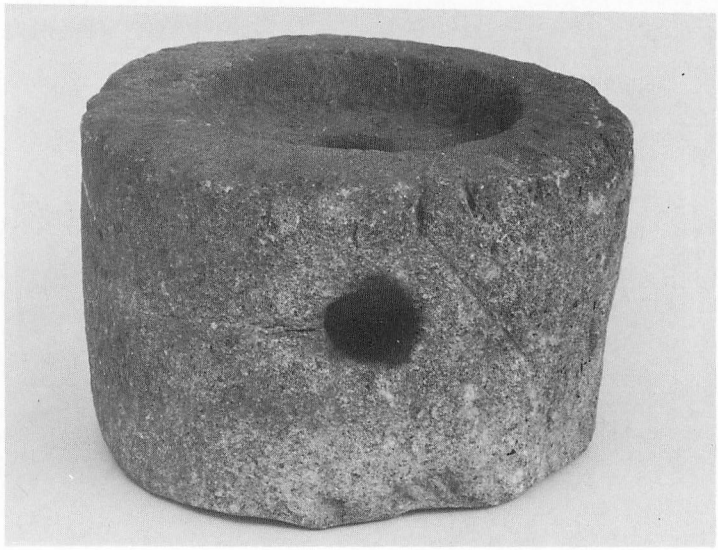
図版 2

1

2



3



4

351地点出土遺物

熊本県文化財調査報告　第56集

肥後国分僧寺跡 I

昭和57年3月31日

編　集　熊本県教育委員会
発　行　〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　中央印刷紙工株式会社
熊本市田崎2丁目5－38
電　話（0963）54－4191

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第56集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：肥後国分僧寺跡 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日